西岩田

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本　文　編 —

(財)大阪府文化財センター
京阪支所蔵書
第 194-1 号

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

大阪文化財センター
寄　書
第　号

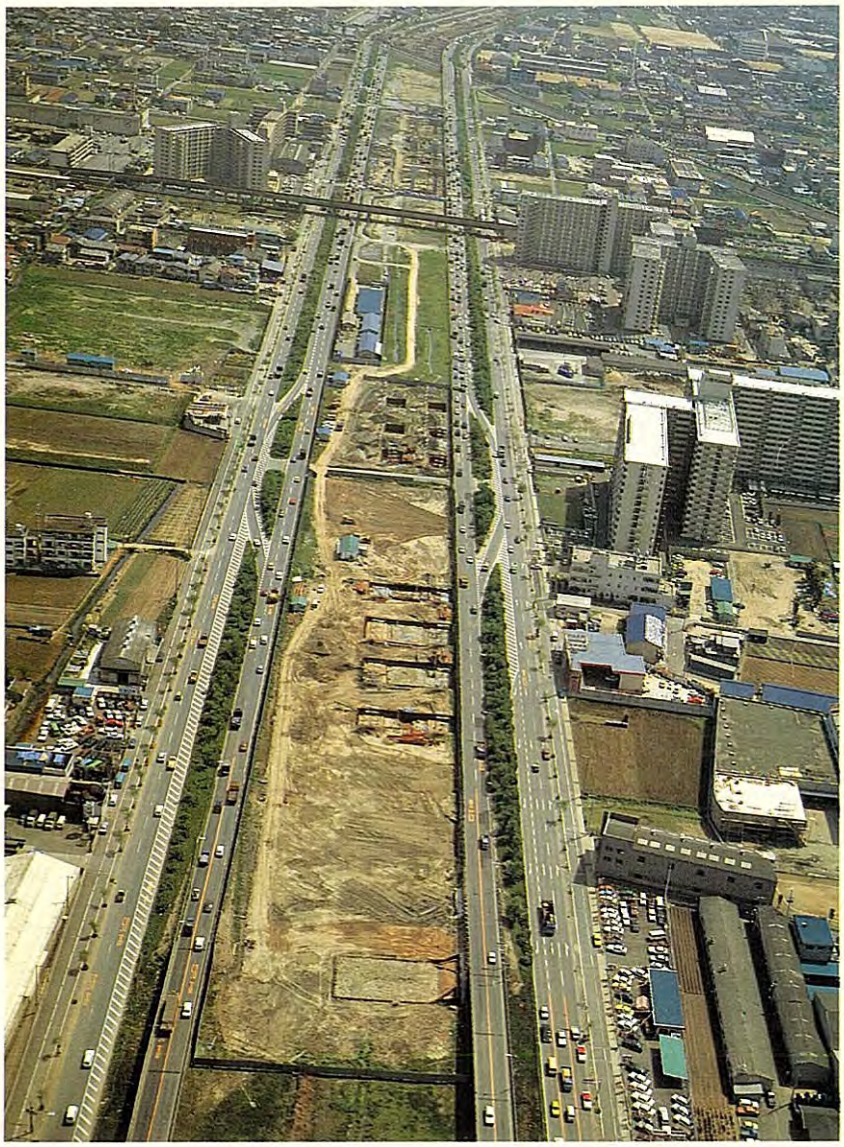
西岩田

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

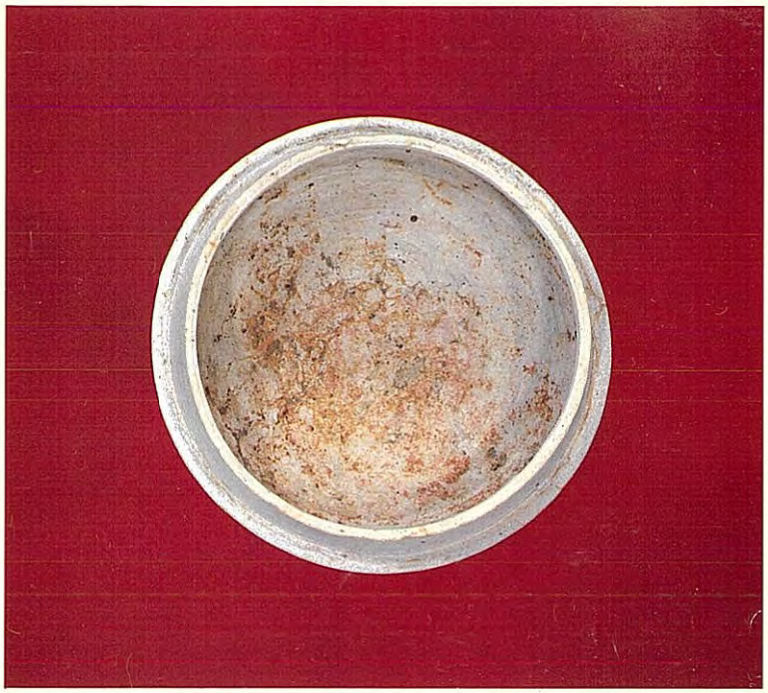
— 本　文　編 —

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

大阪文化財センター
蔵書
第　号



図版1　調査地全景　（北から）



図版 2　酸化鉄の付着状況（須恵器杯身内面）

図版 3　酸化鉄の塗布状況（土師器壺形土器内面）

図版 4　漆器椀　出土状況

図版 5　籠　出土状況

序　　文

“西岩田遺跡”は、府道中央環状線内に布設された、広域下水道中央南幹線下水管渠築造工事によって発見された集落遺跡であり、当時の調査結果によると古墳時代の初期より奈良時代にかけての時期に人々が生活し、それらの時代の土器や木器が多数出土した。そのうち古墳時代の庄内式土器（畿内）と酒津式土器（播磨、備前）の出土は、畿内と播磨との交流を立証する史料として注目されたものもある。

また、本遺跡の周辺には、新家遺跡、瓜生堂遺跡、岩田遺跡、山賀遺跡と多くの集落跡の所在が確認され、かつ発掘調査も実施されているので、この地域一帯の古代の人々の生活を復元するのに貴重な資料を今回の発掘調査で提供している。

この「西岩田遺跡」は、近畿自動車道天理・吹田線の建設に先立ち、昭和54年から昭和56年にかけて発掘調査を実施したものであり、近畿自動車道関連の埋蔵文化財の発掘調査では、長原遺跡、瓜生堂遺跡、新家遺跡、巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡等に引き続いて調査した遺跡である。

本書は、このような経緯で実施した調査の概要報告書であり、本調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係者並びに一般多数の方々のご協力、ご援助の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和58年10月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　籔内盛雄

序　　文

生駒山西麓から、大阪湾にかけて拡がる広大な平野は、“河内平野”と呼ばれ、湾から潟、潟から湖、湖から平野へと4000～5000年間に人々の歴史とともに変化をしてきた三角州である。三角州は、世界的規模でも、日本的規模で見ても人類の歴史の主舞台であり、また現在も主舞台でありつづけている。従って人類の歴史を研究しようとする場合、必然的に三角州の変化過程や、その特性を明らかにする必要があり、“河内平野”も、我国古代史を理解する上で、その変化過程や特性を明らかにすることが前提となるであろう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡の調査を完了し、新家遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡等の発掘調査を実施している。

本書は、昭和56年９月に調査を完了した東大阪市西岩田３丁目に所在する西岩田遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

調査に要した期間、費用も膨大ならば、検出した遺構、遺物もまた膨大であり、そのすべてを本書に収録しきれなかったが、河内平野の歴史、河内平野に生活した人々の歴史を直接肌で感じ取り、理解していただけるものと確信するとともに、“河内平野”と呼ばれる三角州の変化過程や、その特性の理解の一助となるであろうと自負している。

最後に、当文化財センターは、設立以来、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施してきた中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。今後も、初期の目標を見失しなうことなく、一層研鑽、努力することを約すると共に、一般府民の皆様を始め、関係各位のより一層の暖い御理解と御支援を願ってやまない。

昭和58年10月

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加　藤　三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市西岩田３丁目に所在する西岩田遺跡（その１）・（その２）の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用、（その１） 279,734,000円、（その２）94,435,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、（その１）昭和54年３月28日から昭和56年９月30日まで、（その２）昭和55年５月29日から昭和56年７月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と並行して実施した。また、遺構図面や写真撮影等の整理業務は、現地における発掘調査の合間と、（その１）昭和56年８月１日から昭和56年９月30日、（その２）昭和56年６月１日から昭和56年７月31日の、各２ケ月間に実施した。
6. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は、以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄（昭和55年11月迄）・大塚恭朗（昭和56年４月から）
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣・灰本明子・千野和久・田口宗義・鎗山洋子・宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　片山彰一・立花政治・平井貞子　妹尾直子
	業務課主幹	椋尾孝彦
調査統括責任者	業務課長	堀江門也（昭和56年３月迄）・中井貞夫（昭和56年４月から）
瓜生堂分室	業務課主幹兼第１係長	中西靖人、技師　石神幸子・村上年生・宮野淳一（その１）
	業務第３係長	玉井　功、技師　生田維道（その２）・小山田宏一（その１・その２）

また、調査に際して日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所及び河内警察署等に格別の配慮を受けた。

7．本書の記述は、遺構に関して村上年生、生田維道、小山田宏一、宮野淳一が分担し、一部、小田和利、服部文章（奈良大学学生）の協力を得た。遺物に関しては、木器を石神幸子、土器その他は村上、小山田、生田、宮野が行った。また、舟形木製品について久保寿一郎（奈良大学学生）がまとめた。

8．本書の記述にあたり、以下の諸氏から御指導、御教示を得た。記して感謝します。

石野博信（橿原考古学研究所）・上野利明（東大阪市遺跡保護調査会）・荻田昭二（縄手中学校教諭）・奥田尚（刑部小学校教諭）・木下正史（奈良国立文化財研究所）・三枝健二（広島県埋蔵文化財調査センター）・清水真一（鳥取県教育委員会文化課）・下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課）・寺沢薫（奈良県教育委員会文化財保存課）・三浦純夫（石川県立埋蔵文化財センター）・森田克行（高槻埋蔵文化財センター）・柳本照男（豊中市教育委員会）・米田敏幸（八尾市教育委員会）

9．本調査では、自然遺物の分析、鑑定を以下の諸氏、機関に依頼した。

（花粉・珪藻）　パリノサーヴェイ株式会社、（種子）　粉川昭平、（炭化物）　佐藤敏也、（赤色顔料）　安田博幸・奥野礼子、（樹種）　松田隆嗣

また、出土木器の保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

10．発掘調査、遺物整理作業にあたり、以下の学生諸君の協力を得た。

外業　荒木敏・石井直人・伊豆彰一・伊藤徹也・今西純一・岩本敏明・上杉明宏・大嶋英明・大野喜宏・小田和利・加治屋孝敏・紙西英利・久保寿一郎・塩野尚彦・下阪泰一・菅原進・杉本和昭・須山允・高見良典・田川宗良・田中祥介・土居仁・夏目雄二・新田隆・服部文章・林光一・原田久人・福本行洋・藤江一晃・増本真治・松下信一・松田隆・水谷茂敏・森澤靖夫・八木泰典

内業　池田素子・池田利恵子・伊藤純子・稲井裕子・上坂雅恵・大田享子・大宮恵美子・岡村和恵・奥野岐予子・楫野優子・金正尚子・国谷隆子・桑原真理子・古賀利恵・坂本好子・末次貴美子・高橋真理恵・谷田由香・中川良美・中西倫子・並川悦子・二宮久美子・福光由里・三並悦子・森加世・森国恭子・安田仁美

11．本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成した。また、本書に掲載した資料は、すべて財団法人大阪文化財センターが保管している。広く利用されることを希望したい。

凡　　例

1. 遺構番号は、トレンチ・時期ごとに与えた。ただし、C・Dトレンチはまとめた。
2. 各遺物は記載順に通し番号を与え、実測図と写真が対照できるようにした。また土器は数字のみで表わしたが、土製品は頭にT、瓦は頭にK、木製品は頭にW、金属製品は頭にM、石製品は頭にSを付して表示した。
3. 遺物実測図の縮尺率は、一部の例外を除き土器を3分の1、木製品を3分の1・4分の1・6分の1・8分の1に統一した。写真の縮尺率も同様にした。
4. 木器の木取りは、木目が明瞭に観察されるものに限り断面図に示した。
5. 本文中の遺構実測図の縮尺率は、20分の1・40分の1・80分の1を多用した。
6. 付図の時期別遺構面図の縮尺率は、原則として200分の1を使用、他の縮尺も使用した。
7. 遺構実測図の高さはT.P.（m）で統一し、方位は真北とした。位置は、公団の基準を使用し、本文中においてはSTAの記号を使用した。
8. 付章を除き、引用・参考文献は一括し末尾にまとめた。
9. 土器様式名は、現段階における土器編年による名称を暫定的に使用する。以下その編年対比表を掲げておく。（P.288を参照）

時期名			河内の資料	米田'82	酒井'76	纒向'77	安達木下'74	都出'79	江見'80	柳田'82
弥生V様式			船橋第9トレンチ土坑 北鳥池下層		V様式	纒向Ⅰ		V様式		
庄内式	古（上田町Ⅰ式）		上田町Ⅰ層 八尾南SE10	八尾南Ⅰ	過渡期Ⅰ			Ⅵ様式古相	百間川後期Ⅳ	
	新（上田町Ⅱ式）	古相	馬場川井戸 Ⅰ類 瓜生堂溝224 Ⅰ類	Ⅱ～Ⅳa	過渡期Ⅱ	纒向Ⅱ		Ⅵ様式新相		Ⅰa
		新相	瓜生堂溝224 Ⅱ類 西岩田1丁目						百間川古墳時代Ⅱ	Ⅰb
布留式	古	古相	中田1丁目土坑 竪振、東弓削A8S 美園SE3	Ⅳb	過渡期Ⅲ	纒向Ⅲ	和田廃寺下層	布留式古相		Ⅱa
		新相	八尾南SE9	Ⅴ	布留式	纒向Ⅳ	坂田寺下層		百間川古墳時代Ⅱ	
	中		小若江北			纒向Ⅴ	上の井手SD-031 藤原SD 914 912	布留式中相		Ⅱb
	新		船橋OⅠ～OⅡ			纒向Ⅵ	上の井手SE30	布留式新相	百間川古墳時代Ⅲ	

土器編年対比表

西　岩　田

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

巻頭カラー図版　1～5

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査に至る経過……中西靖人……1

第Ⅱ章　調査方法　村上年生

第1節　既往の調査……3

第2節　調査の方法……6

第Ⅲ章　歴史的環境……村上年生・小山田宏一・宮野淳一

第1節　旧石器・縄文時代……10

第2節　弥生・古墳時代……14

第3節　奈良時代以降……18

第Ⅳ章　調査結果……石神幸子・村上・生田維道・小山田・宮野・小田和利・服部文章・久保寿一郎

第1節　ボーリング・データから見た層序……22

第2節　基本層序……29

第3節　弥生時代　（弥生前期～後期）……32

第4節　古墳時代・Ⅰ　（庄内式併行）……98

第5節　古墳時代・Ⅱ　（布留式併行）……179

第6節　古墳時代・Ⅲ　（古墳中期）……183

第7節　古墳時代・Ⅳ　（古墳後期）……209

第8節　奈良時代・中世……254

第9節　近世・近世以降……261

第Ⅴ章　総　括……中西・村上……281

付　章　自然遺物

第1節　西岩田遺跡の花粉分析結果……（株）パリノ・サーヴェイ……289

第2節　西岩田遺跡の珪藻化石分析結果……（株）パリノ・サーヴェイ……297

第3節　西岩田遺跡出土土器内面に付着する炭化物分析結果……佐藤敏也……304

第4節　西岩田遺跡出土土器に塗布された赤色顔料の化学分析……安田博幸……307
奥野礼子

第5節　西岩田遺跡出土木製遺物の樹種について……松田隆嗣……309

大阪文化財センター
蔵書
第　号

挿　図　目　次

第 1 図　トレンチ位置図および関連調査位置図……5
第 2 図　トレンチ設定方式……6
第 3 図　調査トレンチ横断面図……7
第 4 図　トレンチ平面図……9
第 5 図　旧石器・縄文時代遺跡分布図……13
第 6 図　弥生時代前期遺跡分布図……14
第 7 図　弥生時代～古墳時代遺跡分布図……16
第 8 図　古墳時代古墳分布図……17
第 9 図　奈良時代以降遺跡分布図……19
第 10 図　条理復原図……21
第 11 図　ボーリング・データから見た地質断面図……23・24
第 12 図　ボーリング・データから見た表層地質断面図……25・26
第 13 図　各トレンチ柱状図……27・28
第 14 図　弥生時代後期以前　流水堆積層下部堆積状況……32
第 15 図　弥生時代前期　灰色粘土層上面出土遺物……33
第 16 図　弥生時代中期　ピート層出土遺物……35
第 17 図　弥生時代後期　筋掘断面略図……36
第 18 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積　堆積状況図……37・38
第 19 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流路内遺物出土状況図……37・38
第 20 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積出土木器群位置略図……39
第 21 図　弥生時代後期　1Aトレンチ　流水堆積木器出土状況……40
第 22 図　弥生時代後期　Aトレンチ　筋掘・9Aトレンチ　流水堆積木器出土状況
……41・42
第 23 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層上面土器出土状況……42
第 24 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(1)（土器）……43
第 25 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(2)（木器）……70
第 26 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(3)……71
第 27 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(4)……72
第 28 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(5)……73
第 29 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(6)……74
第 30 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(7)……75

第 31 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(8)……76
第 32 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(9)……77
第 33 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(10)……78
第 34 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(11)……79
第 35 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(12)……80
第 36 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(13)……81
第 37 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(14)……82
第 38 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(15)……83
第 39 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(16)……84
第 40 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(17)……85
第 41 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(18)……86
第 42 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(19)……87
第 43 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(20)……88
第 44 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(21)……89
第 45 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(22)……90
第 46 図　弥生時代後期　Aトレンチ　流水堆積層出土遺物(23)……93
第 47 図　弥生時代　BCDトレンチ　古墳時代第Ⅰ面までの堆積状況図……93・94
第 48 図　弥生時代後期　Cトレンチ……流水堆積層出土遺物(1)……95
第 49 図　弥生時代後期　Bトレンチ　流水堆積層出土遺物……96
第 50 図　弥生時代後期　Cトレンチ　流水堆積層出土遺物(2)……97
第 51 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ遺構面……99・100
第 52 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1－1　遺物出土状況……101
第 53 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1－1　遺物出土状況……101
第 54 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1－2　遺物出土状況（E区）……102
第 55 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1－2　遺物出土状況（W－1区）……102
第 56 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　断面図……103
第 57 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(1)……106
第 58 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(2)……107
第 59 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(3)……108
第 60 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(4)……109
第 61 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(5)　土錘……109
第 62 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(6)　木器……110
第 63 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝1　出土遺物(7)　木器……111
第 64 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝2　東西断面図……112

第 65 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝 2　遺物出土状況……113・114
第 66 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　溝 2　出土遺物……115
第 67 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　土器列　出土遺物……116
第 68 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　土器列　遺物出土状況……117・118
第 69 図　古墳時代・Ⅰ　A 3 トレンチ　粗砂層　遺物出土層位……119
第 70 図　古墳時代・Ⅰ　A 3 トレンチ　粗砂層　遺物出土状況……121
第 71 図　古墳時代・Ⅰ　A 3 トレンチ　粗砂層　出土遺物(1)……122
第 72 図　古墳時代・Ⅰ　A 3 トレンチ　粗砂層　出土遺物(2)……123
第 73 図　古墳時代・Ⅰ　16Aトレンチ　粗砂層　遺物出土状況……124
第 74 図　古墳時代・Ⅰ　16Aトレンチ　粗砂層　出土遺物……124
第 75 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　庄内包含層　出土遺物(1)……125
第 76 図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　庄内包含層　出土遺物(2)　土錘 2 点……125
第 77 図　古墳時代・Ⅰ　3 Bトレンチ　暗灰青色粘質微砂層　出土遺物……126
第 78 図　古墳時代・Ⅰ　3 Bトレンチ　土壙 1　出土遺物……127
第 79 図　古墳時代・Ⅰ　3 Bトレンチ　土壙 1　南北断面図……127
第 80 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　庄内第 1 遺構面下　出土遺物(1)土器……128
第 81 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　庄内第 1 遺構面下　出土遺物(2)木器……129
第 82 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　庄内第 1 遺構面下　出土遺物(3)木器……130
第 83 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　庄内第 2 遺構面下　出土遺物……131
第 84 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　土器群 1　出土状況図……132
第 85 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　土器群 1　出土遺物……133
第 86 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　土器群 2　出土状況図……135
第 87 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　土器群 2　土器・炭除去状況図……135
第 88 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　土器群 2　出土遺物……135
第 89 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(1)〔弥生〕……144
第 90 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(2)〔弥生土器第Ⅴ様式〕…145
第 91 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(3)〔第Ⅴ様式系土器〕……146
第 92 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(4)〔庄内式甕①〕……147
第 93 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(5)〔庄内式甕②〕……148
第 94 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(6)〔布留式甕①〕……149
第 95 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(7)〔布留式甕②〕……150
第 96 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(8)〔二重口縁壺・長頸壺〕
……151
第 97 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(9)〔二重口縁壺〕……152

第 98 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⑽〔長頸壺・広口壺〕…… 153
第 99 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⑾〔短頸壺・ミニチュア壺〕
…… 154
第 100 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⑿〔高杯〕…… 155
第 101 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒀〔鉢①〕…… 156
第 102 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒁〔鉢・小型丸底壺・器台〕
…… 157
第 103 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒂〔小型器台〕…… 158
第 104 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒃〔庄内式・布留式に存在する甕〕…… 158
第 105 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒄〔吉備系土器〕…… 160
第 106 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒅〔山陰系土器〕…… 161
第 107 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒆〔東海系土器〕…… 162
第 108 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物⒇〔北部九州系土器〕…… 162
第 109 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物㉑〔製塩土器・手焙形土器〕
…… 162
第 110 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　籠出土状況図…… 163
第 111 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物㉒〔土錘〕…… 164
第 112 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物㉓〔木器〕…… 166
第 113 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　A—A′断面図…… 167
第 114 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　出土遺物(1)　土錘…… 168
第 115 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　Belt断面図……169・170
第 116 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　B—B′断面図……169・170
第 117 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　出土遺物(2)…… 171
第 118 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　出土遺物(3)…… 172
第 119 図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅱ　出土遺物(4)…… 173
第 120 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　LocⅠ・Ⅱ　土器出土状況図…… 174
第 121 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　LocⅠ・Ⅱ　出土遺物…… 175
第 122 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　河川Ⅰ　センター断面図…… 175
第 123 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(1)…… 176
第 124 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物(2)…… 177
第 125 図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ　足跡平面図…… 177
第 126 図　古墳時代・Ⅱ　Bトレンチ　落ち込み１　出土遺物…… 179
第 127 図　古墳時代・Ⅱ　Bトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物…… 179

第128図　古墳時代・Ⅱ　Bトレンチ　遺構面出土遺物…… 180
第129図　古墳時代・Ⅱ　Cトレンチ　灰褐色粘質土出土遺物…… 181
第130図　古墳時代・Ⅱ　Cトレンチ　河川Ⅰ　北壁断面図…… 182
第131図　古墳時代・Ⅱ　Cトレンチ　河川Ⅰ　出土遺物…… 182
第132図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　溝1　遺物出土状況…… 184
第133図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　溝1　出土遺物…… 185
第134図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸枠木組模式図…… 188
第135図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　遺物埋納状況　(a)上位　(b)中位(1)
(c)中位(2)…… 188
第136図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　構造図…… 189
第137図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　出土遺物…… 190
第138図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　東・西側井戸枠…… 191
第139図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　北側井戸枠…… 192
第140図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸1　南側井戸枠…… 193
第141図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　井戸祭祀段階想定図…… 196
第142図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙1　出土遺物(1)…… 197
第143図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙1　出土遺物(2)…… 198
第144図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙1　遺物出土状況…… 199
第145図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙6　下層上位遺物出土状況…… 201
第146図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙6　下層下位遺物出土状況…… 201
第147図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙6　A—A′断面図…… 201
第148図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙6　出土遺物…… 202
第149図　古墳時代・Ⅲ　Cトレンチ　土壙7　遺物出土状況…… 204
第150図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙7　A—A′断面図…… 204
第151図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙7　出土遺物…… 204
第152図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　ピット25・26　遺物出土状況…… 205
第153図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　高杯集中地区遺構図…… 205
第154図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　高杯集中地区出土遺物…… 206
第155図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　ピット25・26　出土遺物…… 206
第156図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　ピット27　出土遺物…… 206
第157図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙8　出土遺物…… 207
第158図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙9　出土遺物(1)…… 207
第159図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　土壙9　出土遺物(2)…… 208
第160図　古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　掘立柱建物1、2…… 208

第161図　古墳時代・Ⅳ　Aトレンチ　土器群　遺物出土状況…… 210
第162図　古墳時代・Ⅳ　13Aトレンチ　土壙1　遺物出土状況…… 211
第163図　古墳時代・Ⅳ　Aトレンチ　出土遺物…… 212
第164図　古墳時代・Ⅳ　2Bトレンチ　上部包含層出土遺物…… 213
第165図　古墳時代・Ⅳ　2Bトレンチ　掘立柱建物1…… 214
第166図　古墳時代・Ⅳ　2Bトレンチ　掘立柱建物2…… 216
第167図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　北地区掘立柱建物群配地図……217・218
第168図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　掘立柱建物3…… 219
第169図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　掘立柱建物4…… 220
第170図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　溝4　出土遺物…… 221
第171図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　溝5　出土遺物…… 222
第172図　古墳時代・Ⅳ　4Bトレンチ　上部包含層出土遺物…… 223
第173図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　須恵器・土師器集中包含層出土遺物(1)…… 224
第174図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　須恵器・土師器集中包含層出土遺物(2)…… 225
第175図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　須恵器・土師器集中包含層出土遺物(3)…… 226
第176図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　須恵器・土師器集中包含層出土遺物(4)…… 226
第177図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　須恵器・土師器集中包含層出土遺物(5)…… 227
第178図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　土器群1　出土状況……229・230
第179図　古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　土器群1　出土遺物…… 231
第180図　古墳時代・Ⅳ　1C、2Cトレンチ遺構群……233・234
第181図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　溝……235・236
第182図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　溝1、3、4出土遺物…… 238
第183図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　溝5、6出土遺物…… 239
第184図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　土壙…… 241
第185図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　落ち込み1、2、3、4、5、6…… 243
第186図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　落ち込み7、12、13、14…… 244
第187図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　落ち込み10、15…… 245
第188図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　落ち込み出土遺物…… 246
第189図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　ピット211土器出土状態…… 247
第190図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　南部ピット群…… 248
第191図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　南部ピット群出土遺物…… 249
第192図　古墳時代・Ⅳ　1Cトレンチ　南西部土器群出土状態…… 249
第193図　古墳時代・Ⅳ　1Dトレンチ　ピット群…… 250
第194図　古墳時代・Ⅳ　1Cトレンチ　南西部土器群出土遺物…… 251

第195図　古墳時代・Ⅳ　Cトレンチ　石製紡錘車・下面拓本…… 251
第196図　古墳時代・Ⅳ期面　Cトレンチ　出土遺物(1)…… 252
第197図　古墳時代・Ⅳ期面　Cトレンチ　出土遺物(2)…… 253
第198図　灰茶褐色粘質土層　出土遺物…… 253
第199図　奈良時代　Bトレンチ　遺構面…… 254
第200図　奈良・平安時代　Cトレンチ　柱穴出土遺物…… 256
第201図　中世　Bトレンチ　土壙1～4南北断面図……257・258
第202図　中世　Cトレンチ　井戸出土遺物…… 260
第203図　近世　畝状遺構　東西断面図…… 262
第204図　近世　7Aトレンチ　土壙9…… 263
第205図　近世　11Aトレンチ　土壙10　遺物出土状況…… 264
第206図　近世　11Aトレンチ　土壙10　出土遺物…… 264
第207図　近世　Aトレンチ　出土遺物…… 265
第208図　近現代　15Aトレンチ　遺構面（攪乱溝）…… 266
第209図　近世　1Bトレンチ　遺構面　出土遺物…… 268
第210図　近現代　3Bトレンチ　溝5……269・270
第211図　近現代　3Bトレンチ　溝5　出土遺物…… 272
第212図　近現代　Bトレンチ　攪乱土出土遺物(1)…… 272
第213図　近現代　Bトレンチ　攪乱土出土遺物(2)…… 273
第214図　近現代　Cトレンチ　溝7　出土遺物…… 273
第215図　黄褐色粘土層　出土遺物…… 274
第216図　灰黄色粘土層　出土遺物(1)…… 274
第217図　灰黄色粘土層　出土遺物(2)…… 275
第218図　灰黄色粘土層　出土遺物(3)…… 276
第219図　灰黄色粘土層　出土遺物(4)…… 277
第220図　暗灰青色粘土層　出土遺物…… 277
第221図　灰青色粘土層　出土遺物(1)…… 278
第222図　灰青色粘土層　出土遺物(2)…… 279
第223図　Cトレンチ出土須恵器ヘラ記号拓本…… 280
第224図　表採遺物…… 280
第225図　1Cトレンチ　攪乱土出土遺物…… 280

表　目　次

第 1 表　弥生時代遺跡グルーピング表……14
第 2 表　層序関係表……31
第 3 表　Aトレンチ筋掘出土木製品表……43
第 4 表　Aトレンチ切拡げ出土木製品表……44
第 5 表　手斧柄観察表……48・49
第 6 表　櫂観察表……50
第 7 表　柄状木製品観察表……53・54
第 8 表　用途不明木製品観察表(1)……55・56
第 9 表　用途不明木製品観察表(2)……57
第 10 表　建築用板材観察表……59・60
第 11 表　板材・加工材観察表……60・61
第 12 表　古墳時代Ⅰ　Aトレンチ　溝1出土遺物表……104
第 13 表　古墳時代Ⅰ　Aトレンチ　溝1出土土錘表……109
第 14 表　古墳時代Ⅰ　Aトレンチ　包含層出土土錘表……125
第 15 表　古墳時代Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ足跡集計グラフ……137
第 16 表　古墳時代Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ検出鋤跡計測表……138
第 17 表　古墳時代Ⅰ　Bトレンチ　河川Ⅰ出土土錘観察表……163
第 18 表　古墳時代Ⅰ　Cトレンチ　足跡計測表……178

付章表目次

Tab. 1　花粉分析サンプル表……296
Tab. 2　5Aトレンチ試料の珪藻群集帯と堆積環境……300
Tab. 3　12Aトレンチ試料の珪藻群集帯と堆積環境……302
Tab. 4　5Bトレンチ試料の珪藻群集帯と堆積環境……302
Tab. 5　珪藻分析サンプル表……303
Tab. 6　ジフェニルカルジバドによるスポットの呈色と Rf 値……308
Tab. 7　ジチゾンによるスポットの呈色と Rf 値……308
Tab. 8　鍬・鋤の用材……320
Tab. 9　堅杵の用材……321

Tab. 10　田舟の用材…… 321
Tab. 11　横斧の用材…… 322
Tab. 12　櫂の用材…… 323
Tab. 13　たもの用材…… 323
Tab. 14　板・柱・杭の用材…… 324
Tab. 15　木製遺物の樹種表……339～342

付章写真図版目次

PL. 1　炭化物の拡大写真…… 305
PL. 2　木製遺物の顕微鏡写真(1)…… 325
PL. 3　木製遺物の顕微鏡写真(2)…… 326
PL. 4　木製遺物の顕微鏡写真(3)…… 327
PL. 5　木製遺物の顕微鏡写真(4)…… 328
PL. 6　木製遺物の顕微鏡写真(5)…… 329
PL. 7　木製遺物の顕微鏡写真(6)…… 330
PL. 8　木製遺物の顕微鏡写真(7)…… 331
PL. 9　木製遺物の顕微鏡写真(8)…… 332
PL. 10　木製遺物の顕微鏡写真(9)…… 333
PL. 11　木製遺物の顕微鏡写真(10)…… 334
PL. 12　木製遺物の顕微鏡写真(11)…… 335
PL. 13　木製遺物の顕微鏡写真(12)…… 336
PL. 14　木製遺物の顕微鏡写真(13)…… 337
PL. 15　木製遺物の顕微鏡写真(14)…… 338

巻頭カラー図版目次

カラー図版1　調査地全景
カラー図版2　酸化鉄の付着状況　（須恵器杯身内面）
カラー図版3　酸化鉄の付着状況　（土師器壺内面）
カラー図版4　漆器椀出土状況
カラー図版5　籠出土状況

付　図　目　次

付図	1	弥生時代後期　Aトレンチ　部分図	（S＝1/200）
付図	2	古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ　部分図	（S＝1/200）
付図	3	古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	4	古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ　足跡・鋤跡平面図	（S＝1/40）
付図	5	古墳時代・Ⅰ　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	6	古墳時代・Ⅱ　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	7	古墳時代・Ⅱ　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	8	古墳時代・Ⅲ・Ⅳ・Bトレンチ　中世・近世　全体図	（S＝1/200）
付図	9	古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	10	古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　北群遺構面	（S＝1/80）
付図	11	古墳時代・Ⅲ　Bトレンチ　南群遺構面	（S＝1/80）
付図	12	古墳時代・Ⅳ　Aトレンチ　部分図	（S＝1/200）
付図	13	古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	14	古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　中央地区遺構面	（S＝1/80）
付図	15	古墳時代・Ⅳ　Bトレンチ　南地区遺構面	（S＝1/80）
付図	16	古墳時代・Ⅳ　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	17	奈良・平安　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	18	中世　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	19	中世　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	20	近世　Aトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	21	近世　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	22	近・現代　Aトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	23	近・現代　Aトレンチ　足跡遺構面	（S＝1/80）
付図	24	近・現代　Bトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	25	近・現代　C、Dトレンチ　全体図	（S＝1/200）
付図	26	古墳時代　Bトレンチ　河川　南北断面図	（S＝1/100、1/20）

付図目次

付図 1	第3次九条線	A ブロック 配置図	(S = 1/200)
付図 2	右岸幹線・Ⅰ	A ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 3	右岸幹線・Ⅰ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 4	下水管渠・Ⅰ	B ブロック 工事・施工管理図	(S = 1/50)
付図 5	右岸幹線・Ⅰ	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 6	右岸幹線・Ⅱ	A ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 7	右岸幹線・Ⅱ	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 8	下水管渠・Ⅱ・B・D ブロック	中央・上流・下流・上流 平面図	(S = 1/200)
付図 9	下水管渠・Ⅱ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 10	右岸幹線・Ⅲ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 11	右岸幹線・Ⅲ	D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 12	右岸幹線・Ⅲ	A ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 13	右岸幹線・Ⅲ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 14	右岸幹線・Ⅲ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 15	右岸幹線・Ⅲ	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 16	右岸幹線・B	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 17	中央・幹線	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 18	中央	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 19	中央	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 20	左岸	A ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 21	左岸	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 22	左・幹線	A ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 23	左・幹線	A ブロック 加圧管渠図	(S = 1/50)
付図 24	左・幹線	B ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 25	左・幹線	C, D ブロック 平面図	(S = 1/200)
付図 26	加圧幹線	D ブロック 工事 南北断面図	(S = 1/100, 1/20)

第Ⅰ章　調査に至る経過

西岩田遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内松原Ｊ.Ｃ.～東大阪Ｉ.Ｃ.13.5㎞区間に存在する新家、西岩田、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北、山賀、友井東、美園、佐堂、久宝寺、亀井、城山、長原の13遺跡の内、北端部に位置する遺跡である。地籍は東大阪市西岩田３丁目である。

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内の13遺跡の取扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として協議を重ねてきたが、昭和48年になって、当該路線の存在する河内平野の特殊性を考慮し、まず周知されていた９遺跡（亀井、久宝寺、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家）について路線内の範囲確認と、埋没深度の把握、調査経費及び調査期間の算出根拠を得る為の第１次発掘調査を実施することで合意し、この調査を(財)大阪文化財センターで実施することになった。調査は、５ｍ×５ｍのグリッドを45ケ所（１遺跡平均５ケ所）発掘調査を実施するものであり、昭和48年度に亀井、久宝寺、友井東の３遺跡、翌49年度に残りの山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の６遺跡について実施した。これら２ケ年度にわたる第１次発掘調査の結果は、それぞれ“亀井遺跡他２遺跡等１次発掘調査報告書”“瓜生堂遺跡他５遺跡第１次発掘調査報告書”として、(財)大阪文化財センターより刊行されている。

また、昭和49年には、大阪市交通局が建設工事を進めていた高速電気軌道第２号線（地下鉄谷町線）延長工事予定地の内、大阪中央環状線にかかる平野区長吉出戸町、同長吉長原及び長吉川辺町地内について、遺跡の存在する可能性の極めて強い地点ということから、工事に先立って試掘調査を実施する必要があるとの行政指導が大阪府教育委員会から打ち出され、大阪市交通局は、(財)大阪文化財センターに調査の委託をすることとなった。この結果、長原遺跡、城山遺跡の２遺跡が新たに発見され、昭和49年５月、(財)大阪文化財センターは“中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書”として報告したのである。

さらに、昭和50年には、大阪瓦斯株式会社が切換を進めていた天然ガスパイプラインとしての河内ラインガス導管が、前述の城山遺跡及び久宝寺遺跡の範囲内に布設されることになり、これに伴う試掘調査も、(財)大阪文化財センターによって実施されることとなった。この結果、城山遺跡の北限を一応確認すると共に、久宝寺遺跡の範囲も確認することとなった。

一方、当該河内ラインガス導管の布設にかかる八尾市美園町部分については、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、美園遺跡が確認されることとなった。

以上の様に、主要地方道大阪中央環状線臨接地での各種の工事に先立つ調査及び、近畿自動車道関連の一連の第１次発掘調査の結果により、当該自動車道建設予定地内における遺跡の概略が把握されたのである。

これらの事実を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団は、さらに協議を重ねた結果、基

本的には発掘調査の結果を尊重し、設計や工法を検討しながら橋脚位置を決定し、オール高架の道路を建設していくことで合意した。

上記合意に基づき、日本道路公団は文化庁へ文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁から、事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮するべき旨の回答を受けた。ここにおいて大阪府教育委員会は、現地における発掘調査について、(財)大阪文化財センターに協力を求めることとし、日本道路公団大阪建設局を含めた三者によって昭和51年4月、調査に関する協定を締結し、同年7月、最南端に所在する長原遺跡の調査について上記の協定に基づいて三者で契約を締結し、現地調査に着手した。

その後、長原遺跡の調査は、古墳群の発見や掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏まえて保存策が講じられ、数回にわたって設計変更に伴う契約変更を繰返しながら、昭和53年3月に現地における発掘調査を終了し、同年5月概要報告書作成作業を完了して、概要報告書“長原”を刊行した。

この長原遺跡の調査の終了を待って、残る12遺跡の調査について、一応の調査終了目標を昭和58年度末とする5ヶ年計画を作成すると共に、長原遺跡での設計変更の繰り返し及び調査面積の拡大、期間の延長、経費の増加等々反省する点が多かったことから、調査方法の再検討を行なった。その結果、建設される道路は高架道路であること、沖積平野上の遺跡の特殊性としての埋没深度の深いこと、発掘作業の安全性の確保及び調査期間や調査費用を考慮して、いわゆる“トレンチ調査方式”を採用することとなった。“トレンチ調査方式”とは、路線の全面発掘より、現況保存を優先した必要最少限度の調査を目的として、調査面積を極力限定すると共に、主要な遺構の存在する部分の保護・保存をも併せて可能とする沖積平野発掘調査の新しい試みであった。

この調査方式をもって、昭和53年2月には瓜生堂遺跡、昭和53年11月には巨摩廃寺遺跡と順次道路の供用工程にあわせて調査に着手してきた。また上記2遺跡については、当該方式による初期の目的を無事果して発掘調査を終了し、それぞれ“瓜生堂”、“巨摩・瓜生堂”として調査概要報告書を刊行してきている。

こうした一連の経過を踏まえて、西岩田遺跡の発掘調査に着手することとなった。調査は昭和54年3月、周知されていた 300m区間について大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局及び(財)大阪文化財センターの三者による契約を締結し、同年4月7日から現地における発掘調査に着手した。こうして調査が進行していくなかで、南側Bトレンチ南端部分から、古墳時代の建物跡等が多数検出され、その状況からみて遺跡はさらに南へ拡がる可能性が強くなったため、幅2mの試掘トレンチを設定し南側の拡がりを調査することとした。その結果、Bトレンチ南端よりさらに 100m遺跡が拡大することが判明した。従って、この拡大部分については別途調査を実施することとし、西岩田遺跡（その2）調査区として昭和55年5月28日付で三者契約を締結し、同年6月14日に調査に着手した。調査は各々の調査で数回の設計変更に伴う契約変更を重ね、昭和56年7月に（その2）の、また、昭和56年9月に（その1）の現地における調査を全て完了した。

（中西）

第Ⅱ章　調　査　の　方　法

第１節　遺跡の発見から既往の調査

ここにおいては遺跡が発見された経過から、西岩田遺跡およびその周辺において行われた調査の略史を述べる。

＜位置＞　西岩田遺跡は近鉄奈良線の八戸ノ里駅と若江岩田駅の中間北方に位置している。遺跡に行くには、八戸ノ里駅で降車し、東へ１kmほど行くと中央環状線に行きあたる。その中央環状線瓜生堂交差点から北へ500mの付近が西岩田遺跡の範囲内である。この付近は、旧岩田村・新家村・菱江村の中間にあり、従来水田地帯であった所で、明治から戦後に至っても大きな変貌をとげていない。周辺の環境に変化を与える契機は、「大阪中央環状線」の建設という事業に起因する。

＜発見＞　東大阪市西岩田２丁目付近から意岐部中学校敷地にかけて、須恵器・土師器が散布していることは従来から知られていた。特に、昭和15年に東大阪市新家在住の規矩一太郎氏が同氏の田地から４～５世紀・９～10世紀の遺物を採集されている。この遺物は意岐部遺跡出土のものと考えられるが、当時は遺跡の存在が推定されるのみで、西岩田遺跡はまだ地下に眠っていた。荻田昭次氏（現、縄手中学校教諭）は、1964年に着手された大阪中央環状線の敷設に注目して見守っておられた。そして1965年には中央環状線工事に伴う工業用水道管の埋設工事現場の排土の中から、弥生・古墳時代の遺物が発見された。

＜1971年の試掘＞　1970年12月に寝屋川南部流域下水道計画事業の中央南幹線下水管渠管造工事が開始された。これは中央環状線の中央分離帯東端に幅５ｍ、深さ６ｍで掘削し、下水管を埋置するものであった。瓜生堂遺跡内においては、既に鋼矢板の打ち込み作業が始まっていたが、工事は一時中止され、大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会・大阪府下水道課により協議された。その結果、近鉄線以北 1.5kmについては、西岩田・新家遺跡が存在し、未知の遺跡の確認を含めて、工事に先立ち試掘調査を行なうこととなった。試掘調査については東大阪市教育委員会を主体とした「中央南幹線内遺跡調査会」が組織され、1971年２～３月にかけて調査(藤井71A)が行われた。調査は幅５ｍの下水管渠の中央２ｍをユンボによる機械掘削を行い、地層断面図を作成するとともに、遺構・遺物を確認した場合、本調査に移行させることを前提として行われた。２工区（今回のＣ・Ｄトレンチの南側にあたる）からは若干の須恵器・土師器が、５・６工区境（意岐部交差点の北側にあたる）からは弥生時代前期の小型壺形土器が、その南200mの地点（交差点の南側）からはセタシジミの堆積層が確認されている。西岩田遺跡が存在する第４工区については南北両端から試掘が行なわれ、 170mにわたる範囲の遺跡であるとされた。この結果を受けて遺跡の全面発掘の必要性が説かれた。

＜1971年の本調査＞　試掘調査の結果を受けて瓜生堂・西岩田遺跡の調査を行うため、「中央南幹線内西岩田・瓜生堂遺跡調査会」が組織され、西岩田遺跡においては４～６月にかけて第二次

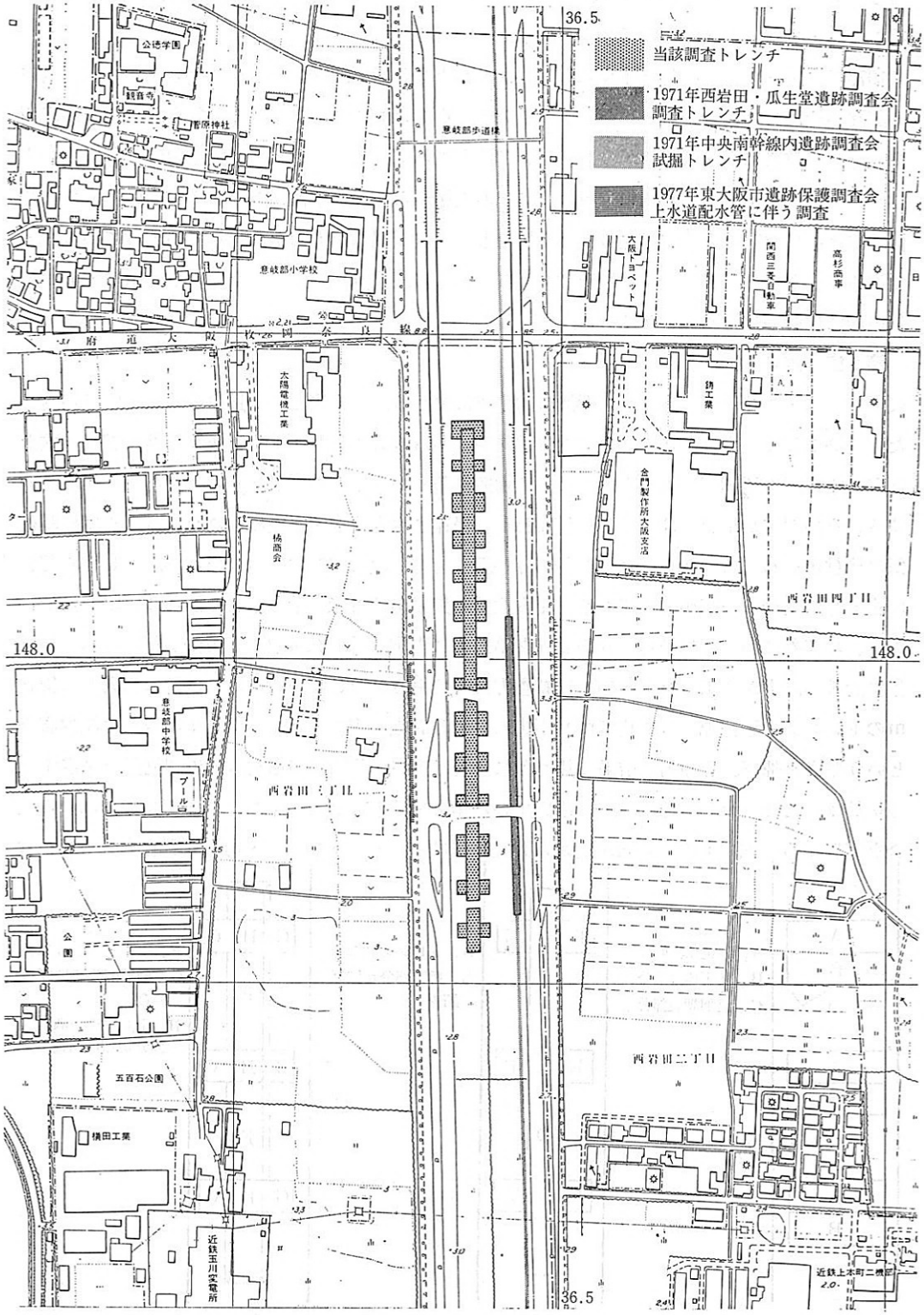
の調査(藤井71B)が実施された。調査の結果、本遺跡を４つの時期にわたり把握された。第１には西岩田遺跡の名を高らしめた、庄内式土器と酒津式土器が共伴して出土している古墳時代初頭のものである。第２に布留式の時期に属する井戸が検出された古墳時代前期で、この時期の須恵器を伴わない磨滅のはげしい土師器片を含む川床が確認され、奈良時代初めに埋没したと考えられた。第３には５世紀末～６世紀初頭の遺物を出土する古墳時代後期で、建築遺構・溝・大小のピット群などが検出されている。第４には古墳時代～歴史時代の遺物を含んだ包含層である。遺跡の環境について、八尾市弓削から東大阪市若江に向かってのびる低平な台地の突端に位置しているとされ、周辺は一面の沼沢地と想定し、河内湖の岸辺の一端に位置していた集落と推定された。

＜1974年の試掘＞　歴史上に顔を現わした西岩田遺跡は下水道の調査が終り、しばし安息の日々をむかえた。しかし、河内平野に眠っていた遺跡が喧騒の日々を迎える前夜がやって来た。近畿自動車道天理～吹田線の工事を実施するにあたり予定地内に含まれる12ヵ所の遺跡について試掘調査(中西75)が1974年に実施された。西岩田遺跡については２グリッド（グリッドは５×５ｍ）当っており、試掘からは問題提起さるべき資料は提出されなかった。範囲については、古墳時代から歴史時代の遺物の出土から当初 130mと考えられていた遺跡範囲が、 300mと拡大することが判明し、意岐部交差点近くまで達した。

＜1974年のガス管埋設に伴う調査＞　1974年９月～1975年２月までには、意岐部から巨摩橋までの１㎞にわたり、大阪ガス中央幹線埋設に伴い調査(芋木75)が実施された。調査方法は幅1.2m、深さ2.2ｍのトレンチであることから、西岩田・瓜生堂・巨摩廃寺等、予定地内に存在する遺跡の範囲確認調査とされた。西岩田遺跡については、近鉄奈良線の北約 500mの地点（ＳＴＡ68＋00ライン東）の砂層から小型丸底壺と器台が、やや南の黒灰粘質土から庄内式の甕が一括出土している。調査者は遺物の出土状態がいずれも流れ堆積の状態を示していることから、調査区域より東へは遺跡の範囲は拡がらないとされた。

＜1975～76年の上水道配水管敷設に伴う調査＞　1975年度に新家東町から横枕浄水場までの配水管布設工事が予定され、そのうち荒本西２丁目の大阪中央環状線緑地帯から荒本西３丁目24番地までの新家遺跡の範囲内について調査(勝田・才原77)が行なわれた。その後、若江西新町１丁目から新家東町までの区間 1.6㎞について調査が行なわれた。調査方法は幅1.2m、深さ2.2mで行なわれ、道路を通過する部分は立坑を調査された。第２工区にあたる西岩田・新家遺跡については、25ヵ所のトレンチが設定された。この結果にもとづき西岩田３丁目の公害監視センター前 120mの区間について本調査を行い、残り区間を立会調査することが決定された。本調査部分において、井戸および井戸に伴う溝状遺構・ピットが検出されている。井戸からは土師器・須恵器が出土し、古墳時代に属するもの、または遺物としては、須恵器を伴わない土器（布留式か？）の小型丸底壺・高坏・甕が一括出土したとされている。

＜1978年・意岐部遺跡の調査＞　西岩田遺跡に隣接し、強い関連性をもつのが意岐部遺跡である。前述の昭和15年に遺物が出土したことから注目されていたが、1978年には意岐部交差点の南西に



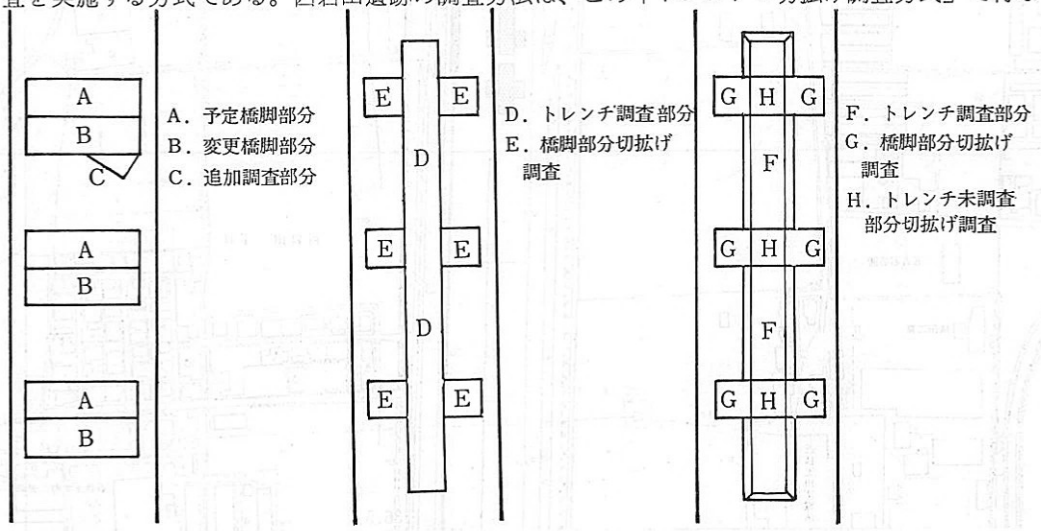
第１図　トレンチ位置図および関連調査位置図（S＝1/500）

あるマンション建設に伴い調査された。6世紀後半頃に属する南北方向・東西方向に方眼状を構成する溝・ピットが検出されているが詳細は不明である。

＜1978年・マンション建設に伴う調査＞　東大阪市遺跡保護調査会により、マンション予定地内の調査(上野80)が行なわれた。予定地は今回西岩田調査のCトレンチと中央環状線北行車線をはさんだ西側にあり、道路に面して300m²のトレンチが設定され試掘調査が行われた。庄内併行期にあたる13mの円形周溝が検出され、周溝内およびその上層から庄内式土器が多数出土している。特に注目すべきは鳥取県秋里遺跡出土の古い様相をもつ甕に類似したものが共伴して出土していることで、他の土器には小形丸底壺の祖形にあたるもの、口縁が立ち上がる小型器台など上田町Ⅱ式の新段階に位置づけられたことである。　（村上）

第2節　調査方法

＜トレンチ・切拡げ調査方式＞　近畿自動車道における調査方法は、(1)長原遺跡において実施した「橋脚部分調査方式」と、(2)瓜生堂遺跡の調査から導入された「トレンチ・切拡げ調査方式」とがある。(1)の橋脚部分調査方式とは、日本道路公団が設定した橋脚部分の調査を第一次に実施する。その調査結果を受けて協議が行なわれ、保存すべき遺構等が検出された場合、再度橋脚位置の検討が行われる。変更された橋脚部分の調査を第二次に実施する方式である。もし橋脚部分に古墳等の遺構の一部が入っており、橋脚位置の変更が不可能で消滅がまぬがれない場合については、範囲外にある遺構推定部分の調査を第三次に実施し「記録を取る」方法が行なわれた。瓜生堂遺跡の調査からトレンチ・切拡げ調査方式に変更されたこの方式とは、遺跡の範囲内に幅10mのトレンチを予定地内（幅約27m）中央に設定し調査を実施する。トレンチ調査とは試掘調査という性格を帯び、その調査結果に基づき二者（府教委・公団）が協議して橋脚位置を決定する。「切拡げ」とはトレンチ部分からはみ出ている橋脚部分のことで、第二次に「切拡げ」部分の調査を実施する方式である。西岩田遺跡の調査方法は、この「トレンチ・切拡げ調査方式」で行な



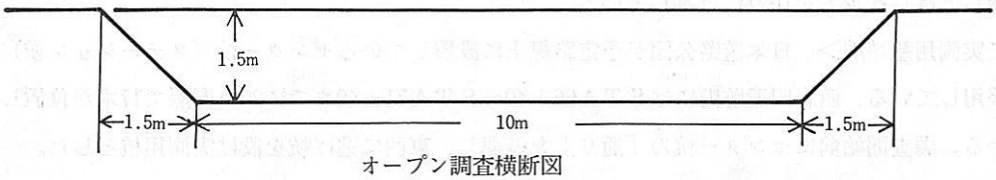
第2図　トレンチ設定方式

われることとなった。

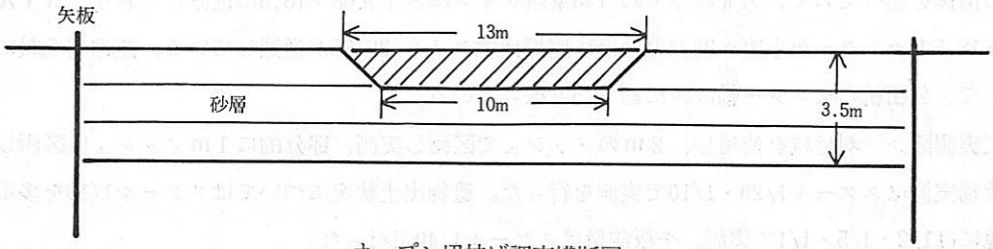
<地下埋設物>　AトレンチとBトレンチ間には、上下水管と電電公社のケーブル用配管が埋設され、BトレンチとCトレンチ間には、「舗装されている横断道」が施設されている。CトレンチとDトレンチ間には、電電公社の電話ケーブルが埋設されている。以上の埋設物は、管の埋設時の掘形により遺構が検出されないため、管を中心に両側数メートルの間隔を置きトレンチを設定している。

<オープン調査法>　当初、西岩田遺跡の最終面は表土から 1.5mの深さで計算が行なわれていた。そのためA・Bトレンチとも矢板を打設せず、オープン（素掘り）で最終面まで調査する予定であった。オープン調査法とは、最終面において幅10mを確保し、壁面の崩壊を防ぐためトレンチ四側辺に 1.5mの法勾配を設けたもので、トレンチ横方向の上端幅は13mをなすもの。A・Bトレンチともこの方法をもとに調査を開始した。

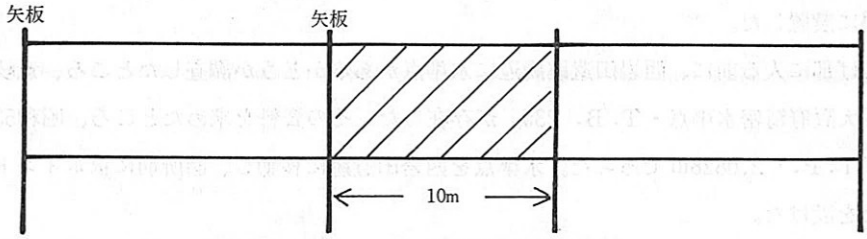
<Aトレンチ調査工法>　オープン調査法により最終面（流水堆積砂層上面）までの調査を終了したが、その後、筋掘調査で遺物を検出したことから、最終面までの掘削深度が表土から 3.5m近くに達するものと判断を下した。トレンチ部の調査は既に終了しており、トレンチ部に矢板を打設し、再度 3.5mの深度まで調査を行うことは状況としては不可能と判断された。この問題は、



オープン調査横断図



オープン切拡げ調査横断図



トレンチ切拡げ調査横断図

第3図　調査トレンチ横断面図

従来においてトレンチの両側に独立している「切拡げ」部分をトレンチ部を含めて連結して矢板を打設し「切拡げ」と「トレンチ部における 1.5m以下の未調査部分」とを同時に調査することにより解決した。

<Bトレンチ調査工法> オープン方式で調査を開始したBトレンチであるが、調査中にトレンチ部南西コーナーを除き大規模な河川Ⅰ・Ⅱが存在することが確認された。河川の底部を確認するため3カ所に試掘を行ったところ、地表下3mに達することが判明した。これではオープンで調査を進行することは全く不可能なため、調査を一時中断し、矢板を打設した段階で調査を再開した。トレンチ南西コーナー部分に関しては、庄内遺構面が遺存し、予定の地表下 1.5mの深度でも十分なため、矢板を打設していない。

<C・Dトレンチ調査工法> C・Dトレンチに関しては、A・Bトレンチの調査状況・掘削深度から判断し、当初から3m以上の掘削深度になるものと判断され、トレンチ部、切拡げ部とも矢板を打設して調査を行った。

<土層観察用ベルト> 基本的には20mピッチに位置するステーション・ラインに設定した。遺構密度の高い地区は10m間隔に設定した。切拡げ調査においては、出来うる限りステーション位置に設定するよう努めたが、調査の都合上・安全のため矢板側に寄せたものがある。遺構部分に関しては、ベルトを任意に設定している。

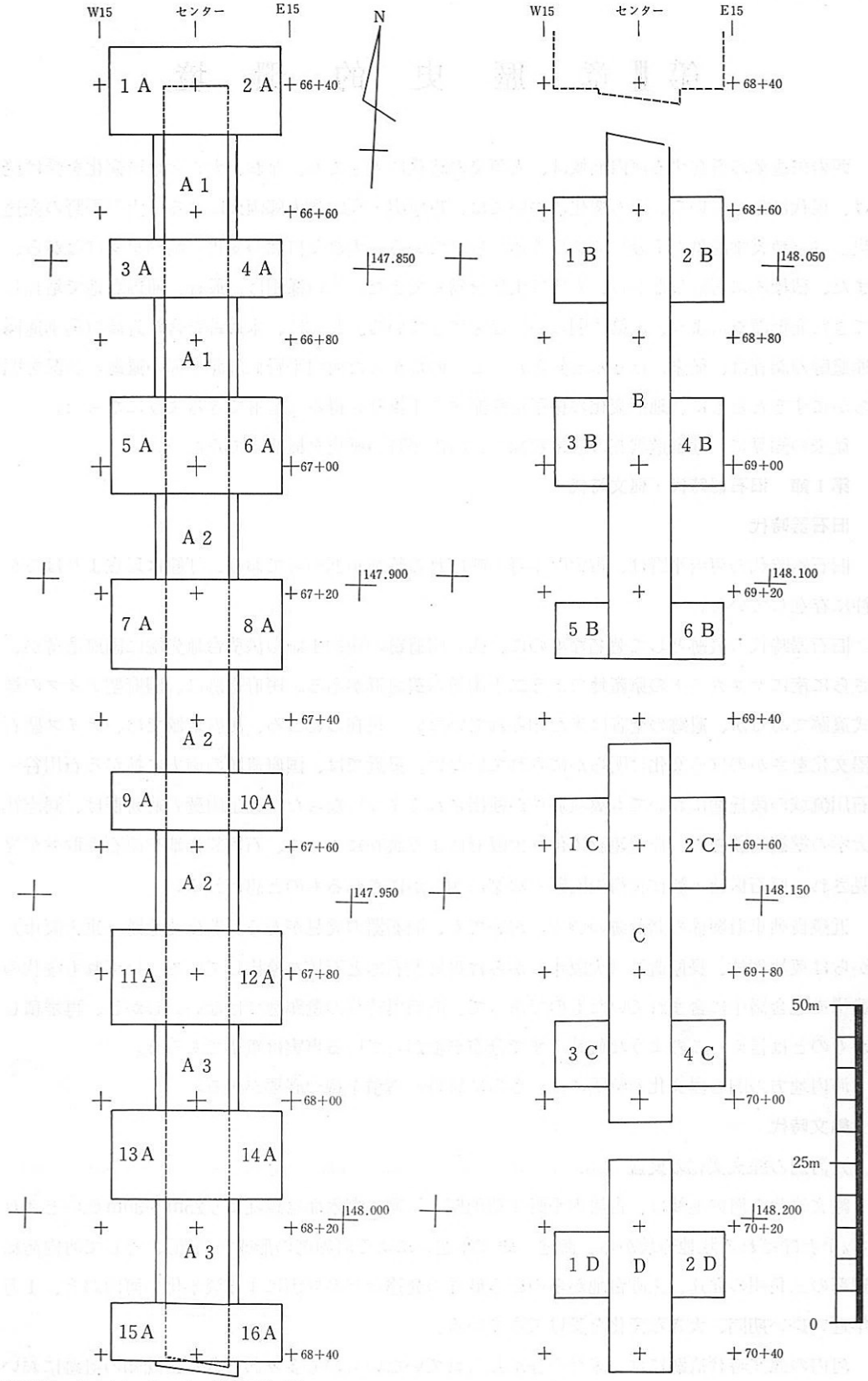
<実測用基準線> 日本道路公団が予定路線上に設置しているセンター杭（ステーション杭）を援用している。西岩田遺跡内にはＳＴＡ66＋40～ＳＴＡ71＋40までに20m間隔で17本が位置している。調査開始前にセンター杭の「通り」を確認し、東西に逃げ杭を設け実測用杭とした。

<座標系> 公団杭、公団基準線のみでは，調査位置の絶対化を決定できないため、国土座標との関係を述べておく。第Ⅶ座標系の 148東西ラインはＳＴＡ68＋18.5に位置しており、ＳＴＡ68＋18.5のセンターから東へ23.4の地点に座標南北ライン 36.55が通過している。座標南北軸に対して、公団杭のセンター軸は西に約 1.5度振っている。

<実測図> 割付杭を使用し、2mのメッシュで区画し実測、部分的に1mメッシュに区画した。遺構実測はスケール1/20・1/10で実測を行った。遺物出土状況についてはスケール1/10を多用し、他には1/2・1/5・1/1で実測。平板測量はスケール1/40で行った。

<水準点> (1)トレンチ部については瓜生堂遺跡から移動、仮ポイントＴＰ 2.007mをＢトレンチ南西隅に設置した。

(2)切拡げ部に入る前に、西岩田遺跡周辺に水準点があるかどうか調査したところ、意岐部小学校内に「大阪府精密水準点・T.B. 235」が存在した。その資料を求めたところ、昭和53年段階で標高（T.P.）2.0828mであった。水準点を西岩田遺跡に移動し、詰所前に仮ポイントT.P. 2.7108mを設けた。


W15
センター
E15
N
1 A
2 A
A 1
3 A
4 A
A 1
5 A
6 A
A 2
7 A
8 A
A 2
9 A
10 A
A 2
11 A
12 A
A 3
13 A
14 A
A 3
15 A
16 A
66+40
66+60
66+80
67+00
67+20
67+40
67+60
67+80
68+00
68+20
68+40
147.850
147.900
147.950
148.000
1 B
2 B
B
3 B
4 B
5 B
6 B
1 C
2 C
C
3 C
4 C
1 D
D
2 D
68+40
68+60
68+80
69+00
69+20
69+40
69+60
69+80
70+00
70+20
70+40
148.050
148.100
148.150
148.200
50m
25m
0

第4図　トレンチ平面図

第Ⅲ章　歴　史　的　環　境

西岩田遺跡の所在する河内地域は、人類史の時代に入っても、なお、大きな地形変化を受け続け、現代に至っている。その変化については、市原実・梶山彦太郎両氏による「大阪平野の発達史」（『地質学論集』7号）に詳しく述べられている。大きな自然の変化に制約を受けながら、また、積極的に対応しながら、人間は生活を営んできた。その様相は、最近、河内各地で増加してきた発掘調査により、次第に明らかになってきている。とくに、本遺跡を含む近畿自動車道関連遺跡の調査は、従来、ほとんど知られることのなかった河内平野低湿泥地部の遺跡の状況を明らかにするとともに、地形変化の様子を復原する手掛りを得ることもできるようになった。

従来の知見に、近畿道調査の成果を加え、河内平野の歴史を概述してみたい。

第1節　旧石器時代・縄文時代

旧石器時代

旧石器時代の河内平野は、古大阪平野と呼ばれる陸地が拡がっており、汀線は現在よりはるか沖に存在していた。

旧石器時代の遺跡として著名なものに、西岩田遺跡の南約1㎞の洪積台地先端に国府遺跡が、さらに南にサヌカイトの原産地である二上山麓の遺跡群がある。国府遺跡は、国府型ナイフの標式遺跡であるが、遺跡の全容は未だ知られていない。現在のところ、河内地域では、ナイフ型石器文化をさかのぼる文化は明らかにされていない。最近では、国府遺跡の南方に拡がる石川谷＝石川流域の段丘面においても翼状剝片が検出されるようになった。二上山麓の遺跡群は、同志社大学の継続的調査や、農道建設に伴う大阪府による調査によって、石器製作地や原石採取坑が発見され、原石供給・製作技術の問題も次第に明らかにされるものと思われる。

近畿自動車道関係の諸遺跡の調査においても、旧石器の発見がある。若江北遺跡（東大阪市）からは翼状剝片、長原遺跡（大阪市）からは舟底型石器と石核を検出している。いずれも後代の遺構や包含層中に含まれていたものであって、旧石器時代の遺跡地ではない。しかし、再堆積したものとは言え、このような低地にまで分布が拡がっている事実は重要であろう。

河内地方の旧石器文化の解明には、さらに資料の蓄積を待つ必要がある。

縄文時代

1）河内の縄文文化の変遷

縄文時代の河内地域は、古河内平野〔草創期・早期：海水面は現在より25m～30m低いとされる。〕と呼ばれる陸地環境から、海進（縄文海進）による河内湾の形成〔前期〕、そして河内湾縁辺部の三角州の発達、上町台地からのびる砂堆の発達などの要因による淡水化＝河内潟と、1万年近い長い期間、大きな変化を受けてきている。

河内の縄文時代遺跡には、未だ存在が知られていないものも多々あろうし、既知の遺跡におい

ても、土器片がわずかに出土したのみである場合や、聚落遺跡であっても、その全容を知ることができるものはない。従って、現在の知見によって知ること、考えられることの限りにおいて、河内の縄文文化の変遷を概述する。

草創期：草創期に含まれると考えられるものには、有茎尖頭器がある。有茎尖頭器は一般に、隆線文系土器群に伴って検出されるものであるが、河内においては、隆線文系土器群は検出されておらず、有茎尖頭器が単独に出土している。出土地には、生駒山麓の草香山や六万寺などがあり、また、最近では石川左岸の段丘上でも検出されているようである。しかし、これらは、いずれも純粋な包含層の出土ではない。隆線文系土器が今後検出される可能性があるのか、それとも他の土器と結びつくのか、有茎尖頭器を含む石器組成はどのようなものであるのか。いずれも、今後の課題である。

早期：早期の遺跡は、神宮寺遺跡（標高約65m）、穂谷遺跡（標高約 150m）、田原遺跡（標高約 140m）などがあり、主に河内北部を中心に確認されている。各遺跡とも押型文土器が主体となる。神宮寺遺跡を標式遺跡とする神宮寺式土器については、その施文方法に関して異なる見解があり、編年上の評価も分かれるところであるが、回転押型文の初源期であることは疑いないところであろう。穂谷遺跡では、石鏃・石匙・敲石などの石器が検出されており、立地を考え合わせると、採集・狩猟を生業としていたことが推定されよう。従って、河内北部に限らず、中部、南部の丘陵・台地上に存在する可能性もある。しかし、大規模な定住聚落は予想しがたい。

前期：前期は早期と異なり、河内南部を中心に遺跡が検出されている。国府遺跡（標高22m～26m）は洪積丘陵縁辺部に位置し、前期初頭の北白川下層Ⅰ式期に成立する。住居址の検出はないが、住居域を想定することは可能で、また、多数の土壙墓・人骨が検出されており、定住聚落であったことがわかる。恩智遺跡（標高10m～15m）は、生駒山麓の複合扇状地に位置し、北白川下層Ⅱ式を上限としている。両遺跡とも晩期まで継続する聚落で、拠点地的役割を果たしたものと考えることができる。錦織遺跡（標高約70m）は、石川左岸の段丘上に立地し、北白川下層Ⅱ式から中期初頭の鷹島式（船元Ⅰ式B類）まで継続している。最近、近接した錦織南遺跡で晩期の河道が検出され、土器が多量に出土しているが、遺跡の規模は未だ不明である。

前期の遺跡立地は、早期に比べ、低位置に移動している。前期は海進がピークに達し、海水面が大きく拡がった時期である。そこで、水面への進出＝漁撈が考えられるところである。全国的には、すでに早期の段階で漁撈の発展が見られることは周知のとおりである。しかし、現在のところ、その証拠はない。むしろ、生駒山麓や、羽曳野丘陵での採集・狩猟活動を想定すべきであろう。また、上記の遺跡がいずれも石川・大和川水系に接していることも注目されよう。これらの遺跡の成立は、単に河内地域内部においてのみ説明されるべきものではない。

中期：中期、とくに後葉から末葉に至る時期は、河内の縄文文化における画期にあたる時期である。初頭から中葉にかけては、瀬戸内地方に中心を持つ船元式が分布し、後葉にも里木Ⅱ・Ⅲ式の出土をみるが、この時期に、従来全く見られなかった東日本的要素をもった土器型式が成立す

る。星田遺跡を標式とする星田式土器は、キャリパー形の器形、口縁部と胴部の文様帯構成など、里木式の影響は見受けられるものの、明らかに加曽利E式系土器の影響を受けて成立した地方派生型式である。星田式以降、東方の要素を持つ土器が、恩智遺跡・馬場川遺跡・縄手遺跡・森の宮遺跡で出現する。いずれも、中期終末に位置づけられているものである。これらの遺跡は、森の宮遺跡が上町台地の東辺部に位置するほかは、生駒山西麓部の扇状地先端部であり、縄文海進以降は、あまり聚落地として利用されていない地域である。（中期初頭の船元Ⅰ・Ⅱ式の出土はあるが、継続的なものではない。）聚落地としての利用は、汀線の後退という自然要件が考えられるが、低地への進出、遺跡数の増加は単にそのことだけで説明できるものではない。東日本系文化の伝播による生業の変質、漁撈の導入を、人間の移動とともに考慮せねばならない。

後・晩期：関東や中部山岳地方では、縄文後・晩期遺跡は大きく減少する。それに対し、東海や近畿地方などでは、後期、とくに晩期の遺跡の大幅な増加がみられる。河内地方でも、この傾向は同じで、後期・晩期の遺跡は中期以前に比べ増加している。

河内北部では岡山遺跡（後・晩期）、南下山遺跡（後期）があり、中央部の生駒山麓扇状地には前・中期から継続する遺跡のほか、日下遺跡・芝ケ丘遺跡（後・晩期）、鬼塚遺跡（晩期）などが成立し、洪積段丘と沖積地の境に位置するところに、八尾南遺跡（後・晩期）、長原遺跡(晩期）がある。八尾南遺跡では晩期の木器が検出されており、長原遺跡では晩期終末の突帯文土器が多量に検出されている。南部の石川流域では、国府遺跡のほか、堀ノ内式系土器を伴う住居址を検出した林遺跡、晩期の甕棺を検出した土師ノ里遺跡、滋賀里式と大洞式を検出した錦織南遺跡などがある。

2）近畿自動車道関連遺跡の調査から

縄文土器を検出しているのは、北から、新家遺跡、巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡である。以下、時期毎に示す。

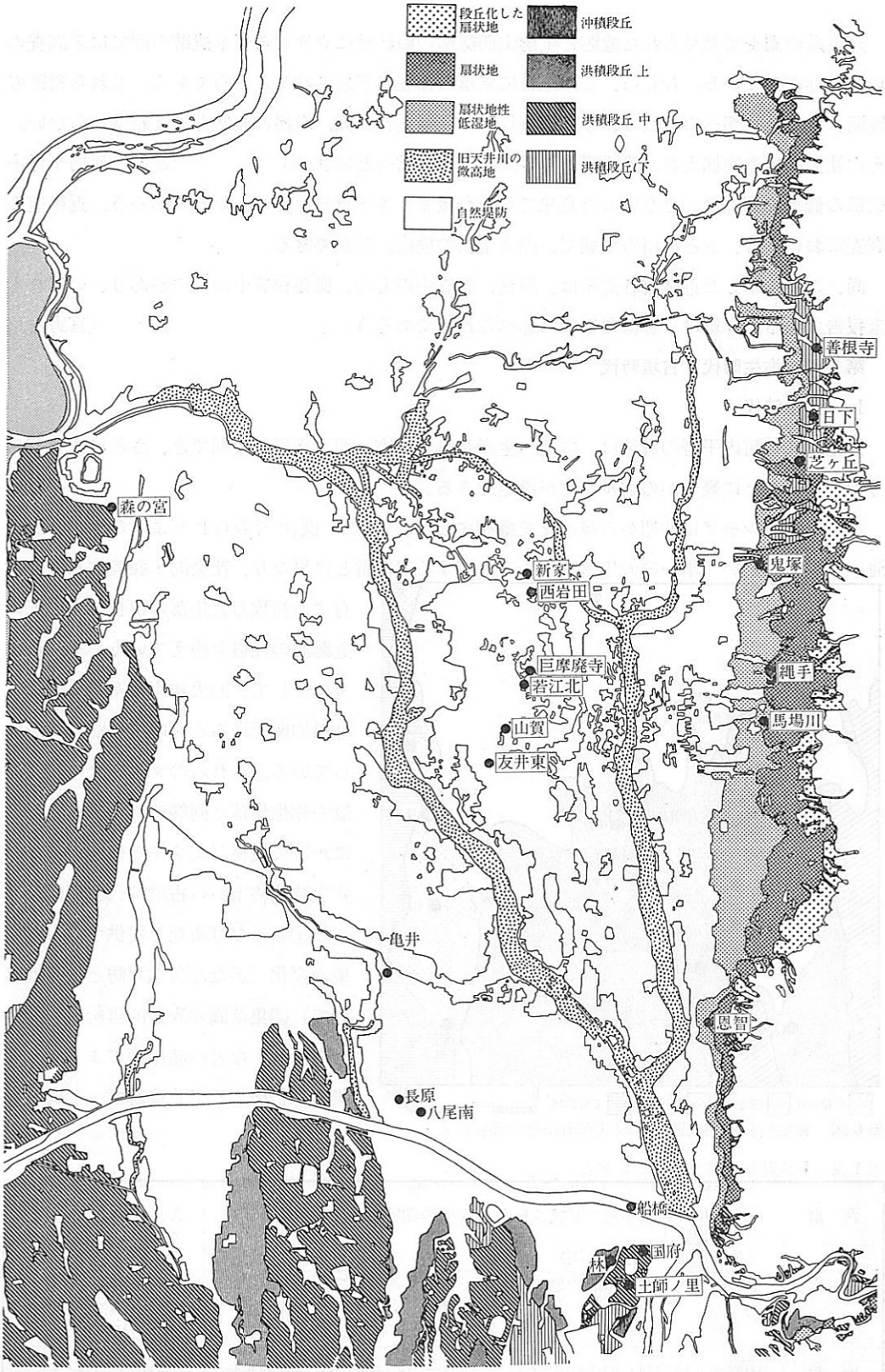
＜前期＞　山賀遺跡で、前期と考えられる縄文を施文した土器片１点を検出している。弥生時代の自然河川から出土したものである。

＜中期＞　巨摩廃寺、山賀両遺跡で検出されている。いずれも流れ込みである。

＜後期＞　若江北・山賀両遺跡にある。山賀遺跡では、晩期初頭の自然河川中に後期後葉の土器が含まれており、上流域に後期の聚落が存在したことが予想されている。

＜晩期＞　上記５遺跡で検出されている。初頭から末葉に至るものがあり、良好な資料も多い。新家遺跡では、滋賀里Ⅲ式の良好な土器を包含層中から検出しているが、遺構は伴っていない。山賀遺跡では、初頭の土器とともに人間・鹿の足跡があり、初頭自然河川中からは、木製容器を検出している。また、弥生前期の河川からは、土偶が出土している。

環境復原の手がかりになるものに、山賀遺跡の地表下７m（T.P.－３m）以下で検出された、貝を多量に含む土層がある。貝は、ハイガイ、マガキなど二十種以上に及び、縄文海進時の河内湾内の堆積と考えられている。



第５図　旧石器・縄文時代遺跡分布図（S＝1/10万）

近畿道の調査で発見された遺跡と生駒山西麓部の扇状地に立地する聚落遺跡の間には未調査の地域が存在している。むしろ、この地帯に聚落の存在が予想されるところである。これら遺跡の展開、低湿泥地部への進出は、中期末葉以来の、採集、狩猟，漁撈の発展を考えねばならない。その社会の構造的拡大が、農耕経済の導入＝水田経営へと結びついていくのである。河内平野中央部の低地の調査は、そういった意味でも、今後ますます重要なものとなるであろう。近畿道の調査においても、さらに南の地域で、縄文土器の検出が予想できる。

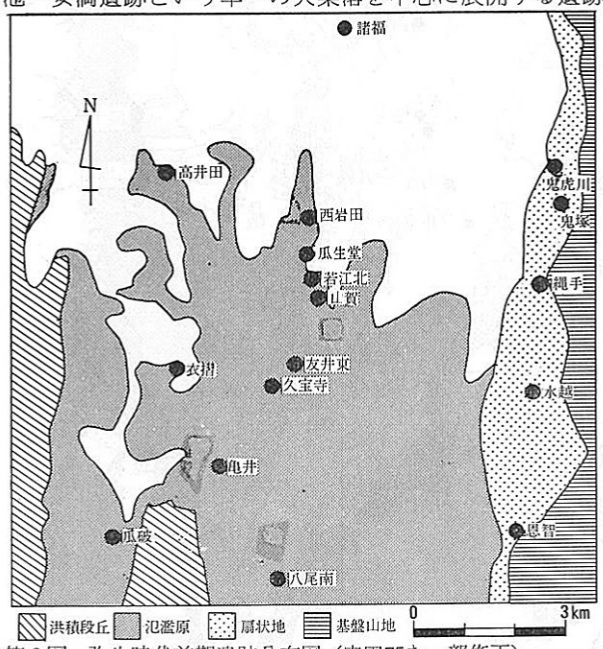
尚、ここに示した近畿道各遺跡は、現在、調査中のもの、概報作成中のものがあり、いずれも未報告である。詳細は、各概要報告に述べられるであろう。　（宮野）

第2節　弥生時代・古墳時代

1．弥生時代

弥生時代の河内平野の遺跡は、立地・生産基盤から東・西・南群に大別でき、さらに大集落の分布から群ごとに幾つかのグループが設定できる。

これらのグループは前期から後期まで継続するが、和泉や摂津でみられるような池上・四ツ池・安満遺跡という単一の大集落を中心に展開する遺跡群とは異なり、社会的・経済的基盤を共有する複数の大集落の複合体としての遺跡群の性格を備えている。それらは全体として、旧大和川水系を基軸にし地縁的関係にある河内大遺跡群を形成している。これらのグループは畿内一般の弥生集落と同様に中期末から後期にかけて規模が縮少する傾向にあるが、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて、①新たな可耕地を提供する自然環境の変化（新たな自然堤防と低湿地の形成）②集落間の政治的再編成（西からの影響）などの諸原因により新たな集落を析出する母胎遺跡群へと質的転



第6図　弥生時代前期遺跡分布図（安田75を一部修正）

第1表　弥生時代遺跡グルーピング表

	立　　地	生　産　基　盤	グループ名
西　群	旧大和川の推積作用で形成された自然堤防上 （瓜破グループは西除川）	河内潟湖周辺の低湿地帯	Ⓐ瓜生堂～山賀G Ⓑ美園　～久宝寺G Ⓒ亀井G　Ⓓ瓜破G
東　群	生駒山地から伸びる扇状地先端	旧大和川の支流である玉串川の自然堤防と扇状地間の低湿地	Ⓔ鬼虎川～鬼塚G Ⓕ縄手　～馬場川G Ⓖ水越G（？） Ⓗ恩智G
南　群	国府台地縁辺部と旧大和川（長瀬川）の自然堤防上	旧大和川（長瀬川）の自然堤防と国府台地縁辺部間の低湿地	①船橋・国府G

換をなしとげている。その結果新たな集落は遺跡群に重複・隣接する形で成立し（ｅｘ・亀井Ｇ→加美・瓜破Ｇ→瓜破北）、あるいは新たな遺跡群を形成する（中田・東郷グループ）。

西岩田遺跡も先の歴史過程を踏まえて成立する集落で、出現母胎は南に位置する瓜生堂・巨摩・若江北・山賀遺跡を抱括するⒶグループであると考えられる。このグループでは弥生時代前期に立地条件・生産基盤に共有関係のある瓜生堂・若江・山賀遺跡という大集落が成立するが、その変遷過程を中・後期と巨視的に追ってみると、各々各時期にわたり遺構・遺物は存在するが、第Ⅰ様式～Ⅲ様式古段階にかけて山賀遺跡が盛行しⅢ様式新では瓜生堂遺跡が盛行する、また第Ⅳ様式～Ⅴ様式古段階にかけては若江遺跡が盛行する、というパターンが読みとれ、これらの生活空間・生産空間・墓域空間の移動を解明することにより西岩田遺跡の出現の歴史的意義は明らかになると考えられる。又、旧大和川水系の根幹に位置し規模・質ともに大和纒向遺跡に類似する中田・東郷グループとの比較もその助けとなろう。

2．近畿自動車道関連遺跡の調査から（古墳時代）

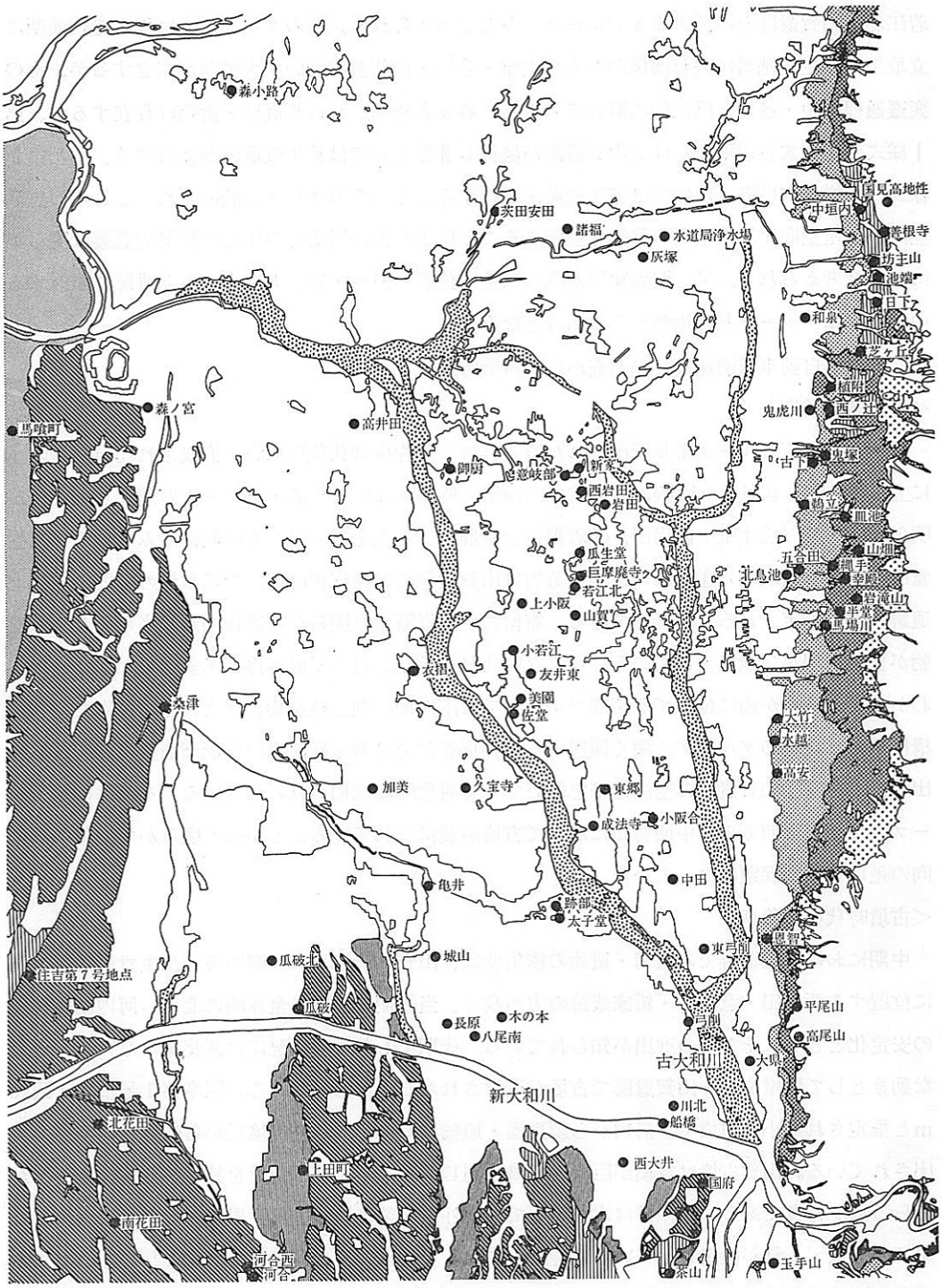
＜古墳時代前期＞

瓜生堂・山賀グループより折出された遺跡群は、①弥生時代後期以降に形成された自然堤防上に立地する②住居址など直接的な遺構は未検出に終わっているが溝・土壙・土器溜などの存在が明らかである（瓜生堂・西岩田）③灰褐色土壌群による生産性の高い水田経営がみられる（瓜生堂巨摩廃寺、若江北）④それの遺構・遺物は山賀遺跡での検出例は僅かで当該期の範囲が若江北遺跡以北に限定される、と概括できる。布留式中頃以降では明らかな遺構面が見当らず多少の遺物が自然河川から検出されているにすぎない状況を示し、自然環境が再び不安定になったことがわかる。ところが南に位置する美園グループでは庄内期の掘立柱建物、竪穴式住居倉庫を伴う遺構群が、またそのグループに深く関連する友井東遺跡では布留期前半の方形周溝墓（２基）が検出されており、山賀遺跡の空白地帯を置いて全く対称的な様相がみられている。それは美園グループで後続する前期末～中期初頭にかけて古墳が造営されていることからも明らかで、集落間動向の差は今後の課題になっている。

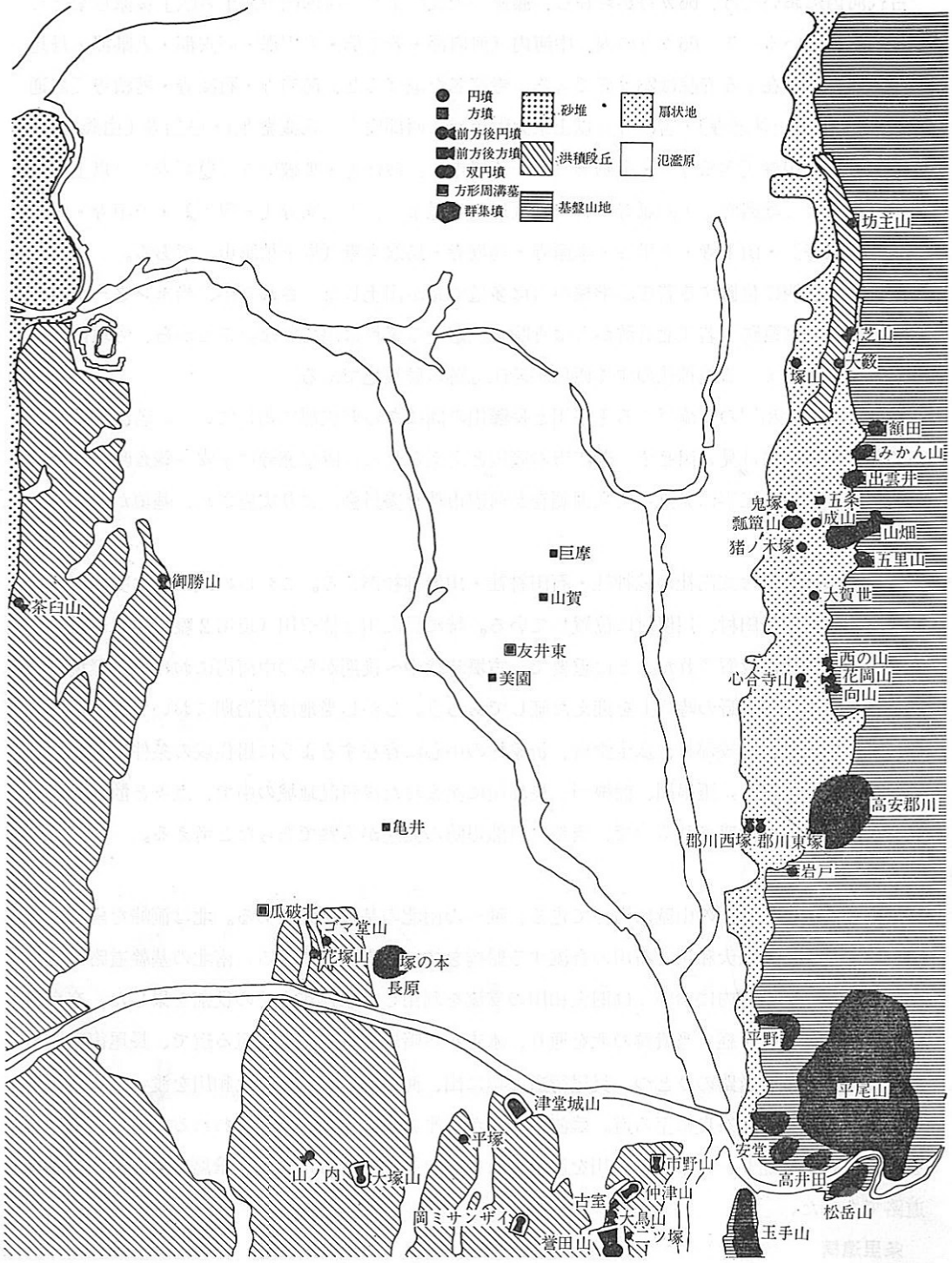
＜古墳時代中・後期＞

中期における遺跡群での遺構・遺物の密集度は、山賀・若江北・巨摩廃寺・瓜生堂遺跡より北に位置する西岩田・意岐部・新家遺跡の方が高く、当該期の範囲が全体的に北上し河内湖縁辺部の安定化とともにそこへの進出が知られている。後期でも基本的状況には変化をみないが、新たな動きとして巨摩廃寺・山賀遺跡で古墳が造営されたことがあげられる。巨摩第１号墳は１辺15ｍと推定される小形方墳で、溝内から須恵器・埴輪（家形・円筒）が墳丘から転落した状態で検出されている。山賀古墳は規模が巨摩１号墳と同じであるが、外部施設を持たず四隅に陸橋部がみらる点が特徴である。主体部は木棺直葬で、棺外から須恵器の供献土器が、棺内から鉄鏃・ガラス玉・朱・人骨が検出されている。時期的には６世紀前半で、巨摩第１号墳よりやや後出する。平野部での古墳時代前期の墓制には、先の友井東遺跡の例を含めて瓜破北・八尾南遺跡で知られ

ているように方形周溝墓が残存しており、形態的には差をみない先の小形方墳がどのような連関性を持つか、また平野部を取り囲む生駒西麓での群集墳あるいは国府台地の古市古墳群活動とどのような対応関係にあるのかが問題となる。（小山田）



第７図　弥生時代～古墳時代遺跡分布図（S＝1/10万）



第8図　古墳時代古墳分布図（S＝1/10万）

第3節　奈良時代以降

古代寺院

古代河内においては、66ヵ寺が存在し、藤沢一夫氏により「河内国寺六十六区」復原私案(藤沢75)として比定されている。その66ヵ寺の内、中河内（河内郡・若江郡・渋川郡・高安郡・大県郡・丹比郡の北部）に存在する寺院は23ヵ寺である。寺院名を載げると、河内寺・石凝寺・樗積寺〔法通寺〕・楮蔵山寺〔神感寺〕・若江寺（以上東大阪市）、西郡廃寺〔錦織廃寺〕・弓削寺〔由義寺〕・五条廃寺・渋川寺〔宝積寺〕・竜華寺（以上八尾市）、鞍作寺・瓜破廃寺〔道昭寺〕（以上大阪市）、高安寺〔教興寺〕・高麗寺・心合寺（以上八尾市）、大県廃寺〔大龍寺〕・茨田寺・大平廃寺〔智識寺〕・山下寺・大里寺・家原寺・鳥坂寺・鳥取廃寺（以上柏原市）である。

鏡神社の北西に位置する若江小学校からは多量の瓦が出土したとされるが、当センターが調査を実施した巨摩遺跡・若江北遺跡からは寺院を決定する資料は出ていないことから、寺垣内という小字名を残している鏡神社のすぐ西側が若江寺跡の候補地である。

当遺跡は旧大和川の支流である玉串川と長瀬川の間にある若江郡に属している。若江郡衙についても明確な遺構は見い出せず、若江寺の周辺と考えられる。巨摩廃寺は平安〜鎌倉時代の寺院で、中央環状線の工事に先立って発掘調査が河内市教育委員会により実施され、基壇が検出されている。

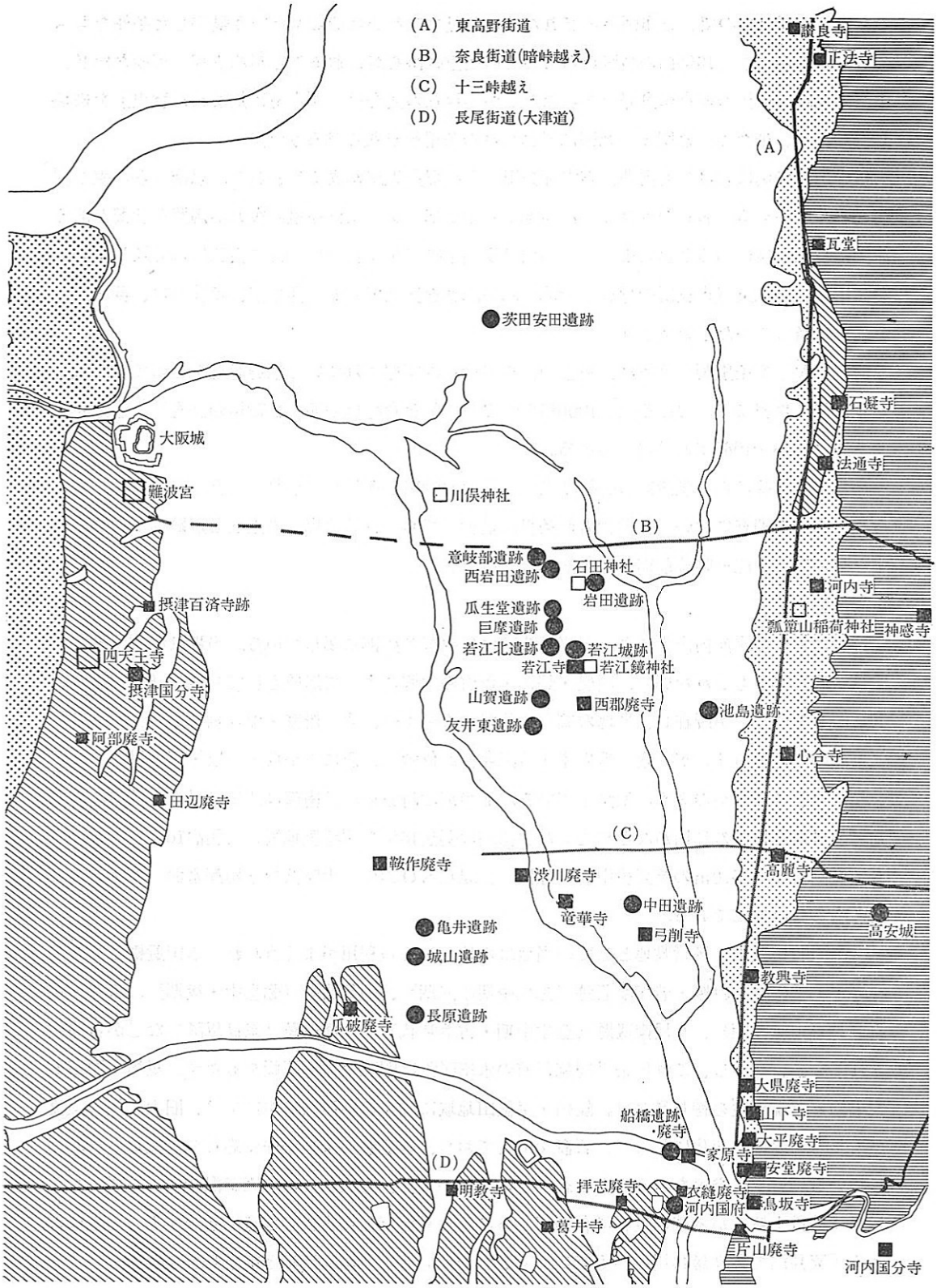
当遺跡の周辺には式内社の鏡神社・石田神社・川俣神社がある。これらの式内社は明治における村、若江村、岩田村、川俣村に位置している。特に長瀬川と楠根川（現第2寝屋川）が合流する南に川俣神社が設置されたことは重要で、古墳時代中〜後期からの中河内における、環境の安定がより進み、「平野の時代」を迎えた証しであろう。しかし当地は明治期においては村が形成されず、岩田村、意岐部村、瓜生堂村、新家村の中心に存在するように居住域の条件は整わず、耕作地であり続けた。玉串川、楠根川、長瀬川に挟まれた後背湿地域の中で、点々と散存する小規模な自然堤防が形成される中で、当地は自然堤防の発達が未熟であったと考える。

古道

東高野街道は生駒山の山麓に沿って走る、唯一の南北の基幹道路である。北は洞峠を経て山城国八幡に至り、南は大和川と石川の合流する船橋を抜け河内長野に至る。南北の基幹道路が他にないことから、中河内においては旧大和川の支流を利用した水運が多くの役割を果した。奈良街道は難波宮、御厨を経て当遺跡の北を通り、水走から暗峠を抜け奈良に至る道で、長尾街道、竹内街道と東西基幹道路のひとつ。長尾街道は堺に出、河内国府を経て、大和川を渡って青谷を通り亀ノ瀬の滝を越え奈良に至る道。難波・和泉から平城京に至る公路と言われる。竹内街道は堺を出て長曽根を通り、古市から石川を渡り、竹内峠を越え当麻寺に至る、飛鳥に至る最大の基幹道路であった。

条里遺構

条里復原図は昭和　年の大阪府文化財分布図から、道・畦畔・溝などの条里を表現しているも



第9図　奈良時代以降遺跡分布図（S＝1/10万）

のを取り上げたもので、分布図からどれだけの条里をひろいだせるかという限定した条件をもっている。このように10年前の地図からも多くの条里区画を読み取ることがある程度可能なほど、中河内地域の条里の保存は良好であった。しかし現在の開発は、「土地に刻まれた歴史」を破壊しつつあり、来たるべき明日の地図にどれだけの条里線が残るだろうか。

玉串川の東側における河内郡、高安郡条里と若江郡条里線が異ることから、以南からの線が採用されたといえる。おしむべきことに当地より意岐部にかけては条里の復元が困難な状況がある。原因は自然環境にあると言えよう。玉串川は現稲葉町で東に吉田川、西に菱江川に分岐している。菱江川は、菱江東（市役所の付近）で北へ向い流れを変えている。西岩田、意岐部は、菱江川の氾濫原に当っていたといえよう。

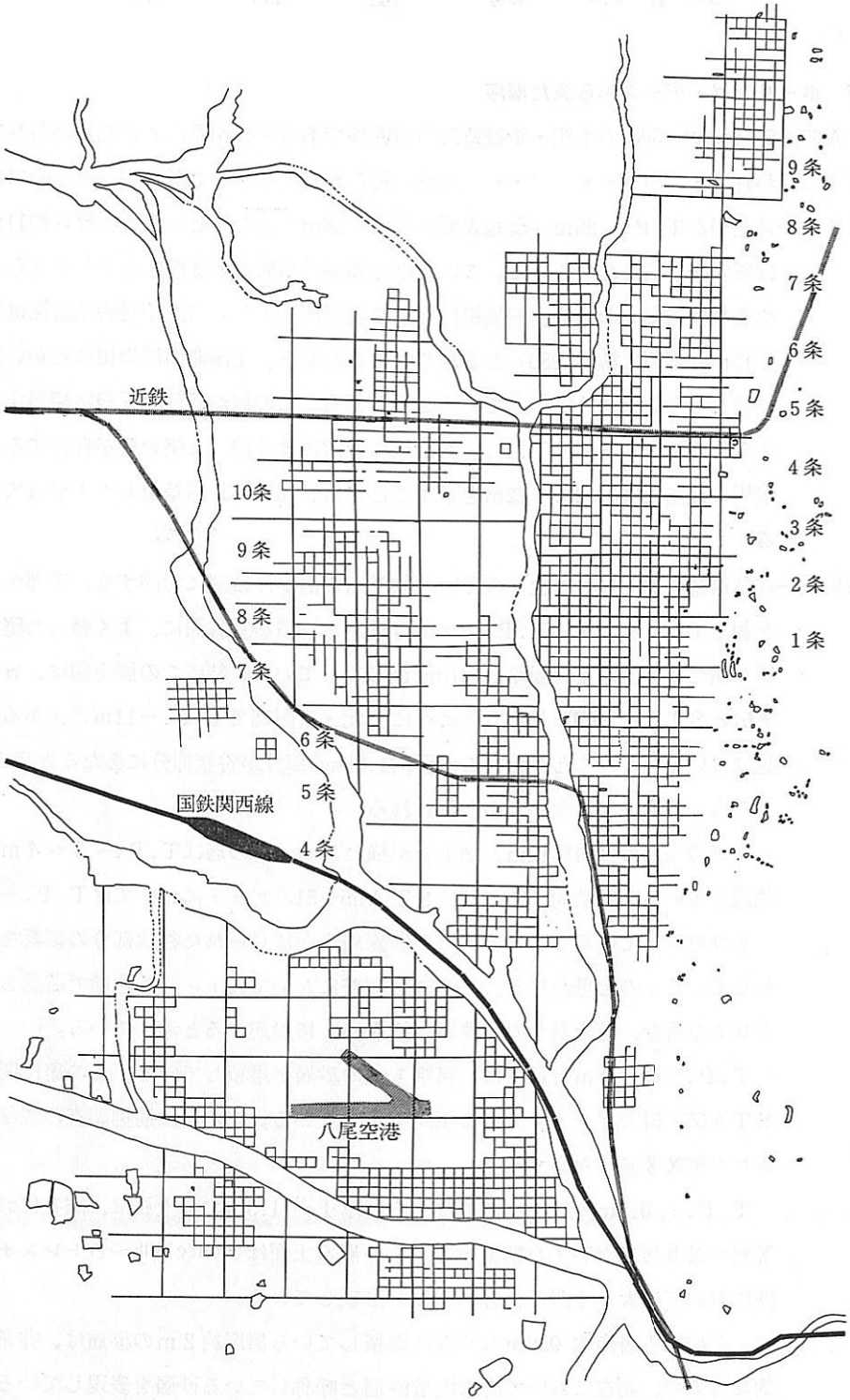
河内における条里制の施行は、条里の調査が行われ把握されている池島遺跡をとっても諸説があり、①７世紀にさかのぼる説（1966年の町史）、②鎌倉時代初期（1972年の調査）、③近世とする説（1978～1980年の調査）がある。

当地の条里線は瓜生堂遺跡（近鉄奈良線）以南の軸線を援用した近世に施行された条里と考えられ、今回の調査においては近世溝が条里に並行しており畝状遺構面の土壙と足跡面から寛永通宝を見い出し、江戸時代前期にはさかのぼり得ない。

若江郡

近世における『河内志』によると当該遺跡は河内国若江郡に属している。当郡は弓削・刑部・巨摩（渋川郡かもしれない）、川俣・錦部・新治の六郷によって形成されていた。村は51カ村（新田９を含む）が所在し、当地の周辺に位置する村々は、北に新家・荒本村が、東に岩田村（東西の二村を有す）が、南に瓜生堂・若江北村が位置し、西に下小坂・中坂・御厨村があたかも当遺を取り囲むかのように配置している。北半部は新家村に、南部は瓜生堂村の領域内にあり、両村の耕地としての利用がなされていた。標高は明治18年の『陸測地図』（明治16年）においても、標高3.75～ 5.0mの等高線中間に位置し、現在もＯ．Ｐ．（大阪湾の平均海水面）のプラス２ｍに当る低い地域である。

玉串川と長瀬川の後背湿地としての当地は耕地としての利用がよく行われ、水田遺構としての畦畔が、瓜生堂・巨摩・若江北遺跡（弥生中期庄内期）、山賀遺跡（弥生中・後期）、亀井・長原遺跡（古墳後期）、八尾南遺跡（弥生中期・古墳時代）、池島遺跡（奈良以降）などから検出されている。しかし、これら条里制施行前の水田区画は明瞭な方形区画をもたず、規模・面積も大小様々で規格性を持ち得ない。湿田・半湿田地域に属する中河内においては、旧大和川の支流がもたらす環境の変化に伴って、灌漑を考えており、各遺跡の土地条件に応じて自然地形を利用している。近世に発達をみる河内木綿の生産においても、旧大和川の支流が氾濫によってもたらした「砂質土壌」が木綿の生育に有効であることを見いだした古人の創意に敬服する。当地における「天井川であり暴れ川」の玉串川と人間との闘いは古代から連綿と継続してきた。



第10図　条　里　復　原　図

第Ⅳ章　調　査　結　果

第1節　ボーリング・データから見た層序

ＳＴＡ65＋51（Route 308 の北側・新家遺跡の範囲外であるが、南側にあたる）からＳＴＡ72＋00までに行われた８本のボーリング・ピットから得られたデーターを概念化したものである。

洪積層――粘土層がＴ.Ｐ.－25m（現地表面からは－28m）にやっと存在し、厚さ約11mで、ほぼ水平に横たわっている。この層の上面が洪積層の基底面をなすと考えられる。樟蔭東女子短大の東側、旧楠根川（第２寝屋川）の付近の洪積層の基底面はＴ.Ｐ.－15m（那須・樫野1980）とされていることから、１㎞北の西岩田にむかい約10mの差をもち、大きく下がっていくことが判る。この層が低位段丘層に相当すると考えられる。この下部、Ｔ.Ｐ.－36mから非常によく締った堅い層が存在する。旧楠根川の地点ではＴ.Ｐ.－22mを示すことから、14mの比高差をもち下がってきている。

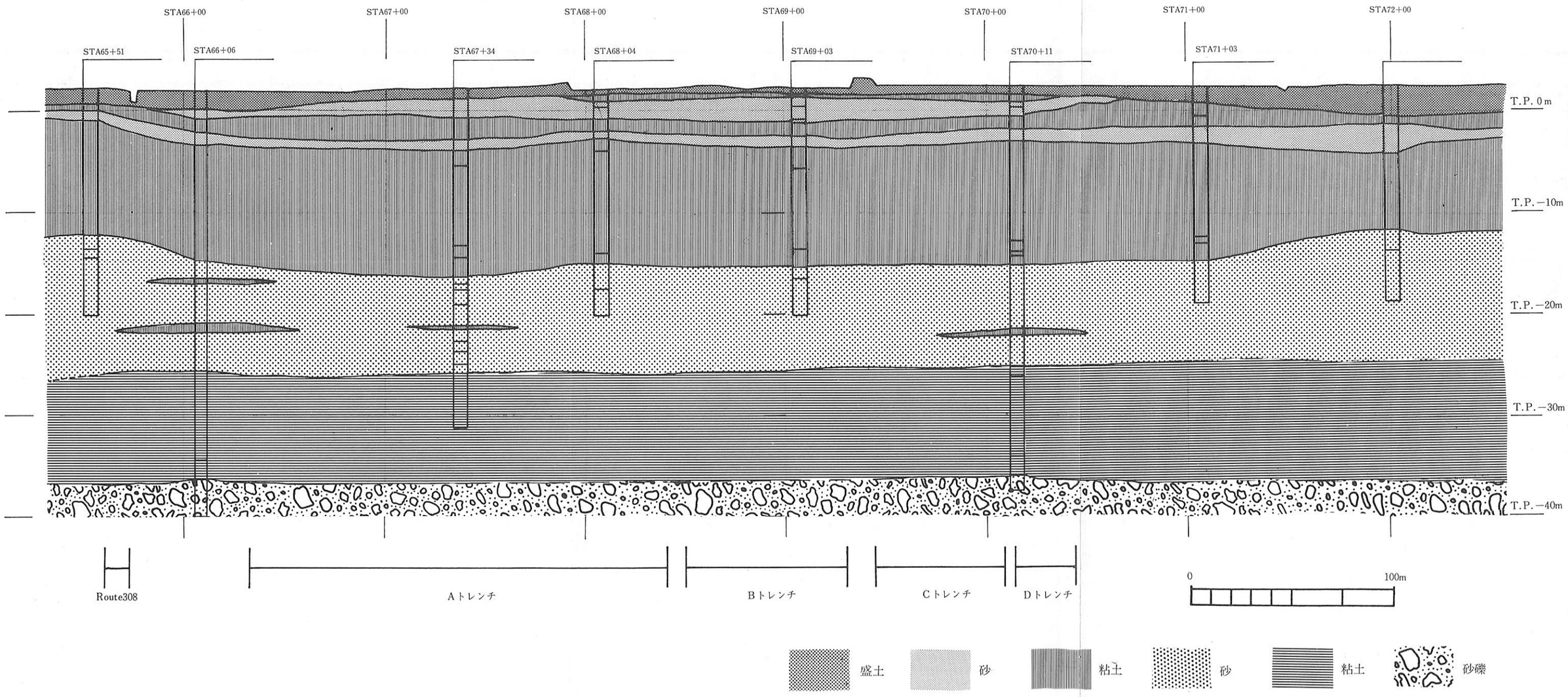
沖積層――沖積層基底面から、埋土をのぞいた約28mの層が沖積層に対応する。下部から説明を加えていくと、まずＴ.Ｐ.－16m付近から沖積層基底面に、よく締った堅い砂礫層が横たわっている。層厚は約10mを形成している。特にこの層上面は、ＳＴＡ65＋51とＳＴＡ72＋00に見られるように、北・南両端でＴ.Ｐ.－11mと上がる傾向を見せている。このことから、この間約1.2㎞の部分が谷状部分にあたると考えても、おそらく間違いではないものと思われる。

砂礫の上部には層厚12mの粘土層が横たわる。この層はＴ.Ｐ.－３～４ｍ付近に位置している。特徴的なことは、ＳＴＡ65＋51のピットにおいてはＴ.Ｐ.－１ｍと上がりを示していることで、下層の砂礫層上面に見られた谷状部分の影響をまだ現わしているものと思われる。この層は調査においてＡトレンチ北端で確認したセタシジミを含む、粘土混りの砂礫層（第Ⅳ層）に対応すると考えている。

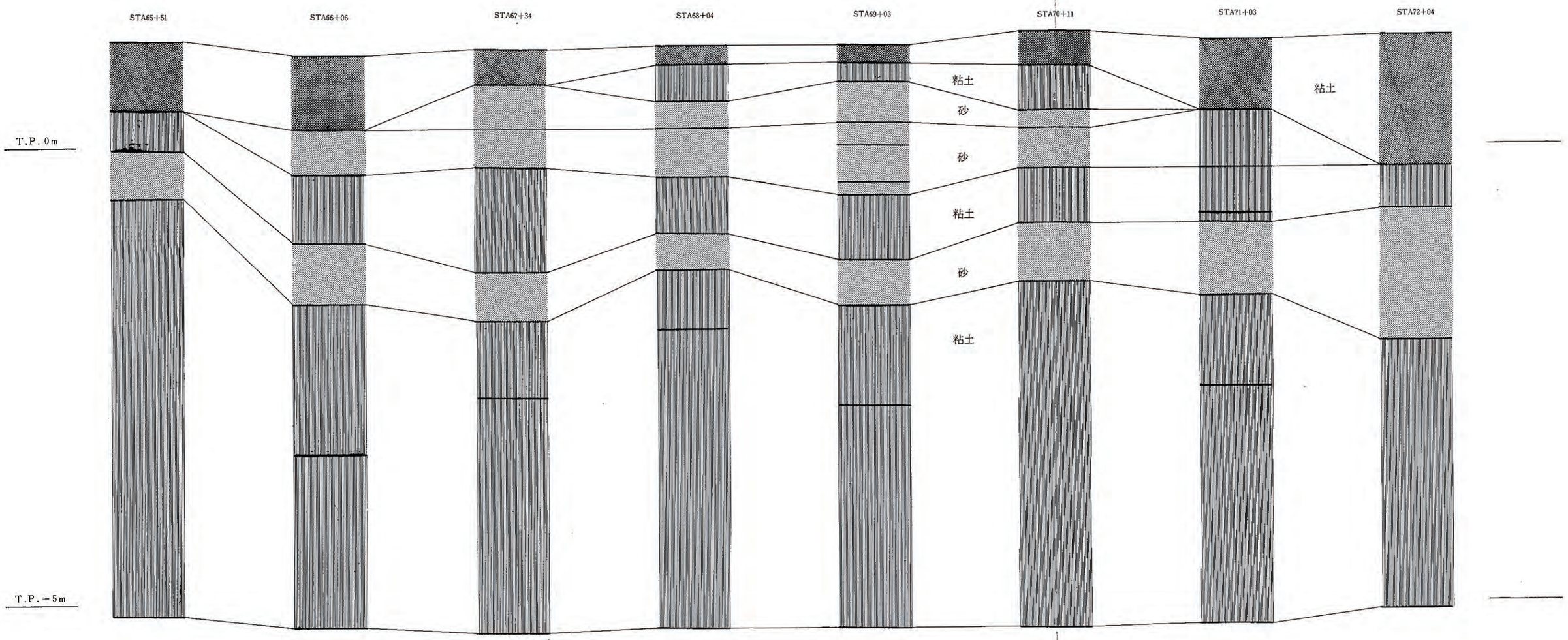
Ｔ.Ｐ.－２～３ｍ付近には、層厚１ｍの砂層が堆積している。この層に関してもＳＴＡ65＋51のピットで上がる傾向を示している。この層は筋掘調査の底部に検出された第ＸⅢ層に対応する。

Ｔ.Ｐ.＋ 0.5m～－１ｍに位置する層厚１～ 1.5mの粘土層は、調査における第Ｘ層～ＸⅢ層に対応する粘土層で、この層の上面は Route 308～Ｄトレンチ南側の間においては大きく凹み、谷状部分を形成している。

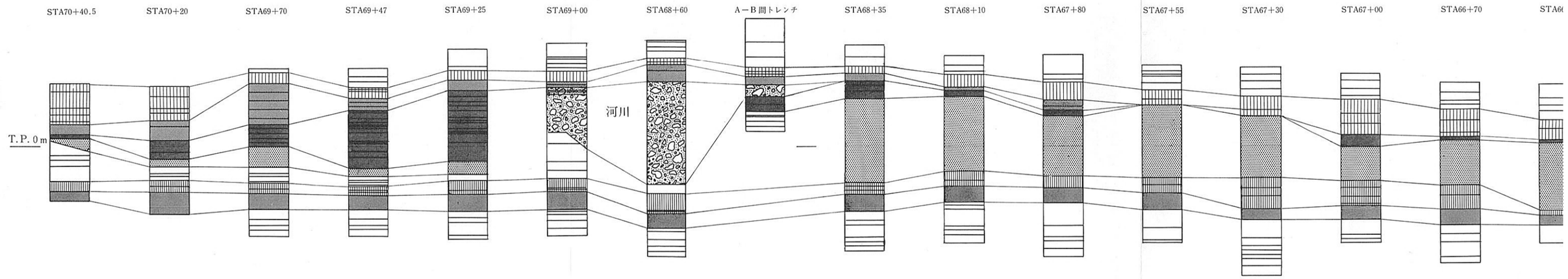
上記の粘土層南北 950mの凹みに堆積している層厚約２ｍの砂層は、非常に特徴的なもので、調査において流水堆積砂層と呼称している砂層を表現しているものである。



第11図　ボーリング・データから見た地質断面図



第12図　ボーリング・データから見た表層地質断面図



第13図 各トレンチ柱状図（S＝1/80）

この砂層上面の粘土層は庄内期対応層の層位を表現したものと考えられる。この粘土層は、ＳＴＡ68＋04～ＳＴＡ70＋11の３ピットにしか認められず、上面はＴ．Ｐ．＋1.7～1.8mと高く位置していることが判る。この３ピット地点は砂層の上面も高いことから自然堤防が形成された地域と考えられる。庄内期以降の遺構はこの範囲内のみ密度が高く、遺跡の中心地といえる。

第２節　基本層序

現地表面はＴ．Ｐ．2.2～ 2.5m付近に位置している。旧耕土上には盛土および攪乱土が認められる。遺跡全体の状況を見た場合、自然堤防上に存在した部分、たとえば、Ａトレンチ南側からＢトレンチ・Ｃトレンチの一部に関しては、同一時期の層は高く、北側へはＡトレンチ北端から新家遺跡の方向に向い除々に傾斜して下ってゆく。南側もＤトレンチ（瓜生堂遺跡の方向）に向い同様に傾斜して下がる。各時期の遺構密度を比較しても、自然堤防上に位置するＡトレンチ南側・Ｂトレンチ・Ｃトレンチの北部は他に比べて高い密度を示す。

第Ⅰ層――盛土　現在

第Ⅱ層――黒色腐植土（旧耕土）近い現代

第Ⅲ層――青灰色粘土・全体には認められない層であるが、Ａ・Ｃ・Ｄトレンチに存在しており近世以降の時期にあたる。水田土壌と考えられる層である。

第Ⅲ層（下層）――粘土と微砂の互層・ＡトレンチＳＴＡ68＋20まで明瞭に存在する。南へ行くにつれ、灰褐色等に変化する。古墳～中世包含層の上層にあたる。

第Ⅳ層――古墳～中世包含層と呼称している。層厚は30～40cmに達している。基本的に２層に分化できるが、層境は不明瞭である。中近世に属すると考えている褐色の斑文をもつ層。

Ⅳａ――上面に畝状遺構をもつ他には土壙が多く認められる。

Ⅳｂ――Ⅳａより鉄分の含侵が強く、明褐色を帯びる。

第Ⅴ層――古墳後期に属する層で、ほぼ全体に分布する。茶褐色粘土・褐色粘土等と色調が変化するが、基本的には、鉄分・マンガンの沈着が強い褐色の層。

第Ⅵ層――布留期に属する層で全体的には分布せず、Ｂトレンチのみに認められるが面としては不明瞭なもの。褐色、赤褐色の砂礫の層で、河川の影響が考えられるもの。

第Ⅶ層――庄内期に属する層で、Ａトレンチ北側と３・４Ｄトレンチのように明確に確認できない所もある。層厚は厚い所では50cmに達する所もあり、三層に分化できる部分がある。

Ⅶａ――灰青色粘土とシルトとの互層を呈する。部分的に薄い炭層がバンドで認められ、若干遺物が入っている。

Ⅶｂ――灰青色粘土層で、ａ・ｃに比べ厚くしっかりしている。遺構が切り込まれているのはこの層の上面から。層中にも遺物が入っている。Ａ・Ｂ・Ｃ各トレンチにおいて

遺構が認められ、庄内期の中心を成す遺構面で庄内Ⅱ面と呼称する。

Ⅶc——灰青色粘土・黒灰色粘土Ⅰと呼称している層で、Bトレンチにおいては庄内Ⅰ面となり、土壙が認められる。

第Ⅷ層——弥生後期に属している。流水堆積砂層と呼称している。Aトレンチは層厚が全体の中でも厚く、ほぼ 1.2m程度であり、特に15・16Aトレンチは 1.6m近くに達する。Bトレンチ、Cトレンチは庄内層が厚くなるのだが、 0.4mほどしか存在せず、Dトレンチ南端では流水堆積が消える。

第Ⅺ層——暗青色粘土層。流水堆積層とピート層の間に認められる層で、暗青色を呈している。層厚は約30cmで、2層にわけられる。

Ⅺa——上位にあり、ほとんど植物を含まない純粋の粘土層で、上面に流水堆積による青黒色粘土と微砂の互層が形成されている。木器は層中ではなく、上面において出土している。

Ⅺb——上位に類似する粘土層で、間に極めて薄い植物層がバンドで認められる層で、ピート層への漸移層と考えられる。

第Ⅹ層——弥生前期に属すると思われる、ピート層。T.P.－ 1.0m付近に認められる層で、全体的にはほぼ平担だが、ただし、STA68＋00～69＋00間はやや浅く谷状に凹む。しかし、東西方向については西に向い大きく下がってゆく。基本的には茶黒色植物層と灰白色粘土層との互層を呈する。層厚0.3～0.4mで全体的に存在するが、Dトレンチ南端では泥炭化が強く、浅くなる。

第Ⅻ層——灰色粘土層で、下部に行くにつれ茶色を帯びてくる。層の中位あたりはわずかな凹凸を示す。「～～」状を呈することから、古生痕と考えられる。上位は茶色を帯び、弥生前期の包含層と考えられ、中位の凹凸から下部は灰白色の粘土化が強く、層境が不明瞭のため分層を行わなかった。この灰白色粘土上面は弥生前期のベース面といえる。

第ⅩⅢ層—暗茶黒色粘土層で層厚は 0.5m、下位には厚さ10cmの灰黒色のバンド層が認められる。無遺物層。

第ⅩⅣ層—灰色砂礫層で、粘土を含んでいる。層厚は1mに達すると考えられる。自然木が認められる。無遺物層。この層は他遺跡との比較から縄文晩期に属する。

第ⅩⅤ層—T.P.－ 3.0m付近に存在した、灰白色砂礫層で、多量の貝（セタシジミ）を含んでいる層である。この層はAトレンチ北側の試掘でしか確認していない。

（村上）

第2表　層　序　関　係　表

時期	層序略号		A トレンチ 層名	A トレンチ 遺構・遺物	B トレンチ 層名	B トレンチ 遺構・遺物	C・D トレンチ 層名	C・D トレンチ 遺構・遺物
現代	Ⅰ		盛土		盛土		盛土	
近現代	Ⅱ		黒色腐植土	溝・木矢板	淡黒褐色土	溝・木矢板・井戸 土壙	Bと同じ	
近世以降	Ⅲ		青黒色粘土	足跡・土壙	淡茶褐色粘質土	溝・ピット落ち込み		
中近世	Ⅳ		褐色混り青灰色粘土	畝状遺構・足跡		土壙	暗灰青色粘	古墳～近世の遺物包含層
			〃（上層より褐色強い）	古墳～鎌倉の遺物包含層			灰黄色粘	
古墳Ⅳ	Ⅴ		褐色粘土	溝・ピット	黄褐色混り暗青灰色混砂粘質土	溝・柱穴	黄褐色粘土 灰茶褐色土	溝・建物・土壙 須恵器・土師器
古墳Ⅲ	Ⅵ				淡黄褐色粗砂（布留河川堆積）	土壙・井戸	Bと同じ	
古墳Ⅱ					淡黄褐色系砂（河川最終堆積）	落ち込み	河川	
古墳Ⅰ	Ⅶ	a	灰青色粘土シルト互層	上面に褐色粗砂 Ⅰ	青灰色粘土	河川・土器群	河川	
		b	灰青色粘土1	溝1・2 Ⅱ	黒褐色粘土Ⅱ			
		c	灰青色粘土2	Ⅲ	黒褐色粘土Ⅰ			
弥生後期	Ⅷ		流水堆積砂層	流路 木器多量	流水堆積砂層			
弥生中期	Ⅸ	a	暗青色粘土	上面に木器				
		b	暗青色粘土（植物層を含む）		暗青色粘土（漸移層）			
	Ⅹ		ピート層	木器少量	ピート層			
弥生前期	Ⅺ		灰色粘土	土器含む	ピート層			
	Ⅻ		暗茶黒粘土	無遺物				
縄文	XⅢ		灰色砂礫	自然木	灰白色粗砂			
	XⅣ		灰白砂礫	貝を含む				

第３節　弥生時代

＜概説＞

弥生時代の遺構については今回の調査において明確には見出せなかったが、弥生時代の遺物が出土している。

(1)　流水堆積砂層（第Ⅷ層）　弥生時代後期に対応し、若干の土器、多量の木器が出土している。

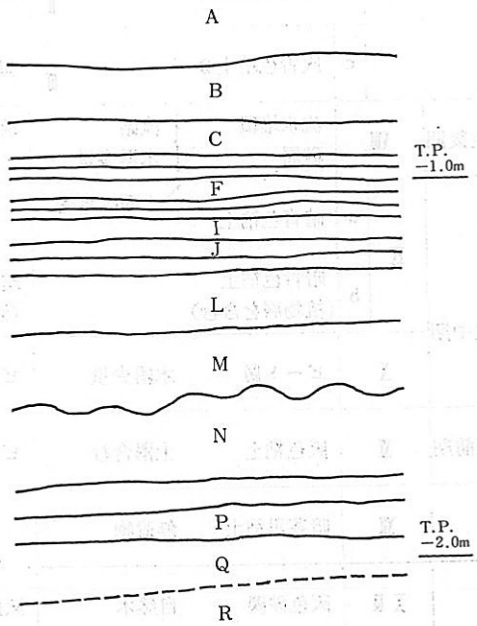
(2)　ピート層（第Ⅹ層）　弥生時代中期に対応し、土器と木器が出土している。

(3)　灰色粘土層（第Ⅺ層）　弥生時代前期に対応し、土器が２点出土している。

最終面であるピート層（第Ⅹ層）から、下部の堆積状況を把握するための筋掘り調査を実施した。その結果約１ｍの深さ（ＴＰ約－2.0m）において、灰色砂礫層（第ⅩⅣ層）を確認した。この層が縄文晩期に対応する堆積層と考えられる。またＡトレンチの北端（ＳＴＡ66＋40）付近の一か所であるが、坪掘りを実施し、灰色砂礫層を１ｍほど（Ｔ.Ｐ.－ 3.0m付近）掘削したところ、灰色砂礫層・Ⅱ（第 ⅩⅤ 層）が認められ、セタシジミが白く点々と含まれていた。この層は非常に部厚く、安全性の限界に達したため中止したが、１ｍ以上あると思われる。これらの灰色砂礫層は縄文時代晩期における河内潟による堆積層であろう。

ピート層はＡ～Ｄトレンチの全域に分布していたが、遺構については検出し得なかったが、若干の遺物を含んでいる。流水堆積層はＡ～Ｄトレンチに分布し、特にＤトレンチで途切れていたことは特徴的で、南肩から北へ向かい 300ｍ以上の谷を形成していたと言えよう。

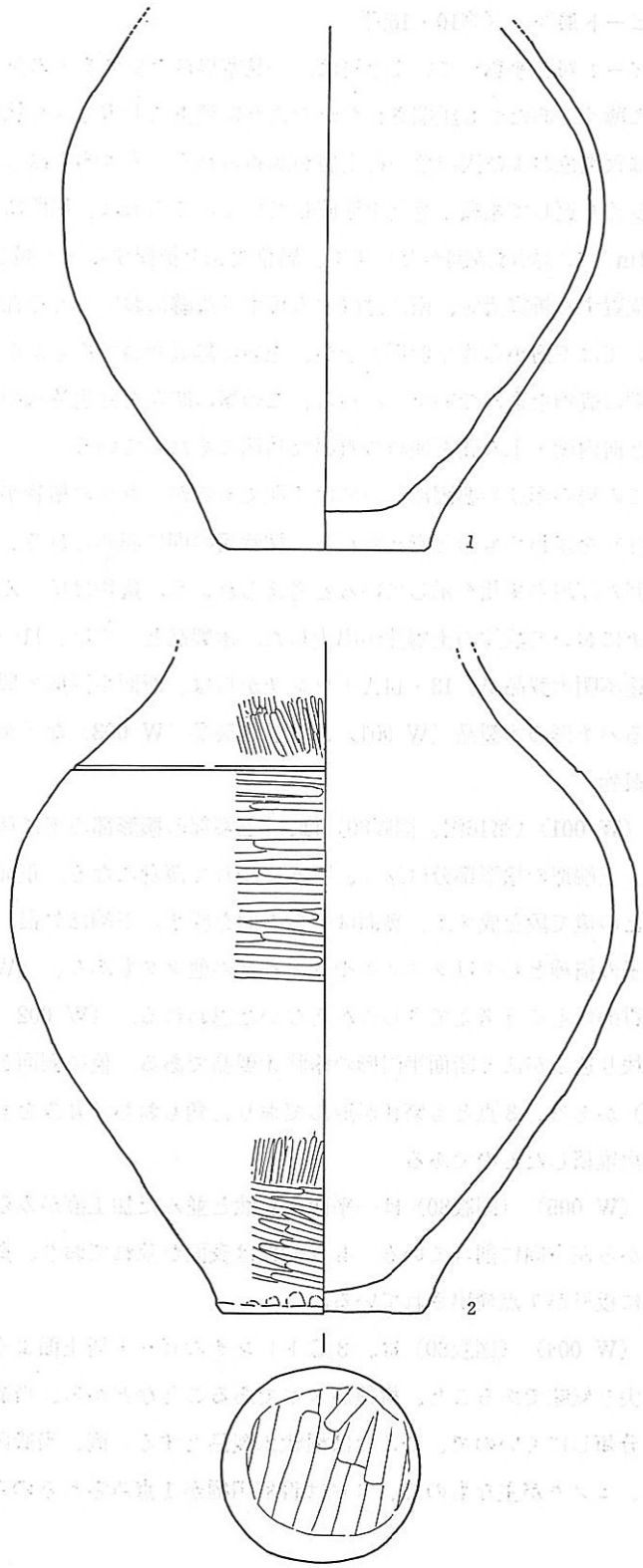
A	Ⅷ	流水堆積砂層（層厚１ｍ）	
B	Ⅸ	暗青色粘土	
C		暗青色粘土（漸移層）	
D	Ⅹ	黒色粘土・植物層	ピート層層厚0.3m
E		黒灰色粘土	
F		灰黒色粘土（植物遺体含む）	
G		黒色粘土（植物遺体多量に含む）	
H		灰白色粘土	
I		灰黒色粘土	
J		灰白色粘土	
K		黒色粘土・植場層	
L	Ⅺ	暗灰色粘土	
M		灰色粘土	
N		茶灰色粘土	
O	Ⅻ	灰黒色粘土（（NとPに挟まれる炭化物を含む）	
P		茶灰色粘土	
Q	ⅩⅢ	灰色粘土混灰色粗砂	
R		灰色粘土混灰色粘砂（Qに類似）	



第14図　弥生時代後期以前　流水堆積層下部堆積状況（Ｓ＝1/20）

＜灰色粘土層＞　（第15図）

切拡げ調査はピート層上面を最終調査面としていたことから、最終面における調査終了後に筋掘調査を実施した。1A～8A・1B～6Bトレンチについては筋掘調査から遺構・遺物が全く検出されず、トレンチの埋め戻しを行った。しかし13Aトレンチ・W5ラインの筋掘断面をよく見ると、上から2層目の茶黒色粘土層中に弥生式土器の細片が数片認められた。このことから、9A～16Aトレンチについては、ピート層から0.2～0.3m掘り下げて、下部の遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、11Aトレンチからは弥生式土器の底部と同一個体の細片20数片を採集した。また13A・14Aトレンチの南側部分からは、ピート層下層の灰色粘土層から口縁部を欠いた弥生式土器2点（1、2）が出土した。この土器は第Ⅰ様式の新段階のもので、あたかも灰色粘土面に置かれたかのように、底部を下にして出土した。ピート層と灰色粘土層との間には茶灰色粘土層が0.2m堆積していることから、この層が弥生時代前期の包含層と考えられる。　（村上）



第15図　弥生時代前期　灰色粘土層上面出土遺物（S＝1/3）

＜ピート層＞　（第10・16図）

ピート層と呼称している土層は、一見茶黒色を呈する木の葉・根茎類（葦の茎など）などが非常に薄く、あたかも圧縮されたかのように幾重にも重なった状態をなすものである。この層の下には灰黒色および灰白色の粘土層が認められる。基本的にはこれらの層がし、3回もしくは4回程度くり返して堆積し互層を形成している。この層は、場所により層厚に変化が見られる 0.3～0.4mとこの層は識別がたやすく、層位関係を把握するキー層ということができる。この層は北に位置する新家遺跡、南に位置する瓜生堂遺跡においても存在が確認されている。西岩田遺跡においては下層から弥生前期の壺が、上層は無遺物層であったが、その上の流水堆積層は弥生時代後期の遺物を含んでいたことから、この層の時期を弥生時代中期に位置させた。この時期は河内潟と河内湖・Ⅰの間を埋める重要な時期にあたっている。

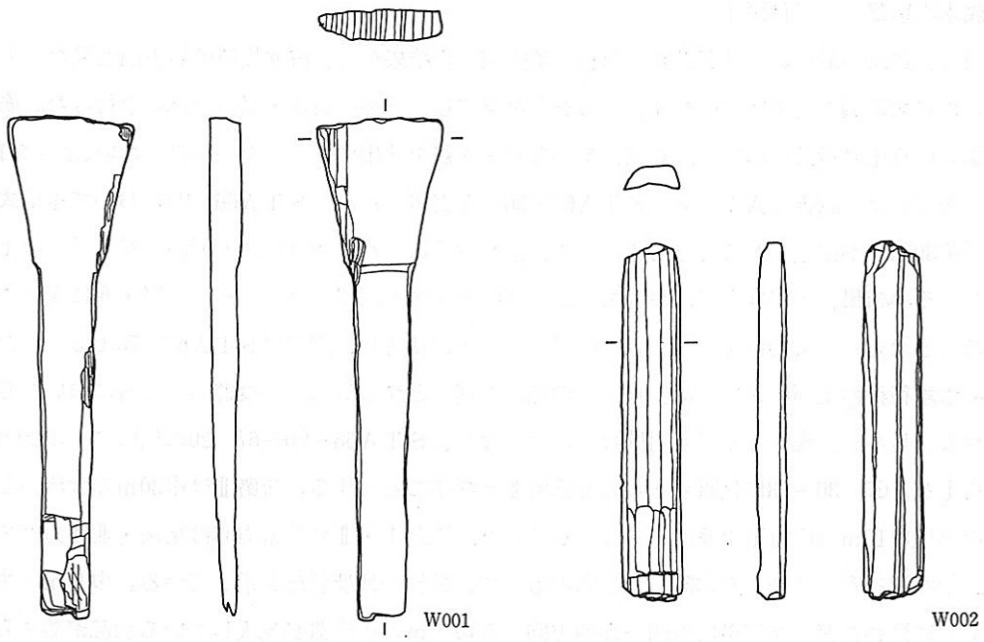
この層の形成の要因については不明であるが、葦状の植物が多量に含まれていることから、潟の汀線を現わすものと考えられる。植物層の間に認められる、灰黒色・灰白色の粘土層の存在は数回の汀線の変化を示していると考えられよう。遺物はほとんど認められなかったが、13Aトレンチにおいて数片の土器片が出土した。木製品としては、11～12Aトレンチのピート層上面から用途不明木製品が、13・14Aトレンチからは、断面半円形木製品（W 002）、未製品とも考えられるバチ形の木製品（W 001）、板状木製品（W 003）などが出土している。

遺物

（W 001）（第16図、図版80）は、上端部の撥形部の下に柄がついた形の用途不明木製品である。上端部の撥形部分は厚く、下るにつれて薄身になる。正面のみ撥形部分と下半部の柄状の部分との境で段を成すが、裏面は平らな面を成す。下端は欠損。丁度杓子の柄のような形態である。杓子の樹種としてはクスノキやカヤなどの他クワもあり、（W 001）の材質もヤマグワなので、材質的にもそう考えてさしつかえないと思われる。（W 002）（第16図、図版80）は下半部に浅い抉り込みがある断面半円形の棒状木製品である。他に側面が丸い板状木製品（W 003）（図版80）がある。3点とも磨耗が進んでおり、角もおちて丸みをもち細部はわからなくなっている。二次堆積したものである。

（W 005）（図版80）は一平面に整然と並んだ加工痕がみられる。加工痕の幅は最大約2㎝で、右から左方向に削っている。もう一面は表面が荒れており、長期間放置されたことがうかがえる。他に板材が1点検出されている。

（W 004）（図版80）は、3Cトレンチのピート層上面より出土。櫂身先端部のみ残存。先端が尖り気味であること、樹種がスギであることなどから、当遺跡出土の他の櫂と比較して、櫂とは分類しにくいので、ここでは櫂状木製品とする。尚、当遺跡出土の櫂の樹種はシイノキ、サクラ、ヒノキが主なもので、スギは着柄用櫂が1点みられるのみである。　（村上・石神）



第16図　弥生時代中期ピート層出土遺物　W 001・002　用途不明木製品（S＝¼）

＜暗青色粘土層＞

ピート層上に存在する層で、上層の流水等による浸蝕を受けているため平坦ではなく、所々で凹凸を持っている。層厚は部厚い部分で0.4mを有している。層の下部はピート層に向うにつれ、灰色が強くなり、また極めて薄い植物遺体層を間層に含んでいる。そのため、泥炭層に漸移的に変化することから漸移層と名付けた。暗青色粘土層は遺跡全体において検出されたが、南北方向についてはほぼ平坦と言えよう。しかし、東西方向においては、西に向かい大きく傾斜している状況が認められた。特にその傾向は１・３Ａトレンチにおいて顕著で、２・４Ａトレンチのレベルと比較すると、約 0.5mの比高差がある。この傾向は下層のピート層においても認められる。Ａトレンチ北部西側には、大きな谷状地域が存在したことが推定されよう。

この面は各トレンチにおいて検出したが、遺構についてはついに見出せなかった。上面からは木器を検出した。これらの木器は流水堆積砂層の下部の粘微砂層に含まれるもので、層中からは遺物の出土を見ていない。

北に位置する新家遺跡においても、層序関係は西岩田遺跡と全く同じ状況を示しており、暗青色粘土層に対応する層から多量の木器が出土している。この結果をいかに考えるべきであろうか。

この層の形成は、弥生後期に「河内潟」から「河内湖」に変化する過程において形成された湖岸近くの堆積層と言える。より湖岸に近く、より低い新家遺跡に「ただよって」いた木器が、水位の後退により湖の底に徐々に沈んだものと想像され、西岩田遺跡と様相を異にしたといえる。

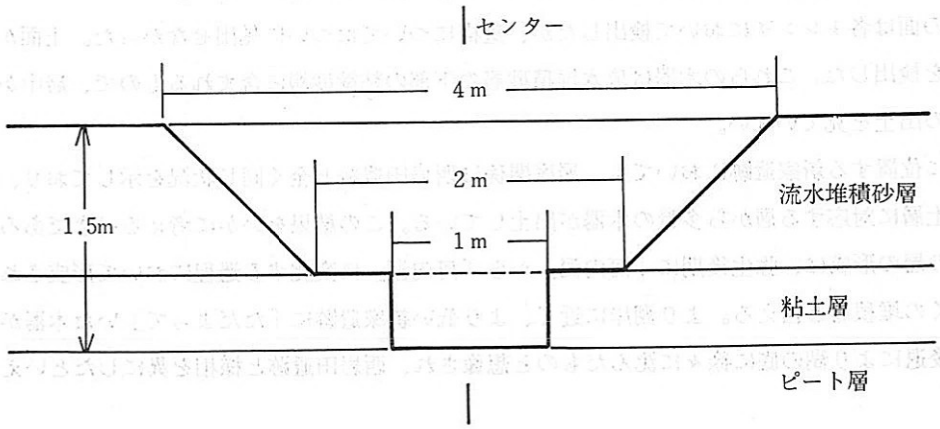
＜流水堆積層＞　（付図１）

当初、遺跡の最終面は試掘調査（昭和　年実施）の結果から、流水堆積砂層上面と見なしていた。最終面の調査終了後、筋掘りによる調査を設定し、下部の遺構・遺物の確認を行った。筋掘り調査は瓜生堂遺跡における調査結果等からピート層を検出することを基準に行ない、添さを1.5ｍと決定した。調査はＡトレンチＳＴＡ66＋50から実施したが、ＳＴＡ66＋90において差柄式の櫂（第30図）が出土したことを初めとして、南へ行くにつれ遺物（特に木製品）が多量に出土を見た。その結果、切拡げ調査においては、最終面を砂層上面ではなく、ピート層上面に変更されることとなった。遺物は切拡げ調査で検出することに期待し、調査はＳＴＡ67＋70で中止した。

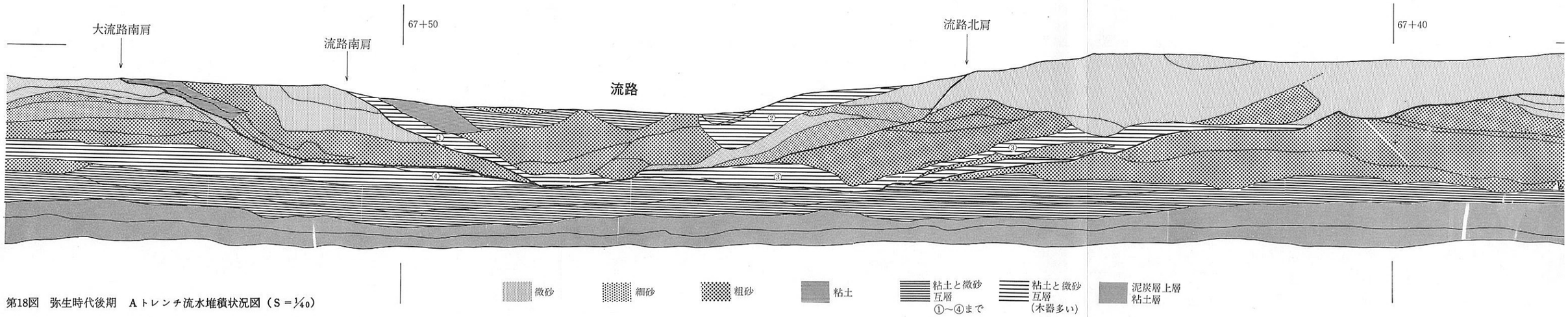
流水堆積砂層上面においては、青灰色の粘土を埋土とする流路状の痕跡が数か所において認められる。しかし、流路としても明確なものは少なく、ＳＴＡ66＋90～67＋20に位置する巾20ｍの流路Ⅰと、67＋30～53に位置するものを流路Ⅱと呼ぶこととする。流路Ⅱは巾30ｍの大流路とその内部に巾10ｍの小流路を検出することができた。流跡Ⅰ・Ⅱの流水方向は東南・北西方向である。平面図は青灰色粘土を排除した段階のもので、最終の埋没状況を示している。巾５ｍの東西３方向に流れを変えた流路に東西＋北西方向から巾１ｍの小流路が流入している状況が認められる。

流水堆積層の調査においては、非常に薄い層による波状堆積が激しいため、切り合い関係の把握が困難なために、層位的な調査が不可能であった。そのために流水堆積層を任意に、上・中・下位と３層に分割したが、分層にあまり意味を持たない。しかし下位から多くの木器が検出されており、暗青色粘土層上面に木器がのっている例が多い。

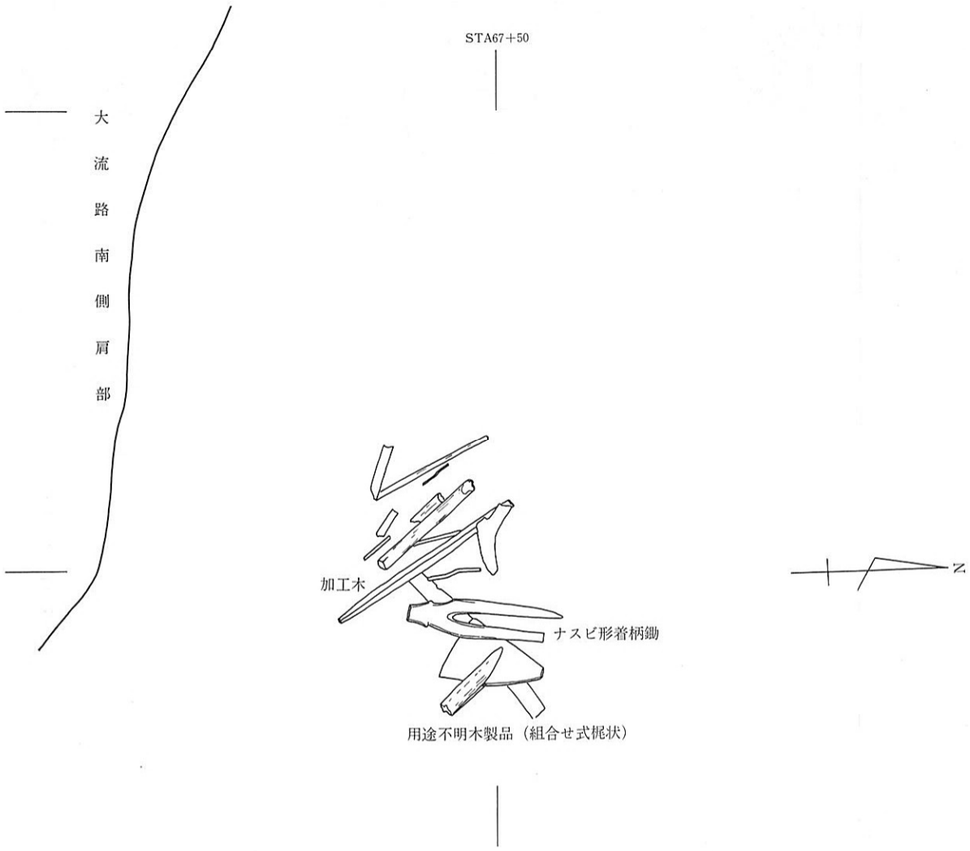
昭和40年の中央環状線建設に際し、西岩田遺跡の北方において、木製の梯子が出土しており、このことが新家遺跡の存在を明確にした。また、昭和46年における下水管渠築造工事においても、当遺跡の北辺から四分子木製品が出土している。この遺物は四つの分岐した枝の先に網をつけた、魚獲り用の網枠と思われるもので、河内湖の漁撈的性格を明確にしたものと云える。

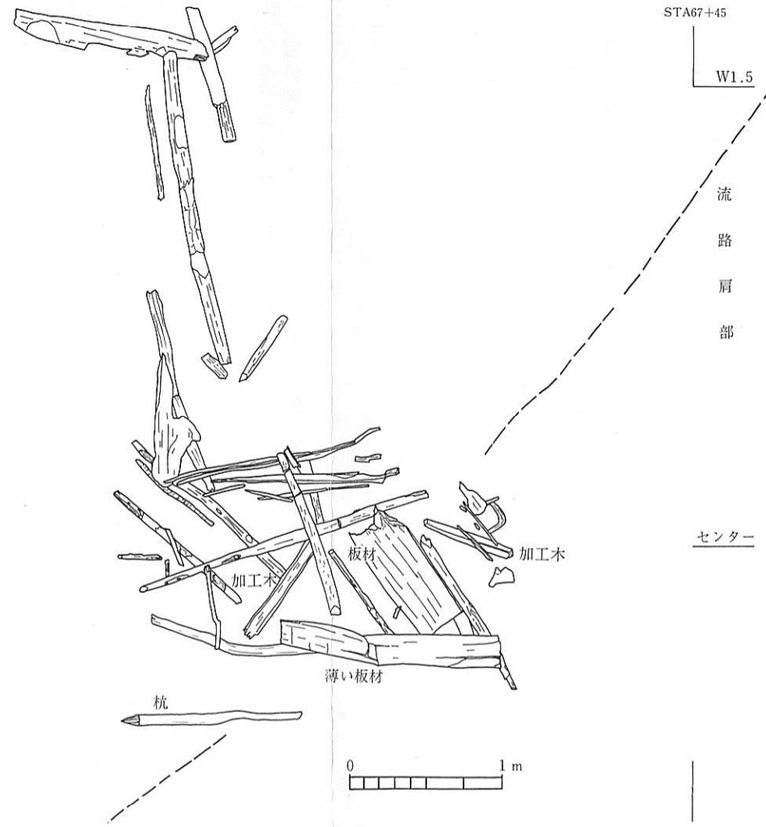


第17図　弥生時代後期筋掘り断面略図



第18図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積状況図（S＝1/40）





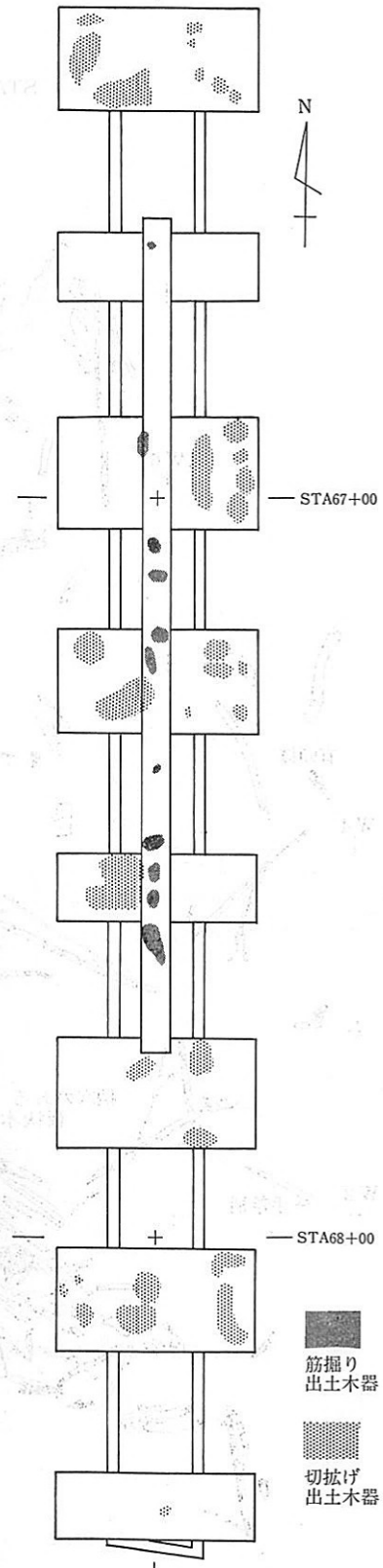
第19図　弥生時代後期　Aトレンチ流路内遺物出土状況図（S＝1/20）

＜流水堆積層　流路を中心として＞

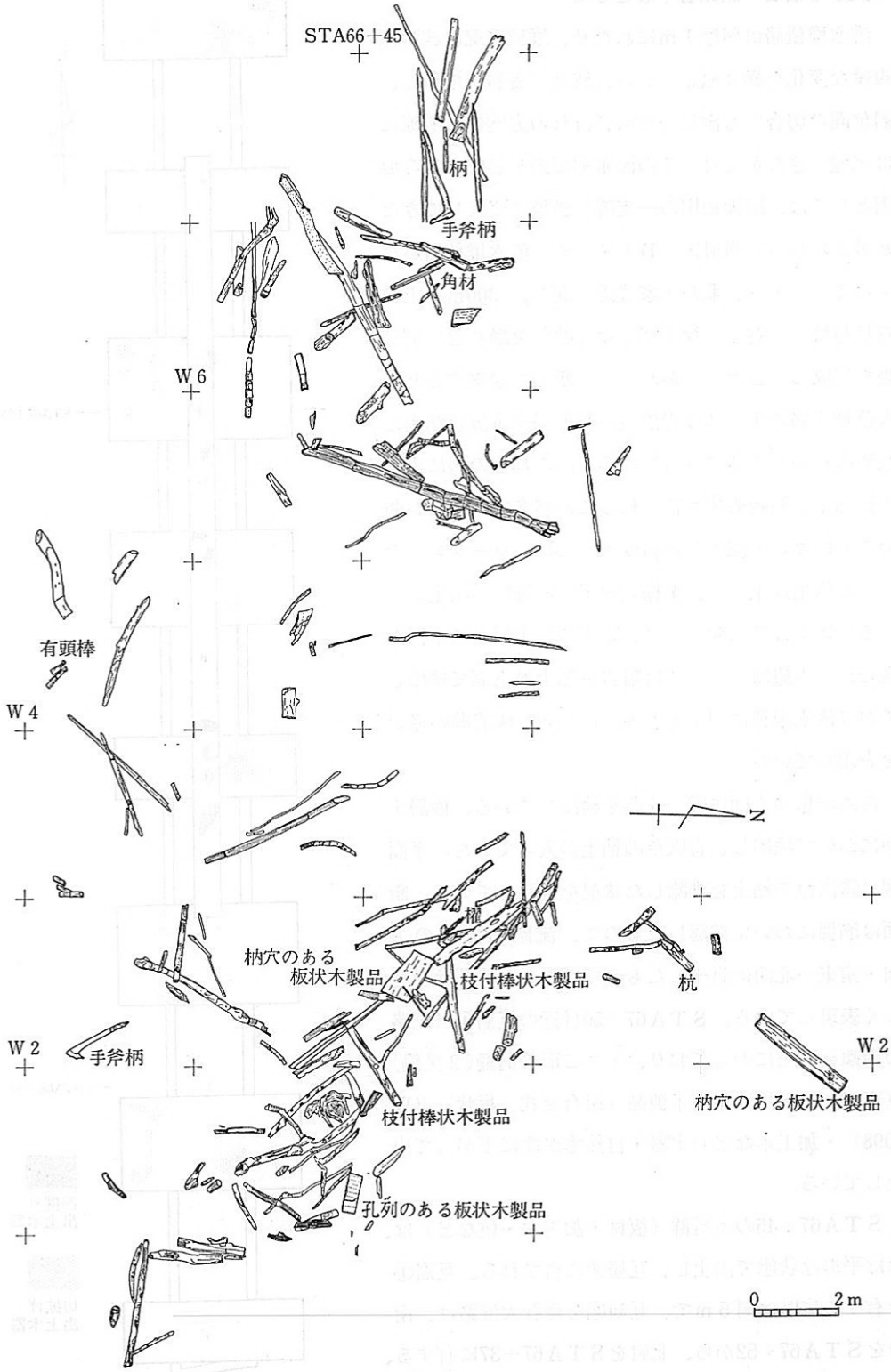
流水堆積層は層厚１ｍにわたり、堆積状況は非常に複雑な変化を繰り返している。波状に各層が堆積し、層位間の切合いも激しいため、流れの方向性も明瞭には把握できなかった。この流水堆積層が形成される要因としては、旧大和川の一支流が当地に流入してきたと考えられる。当遺跡のＤトチンチに流水堆積層がなくなることから、北の新家遺跡に向かい 300m以上の谷状地域が左右し、数十回となく蛇行を繰り返し扇状地を形成してきたことがわかる。断面を観察すると暗青色粘土層の上層には青黒色粘微砂層や青黒色粘土と微砂の互層が堆積する状況がある。これらの層に木器や自然木、植物遺体が含まれることが多い。流れが強いことによって流入した粗砂層中には、ローリングを受けた弥生式土器（第Ⅴ様式後半）の細片が出土している。新家遺跡においては、暗青色粘土層中に木器を含むが、当遺跡においては暗青色粘土層上面で検出しており流水堆積に属するものとはいえ、両遺跡の違いを表現している。

流水堆積層上面に唯一流路を検出している。砂層上面において検出し、青灰色の粘土が入っていた。平面図は青灰色の粘土を排除した状況を現わしている。断面は筋掘において確認したもので、流路の流れの方向・南東―北西に直交したものではないが堆積状況をよく表現している。ＳＴＡ67＋50付近の互層①は流路の南傾斜面上にのっており、ナスビ形着柄鋤（２叉鋤）（Ｗ 050）・用途不明木製品（組合せ式　梶状）（Ｗ 098）・加工木などの木器・自然木が北に下がって出土している。

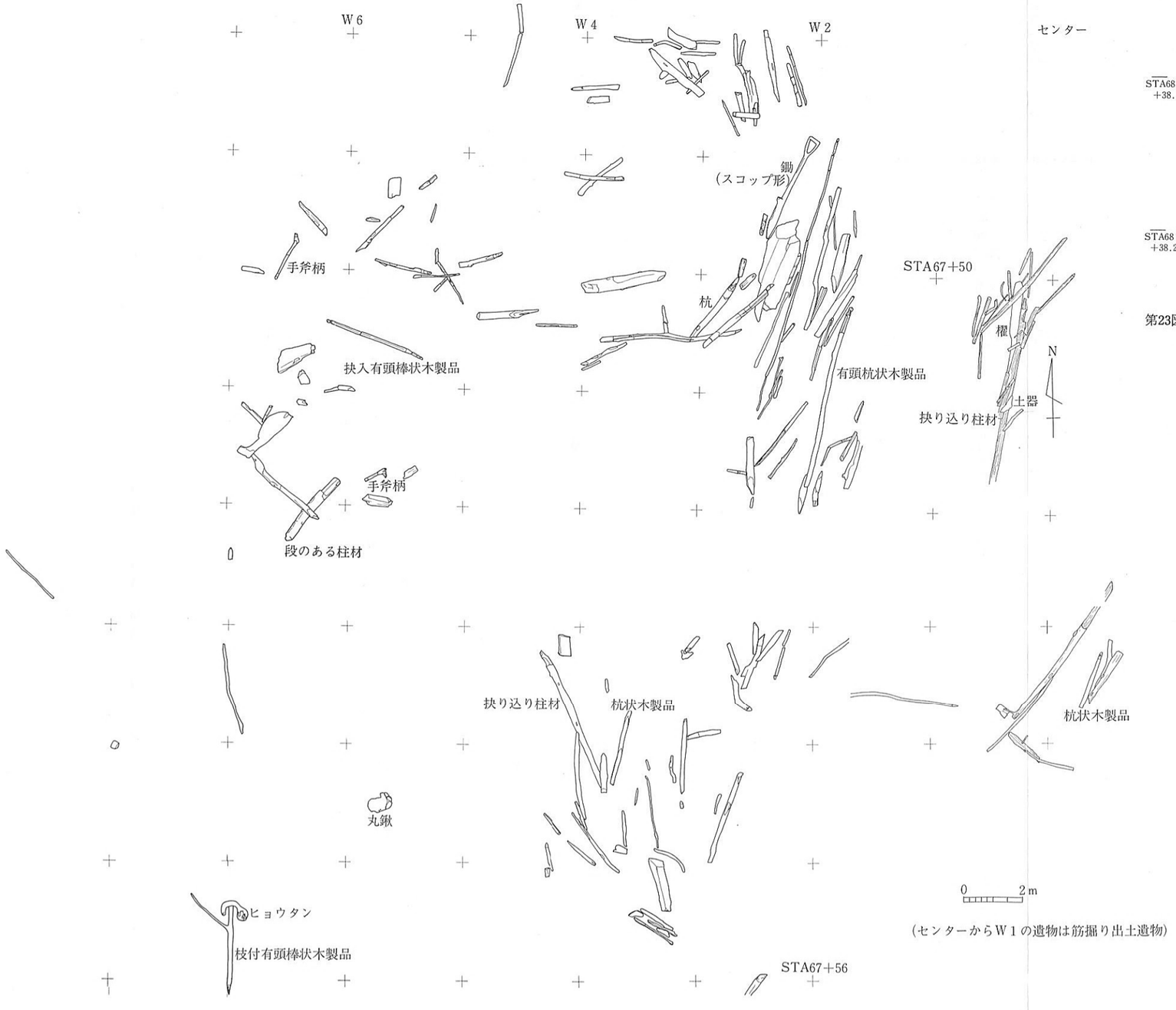
ＳＴＡ67＋45の木器群（板材・加工木・杭など）は、ほぼ平坦な状態で出土し、互層③に含まれる。互層①を有する流路は幅５ｍで、互層③を含む大流路は、南肩をＳＴＡ67＋52から、北肩をＳＴＡ67＋37に有する、幅12mのものであった。



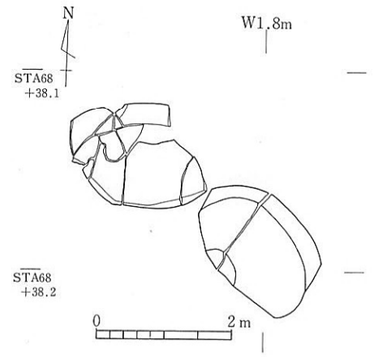
第20図　弥生時代後期Ａトレンチ流水堆積出土木器群位置略図（Ｓ＝1/500）



第21図　弥生時代後期　1Aトレンチ流水堆積木器出土状況（S＝1/40）



第22図　弥生時代後期　Aトレンチ筋掘9Aトレンチ流水堆積木器出土状況（S＝1/40）

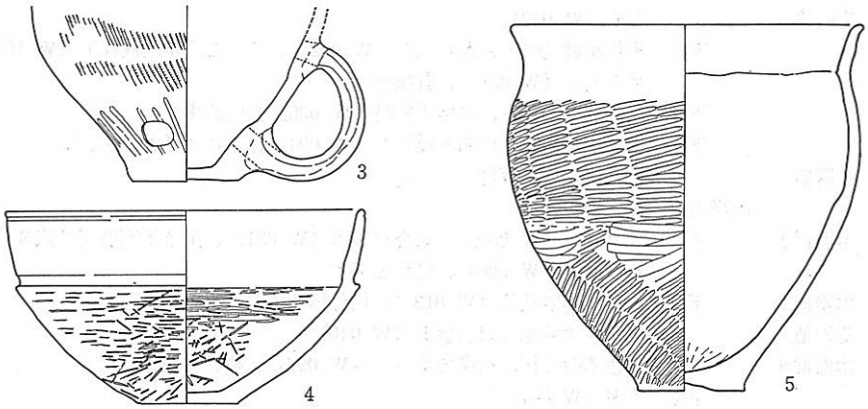


第23図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層上面土器出土状況（S＝1/16）

＜流水堆積層出土遺物＞

把手付の鉢（第24図－３）は、縦位の半環状の把手が付けられ、体部に列点文が施されている。この鉢は弥生中期（Ⅲ様式）に属しており、混入品と思われる。甕形土器（第24図－５）は、中位の粗砂層から出土したもので、弥生時代末期のものと考えている。

鉢形土器（第24図－４）は、庄内期の青灰色粘土を排除した流水堆積砂層上面で出土した。口縁部はやや外方に開きぎみに直立し、沈線が一条施される平底の鉢で、明褐色の土師器のような色調をしている。山陽系の鉢形土器と思われ、才の町Ⅰ式期に属するもので、庄内式に位置されるものかもしれない。



第24図　弥生時代後期　Ａトレンチ流水堆積層出土遺物(1)（土器）（Ｓ＝1/3）

第３表　Ａトレンチ筋掘出土木製品表

66＋90～67＋00	流堆下位	着柄（式）櫂（W 030）、竪杵（W 017）、板材（W 141・W 121）櫂〔鋤先か〕、加工木
67＋00～67＋12	流堆	把手（W 011）、櫂、杭
67＋14～67＋15	流堆下位	脚付角形容器（W 042）、枘穴のある角材、布巻具、板材
67＋18～67＋19	流堆下位	アカトリ（W 037）
67＋21～67＋23	下位	板材〔やりがんなの加工痕〕（W 126）
67＋37～67＋38	下位	櫂（W 027）、板材〔穿孔数ケ所有〕
67＋45～67＋48	下位	布巻具（W 046）、用途不明品〔枝付有頭棒〕（W 071）、板材〔手斧痕〕（W 120）、板材〔手斧痕〕
67＋49～67＋52	流路中	櫂（W 026）、抉入柱材（W 104）、ナスビ形着柄鋤（W 015）、用途不明品〔梶状に組合せる〕（W 098）、布巻具
67＋53～67＋56	下位	木釘の打ち込まれた板材（W 107）
67＋57～67＋60		布巻具（W 048）、ピンセット状木製品（W 044）抉入有頭棒（W 103）、枘穴のある板材、有頭棒
67＋60～67＋62		着柄式鋤（W 009）

第4表　Aトレンチ切拡げ出土木製品表

1A	木器群1	流堆下位	櫂〔「○」の記号有〕（W 031）、用途不明の組合せ式枝付棒状木製品〔樹皮を編んだ紐をもつ〕2点（W 067・W 068）、手斧柄2点（W 021・023）、櫂（W 032）、布巻具（W 045）　孔列のある板状木製品（W 093）、その他枘穴のある板材、杭
1A	木器群2	下位	手斧柄〔大型のもの〕（W 020）、布巻具、有頭棒
1A	木器群3	下位	受け柱（W 105）、手斧柄（W 022）、杭、加工木、櫂破片
2A	木器群4	下位	鍬状木製品（W 016）、有頭棒、加工木
2A	木器群5	下位	用途不明有頭棒（W 073）、柄
	木器群6	下位	板材、杭
	木器群7	下位	板材
2A	その他		木槽（W 043）
3A		下位	板状建材〔ねずみ返し状〕（W 092）、はしご〔4段残存〕（W 102）、アカカキ（W 038）、有頭棒
4A		下位	叉鋤（W 012）、舟型木製品（W 036）、櫂破片
5A		下位	板状木製品〔孔のある板材〕（W 094）、ナスビ形着柄鋤、槌
6A	木器群		杭、柄数点、板材
7A		流堆上位	櫂、棒
7A	木器群1	下位	アカカキ（W 039）、組合せ木器（W 081）、用途不明板〔枘穴3孔があり台形〕（W 096）、弓状加工木
7A	木器群2	下位	ナスビ形着柄鋤（W 013）、枝付棒状木製品（W 069）
7A	その他		浮子状木製品〔有孔板〕（W 040）
8A	木器群4	下位	用途不明〔桜の樹皮で接合〕（W 097）、柱、有頭棒、杭
8A		下位	広鍬（W 007）
8A		中位	木板状木製品（W 080）
9A		中位	栓状木製品（W 078）
9A	木器群（北）		鋤〔スコップ状〕（W 010）、有頭組み柱（W 113）、布巻具・緯巻具（W 053）、手斧柄、杭、抉入有頭棒、枘穴のある板材
9A	木器群（南）		丸鍬（W 008）、用途不明枝付有頭棒（W 070）、受け柱（W 106）、抉入組柱、板材
11A			用途不明〔未製品か〕（W 099）
13A	木器群1		杭（W 149）、脚付角形容器（W 041）
13A	木器群3		枘をつくり出した角材（W 136）
13A	その他		用途不明有頭棒（W 074）
16A		流堆中位	ナスビ形着柄鋤（W 014）
16A		中位	広鍬（W 006）
16A	その他		櫂（W 034）

（注）　以上の木器群・木器出土地点の他に、多数の木製品が出土している。
たとえば加工木については、非常に分類がむつかしく、煩雑になるおそれがあるため、多くを割愛し、実測図があるもの、主要なものについてのみ掲載した。
またAトレンチにおける流水堆積は非常に複雑な堆積をくり返し、1m近い層厚をもっている。そのため調査における出土層位の確認がむつかしく上位・中位・下位の判定は出土地点の高さをもってひとつの根拠とした。

（流堆上位）基本的に上位においては粗砂・細砂の分布が多く木製品はきわめて少ない。

（流堆中位）中位の一部に粘土と微砂の互層が認められ木製品が出土する。

（流堆下位）下位については、特に腐植物層がよく認められ、青黒色粘土と微砂の互層や粘微砂層が顕著で、木製品が多く出土している。

（村上）

＜Aトレンチ流水堆積層出土の遺物・木製品＞

弥生時代後期最終末に相当する流水堆積から、製品として登録したもの 177点、加工材・加工木・切断痕のあるものなど人の手の加わったものとして登録したもの 976点が出土した。この他に自然木がコンテナ 140箱検出されている。これらの木製品・加工木・自然木は、河内湖に流れ込む自然河川の河口近くから群をなして検出された。殆ど植物製品のみで、土器はわずかに数個体である。

概報作成にあたり、これらの木製品を、用途別に器種分類しうるものは、その機能によって、農具・工具・漁撈具・紡織具・容器・祭祀具・建築材・杭材等に分類し、用途不明木製品に関しては、その形態によって分類した。細分は下のようになる。

Ⅰ　農具……鍬類、鋤類、鎌形木製品、竪杵、田舟

Ⅱ　工具……手斧柄

Ⅲ　漁撈具……舟形木製品、櫂、アカカキ、浮子状木製品、手網枠

Ⅳ　容器……脚付角形容器、木槽・片口

Ⅴ　紡織具……布巻具・経巻具、編錘

Ⅵ　祭祀具……鳥形木製品、剣形木製品、斎串状木製品

Ⅶ　用途不明木製品……ピンセット状木製品、柄状木製品、枝付棒状組合せ木製品、枝付有頭棒状木製品、棒状木製品、板状木製品

Ⅷ　建築材……はしご、柱材、板材、杭材、井戸枠

Ⅸ　板材、加工材

Ⅰ　農具

農具は15点を数え、耕作具としての鍬・鋤、刈取具としての鎌形木製品、脱穀具としての竪杵等が分類される。農作業に使用される一連の道具があるといえる。Bトレンチより田舟も検出されており、低湿地における稲作が想定される。部分名称は『池上遺跡・木器編 1・2』1980に準じる。

鍬　鍬3点を数え、広鍬2点、円鍬1点が含まれる。

＜広鍬＞　（第25図、図版81）2点を数える（W006・007）。2点とも同様の形態である。両側が裾広がりに大きく彎曲し、刃縁は浅く外彎する。頭部は2点とも欠損している。東大阪市瓜生堂遺跡(中西他80)より広鍬の頭部が出土しており、それと比較すると、丁度この形態の広鍬の頭部になる。つまり、頭部は逆台形状に広がり、着柄孔直上に溝を設ける形をしている。樹種は2点ともカシを使用している。広鍬（W 006）は現長26.1cm、刃部最大幅18.8cm（復元幅21.2cm）、厚さは着柄部が 3.6cmを測り、周縁にむかって薄くなり、刃部先端部では 0.8cmを測り、刃縁は両刃気味である。着柄孔径3.6cmを測る。前面は全体に平らな面を成し、着柄孔上2cmに幅2.5cmの横溝が設けてある。後面は着柄部に最も厚みがあり、周縁にむかって徐々に薄くなる。着柄角度は75度になる。両面とも加工痕が明瞭に残っている。刃幅4.0cm～0.8cmの非常に鋭利な痕跡で、鉄製手斧が用いられたとみられる。刃部先端部は表面が磨滅しており、使用されたことがうかがわれる。

広鍬（W 007）は、刃部上半部の片身しか残っていない。現長18.0㎝、現存部最大幅11.5㎝、着柄部現存部厚2.4㎝、下端部厚0.8㎝を測る。（W 006）同様に前面は平らな面をなし、着柄孔上2㎝に横溝が設けられている。この溝はやや下ばが広く、上ばが狭い溝になる。着柄孔径はおよそ3㎝になり、着柄角度は70度を測る。両平面とも加工痕がよく残っており、刃最大幅 2.6㎝を測る。後面の着柄部分が、着柄孔にむかって放射状に加工を施していることがわかる。

＜円鍬＞（第25図、図版81）（W 008）　樹種はカシで、柾目材の横木取りである。頭部は欠損するが、横長の楕円形を呈し、刃縁は浅く外彎する。現長16.5㎝、幅24.4㎝、厚さ着柄部1.0㎝、刃部先端部 0.5㎝を測る。周縁は丸い面を成す。着柄部は特に厚みはなく、孔径は復元すると、長径4.6㎝、短径3.3㎝の楕円形になる。刃部先端部中央に径0.5～0.4㎝の小孔が2個対になって穿たれている。全体に磨耗がみられるが、材木の方向に沿った加工痕がみられた。薄手の円鍬である。

鋤　鋤、8点を数える。着柄鋤1点、ナスビ形着柄鋤4点、身と柄と一木作りのスコップ形鋤1点、叉鋤1点、鋤破片1点である。樹種は8点ともカシを用いている。柄の把手部分も1点出土している。

＜着柄鋤＞（第25図、図版82）（W 009）　現長24.8㎝、幅13㎝、厚さ 0.6㎝を測るが、乾燥してしまってからの法量なのでかなり縮少している。登録時の計測では、現長28.5㎝、幅14.9㎝、厚さ 1.5㎝を測る。側縁はほぼ平行してのび刃部先端部でやや彎曲して小さくなり、刃縁は平らである。柾目材の縦木取りである。側縁は丸味をもつ。着柄孔部は現長6.8㎝、現在幅2.2㎝を測る長方形の着柄孔である。着柄部に特に厚みはなく、全体的に薄身につくられた細長い鋤先といえる。

＜長柄式（スコップ状）＞（第26図、図版82）（W 010）　柄の把手部分から鋤身刃縁まで全体がわかる資料で、1木作りの鋤である。鋤身半分欠損。全長98.8㎝、現存幅 9.2㎝（復元幅15.0㎝）、柄径3.15×3㎝、鋤身厚3.0～0.3㎝を測る。鋤身の長さは35.9㎝を測り、幅を復元すると最大幅15.0㎝となり、鋤身の肩部に最大幅があり、徐々にすぼまってのびる細長い鋤身になる。刃縁はわずかに張りをもつ円刃になる。刃縁は非常に薄くつくられ、磨耗痕がみられる。柄の延長上、つまり鋤身中央に厚みをもたせ、更に背面が傾斜しており、折れにくくしている。柄は長さ62.9㎝、上端部は三角形状に把手部がつくられる。握り部は直径3.75×3㎝のやや縦長の楕円形を成し、側面からみて、柄の軸と把手部分の軸がわずかに傾いていることなどから、握り易く、使い易いように作られていることがわかる。

＜叉鋤＞（第26図、図版82）（W 012）　現長19.8㎝、肩部現存幅 5.7㎝、肩部厚さ 1.9㎝、刃部幅4.9～3.4㎝、刃部厚さ1.4㎝を測り、肩部と刃部の境で抉りが入りそのまま刃部に伸てゆく。刃部は二叉に分かれる。刃部先端は切断痕がある。肩部中央には柄があったものと考えられる。

＜なすび形着柄鋤＞（26・27図、図版82・83）（W 013、014、015）　刃部が一枚づくりのものと（W 014）二叉に分れるものW 013、015と二種類ある。

（W 014）のなすび形着柄鋤は身の完形品である。全長74㎝、肩部幅11.2㎝、刃部幅13.1㎝、着柄部厚 1.5㎝、刃部中央部は 1.2㎝、刃縁は 0.2㎝を測り、着柄部から刃縁まで徐々に薄くなっている。肩部突出部分直下の抉り込み部分から刃縁まで長さ53㎝を測り、非常に薄身の鋤身である。刃縁は磨滅している。着柄部は下面は平坦面で、上面は隅丸長方形のかまぼこ形を呈す。刃部側縁は平らな面を成す。全面手斧の加工痕がみられる。

（W 015）のなすび形着柄鋤は、刃部が二又に分れている。着柄部上端部と片方の刃先が欠損しているが、現長52.0㎝、肩部幅 9.1㎝、刃部最大幅12.1㎝、刃部幅5.0㎝、着柄部上端部厚さ1.4㎝～刃部先端部厚 0.7㎝、二又に分れた部分から刃部先端まで38.5㎝を測る。側縁は全体に丸い面を成し、着柄部は断面かまぼこ形を呈す。両面とも加工痕がみられる。

（W 013）は二又に分れるなすび形着柄鋤の刃部上半の部分である。現長27.7㎝、残存部幅 5.8㎝、刃部幅5.0㎝、刃部厚1.2㎝を測る、断面は扁平な楕円形を呈し、両面に加工痕が残っている。

（W 011）は柄の把手部である。全長11.4㎝、直径2.4×2.5㎝を測る断面正円形に近い棒状木製品である。下端面に長さ2.6×幅0.4㎝×奥行き１㎝の細長い孔があり、T字形に組合される把手部分にあたる。樹種はヒノキで（W 010）の鋤の把手部のように作られるものの他に、このようにT字形に組合されるものも同時に存在することが言える。柾目材である。

＜鎌形木製品＞（第28図、図版83）（W 016）　鎌形木製品は、身と柄とが組合された形で検出された。柄の下端部は欠損している。樹種は身はカシで柾目材の横木取り、柄はクリで柾目材の縦木取りである。身は長さ24.4㎝、基部幅4.1㎝、基部厚さ1.4㎝、刃部幅3.4～2.6㎝、刃部厚さ1.2～0.7㎝を測る。刃縁は直刃で刃先は鋭く、背に当る部分は厚みをもつ。背面はまっすぐにのび、柄に納まる部分から基部にかけての下縁は背面と同様に平らな面につくられ、基部は刃部より幅広く下縁が突出している。身の先端は刃縁と同様に薄く作られる。身本体は小さな加工痕がよく残っており、手斧による加工とみられる。

柄は現長29.5㎝、柄頭部幅 5.5㎝、厚さ2.75㎝、握り部直径2.2×1.8㎝を測る。着装孔は長辺3.5㎝、短辺1.4㎝の長方形の孔がクラブヘッドのように大きくつくられた頭部の直下に位置する。幅広くはり出しているのは、身を固定するのに役立たせるためである。身の基部側は上からしばりつけるのに都合の良いように浅く削られている。握り部分は隅丸方形を呈す。握り部下端部は欠損して不明であるが、他の鎌の柄の例から考えてかえり部分がつくられていたと考えられる。更に、この鎌形木製品は、鎌の身と柄の着柄角度が79度であり、鎌の身が柄に装着された部分に、植物性の繊維で上からしばっていた痕跡がみられた。

1982年に静岡県有東遺跡から弥生時代中期の曲刃の鎌が柄に着装された状態で検出された。これまで、弥生時代には鎌は近畿地方では出土せず、稲の刈取りはもっぱら石庖丁や木製庖丁で行ったと考えられていた。しかし鉄鎌は、北九州の方では使われていた。手に入らなかった近畿地方では、それを模倣して、固いカシを利用した鎌が出現しても不思議ではないと考えられる。

竪杵（第29図、図版84）（W 017・018）

2点を数える。ともに下端面が磨耗している。竪杵（W 017）は現長52.2cm、搗部径 9.1cm、握部径3.1×2.7cmを測る。樹種はクヌギ柾目材の縦木取りである。搗部は全面に最大幅 1.6cmの加工痕が明瞭にみられ手斧による加工である。下端面は使用により磨滅している。（W 018）は竪杵の搗部分のみで上端部は焼けている。現長18cm、搗部直径8cmを測る。上端部は再加工痕が一部にみとめられる。樹種はカシで柾目材の縦木取りである。

このように弥生時代最終末の時期において当遺跡では、広鍬、丸鍬、一木作りの鋤、なすび形着柄鋤・鎌形木製品・竪杵等、農作業に必要な一連の道具がそろっている。広鍬や鋤等も鉄製刃先は使用されず、木製のものが使用されている。なすび形着柄鋤なども非常に薄身で長い鋤身をもち、固い土地をすき返すことは不可能で、低湿地に適する道具といえる。更にBトレンチより田舟も検出されており、低湿地における稲作農業が考えられる。鎌形木製品の存在は、その様な農作業における収獲用具と考えてさしつかえないと考える。

Ⅱ　工具

工具として、手斧柄が7点含まれる。

＜手斧柄＞（第29図、図版85～87）（W 019～W 025）　樹枝と樹幹の枝分れ部分を利用し、樹幹を身をとりつける台部にあて、握部に樹枝を用いている。台部と握部の角度、即ち斧の着柄角度は60度～70度の鋭角をなすものと、100度～110度の鈍角をなすものとがあり、握部はそのままま っすぐに伸るものもあれば、彎曲しているものもある。台部の形態は、台部の先端を一段低く削り込んで着装部をつくり出すもの3点（W 020・021・022）と、台部上面は平坦面をなし、台部先端を一まわり細くつくり、そこに鉄斧をはめ込む形態のもの1点（W 019）との二者がみられる。また台尻は丸くつくられるが、1点のみ台尻から柄にかけて切りおとし台尻が平坦なものがある。握部が真直ぐにのびるものが1点（W 022）で、反ったり内彎したりするものが5点（W 019・020・021・023・024）もあり、手斧の柄としてはその方が使い易いと考えられる。（W 019・021）は、加工痕の残りがよく、握部のような丸い部分はヤリガンナの削り痕とみられる。一部手斧痕もみられるので、仕上げ調整としてこのような工具を使用していたことがうかがえる。

また台部に着装される鉄斧として、板状鉄斧と、はめ込み用鉄斧とが考えられる。また握部末端が斜めに切断されている例が多く、かえし部分を作り出しているものはみられないので、余り大きな力を使わずにすむ細工用の手斧の柄と考えられる。

第5表　手　斧　柄　観　察　表

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区・ 遺構・層位	法量(cm) 長 最大巾 最大厚	樹種 木取り	着柄角度	特徴
W019	第29図 図版85	9Aトレンチ 木器北群K-1 暗青灰色微砂	38.3、2.5×2.1、台部8.9×3.4×3.0、着装部2.1×2.8×1.9	ヒノキ	110°	台部上面は平担面を呈し、その先端の着装部は周辺をわずかに削って細くし鉄斧をそう入する。台尻は平らな面をなし、その部分から握部にかけて一部平担面をつくる。握部は後へ反っている。握部末端から3.6cm、18cmの部分に浅い段をつくる。握部末端は斜めに切断されている。

W020	第 29 図 図版85	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層下部	54.2、径2.8×2.7 台部18.0×4.9×3、着装11.1×3.5×1.8cm	クヌギ	95° ～ 100°	台部上面は鉄斧着装のため1cmほど一段低く削り、その先端下面には組かけ用の突起帯をつくり出す。 握部は曲がった枝がそのまま利用されており、握部全体として後へ傾斜する。握部末端は、斜めに切断される。表面の残りは悪く剝落が著しく、加工痕はみられない。
W021	第 29 図 図版85	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 上　層	38.0、2.2×2.1 台部現長8.5×4×2.6	カ　ヤ	60° ～ 70°	台部上面基部のみ残り、着装部は不明。台部を一周して段がつくられる。握部は大きく内弯している。握部下方21.6cmより下方をそのまま残し、上方をうすく削って段状につくる。 非常に丁寧な、手斧とヤリガンナの加工痕が残る。
W022	第 29 図 図版86	1Aトレンチ 木器群Ⅲ 下層下部	51.0、2.5×2.1 台部現長11.2×4.0×3.3 着装部3.9×4.0×2.4	サカキ	80°	台部上面は着装のため9mmほど低く削る。しかし先端は欠損。握り部はほぼまっすぐのび、末端は斜めに切断される。
W023	図版86	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 上層	44.5、2.5×2.2 台部現長7.5×5×2.1	サカキ	70°	台部先端欠損。W021 同様台部と握部の境に稜がめぐる。握部はやや後側に反ってのびている。下端は欠損。
W024	図版87	11・12A トレンチ 流水堆積Ⅰ 砂　層	36.4径、2.6×2.5 8.9×現存部幅3cm×2.7、着装部長2.7～2.9×1.7	クヌギ	110°	台部は後半分欠損している。台部上面は1cm程低く削られ着装部をつくる。着装部は長さ2.7～2.9cmと斜めに作られる。 握部は内彎している。台部上面の平らな面は狭く、断面形はソロバン玉形に近く磨滅が著しい。その下半部は隅丸になる。
W025	図版87	9Aトレンチ 木器北群 K－3 暗青灰色微砂	20.4径、2.4×1.9、 台部7.8×3.4×不明	サカキ	70°	台部上面欠損。

Ⅲ　漁撈具

漁撈具として、舟形木製品、櫂、アカカキ、浮子状木製品、手網枠、弓などが含まれ、当遺跡では19点を数える。

＜舟形木製品＞（第31図、図版89）（W 036）　1点出土。一側面が欠損しているが、全体形のわかる資料である。 樹種はヒノキで、柾目材である。 全長68.0cm、現存幅 7.7cm（復元幅 8.3cm）、高さ 4.8cmを測る。断面形は隅丸の逆台形状を呈し、舟底は平底になる。船首、船尾とも尖っておらず、幅 2.1cmの平坦面を成し、舟底から船首、船尾に向って斜上方に高くつくりあげる。内法は長さ52.5cm、深さ 2.4cmを測り、凹レンズ状に彫り凹められる。船底の厚さは 2.4～2.5cm。 船首には 0.5× 0.4cmの角孔が側面に貫通しており、綱を通してつなぐための孔であろう。また上面から両側面にかけて浅く削って溝状に一段低く作り出している。静岡県登呂遺跡、韮山町山木遺跡、新潟県千種遺跡、静岡県伊場遺跡などで舟や舟形木製品が検出されているが、このような形態の舟は未見である。独木舟というよりは構造舟を模倣したものといえるのではないか。

＜櫂＞（第30・31図、図版89～91）（W 026～035）　14点を数える。 柄と櫂身を一木でつくる長大な形態のものと別木で柄をつくり櫂身を着装して使う着柄用櫂とがある。櫂身部は全体として細長い。 櫂身の形は木ノ葉状に側辺がふくらみ先端部が鋭角に終るもの（W 027・031）と、先端部に最大幅をもち先端が円く終るもの（W 026）とがみられる。柄は断面正円形を呈し、上端部を特につくるものはみられなかった。柄のつけねの部分のみ残るものが3点、櫂身のみ残る

ものが6点である。樹種はシイノキ6点、サクラ2点、カシ1点、ユズリハ1点、ヒノキ1点、スギ1点で柾目材の縦木取りである。

着柄用櫂（W 030）と想定したのは、形態的には着柄鋤と考えてもさしつかえないが樹種がスギであり農耕具としては余り例がみられないことと、一枚歯の鋤先にしては先端が尖り気味であることからである。

櫂（W 031）は、櫂身上半部に片面のみであるが杏仁形の彫り込みがある。

第6表　櫂　観　察　表

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区 層　位	法量(cm)長×幅×厚 柄　直　径	樹　種	特　　徴
W 026	第 30 図 図版89	Aトレンチ 青黒色粘土・青灰色微砂互層	100.5×9×2 2.7×2.7	シイノキ	一木作りの櫂。櫂身先端部に最大幅があり、先端は丸く終る。柄上端は欠損。櫂身断面扁平な杏仁形。
W 027	第 30 図 図版90	Aトレンチ 青黒色粘土と青灰色微砂互層	79.2×7×1.3 2.7×2.4	ヒノキ	一木作りの櫂。櫂身はオリーブ葉状を呈し、先端は鋭角に終る。表面はちれている。櫂身断面扁平な杏仁形。
W 028	第 30 図 図版91	7Aトレンチ 流水堆積 1回目	30.4×8.0(復元幅)×1.4	カシ	櫂身先端部のみ。櫂身断面扁平な杏仁形。
W 029	第 30 図 図版90	Aトレンチ 筋　掘	30×8.2×1.4	シイノキ	櫂身上半部。下半部片面に直孤文状の線刻がある。櫂身断面上端部扁平な菱形、下半部扁平な杏仁形。
W 030	第 30 図 図版90	Aトレンチ 青黒色粘土・青灰色微砂互層	55.9×8.8×1.3	スギ	着柄櫂。裏面櫂身部は剝落欠損。加工痕が明瞭にみられる。櫂身断面は扁平な矩形。肩部に最大幅があり徐々に細くなり先端は鋭角に終る。
W 031	第 31 図 図版90	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 土　層	64.4×7.6×1.0	サクラ	一木作りの櫂の身部。櫂身は細り、オリーブ葉状を呈し、先端は鋭角に終ると思われる。正面上方に縦長杏仁形の彫り込みがある。断面は扁平な杏仁形だが、中央にかすかに稜をもつ。
W 032	図版91	1Aトレンチ 南側・その他	27.8×5.9×1.5	シイノキ	櫂身上半部。断面扁平な杏仁形。
W 033	図版91	4Aトレンチ 流水堆積 砂　層	20.9×3.8×2.0 2.7×2.4	シイノキ	柄のつけねの部分。断面扁平な楕円形。
W 034	図版91	15・16トレンチ 流水堆積 砂　層	43.6×7.4×1.4	シイノキ	柄のつけねの部分。断平楕円形。
W 035	図版91	7Aトレンチ 黒色粘土層	16.7×7.3×0.9	カヤ	櫂身上半部。断面扁平な楕円形。
		Aトレンチ 青黒粘土・青灰色微砂互層	16.7×7.3×0.9	シイノキ	櫂身先端のみ。断面扁平な杏仁形。
		1Aトレンチ 木器群Ⅰ 上　層	6.0×3.0×0.6	サクラ	櫂身先端部のみ。鋭角に終る。断面は扁平な杏仁形。
		1Aトレンチ 南側・その他	31.1×5.5×1.9	サカキ	櫂身上半部。片面にのみ中央に稜をもつ。側面があり、断面は扁平な五角形状。
		2Aトレンチ 木器群Ⅲ 上　部	20.7×4.95×2.3	ユズリハ	柄のつけねの部分。櫂身断面菱形。

＜アカカキ＞（第31図、図版87・88）（W 037・038・039）　3点を数える。丁度チリトリのような形態である。三点とも取手がついている。

アカカキ（W 037）は、全長23.8cm、幅11.5cm、高さ 4.9cmを測る。身の長さは20.5cmとなり、身の内法は、長さ16.0cm、巾10.1cm、深さ2.4cmになる。取手の直径は2.8cmで、取手の端部は欠損している。樹種はクスノキで心持材である。全面手斧の加工痕が残り、最大刃巾1.6cmになる。丁寧な加工が施されている。断面は半分形を呈す。

（W 038）は、全長21cm、現存部幅16cm、高さ 8.5cmを測る。肩部中央底近くに取手の痕跡がわずかに残る。樹種はスギで柾目材の縦木取りである。身の内法は長さ14～18cm、深さ 7.2cmになる。側辺は張りをもって彎曲し、底部は平底になる。

（W 039）は、全長22.6cm、残存部幅17.4cm、高さ 5.0cmを測る。身の長さは18.4cm、身の内法は長さ16.5cm、深さ3.7cmを測り、身は横長の平べったい形になる。取手は直径3.2cmである。取手の端部は欠損していおり、磨耗の著しいアカカキである。樹種はクスノキである。

＜浮子状木製品＞（第30図、図版88）（W 040）　1点を数える。全長16.2cm、幅 3.7cm、厚さ0.8cm、樹種はヒノキで柾目材である。細長い木片の両端より約1cmの所に小孔（0.4×0.5cm）を穿っている。和歌山県笠嶋遺跡において、これと同様な小さな板状木製品が出土しており、浮子としているので、それにならった。

櫂とかアカカキなどは必ずしも漁撈具に分類する必要はなく運搬用具として独立させても良いと思われるほど、個体数の割合が多かった。それは当遺跡が河内湖の河口近くに立地していたということから交通の要所を占めていたためとも考えられる。櫂は、どちらかというと細身のものが目立ったが、やはり波静かな内湖や河川での交通ということからうなずけるものである。漁撈具として土錘も多数検出されており、浮子状木製品やBトレンチから出土している弓状木や、時期は異なるが、古墳時代初頭に比定される手網枠などからも、河内湖沿岸における漁業も盛んであったことが考えられる。

Ⅳ　容　器

容器として脚付角形容器と木槽が含まれる。脚付角形容器が2点、木槽1点である。

＜脚付角形容器＞（第32図、図版92）（W 041・042）　2点を数える。平面形は長方形を呈し、底に2個一対の脚台がある。木目に沿って縦方向に割れており、元来2対4個の脚台があったと思われる。樹種は2点ともヒノキの柾目材である。

脚台付角形容器（W 041）は、現長 70.7cm、現存幅 16.4cm、高さ 7.5cmを測る。外底の長さは60.6cm、内法は底の長さが53.8cm、深さは 3.5cmを測る。短辺は外底面より45度、長辺は55度の角度で傾斜している。長辺の上面の縁は3cm、短辺の縁は4cm位になり短辺の方が厚みをもつ。底板の厚さは 1.8cmを測る。丁度脚台の所で縦方向に割れているので、短辺の長さは復元できない。外底面には長さ7.5cm、幅2.3cm、高さ2.2cmの断面は逆台形状の脚台がある。外底面の残りはよいが内面は磨耗が著しく、ヒノキの木目が浮き出ている。

（W 042）は脚台付角形容器の底の部分のみである。現長49.5㎝、現存幅11.0㎝、現高 3.6㎝を測る。外底面の長さは44.8㎝、内底面の長さは40.8㎝を測る。底板の厚さは 1.5㎝になる。短辺は約35度の傾斜である。底面に一辺4.5㎝、高さ１㎝の脚台をつくり出している。

＜木槽＞（第33図、図版92）（W 043）は、半截した心持材を切断し、内側をくりぬいただけの粗い作りの木槽である。 樹種はサクラである。 長さ56.5㎝、幅21㎝、厚さ13㎝、内のりは長さ35.3㎝、幅15.7～17.2㎝、深さ 5.6㎝～８㎝、底部は平らにつくるが、外側の、短辺は切断後粗く加工し、長辺の外面は表皮をはぎ、樹幹の凹凸の凸部を粗く削り取っただけの加工である。内側は逆台形状に彫り凹める。未成品の可能性もある。

Ⅴ　紡織具

紡織具には、布巻具・経巻具、編錘などが含まれる。

＜布巻具・経巻具＞（第34図、図版93・94）（W 045～056）　12点を数える。 細長い棒の両端に握部をつくりだし、断面が円形・楕円形・半円形・かまぼこ形・矩形を呈すものである。Ａトレンチでは完形品はない。この中で（W 045）は明らかに布巻具である。また（W 046～051）のように、断面が半円形・かまぼこ形・矩形を呈し、棒状部分に一部平坦面をもつものは、布巻具とみてさしつかえないと思われる。径は平均4.5×2.4㎝になるが、（W 049・W 050）は棒状部分の中央を抉り、平坦面の所は、布巻具の布巻部分と考える。握部がないので他の用途も考えねばならない。また他の棒状木製品は、両端に握部をもつが、断面は円形・楕円形を呈するもので、布巻具にも経巻具にもなりうるものである。断面円形・楕円形の直径は平均2.9×2.3㎝になる。Ａトレンチでは完形品がないので全長はわからないが、（W 047）は現長47.5㎝、布巻部分は約32㎝、（W 048）は現長33㎝で、布巻部分は24㎝と短い方であり、（W 053）は現長81.9㎝と長いものもある。これは織り上げる布幅に関係するが、必要に応じて幅狭のもの幅広のもの種々な幅の布を織っていたと考えられる。なお、布幅に関しては今後の課題である。

樹種はヒノキ５点、シイノキ５点、サカキ１点、タブノキ１点である。断面円形・楕円形・半円形のものは、樹枝をそのまま樹皮をはいで利用しており、（W 045・047・049）などは、柾目材の縦木取りである。（個々の樹種は後述の一覧表参照）

Ⅵ　祭祀具

祭祀具には、鳥形木製品、剣形木製品、斎串状木製品が含まれる。

＜鳥形木製品＞（図版 104）（W 075）　１点出土。樹種はサカキで樹枝をそのまま利用しており樹皮は剝いでいるが、加工は殆どなく粗い作りのものである。現長38.5㎝、直径4.2×4.0㎝である。端部近くを削りとって頭部を作り出しているが、上面より下方を大きく抉っており、頭部が一方に片寄り、体部の棒状部分とは軸があわない。それ故に、有頭棒状木製品とはせず、鳥形木製品として分類した。当遺跡の立地条件として、河内湖沿岸に位置しており、交通の要所として、航海安全祈願の為の祭祀も行われた可能性が考えられ、舟形木製品の検出と照らしあわせて、鳥形木製品の存在も考えてさしつかえないのではないだろうか。それにしても余りにも作りが粗

いので、今後、検討しなければならない。

Ⅶ　用途不明木製品

用途不明木製品として分類したものは、木製品として作られているが、その用途・機能のわからないものである。その形態的特徴から、ピンセット状木製品、柄状木製品、枝付棒状組合せ木製品枝付有頭棒状木製品、棒状木製品、板状木製品などに分類した。合計45点を数える。

＜ピンセット状木製品＞（第33図、図版84）（W 044）　1点を数える。上半部がたてに割り裂かれて、丁度ピンセットのような形をした木製品である。下方へ降るにつれて徐々に細くなり、端部は丸く磨滅している。一見笄の裂けたものかとみられるが、裂けた部分の上端部には加工が施されており、相対する面があわないが中央部分では相対する部分が一致するので、上端部は意図的に割り裂いた後に加工し作っているといえる。樹種はヒノキで柾目材の縦木取りである。全長20.8cm、幅0.9cm、厚み0.7cmを測る。下端部分は火を受けて炭化している。

＜柄状木製品＞（図版95～98）（W 057～66・142～144）　総数20点を数える。全体形のわかる資料からみると、基部の片面だけを削り斜め方向の平らな面を作り出しており、頭頂部はわずかに尖頭状に丸く終るか、直に終っている。握部の棒状部分は断面円形や楕円形を呈し、その直径は、平均 2.9× 2.3cm（W 057～060の平均値）となる。ほぼまっすぐにのびるもの（W 059・059・060）や、彎曲するもの（W 058）がある。おそらく着柄鋤の柄と考えてさしつかえないと思われる。他の柄状木製品も下端部が欠損しているが、頭頂部を作っており、殆どが柾目材を使用し、表面の加工の丁寧なものが多い。心持材は柾目材に比べると強じん性がなく折れ易いので、柾目材を意識的に利用して柄を作り上げている。樹種はヒノキ９点、カシ２点、シイノキ３点、サカキ２点、スギ２点、ムクロジ１点、コウヤマキ１点となる。やはり打ち割った際に比較的まっすぐに割れるヒノキが数多く使用されている。

直径 3.5～３cm内外のものは、鋤や鍬、そして櫂などの柄と考えてよいのではないだろうか。それより細いものはまた何らかの形で柄状のものとして使用されたと考える。

第7表　柄状木製品観察表

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区 層　位	法　量 長×最大幅×最大厚	樹種	断面形	特　徴
W057	図版95	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層下部	66.3×2.6×2.3	ヒノキ 柾目材	楕円形	完形品。頭頂部は丸く終り、基部は片面を削って斜めの平坦面をつくる。着柄鋤の柄と考える。
W058	図版95	8Aトレンチ 流水堆積Ⅳ	64.0×2.5×2.4	カシ 柾目材	円形	完形品。頭頂部は直に終っており、基部は片面を削って平らな斜面をつくる。側面からみて彎曲している。着柄鋤の柄と考える。
W059	図版95	9Aトレンチ 流水堆積Ⅱ	53.3×3.6×1.6	ヒノキ 柾目材	片面が浅い楕円形	頭頂部欠損。基部は片面を削り、斜め方向の平らな面をつくる。一部焼けている。着柄鋤の柄と考える。
W060	図版95	1Aトレンチ 南側その他	98×2.8×2.8 上部径3.2×2.4	サカキ 柾目材	六角形～八角形上部隅丸方形	頭頂部中央部一部欠損。基部は片面を斜め方向に削り平らな面を作る。表面には粗い加工痕があり、面取りされている。着柄鋤の柄と考える。
W061	図版95	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 上　層	93×3.8×3.1	ムクロジ 柾目材	楕円形	下端部欠損。上方が太く下方が細くなる。上端面に切断痕あり。表面に加工痕がある。鍬や鋤などの柄になると考える。

W062	図版97	2Aトレンチ 木器群Ⅴ 上　層	62.7×3.3×2.2	シイノキ 柾目材	楕円形	基部欠損。頭頂部はやや細目になり直に終る。表面に加工痕あり。
W063	図版97	6Aトレンチ 木器群一括	42.9×3×2.7	ヒノキ 柾目材	楕円形	
W064	図版97	9Aトレンチ 木器南群K 3	31.8×2.3×1.8	コウヤマキ 柾目材	隅丸方形	基部欠損。頭頂部は尖頭状に作られる。表面は丁寧な加工が施される。
W065	図版97	6Aトレンチ 木器群一括	53.9×2.3×2.2	ヒノキ 柾目材	円形～ 隅丸方形	基部欠損、頭頂部は磨滅している。
W066	図版97	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層下部	23.8×3×1.8	カシ 柾目材	隅丸長方形	下端部は焼失、上端部は切断痕がみられる。
W142	図版98	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層下部	39.8×3×3	ヒノキ 柾目材	正円形	上端は欠損、下端部には加工痕がみられる。表面には加工が施される。
W143	図版98	9Aトレンチ 流水堆積Ⅱ	63×3.8×2.2	スギ 柾目材	扁平な 楕円形	下端部欠損、上端部は斜めに切断されている。 柄以外の木製品とも思われる。
W144	図版98	6Aトレンチ 木器群ⅩⅦ	45×2.8×2.1	サカキ 柾目材	片面が浅い楕円形	両端欠損。しかし一端が太く一端は細くなる。枝払いの他、加工が施される。柄以外の木製品とも考えられる。
		1Aトレンチ 木器群Ⅲ 下層下部	27×3.3×3	ヒノキ 柾目材	楕円形	一端は切断痕があり他方の端部は欠損、表面に加工が施される。
		5Aトレンチ 黒灰色粘微砂 互層	23.4×2.4×2.3	ヒノキ 柾目材	正円形	柄状木製品。一端は直に終り、他端部は欠損。表面の磨耗が著しい。
		6Aトレンチ 木器群一括	47.9×2.7×2.7	ヒノキ 柾目材	正円形	両端部とも切断痕からなる柄状木製品。粗い加工が施される。上端部は丸みをもつ。
		13・14Aトレンチ 流水堆積砂層 中位木器群Ⅴ	33.8×4.0×1.8	シイノキ 柾目材	かまぼこ形	柄状木製品。裏面は平らな面であり、両端部とも切断痕からなる。一方が細く他方にむかって徐々に太くなる。粗い加工が施される。櫂の柄とも考えられる。
		5Aトレンチ 黒灰色粘微 互層	21×1.8×1.7	ヒノキ 柾目材	正円形	細い棒状木製品。両端とも欠損。
		8Aトレンチ 淡黄灰色砂層	43×2.3×1.2	スギ 柾目材	隅丸正円形	断面三角形の細い棒状木製品。全体に磨耗が著しく、両端部は生きると思われるが不明。
		8Aトレンチ 淡黄灰色砂層	40×2.3×1.2 上端部径 2.4×1.6	ヒノキ 柾目材	楕円形 下方扁平 楕円形	柄状木製品。上端部には切断痕がみられる。下端は欠損。

＜枝付棒状組合せ木製品＞（第35～36図、図版99～101）（W 067・068）　2点出土。これは1Aトレンチ流水堆積木器群Ⅰ上層より同一面で対になって検出された。サカキ製の、細い枝が二又に分れた樹幹を軸とし、その上端部に枘を作り出し、そこに、ムクロジ製で、プロペラ形に作った板状木製品を直角にとりつける。プロペラ形板の中央には長方形の枘穴があり、軸の頂部の枘と組合わせて取りつけ、固定してしまう。プロペラ形板をとりつけたその上面にあたる枘の部分に小さな角孔があり、その角孔にヤマフジのつるを挿入して結んでしまい、さらにその角孔にプロペラ状板がはずれないようにムクロジで作った（W 068の方のクサビの樹種はヒノキである。）

クサビをうちこんで固定する。軸というか支柱にあたる部分は、サカキの幹を枝払いし、樹皮を剝いで丁寧な加工を施している。プロペラ形板は、ムクロジの柾目材を利用し、丁寧な加工を施しこのような形に仕上げている。プロペラ形板は、W 067は全長70.3㎝、最大幅7.8㎝、厚さ2.3㎝であり、W 068は全長77.7㎝、最大幅 7.9㎝、厚さ 2.2㎝である。軸にあたる棒状木製品はW 067は現長80.3㎝、直径3.9×3.7㎝、枝の部分は先端部で1.8×1.5㎝を測る。W 068は、現長59.1㎝、直径4.4×3.8㎝、枝の先端部直径２× 1.7㎝を測る。W 067では軸の下端部は欠損するが、部分的に残っている所をみると浅い切り込みが入っており、下方はひと回り細くなってのびるようである。下端部は杭先のように作られてはおらず、下に軸受けの様なものがあって、やはり回転して使用したものであろうか。類例は全く見当らず、用途不明である。この出土状況をみると二又に分れた樹枝は、プロペラ状板のすぐ下位までのび、その先端は斜めに切断されていた。現在は小さく割れて失われたが、プロペラ板にあいている小さな角孔につないだものであろうか。W 067とW 068は全く同じように作られているが、プロペラ板が左右反対にとりつけられている。即ちW 067は二又に分れた樹枝がプロペラ形板の幅広の部分の方をむいているが、W 068は、樹枝がプロペラ形板の幅狭の部分の方にむいている。意図的にそのように固定したものであるとすれば、２個一対として考えた方が妥当と思われる。

＜枝付有頭棒状木製品＞（第37～38図、図版102～103）（W069～074）　８点を数える。これは前述の枝付棒状組合せ木製品と同様に、二又に分れた細長い樹枝と樹幹とからなる木製品で、枝がのびていく方向とは逆の方に、握部をつくり出しており、樹幹に一部平坦面がある。略完形品が３点ある。

（W 069）は、上端部に二段に握部をつくりだしている。下端部は欠損、幹部分は両平面に平らな面をもち、断面は俵形を呈す。表面には手斧の加工痕がみられるが、側面に一部樹皮の残る部分もある。樹枝部分には細長いヤリガンナによる加工痕があり、その先端まで加工している。樹種はヤブツバキである。現長50㎝、幹部分直径3.5×2.6㎝、枝部分直径1.9×2.2㎝二又部分から枝先端まで約17.5㎝を測る。

（W 070）は、上端部に握部をつくりだし、下端部に枘穴を持ち、断面楕円形を呈する。上半部は右側を削り平坦面にしている。樹枝部分は長く、幹部分より下までのびる。樹種はサカキである。全長79.2㎝、直径4.4×3.0㎝、枝部分直径1.8×0.8㎝枝部分の長さは約41.5㎝を測る。枝払いが施され、全体に丁寧な加工が施されている。

（W 071）は、幹部分は正面に平らな面をもち、断面は楕円形になる。下端部は段状に作られている。樹種はサカキである。現長62.5㎝、直径4.5㎝×3.5㎝、枝部分直径1.9×1.7㎝、枝の長さは約28.5㎝を測る。この他に、このような形態になる木製品は、握部をつくり出した幹の上半部になるもの（W 072～074）４点、二又部分だけのもの１点が出土している。５点の樹種は、サカキ３点、ユズリハ１点、不明１点となる。

同様の形態のものが、東大阪市瓜生堂遺跡、八尾市亀井遺跡においても検出されている。また、

静岡県伊場遺跡においても多数の二又を利用した木製品が検出され、背負子の枠木と考えておられるが、当遺跡出土のものは（W 069・071）位の大きさで、 平面部に平らな面を作っているものが、背負子と考えられないことはないが、検討を要することである。

これらの他にも多数の用途不明木製品が検出されたが主なものを列挙する。

第8表　用途不明木製品観察表 (1)

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区・ 層　位	法　量 長×最大巾×最大厚	樹　種	特　徴
W076	第 39 図 図版106	6Aトレンチ 木器群XⅡ	50.4×2.7×1.6 (抉り部 1.7×1.8)	カ シ 分 割 材	両側に長い抉り込み(長35cm)の入った棒状木製品。抉りの立ち上り部分に最大径があり、下方はまた除々に細くなる。
W077	第 39 図 図版104	3Aトレンチ 流水堆積 下層下部	22.6×3.0×2.9	ヤ ブ ツバキ 心持材	有頭棒状木製品。下端部をV字状に削り、その直上にV字状に削った面とは軸を異にして、はすかいの位置に抉り込みを入れる。握部が曲っており、抉り込みの方向と曲った方向と一致している。
W078	第 39 図 図版107	9Aトレンチ 流水堆積Ⅱ	13.9×5.3×2.7	ヒノキ	完形品。平面形は逆台形を呈し、下半部を細身につくる。丁度穴をふさぐ栓のような形である。
W079	第 39 図 図版104	Aトレンチ 筋　掘 暗灰青色微砂	11×1.4×2.2	ヒノキ 柾目材	全面にわたって面取りされている棒状木製品。ヤリガンナの加工痕であろう。両端には切断痕がみられる。再加工途上のもの。 断面楕円形。
W080	第 39 図 図版112	8Aトレンチ 淡黄灰色砂層	7.6×3.8×0.7	ヒノキ 柾目材	完形品、板状木製品。上下両端を一平面のみ斜方向に削っている。
W081	第 39 図 図版104	7Aトレンチ 流水堆積 土　層	9.6×2.8×2.4	ム ク ノ キ	略完形品。中央に柄穴のあいた棒状木製品。右端 2.2cmの部分を残して表面には漆と思われる黒色塗料がぬってあり、右端は他の用材に差し込まれた部分とみられる。組材の一部。両端は後に切断されている。
W082	図版104	Aトレンチ 筋　掘 暗灰青色微砂	21.8×4.5×3.0	シ イ ノ キ 心持材	端部を細身に削り握部をつくり、形態的には槌状を呈すが、右側には、樹皮が残る。
W083	第 40 図 図版106	11・12Aトレンチ 流水堆積Ⅰ 砂　層	100.5×3.4 ×2.5	ヒノキ 柾目材	上半部は角形、下端部は楕円形を呈す棒状木製品。上端部は削られて斜面をもつ。下端部は折れ欠損。
W084	第 40 図 図版105	7Aトレンチ 流水堆積Ⅰ 上　層	77.2×3.2×3	ヒノキ 心持材	弓状加工木。中央につくり出しのある棒状木製品。上端は裂けており、下端は焼失。上端部に削った面があり、形態的に弓状を呈すが部分的に樹皮が残ることや、中央部を浅く削ることは弓としては不適当と考えられ、機能的には別の用途を考え方が妥当である。 断面正円形。
W085	図版105	9Aトレンチ 木器北群	76.2×2×1.7	カ シ 樹 枝	一部に切込みのある棒状加工木。下端は切断されている。樹皮は剝がれている。
W086	図版106	9Aトレンチ 木器北群K 5	71.6+34.4× 2.3×0.9	モ ミ	非常に細長い木製品。上端部は有頭に作り出しており、断面半円形を呈す。下るにつれて断面は方形になっていき、下端部では1.9×1 1.7 cmの四角形になる。下端は切断されて直に終る。
W087	図版107	2Aトレンチ流水堆積 （2回目） 砂　層	14.3×3.6×4.0	ムクロ ジ 分 割材	脚状木製品。断面方形を呈す。
W088	図版107	9Aトレンチ 木器北群K10 暗青灰色微砂	53.5×3.4×1.3	ス ギ	組合せ用板状木製品。側面に2個1対になる小さな切込みがあり、紐かけ用の切込みであろうか。枘穴が並んでいる。
W089	図版107	9Aトレンチ 木器北群K 7 暗青灰色微砂	32.2×3.5×1.7	ヒノキ	組合せ用板状木製品。枘穴がいくつかあけられている。側面は加工されて斜めにのびている。

W090	図版	2Aトレンチ流水堆積（2回目）砂　層	41.4×2.8×0.9	ヒノキ	鞘状木製品。裏面中央が凹んでいる。
W091	図版	2Aトレンチ流水堆積(3回目)　暗青色粘土上面	23.3×2.4×2.0	ヒノキ	断面かまぼこ形を呈す木製品。 正面に浅い方形の彫りこみをつくる。

以上16点は用途不明木製品の中でも棒状形態のものや様々な形に作っているもの等である。他に板状木製品で用途不明のものが10点を数える。

第9表　用途不明木製品観察表 (2)

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区・層　位	法　量 長×最大幅×最大厚	樹　種	特　　徴
W092	第 41 図 図版109	3Aトレンチ流水堆積上層下部黒灰色粘微砂互層	35.5×9.5×2.0	コ ナ ラ ?	「ねずみ返し」状の板状木製品、中央部に大きなくり込みがある。(幅9cm、深さ5.5cm) 左端部焼失し、左側部も欠損している。
W093	第 41 図 図版110	1Aトレンチ木器群Ⅰ土　層	25.0×7.9×1.1	モ ミ 柾目材	小孔(3～1.5mm)列が10段並んだ板状木製品。上端は切断面よりなり、右側面は生きる。九段目と十段目は近接しておりその下にまた十一段目がみられる。正面は小孔間を横方向に糸を通した痕跡が残っており、右傾面の相対する位置にもその痕跡がある。裏面には糸の痕跡は全くなく、2枚の板をあわせて糸でとじたものと考える。
W094	第 41 図 図版111	5Aトレンチ黒灰色粘微互層	45.3×15.2×1.8	モ ミ 柾目材	端部近くに円孔があり、その両側に抉りが入った板状木製品。1側辺はまっすぐにのび丸い面を呈し、もう一方の側辺は裾広がりに斜め方向にのび平らな面になる。 円孔には紐ずれによる磨滅がみられる。
W095	第 41 図 図版110	13・14Aトレンチ流水堆積（3回目）砂　層 青黒粘微砂層	39×18.3×3.0	ク ス ノ キ 柾目材	下端は欠損。上端面が丸くカーブした、厚みのある板状木製品。一平面中央に「八」を逆にした彫り込みがある。
W096	第 41 図 図版109	7Aトレンチ流水堆積Ⅰ上　層	52.9×6.7×2.4	ス ギ 柾目材	柄穴のある板状木製品。平面形、扁平な家形につくられる。下側辺沿いに2個、肩部に1個計3個の小さな枘穴がある。
W097	第 41 図 図版111	8Aトレンチ流水堆積Ⅳ	35.8×9.5×1.4	モ ミ 柾目材	二つに割れており、その2枚の板の対になった柄穴をサクラの樹皮で巻いて補修した板状木製品。端部近くに1個。もう一方の割れている部分に1個の枘穴がある。(サクラ樹皮幅1.05～1.3cm)
W098	第 42 図 図版112	Aトレンチ 黒色粘質土層	32.5×22×2.4 柄　6.5×5.0	板　ク ス ノ キ 板目材 柄 ニ レ 心持材	梶状木製品。三角形状の板を丸木を2つに裂いてその間にはさみ込んで使用している。丸木の割り方は不均等だが、板に面した裂いた面には加工を施して調整している。上半部は割れた面がぴったり合うが、下端部は2つに分れる。板状木製品の方は、背面を1平面のみ斜めに加工している。下面は直に終る。もう1辺は焼けている。板の挟み込まれた部分は押しつけられた痕跡が残る、厚みのある板である。柄状木製品の上質木製品の上端は欠損。
W099	第 42 図 図版108	11・12Aトレンチ流水堆積	29.9×21.5×2.4	モ ミ 柾目材	台形を呈し、その上端部に柄をもった厚みのある板状木製品。下端は両面から削られV字状を呈す。 手斧痕が明瞭に残る。
W100	図版109	Aトレンチ 青灰微砂	39.5×8.5×2.0	ク ス ノ キ	柄穴のある板状木製品。斜めに割れている上側辺は、右方は丸い面で左方にいくにつれて平面に近くなる。左辺は断面がV字状につくられる。厚みがある。
W101	図版110	9A 南側 淡灰褐色細砂	18×7.5×1.2	サクラ	線刻文様のある板状木製品の部分。側面は丸い面を呈す。裏面には丁寧な手斧の加工痕がある。

Ⅷ　建築材

建築材には、はしご、柱材、板状、角材、杭材、井戸枠などが含まれる。

<はしご>　(第43図、図版113)　(W 102)　1点を数える。現長 109.8cm、幅19.3cm、厚さ9cmを測る。四段の踏み台部をつくる。上端部は欠損。踏み台部は16.5cm～18cm間隔で、踏み面の

厚さは約6.5cmになる。板状部分は約2.5～3cmの厚さを測る。樹種はサカキで、心持材を利用しており、全体に腐蝕が著しく、スポンジ状になっている。

<柱材>（第43～45図、図版113～116）（W103～118）　15点を数える。柱材を細分すれば次の様になる。

柱　材
- 柱（段なし、段あり）
- 受け柱
- 組み柱（作り出しなし、有頭、有頭抉入、抉入、有頭段あり、有頭抉入段あり）

大きく、柱、受け柱、組み柱に分けられ、柱は、下端部に段をもたないものと有段のものに細分でき、組み柱は、6種類に細分することができる。

（柱）（図版113～115）（W109、W112）　2点出土。（W 109）は現長 215cm、直径10.4×9.7cmを測り、断面は正円形に近い。上端部に加工が施され、先端から15.3cmの部分を一まわり細く作り出している。樹皮は剝がれており、表面には加工痕がみられる。樹種はシイノキで、心持材をそのまま利用している。下端部に段を作り出している柱材（W 112）は現長67.4cm、直径7.4×6.2cmを測る。下端面は切断面であり、上端は焼けている。樹皮が部分的に残っている。樹種はシイノキで心持材を利用。

（受け柱）（第44図、図版114）（W105・106）　2点を数える。（W 105）は完形品で、全長97cm、直径5.6×5.5cmを測り、断面正円形を呈す。樹種はヤマグワの心持材を使い、その二又に分れた部分を利用し、枝を切断し、二又部分の内側にわずかに加工を施して受部をつくり出している。下端部は尖らせている。（W 106）は受部だけ残り、下端部は火を受けて炭化している。これも二又に分れた部分の内側に加工を施している。樹幹は内側半分を切断して受部を広くつくり、樹枝の上面を削って調整している。樹枝の方に部分的に樹皮が残っている。樹種はコナラの心持材である。現長21cm、幅24.5cm、受部左側部分は長径9.5×短径5.5cm、右側部分は長径4.5×短径4.0cmを測る。幹の太さが10cm内外のかなり太い受け柱になりそうである。

（組み柱）（第43～45図、図版114～116）（W103・104、110～118）　11点を数える。組み柱は直径平均4.4×3.7cmと比較的細い柱になる。その上端部に握部を作り出したもの（有頭組み柱）3点（W 110・111・113）や、握部の直下に抉りの入るもの（有頭抉り入り組み柱）1点（W 103）、また抉りが基部に入るもの（抉り入り組み柱①）3点（W 104・115・116）、抉りが上端部に入るもの（抉り入り組み柱②）1点（W 114）、上端部に握部を作り出し、基部に段をつくるもの（有頭有段組み柱）1点（9Aトレンチ木器北群出土の組み柱で、W 117と殆ど同じ形態である。）、上端部に握部をつくり、その直下に抉りが入り、基部には段をつくるもの（有頭有段抉り入り組み柱）1点（W 117）、作り出しのないもの1点（W 118）等である。樹種は、シイノキが6点と圧倒的に多く、他にサカキ2点、サクラ1点、シャシャンボ1点、カキノキ1点で、その心持材を利用している。このようないろいろな組み柱は、その必要とする部材として組合されて使われたものであろう。どのような所に、どのような柱を利用するのかは今後の課題である。ただ、

上端部に抉りの入っている（W 114）は、静岡県韮山町山木遺跡出土の建築用材の中で横架材とされているものとよく似ている。それは自然木そのままの曲材の両端に渡り腮の仕口に加工したもので、床又は小屋組の桁或いは梁のいずれかに利用されたとするものである。（W 114）は下端部が欠損して本来の長さは不明であるが、このような横架材と考えてさしつかえないと思われる。

<杭　材>（第45図、図版122～124）（W 119・146～171）　25点を数える。（自然木の下端部を鋭く作り出す）丸杭と角杭とに大別出来る。角杭は２点のみで他は全て丸杭である。丸杭は自然木の下端部を削ったものである。杭の長さは、完形品からみると全長 103㎝、95.7㎝になる。短い杭の図版 124 の中の大半は上端部が欠損したものだが、上端部に切断痕があるのはW 161で現長36.5㎝を測る。この一点から結論を出すのは危険だが、大体の目安として、短くとも長さ40㎝位は作られたとみられる。完形品からみると、長いものは１ｍを超すものもあり（Ｃトレンチ流水堆積より全長 148㎝の杭が出土）、40㎝位から１ｍを超えるものまで、必要に応じて作られたといえる。直径平均約 4.6×４㎝の太さになる。W 119は上端部が二又に分れた杭である。自然木の二又部分を利用している。樹種はわかっているものだけで16種あり、ヤブツバキ３点、カシ３点、シキミ・シイノキが２点ずつ、スギ２点（角材２点分）、他にヤナギ、クヌギ、サカキ、ケヤキ、マツ、エゴノキ、モミ、モッコク、タブノキ、シャシャンボ、カキノキなどである。これは杭の用材として余り選択されることはなかったことを示す。（個別の記述は後の一覧表参照のこと。）

<建築用板材>（第40・44図、図版118～120）（W107・108・W128～134）

板状木製品として、それ自ら使用に耐えるというものではなく、何らかの部材として組合せて使われたであろう角材や板材の一群を分類した。９点を数える。

枘穴のある角材（W 107）は現長32.8㎝、幅3.2㎝、厚さ2.8㎝を測る。正面上端部に木釘の打ち込んである枘穴があり、中にはその枘穴と組合わされていた他の部材の枘部分と思われる木片が埋め込まれており、そこに木釘が通っている。その下に、上の枘穴と直交する位置に、平面に直角にではなく斜め方向に枘穴を作っている。側面が丸みをもつ角材である。もう一方の側面は割れて凹面を呈しており、正面からこの側面に向けて木釘が斜めに打ち込んであるが、これは縦方向に割れた部材をつなぐために打ったものと考えられる。樹種はケヤキで板目材の縦木取りである。枘穴のある板材はこの他にも４点出土しており、幅狭い細長い板材になる。（W 108・129・130・131）

この他に円孔のある幅狭な細長い板材（W 128）がある。これは全長83.4㎝、幅 7.3㎝、厚さ1.5㎝を測る。 下端部が一番幅広で徐々に幅狭くなり、断面台形状を呈す。下端部に一対、中央部に一対の円孔がある。上端部の欠損部にも円孔がある。樹種はスギの柾目板である。（W 133・134）はほぼ同じ大きさの細長い板材で、（W 133）は現長56.3㎝、幅 7.8㎝、厚さ 1.4㎝で上端は切断面よりなり、両平面、両側面とも加工痕が残る。樹種はコウヤマキの柾目材である。（W 134）は現長53.5㎝、幅 7.7㎝、厚さ 2.1㎝を測り、上端面は切断痕があり、両側面は打ち割り面

のまま、両平面は加工痕が残る。樹種はスギの板目材を利用している。

（W 132）は現長47.5cm、幅14.8cm、厚さ 3.4cmを測る。下端面は切断痕からなり、両平面には手斧の加工痕がある。二葉マツの中心材を利用している。側面は割れており、もっと幅広い板材になると思われる。

以上の9点を建築用材として考察した。

第10表 建 築 用 板 材 観 察 表

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区・ 層　　位	法　量 長×最大巾×最大厚	樹 種	特　　徴
W108	第 40 図 図版120	Aトレンチ 青灰色微砂	71.1×5.0×2.6	ヒノキ 柾目材	上端部と下端部に枘穴があるが、柄穴の軸はそろわない。断面隅丸の扁平な矩形になる。
W129	図版119	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 土　層	66.5×12×1.5	ヒノキ	上端から10.5cmの所に両面から穿孔した枘穴がある。穿孔の際の刃跡がみられる。1側辺には紐かけ状の浅い抉りがおよそ等間隔に6ケ所にある。
W130	図版119	2Aトレンチ 流水堆積3回目 暗青色粘土上面	19.9×11.5×2.7	シ イ ノ キ	上端部のみ残存。両面から加工を施して作った横長の柄穴あり。全面に加工が残る。
W131	図版119	Aトレンチ 筋　掘	80.7×9.7×2.5	ス ギ 柾目材	上面部に小さな柄穴、下端部に縦長の柄穴がある。下端面はV字状につくる。

Ⅸ　板材・加工材　（第46図、図版98～117・118・121）（W120～127、135～141、145）

板材・加工材の中には、加工途上の板材や角材等が含まれる。但し、これは板状木製品・建築用板材・加工途上のものの区別がつきにくく、どこで線をひくか非常に迷う一群である。それらのものが混在していると思われる。

第11表 板 材 ・ 加 工 材 観 察 表

木器番号	挿図番号 図版番号	出土地区・ 層　　位	法　量 長×最大巾×最大厚	樹 種	特　　徴
W120	第 46 図 図版117	Aトレンチ 灰色砂下層 青灰微砂互層	43×22×2	ス ギ 板目材	幅広い板材。両面に手行の加工痕が明瞭に残る。
W121	第 46 図 図版117	Aトレンチ 青黒粘と青 色微砂互層	46.5×21×3	ヒノキ 柾目材	幅広い板材。
W122	第 46 図 図版117	15・16Aト レンチ 流水堆積砂層	22.3×12.0×2.6	ヒノキ 柾目材	上下両端は切断される。両平面・両側面とも手斧の加工痕が明瞭に残る。1側面に抉り込みがある。
W123	第 46 図 図版118	2Aトレンチ 流水堆積2 回目砂層	29.3×17×1.9	ク ス ノ キ 間縁材	加工材。裏面は樹皮近くであり、その痕跡が残る。上方に節のあとが2ヶ所あり、そのためか上半部に厚みがある。
W125	図版118	1Aトレンチ 木器群Ⅰ 上　層	29.5×18.5×1.1	ヒノキ 柾目材	薄い板状木製品。小さな角孔と円孔がある。
W126	図版118	Aトレンチ 青黒色粘土 の下層青黒 色粘微砂	20.8×29.4×1.1	ヒノキ 柾目材	ヤリガンナ痕の残る板材。裏面は焼けている。
W124	図版117	9Aトレンチ 流水堆積Ⅱ	36.8×14.8×2.5	カ シ	台として利用したものであろうか、手斧か何かの刃痕の顕著な板材。

W127	図版118	1Aトレンチ 暗灰色粘質微砂上面	17×1.9×1.9	ヒノキ 柾目材	上下両端を斜めに面取りしている板材の一部。木目に沿って、たてに割れている。平面、側面とも手斧の加工痕が明瞭。
W135	図版121	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層下部	63.5×6.2×1.5	ヒノキ 目材	細長い板材。建築用部材？
W136	図版121	13・14Aトレンチ 木器群Ⅲ①	50.1×7.5×3.7	モミ 柾目材	角材。上端部に柄をつくる。
W137	図版121	6Aトレンチ 黒灰色粘微砂層	38×7.8×3.5	ヒノキ 柾目材	角材。断面台形を呈す。上下面端は平面を直交する面と、平面との角が面取りされた面とからなる。切断痕が明瞭である。
W138	図版121	1Aトレンチ 木器群Ⅱ 下層上部	32.8×5.7×2	ヒノキ 板目材	角板材。上半部に厚みがあり、下半部は薄くなる。上半部断面はカマボコ形を呈し、下半部は扁平な台形になる。上下両端は、斜面に加工される。
W139	図版121	Aトレンチ 暗灰青色微砂	34.0×5×2.8	ヒノキ	加工材。裏面は打ち割ったままの面で、正面は加工痕あり、断面は五角形を呈する。縦方向に割れている。
W140	図版121	Aトレンチ 第2層	43.6×6.6×3.0	ヒノキ	加工材。断面台形を呈する。
W141	図版121	Aトレンチ 第2層	41.8×5.4×2.2	ヒノキ	加工材。裏面は平らな面で、断面は扁平な五角形。
W145	図版98	9Aトレンチ 流水堆積Ⅱ	10.1×2.8×3.2	ヒノキ 柾目材	丸い柄状木製品の一部。表面は丸く加工されており、両端を切断している。切断の仕方のよくわかる資料である。

以上16点の加工板・板材を観察すると、樹種はヒノキを利用しているものが圧倒的に多く、板目材の割合も増えている。

加工痕として、手斧痕とヤリガンナ痕がよく残っておりW120・W121、また棒や丸木などを切断する場合、周囲から手斧を何回も打ち込んで切ることがよくわかる（W 145）。

弥生時代後期において、当遺跡は河内湖河口に位置し、河内湖に流れこむ河川の流路にあたっており、当時の様々な植物製品が流されて集積したといって良い。特にAトレンチにおける夥しい数量の木製品、加工木、自然木はそれを物語るものである。

農具の中では鍬よりも数多く出土した鋤類・田舟等の存在は、当遺跡では低湿地農耕を物語り、鎌形木製品はそのような稲作の中における刈取具を示すものと考える。また櫂やアカカキ、舟形模造品等の存在は、舟による運行が盛んに行われていたことを示すものであろう。　（石神）

＜付＞弥生時代における舟形木製品

久保寿一郎

西岩田遺跡において、弥生時代中期から後期に至る漸移層の上面から、精巧に作られた舟形木製品が出土した。弥生時代における舟形木製品は現在10数例が報告されている。それらを集成し、形態的特徴をまとめ、用途について考えてみたい。

我国においてすでに縄文時代から船が使われていたことは、千葉県加茂遺跡をはじめ各地から(註1)出土した数々の独木船(註2)（刳船）によって明らかであるが、続く弥生時代になると出土例はわずか3例に過ぎない(註3)。弥生時代と言えば、大陸との往来が盛んになり、さらに鉄器の使用による造船技術の発達に伴い用途に応じた様々な船が造られたと考えられるが、実際の出土例に乏しいため構造その他については充分な検討が成されていないのが実情である。

弥生時代の船に関する資料を補うものとして、福井県春江町出土の船が描かれた銅鐸等と共に、舟形木製品があげられる。弥生時代の舟形木製品は、むしろ実用の船よりも出土例が多い。

現在報告されている舟形木製品を管見内で集成したものが表１である。

ところで、我国の古代の船については、西村真次・清水潤三・石井謙治・安井良三諸氏の研究があり、諸先学によって独木船の形式は４つに分類されている（図１）。この４分類は、実用の船に対しての形式分類であるが、舟形木製品の形態にも適用し参考とした。個々の出土例の寸法や形態については表示した通りである。以下、各遺跡ごとに特徴を記していくこととする。

静岡県登呂遺跡出土(註4)の２点は、報告書では容器として分類されているが、独木船の模型と考えられている。Ⅰ（図①）は、両端からそれぞれ 3.6cm、 1.8cmを平坦部として残し、内部を浅く削っており、舳艫の区別が明確である。また、平底で舷側は底部に対し垂直に立ち上がる。Ⅱ（図②）は、一端より 1.5cmを残して内部を削っており、他端は欠損している。形状はⅠ、より細身で横断面はＶ字を成す。これらは他の多くの木器群とともに集落内の低窪地から発見された。

同山木遺跡からは、１次調査(註5)で１点（Ⅰ）、２次調査(註6)で３点（Ⅱ～Ⅳ）計４点が検出されている。Ⅰ（図③）は、長さ13.0cm、幅5.0cm、深さ1.0cmに内部を削っているが、削り方が浅く粗い

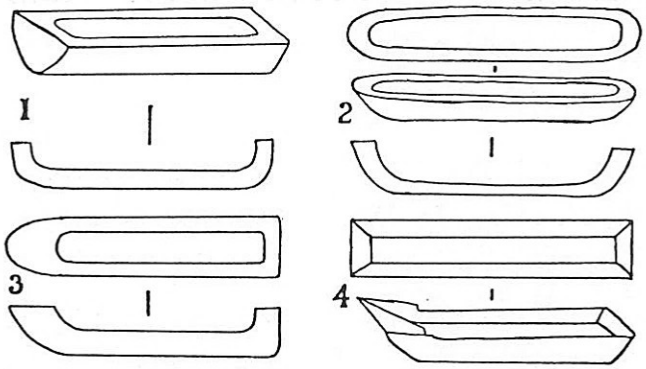


図1　独木舟の形式分類

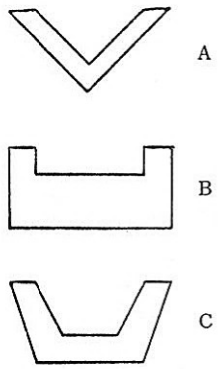


図2　舟形木製品断面模式図

表1　舟形木製品一覧表

	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	材質	型	時期	断面	備考	図
静岡県登呂 Ⅰ	23.5	5.4	2.5		独木船	後期前半	B	容器か？	①
Ⅱ	(21.5)	3.6	1.9		〃	〃	A	〃　一部欠損	②
静岡県山木 Ⅰ	30.0	6.2	3.8	スギ	構造船	後期		未製品か？	③
Ⅱ	40.6	4.2	2.7		独木船	〃	B		④
Ⅲ	40.0cm 内外					〃			
Ⅳ						〃			
静岡県洞	75.0	7.6	4.4		独木船				⑤
新潟県千草	(54.0)	7.5	3.5	スギ	〃	後期後半	C	一端欠損	⑥
大阪府船橋	39.5	4.0	3.5	ヒノキ					
大阪府池上 Ⅰ	17.5	7.0	2.5			後期	C	底部欠損	⑦
Ⅱ	(16.0)	9.0	7.0			中期		断片	
和歌山県笠嶋	31.5	7.2	3.8	ヒノキ	構造船	後期末	C		⑧
奈良県唐古	64.6	16.1	9.2				C	把手有	⑨
滋賀県長命寺	33.0	7.0				後期		〃	
西岩田	68.1			ヒノキ	構造船	後期末			⑩

ため未製品とも考えられる。しかし外形は精巧で、舳艫の区別が明確である。特に舳部が強調されており、構造船を模したものと考えられる。本例は、集落付近の窪地から出土した。2次調査で検出された3点のうちⅡは、両端をそれぞれ8.0cm、9.5cm程平らに残して内部を浅く削っている。報告書によると、舳部を尖らせ、外底は舳に向って高く作り上げており、精巧なものと言える。船底は厚く、舷側は垂直に立ち上がる。本例は、現洞川の東端より出土した。

新潟県千種遺跡(註7)の出土例（図④）は、一端を欠損しているが、ほぼ完形に近いものである。舳部と考えられる現存端は、約 6.0cmを平坦部として残し、先端部より5.0cmの所に深さ1.0cmの小孔が垂直に穿たれている。形状は独木船で、残存状態から舳艫の区別が明確であったと思われる。本例は、手網枠、櫂等とともに木器群を成して検出された。

大阪府船橋遺跡(註8)から出土した舟形木製品は、今回、西岩田遺跡で検出された例と似た形態を成している。両端をそれぞれ、2.0cm、6.0cm平らに残して中央に向って深くなるように内部を削っており、両端は、やや上方に反って緩やかな曲線を示している。また幅は中央部で 4.0cm、両端部で3.5cmである。本例は旧河川内（現河内橋の下流）より出土した。

同池上遺跡(註9)には、容器として分類されたものに舟形をしたものが2点ある。Ⅰ（図⑤）は、小形で底を欠いており、一端の口縁部付近の両側に小孔がある。長さに対し中央幅が大きい。Ⅱは一端を含む破片であるが、現存状態から考えて、比較的大きなものであったと推察できる。これ

らは、いずれも中〜後期の溝から出土した。同溝からはまた、鳥形木製品や男根状木製品など特殊な木製品も出土している。

和歌山県笠嶋遺跡(註10)出土の舟形木製品（図⑥）は、左右対称で、両端より 3.3cmを残し内部を深さ 2.3cmに削っている。両端とも極端に尖らせており、舳艫の区別は明らかでない。船底面は平らで最大幅 5.0cmである。構造船を模したものと考えられる。本遺跡からは、他にも船底材や櫂等船舶関係の木製品が多数出土している。

奈良県唐古遺跡(註11)からは特異な形態をした舟形木製品が出土している（図⑦）。長方形の板材を舟形に刳ったもので、一端を舳状に作り先端に長さ 7.0cm程の棒状把手を作り出している。また他端に向う程扁平になり、端近くに溝状の窪みを設け、その両端部に切り込みを作っている。この部分に別の付属部分があったと思われる。本例は唐古池の西南隅泥土中より出土したものである。

滋賀県長命寺湖底遺跡(註12)からも舳部に径 2.0cmの把手を作り出した舟形木製品が出土している。唐古遺跡の出土例より舟形に近いが、艫部の裏面を斜めに削り上げており、ほぼ同じ形態と言える。

静岡県洞遺跡については、報告書を見ることが出来なかったが、舟形木製品としては大型の部類に属するものが出土している（図⑧）。細身で舳艫の区別がなく、薄手に作られている。また、舳艫の平坦部が狭いのが特徴である。

以上、限られた資料ではあるが、弥生時代の舟形木製品は、後期から作られるようになり、洞千種・唐古の各遺跡出土のものを除いて、いずれも全長20.0cm前後〜40.0cm程と小形であることが共通している。これらは全て一木による独木船で鰹節型である。ほとんどが実用の独木船を模したものであるが、山木遺跡出土のⅠ笠嶋遺跡出土のものは、構造船の形態を示している。また舳艫を尖らせ、特に舳が強調されているものもあり、薄手で精巧な造りのものが多い。登呂遺跡、池上遺跡の出土例は容器状をしており、唐古遺跡、長命寺遺跡出土の把手付きの例とともに、舟形木製品の用途を考える手がかりになると考えられる。また、横断面の形態は、大別して３つに分けられる（図２）。

舟形木製品が出土した遺跡のうち、登呂・山木・笠嶋の各遺跡からは実用の船も出土している。登呂遺跡、山木遺跡出土のものは断面Ｖ字型の独木船、笠嶋遺跡のものは板張りの構造船である。また、山木遺跡出土のものには舷側上部に貫孔痕らしき窪みが２条有り、これは独木船の本体に別の側板を綴った孔の痕跡かと推測され、準構造船かとも考えられている。これらの船舶資料により、弥生時代には、縄文時代からの流れを受け継ぎながらも形態上進歩の見られる独木船と、構造船（準構造船）が存在していたことがわかる。今日の発掘調査が専ら集落跡を中心に行われ、集落外域の調査が少ないだけに、船の出土例は少ないが、千種・船橋・池上・長命寺の各遺跡では櫂も出土しており、船はこの時期普遍的に使用されていたことが推測できる。

さて、今回、舟形木製品の新資料として西岩田遺跡の出土例が加わる訳であるが、これは今ま

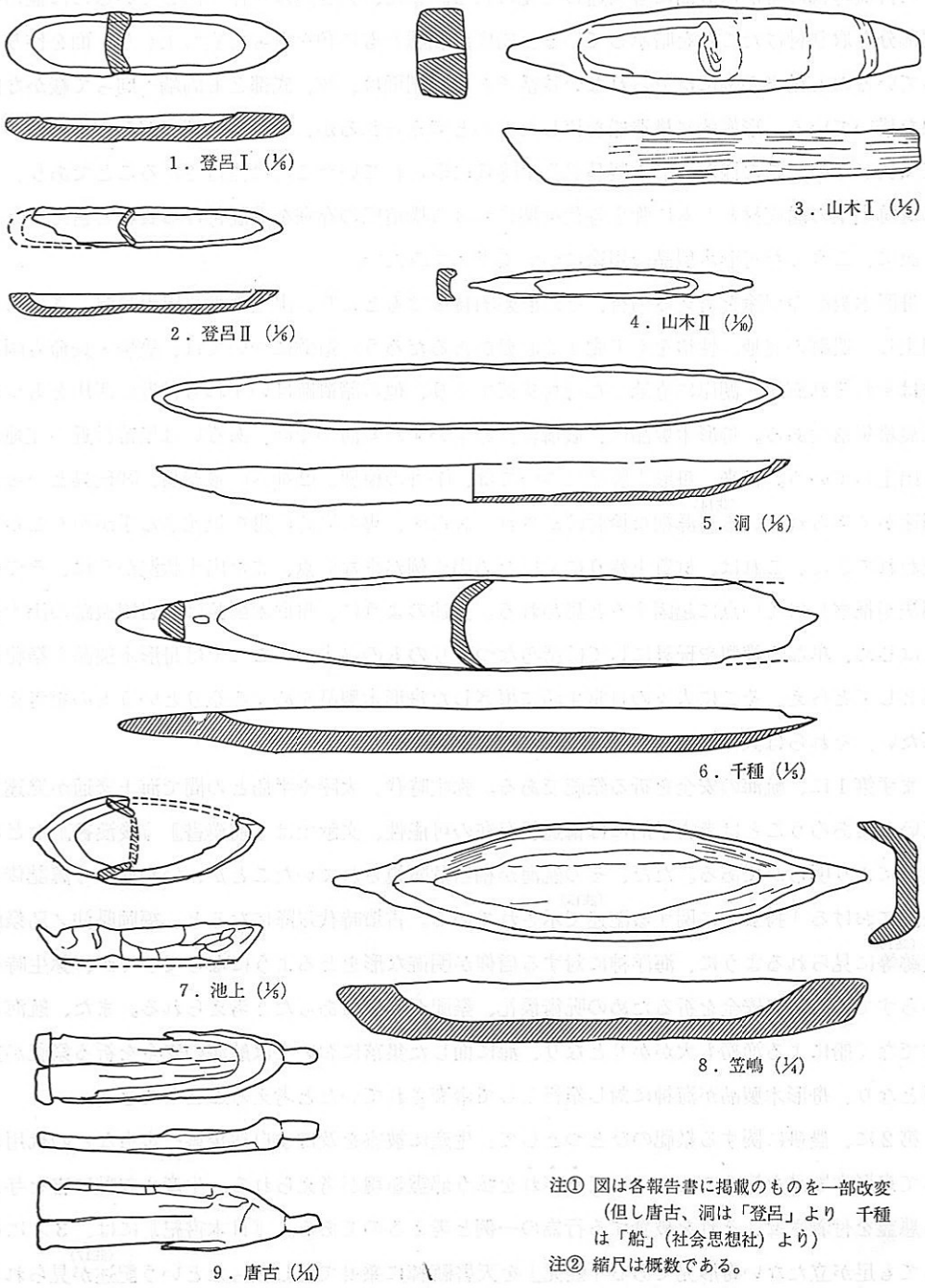
での出土例には見られない特徴を備えている（図４）。一木を刳り抜いたもので、形態は鰹節型であるが細身で船底は厚く、また底部幅に対し舷側が高いため安定感を欠く。舳部には、側面に径 0.5cmの小穴を穿孔しているが、これは池上遺跡出土のⅠ、さらに奈良県の纒向遺跡[註13]から出土した古墳時代の舟形木製品にも共通して見られる。また、欠き込みを作り出しているのは他の付属部分を取り付けたことを暗示している。船底は舳艫ともに角をもって立ち上がり、面を作り出しているのも従来の例には見られない特徴である。側面は、舷、底部とも両端へ向って緩かな曲線を描いている。形態的に構造船を模したものと考えられるが、これ程大型で精巧なものはかつて類例がない。この様な舟形木製品が弥生時代に造られていたことは注目されることであり、笠嶋遺跡出土の船底材とともに弥生時代後期における構造船の存在を確証付ける資料と言えよう。

次に、こうした舟形木製品の用途について考えてみたい。

舟形木製品の用途を考える場合、その形態的特徴はもとより、出土地点、出土状況、さらには出土した遺跡の立地、性格をも考慮する必要があるだろう。遺跡については、笠嶋・長命寺両遺跡はそれぞれ海岸、湖岸に立地した漁村集落であり、他の諸遺跡はいずれも付近に河川をもつ低地農耕集落である。舟形木製品は、遺構に伴わずいずれも河川や溝、あるいは集落付近の窪地から出土している。従来、舟形木製品については、(1)舟の模型、(2)神への奉賽品、(3)玩具といった用途が考えられているが[註14]詳細な検討はなされておらず、専ら当時の舟を復元する手がかりとして扱われてきた。これは、材質上残りにくいため出土例が少ない点、また出土状況からは、その使用法が推察しにくい点に起因すると思われる。先述のように、舟形木製品は西岩田遺跡の出土例をはじめ、単なる模型や玩具にしては精巧なつくりのものが多い。ここでは舟形木製品を祭祀用具としてとらえ、そこに人々の日常生活に根ざした舟形木製品をめぐる祭りというものを考えてみたい。それらは具体的に、どのようなものであったのだろうか。

まず第１に、航海の安全を祈る祭祀である。弥生時代、大陸や半島との間で海上交通が発達していたであろうことは考古学的には構造船存在の可能性、文献では『前漢書』『後漢書』などの史料により明らかである。ただ、その航海が相当危険視されていたことが、いわゆる『魏誌倭人伝』における「持衰」に関する記述で[註15]示されている。古墳時代以降になると、福岡県沖ノ島祭祀遺跡等[註16]に見られるように、海洋神に対する信仰が明確な形をとるようになってゆくが、弥生時代からすでに航海の安全を祈るための呪術儀礼、祭祀が必要であったと考えられる。また、航海だけでなく船による漁撈も大がかりとなり、海に面した集落においては航海の安全を祈る祭祀が重要となり、舟形木製品が海神に対し祭料として奉賽されていたと考えることもできる。

第２に、農耕に関する祭祀のひとつとして、生産に被害を及ぼす自然災害や害虫などの代用として舟形木製品を流すことによってけがれを払う邪霊鎮魂が考えられる。生産や収穫に害を与える悪霊を付着させ、それを破棄する行為の一例と考えるのである。『日本書紀』には、３才になっても足が立たない奇形児である「蛭児」を天磐櫲樟に乗せて流し去ったという記述が[註17]見られる。また、今日各地に見られる「虫送り」[註18]などの民俗事例は、この行為の継承された形と考えること



注① 図は各報告書に掲載のものを一部改変（但し唐古、洞は「登呂」より　千種は「船」（社会思想社）より）

注② 縮尺は概数である。

図3　舟形木製品類例模式図

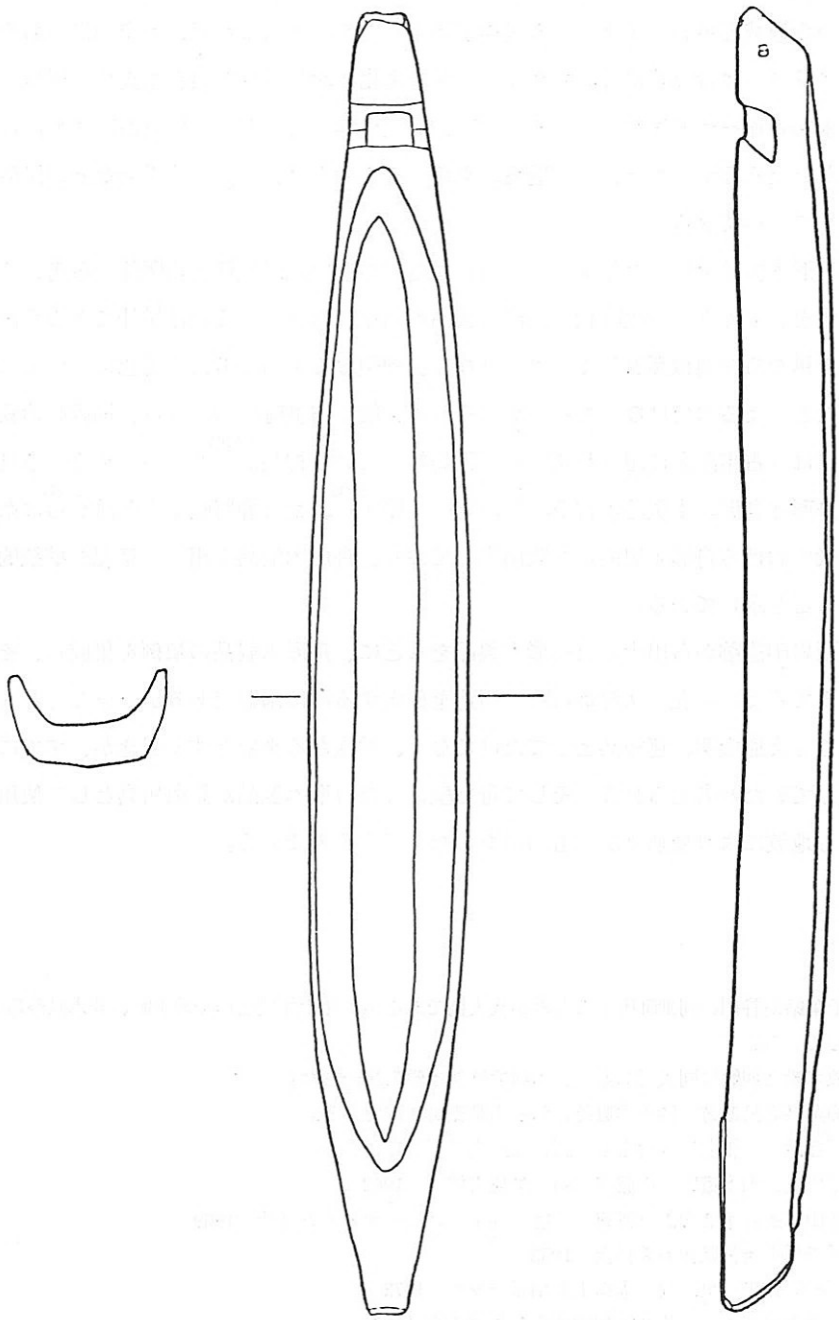


図４　西岩田遺跡出土舟形木製品模式図（1/3）

もできるのではないだろうか。

第3に、海上他界の観念と結びついた舟葬の一形態としての舟形木製品の使用である。死者の霊魂は小舟に乗って運ばれるという海上他界の観念や、死体を小舟に入れて流したり、舟棺を用いる舟葬は、東南アジアからオセアニアにかけての海洋民族の間に幅広く分布している。舟葬の一形態として、インドネシアには「霊魂の舟」の模型も多く、また、死者の舟の代用として小型の舟を用いる地域も多い。オランダの民族学者フロクラーへによれば、死者の舟、あるいは舟葬は、東南アジアでは青銅器時代にあたるドンソン文化、および後期旧石器文化に属していた。弥生時代、水稲耕作や漁撈民文化とともに舟葬、海上他界の観念も徐々に我が国にもたらされてきたのではないだろうか。また、舟を霊魂の乗物とする考えは、今日の精霊会などの民俗事例からもうかがうことができる。

以上、舟形木製品を用いた祭祀について、民俗例あるいは民族例との関係から考えてみた。これらの事例を、すぐさま弥生時代の舟形木製品の用途に結びつけるのは早計であろうが、少なくとも、舟を単なる交通機関としてだけではなく、神聖なる乗物と考える観念は、すでに弥生時代からあったと言えるのではないだろうか。それは、続く古墳時代における、福岡県珍敷塚古墳の例(註19)、さらには『古事記』に記されている「天鳥船」という神名から(註20)もうかがえる。奈良県纒向遺跡では、舟形と鳥形の木製品が古墳時代の同一土壙から(註21)、また静岡県伊場遺跡から(註22)は奈良時代から平安時代における舟形木製品が多数出土しており、舟形木製品を用いた祭祀が継続的に行なわれていたことを示している。

以上、西岩田遺跡から出土した舟形木製品をもとに、舟形木製品の類例を集成し、その用途について考えてみた。現在の状況からその用途を確定するのは困難であるが、少なくとも舟というものを単なる交通機関、運搬具としてだけでなく、神聖なる乗物とする観念が、すでに弥生時代から成立していたと考えられる。そして舟を型どった舟形木製品が祭祀用具として使用され、その祭祀にも地域により幾通りかのものがあったと考えるのである。

註1）千葉県高谷川、同畑町出土のものが代表例であるが、九十九里沿岸や埼玉県、茨木県からも多数出土している。

2）独木船と刳船は同義であるが、本項では独木船で統一した。

3）静岡県登呂遺跡、同山木遺跡、和歌山県笠嶋遺跡である。

4）『登呂　本編』日本考古学会編、東京堂出版　1978

5）『伊豆／山木遺跡』後藤守一編　築地書館刊　1962

6）『山木遺跡第2次調査概報』八幡一郎編　ニューサイサンス社　1969

7）『千種』新潟県教育委員会　1953

8）『柏原市史　第二巻　本編Ⅰ』柏原市役所　1973

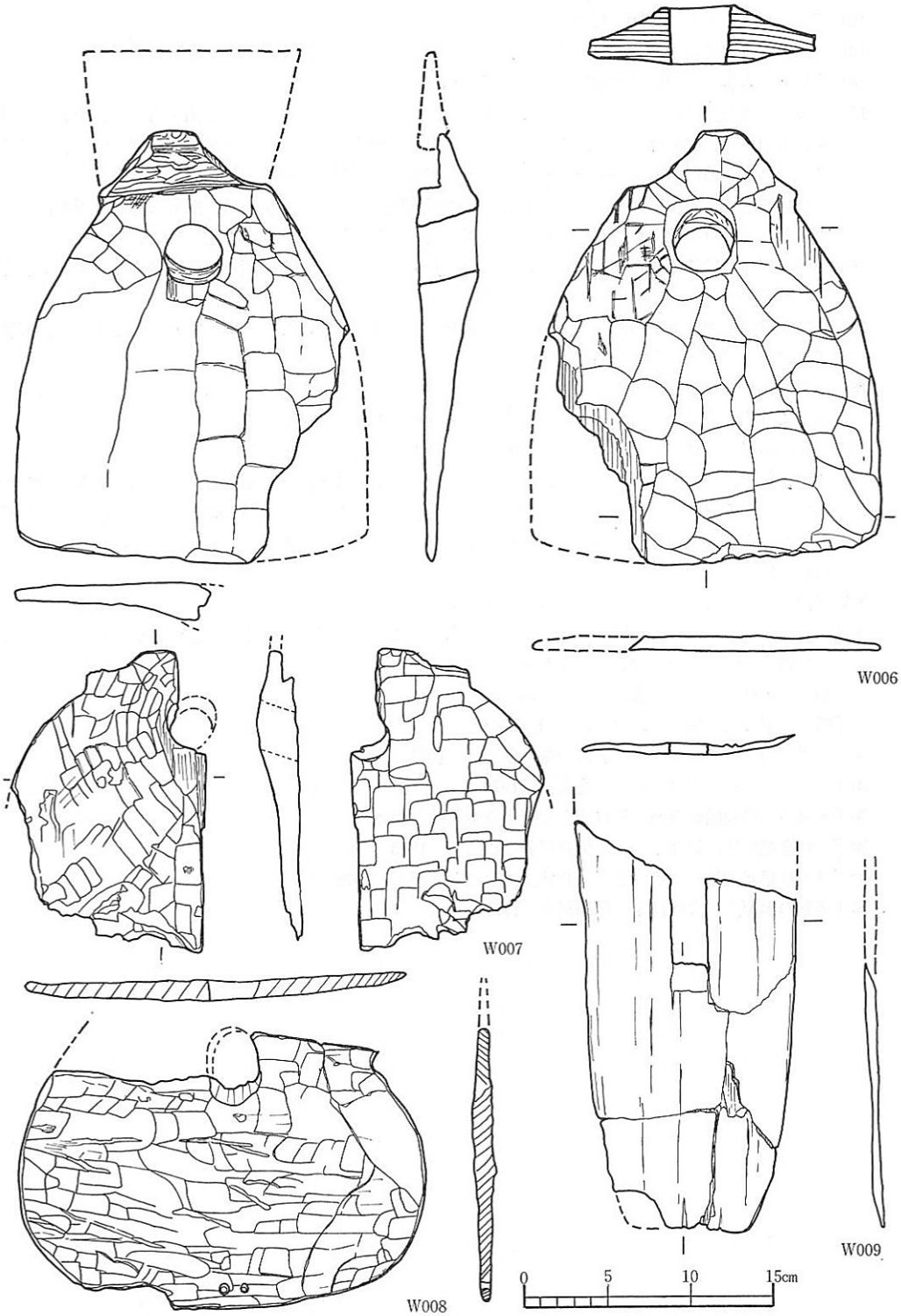
9）『池上・四ツ池』第2阪和国道内遺跡調査会　1970

10）『南紀串本笠嶋遺跡発掘調査報告』安井良三編　1969

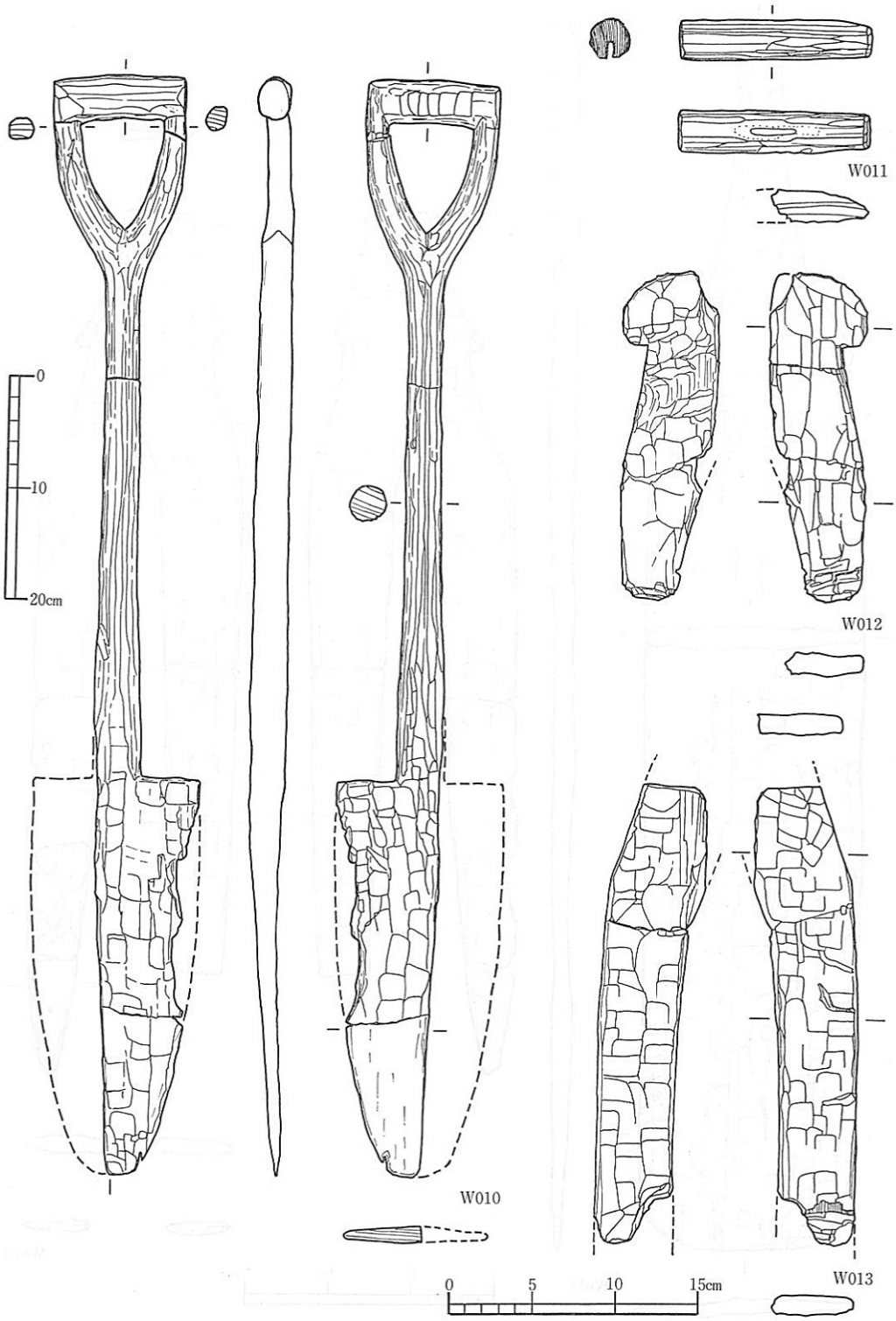
11）『大和唐古弥生式遺跡の研究』京大　1943
12）『サンケイ新聞』　1980．4．8
13）『纒向』橿原考古学研究所　1976
14）『登呂　本編』において後藤守一氏が提唱された。
15）『魏誌倭人伝』には、「其の行来・渡海・中国に詣るには、恒に一人をして頭を梳らず、蟣蝨を去らず、衣服垢汚、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。之を名ずけて持衰とす。若し行く者善なれば、共に其の生口・財物を顧し、若し疾病有り、暴害に遭えば、便ちえを殺さんと欲す。其の持衰謹まずと謂えばなり。」とあり、山上伊豆母氏によると、「持衰は、航海安全の成否を占うため生殺与奪の権を握られており、天候の良否を占う占巫であろう。」と推定されている。
16）福岡県玄海灘に位置する祭祀遺跡で、舟形の石製模造品や玉類、刀剣類その他数多くの祭祀遺物が発見されている。
17）『日本書紀』神代上第四段に「……次に蛭児を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫲樟に載せて、風の順に放ち棄つ」とある。
18）虫送り「作物などの害虫を除くため、村人が大勢で松明をともし鐘鼓を鳴らして村はずれまで送り出す行事（広辞苑　岩波書店）」で、わらで作った小舟を用いる例もある。
19）石室の奥壁に、ゴンドラ状の舟と、それに乗った人、鳥が描かれている。
20）この天鳥船について、松本信広氏は「鳥が霊魂を太陽または天に送り届けるという南洋に広く行なわれている鳥船信仰と関連をもったものであり、古代日本人もかつては鳥と船とを結びつけ、これを天空または太陽へと通うよすがと考える習俗をを有していたのではあるまいか」と考えられている。
21）注13）に同じ。
22）『伊場遺跡遺物編』　浜松市教育委員会　1978

本項を執筆するにあたり、参照した文献中、舟形木製品に関する報告書は註に示した通りであるが、古代船舶および古代祭祀については、次の文献を参照させていただいた。

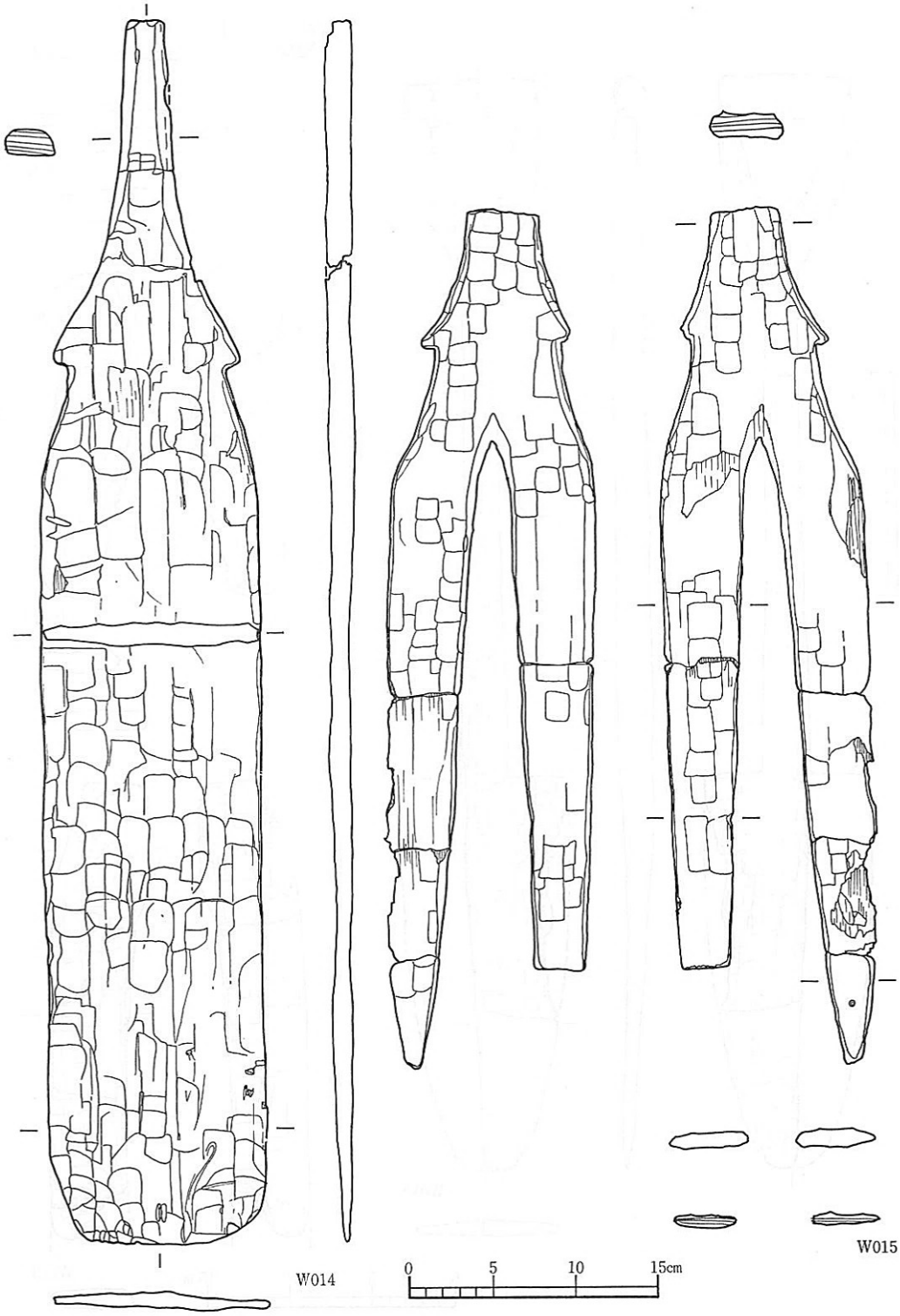
①『船』　大林太良編　社会思想社　1975
②『船』　須藤利一編　法政大学出版局　1968
③『三世紀の考古学（中）』　森浩一編　学生社　1981
④『ゼミナール古代史（上）』　光文社　1979
⑤『大阪市立博物館研究紀要第11冊』大阪市立博物館　1979
⑥『古代祭祀伝承の研究』　山上伊豆母著　雄山閣　1973
⑦『日本祭祀研究集成　第一巻』　倉林正次他　名著出版　1978
⑧『葬制の起源』　大林太良　角川選書　1977



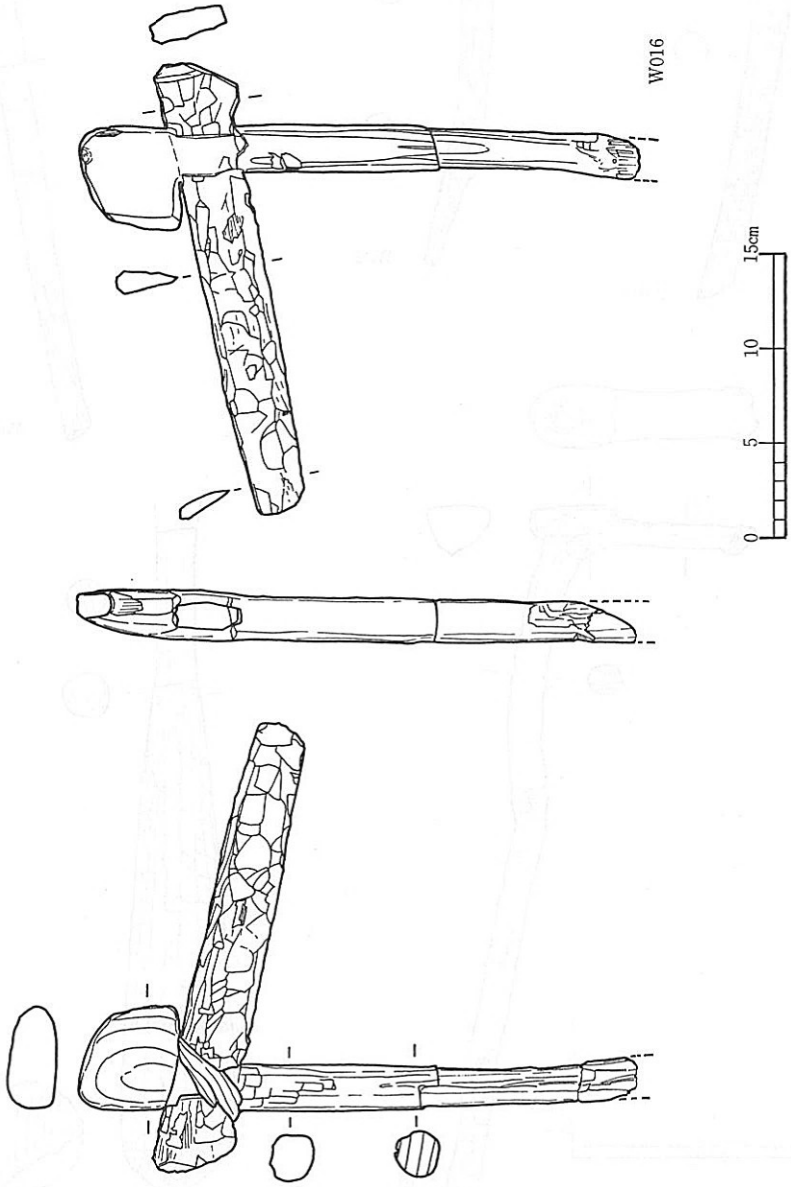
第25図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(2)（木器）
W６・W７広鍬（1/4）、W８丸鍬（1/4）、W９着柄鋤（1/4）



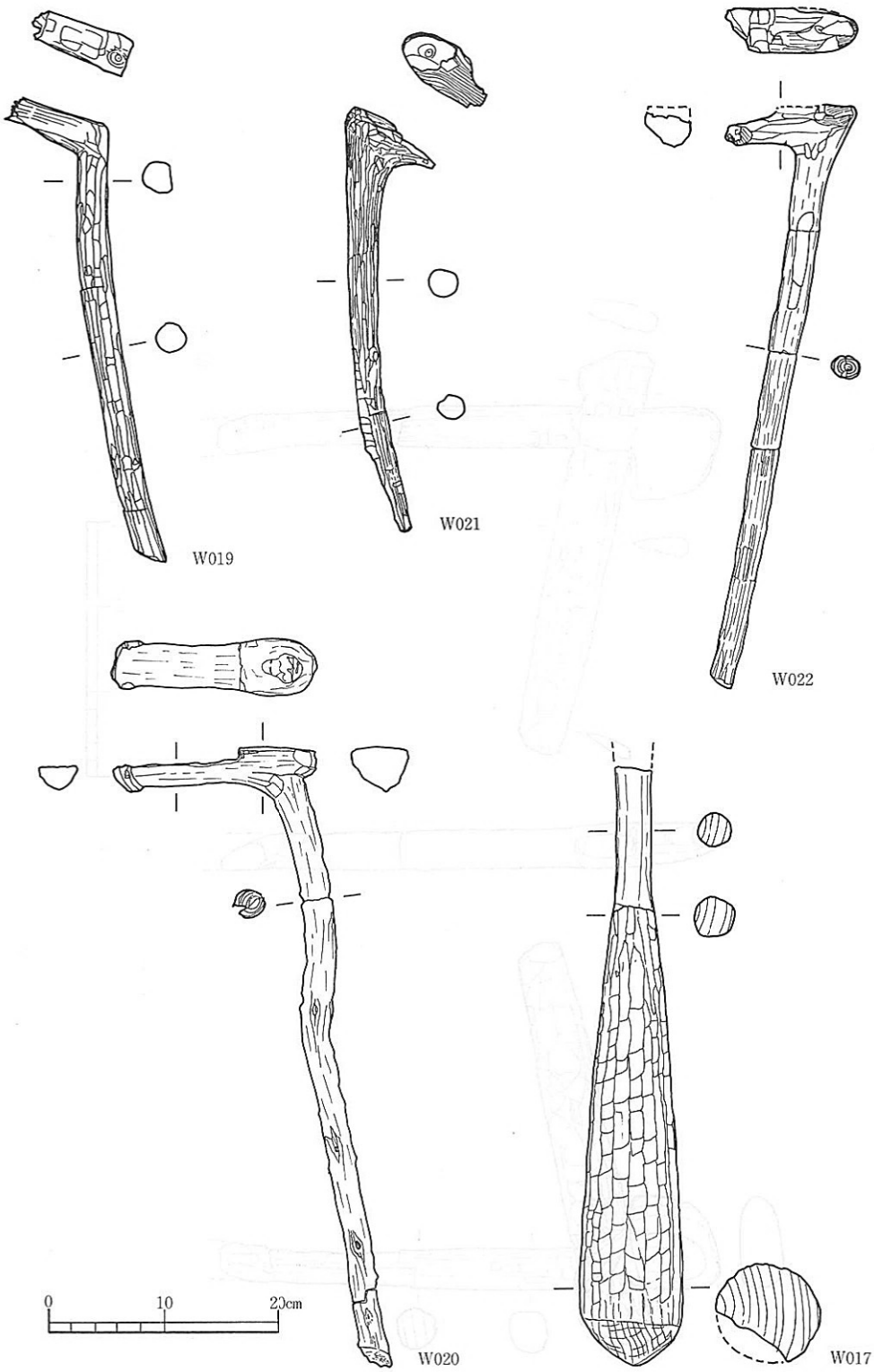
第26図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(3)
W10鋤（1/6）、W11柄把手部（1/4）、W12叉鋤（1/4）、W13なすび形鋤（1/4）



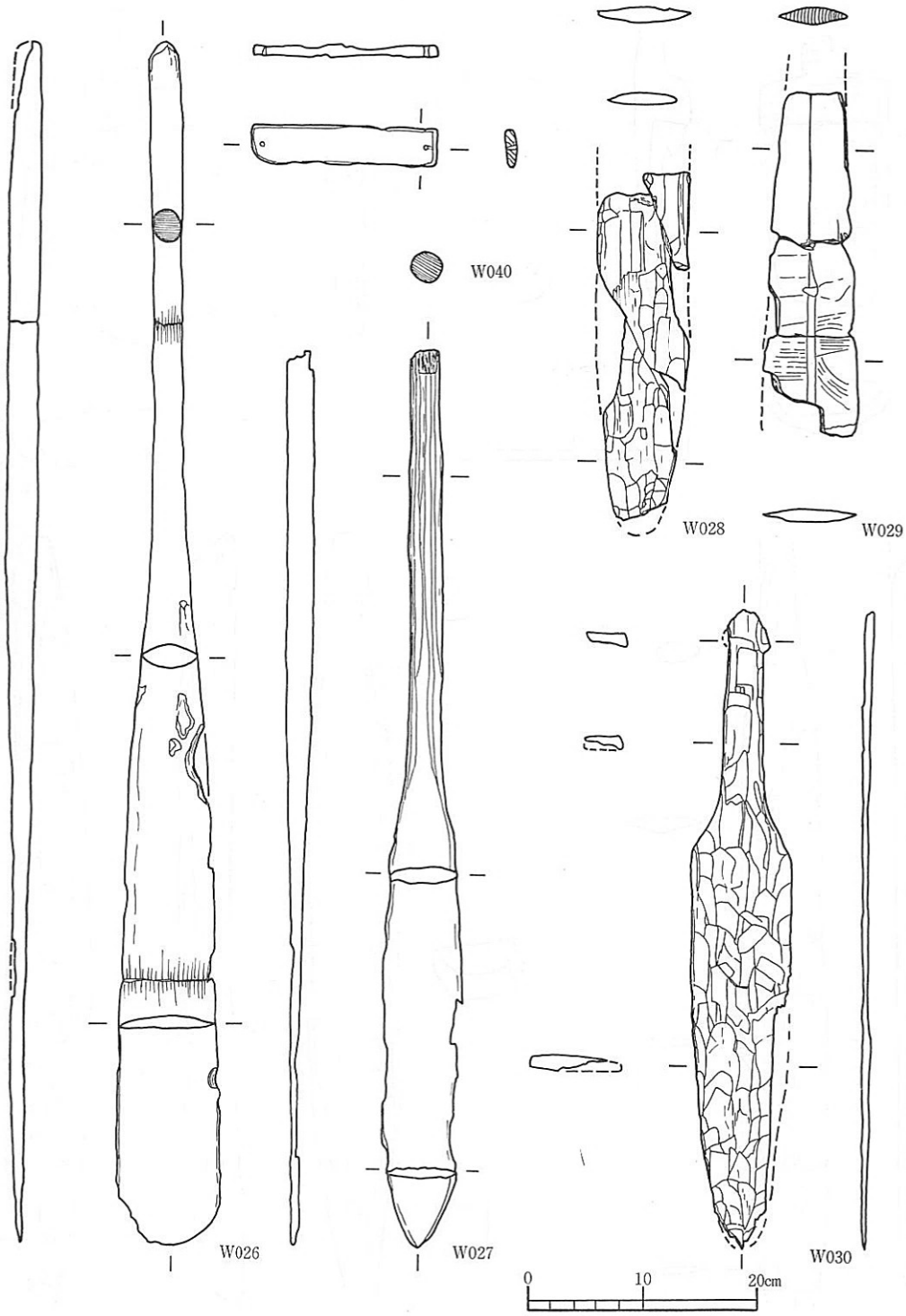
第27図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(4)
W14・W15なすび形着柄鋤（1/4）



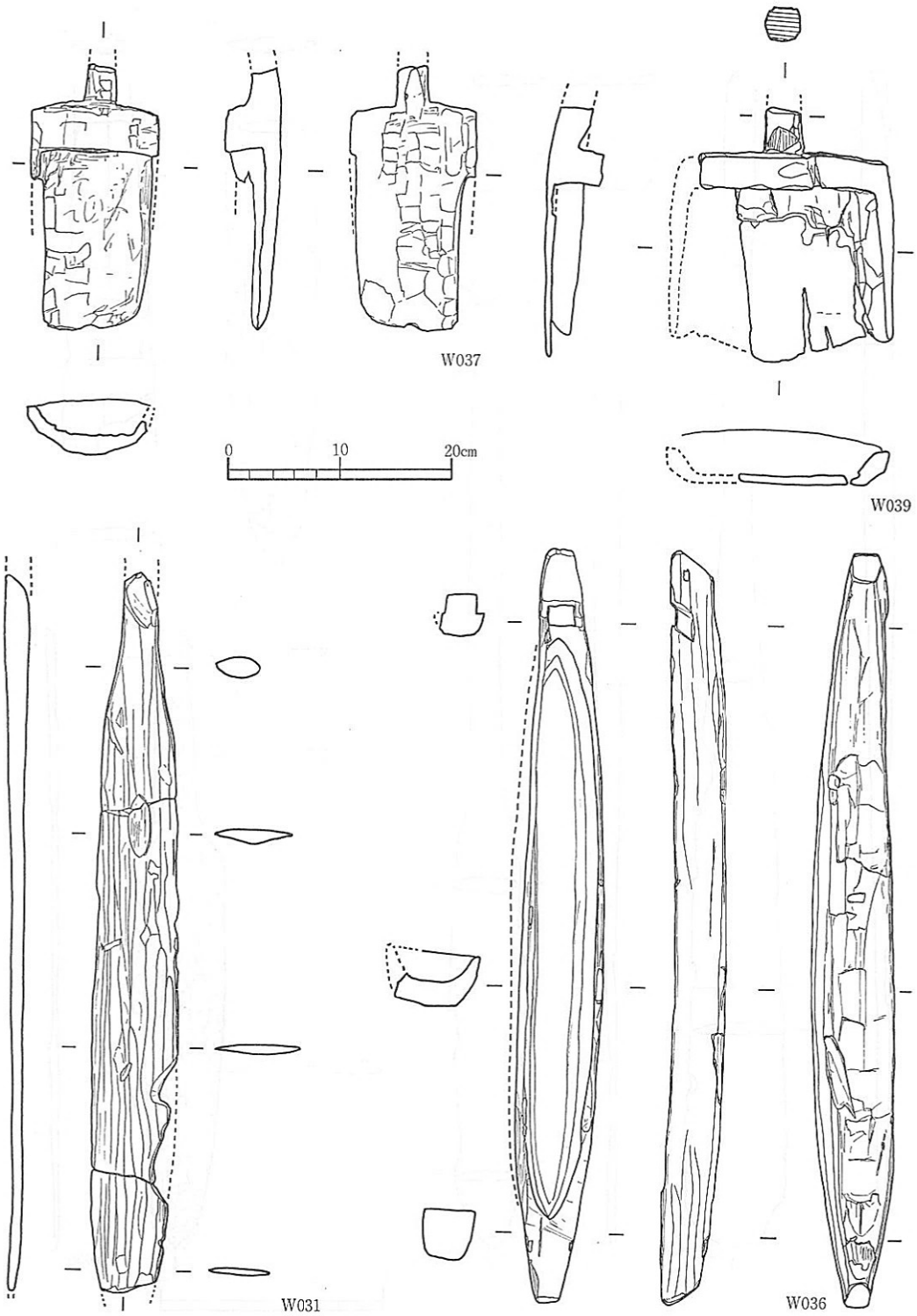
第28図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(5)
W16鎌形木製品（1/4）



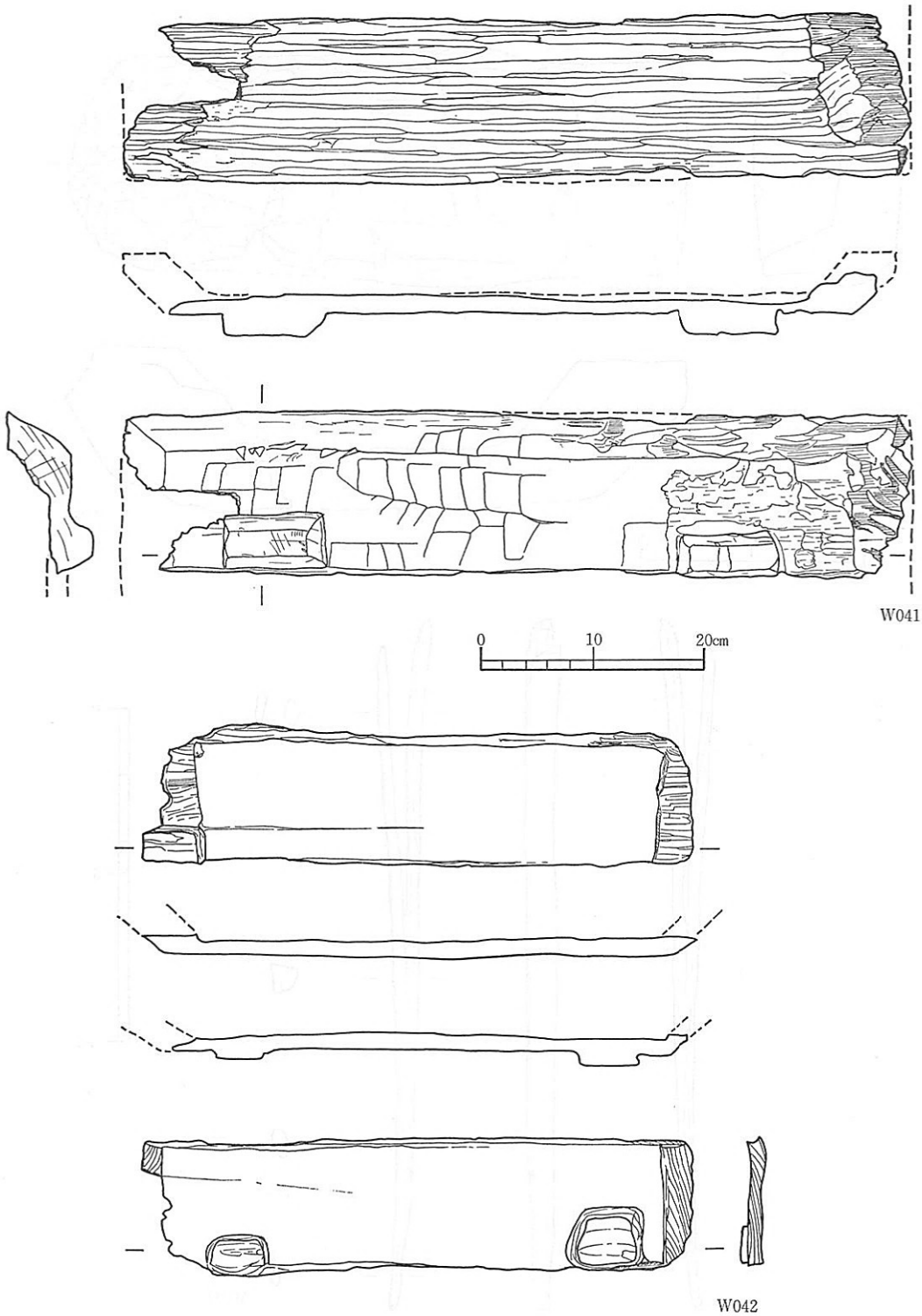
第29図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(6)
W17竪杵（1/6）、W19～W22手斧柄（1/6）



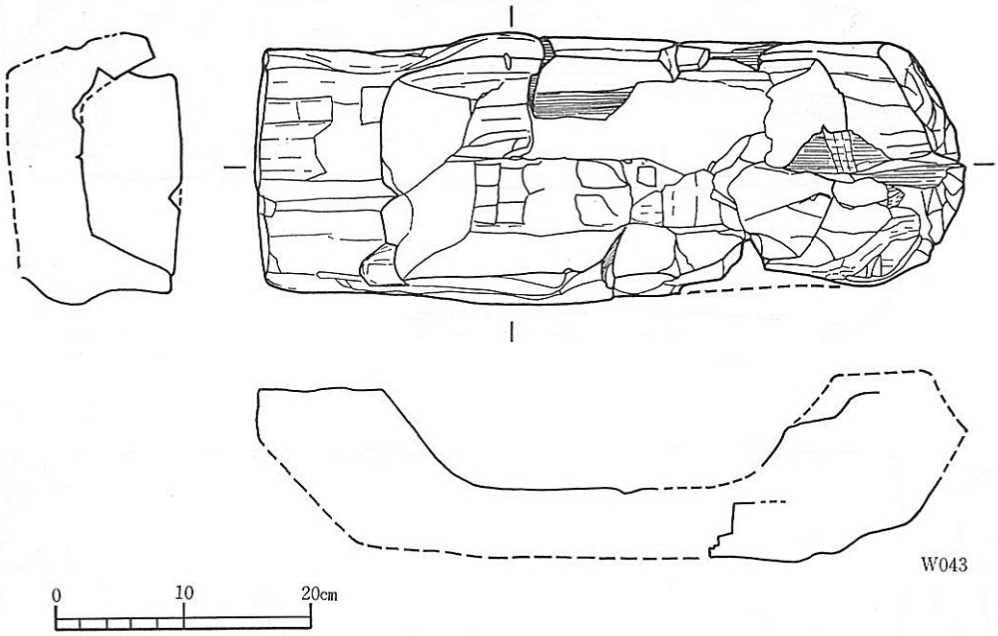
第30図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(7)
W26～W30櫂、W40浮子状木製品（1/6）

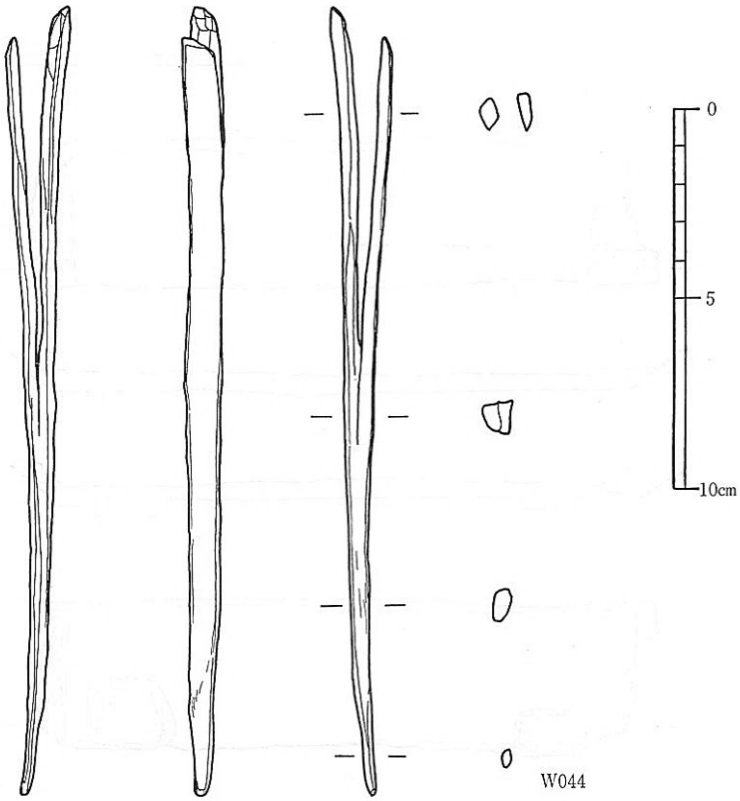


第31図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(8)
W31櫂、W36舟形木製品、W37・W39アカカキ状木製品（1/6）

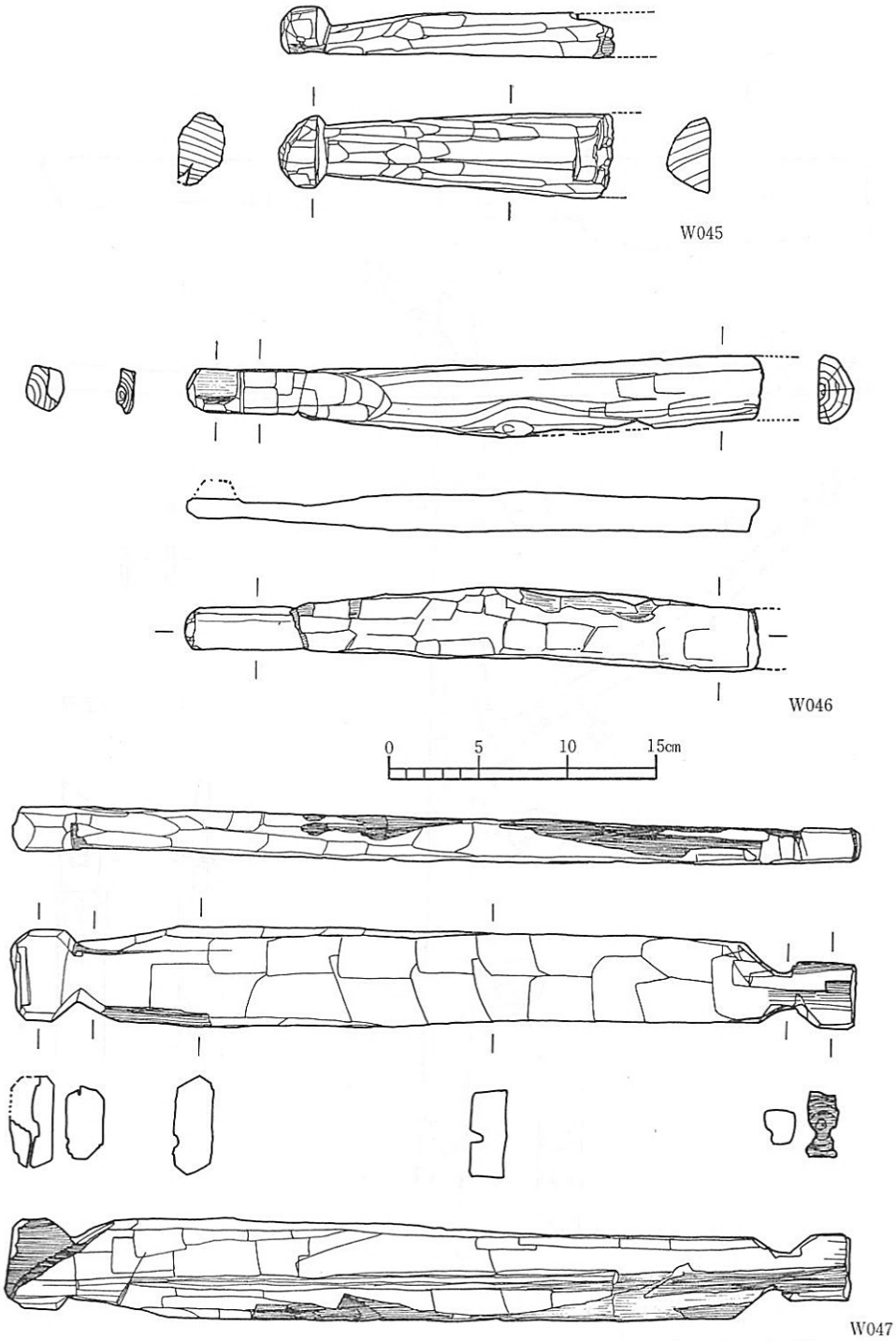


第32図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(9)
W41・W42脚付角形容器（1/6）

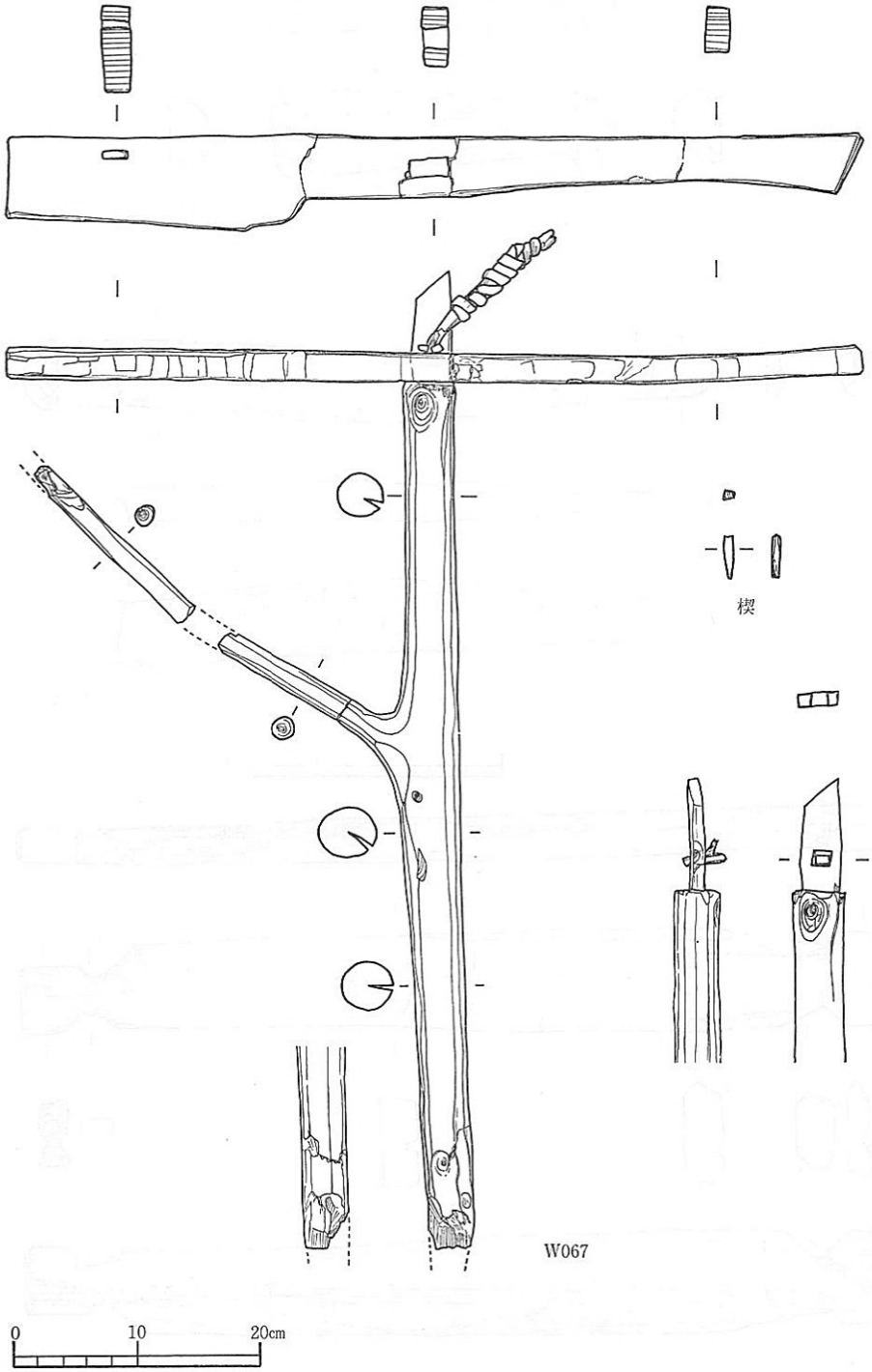




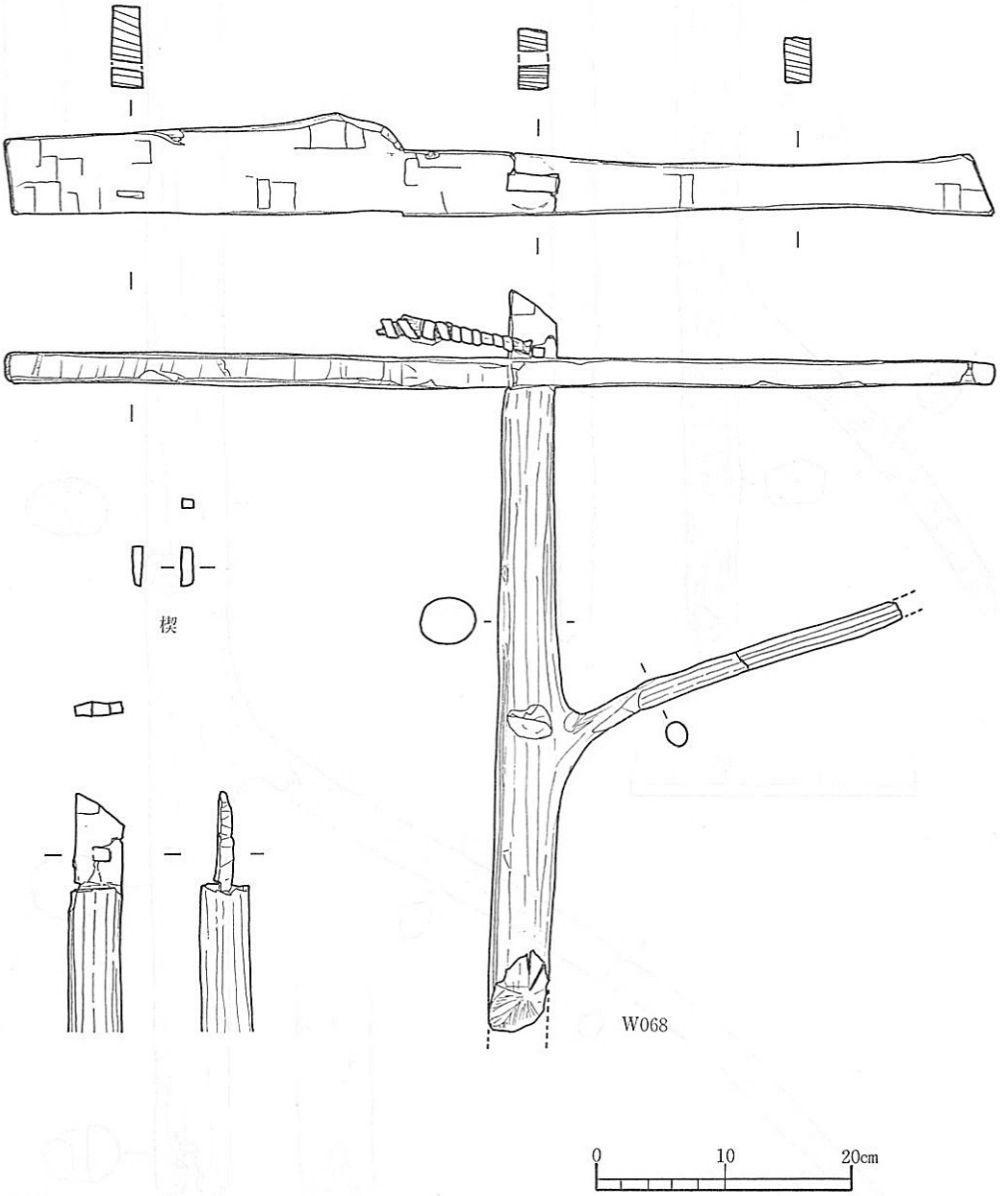
第33図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(10)
W43木槽（1/6）、W44ピンセット状木製品（1/2）



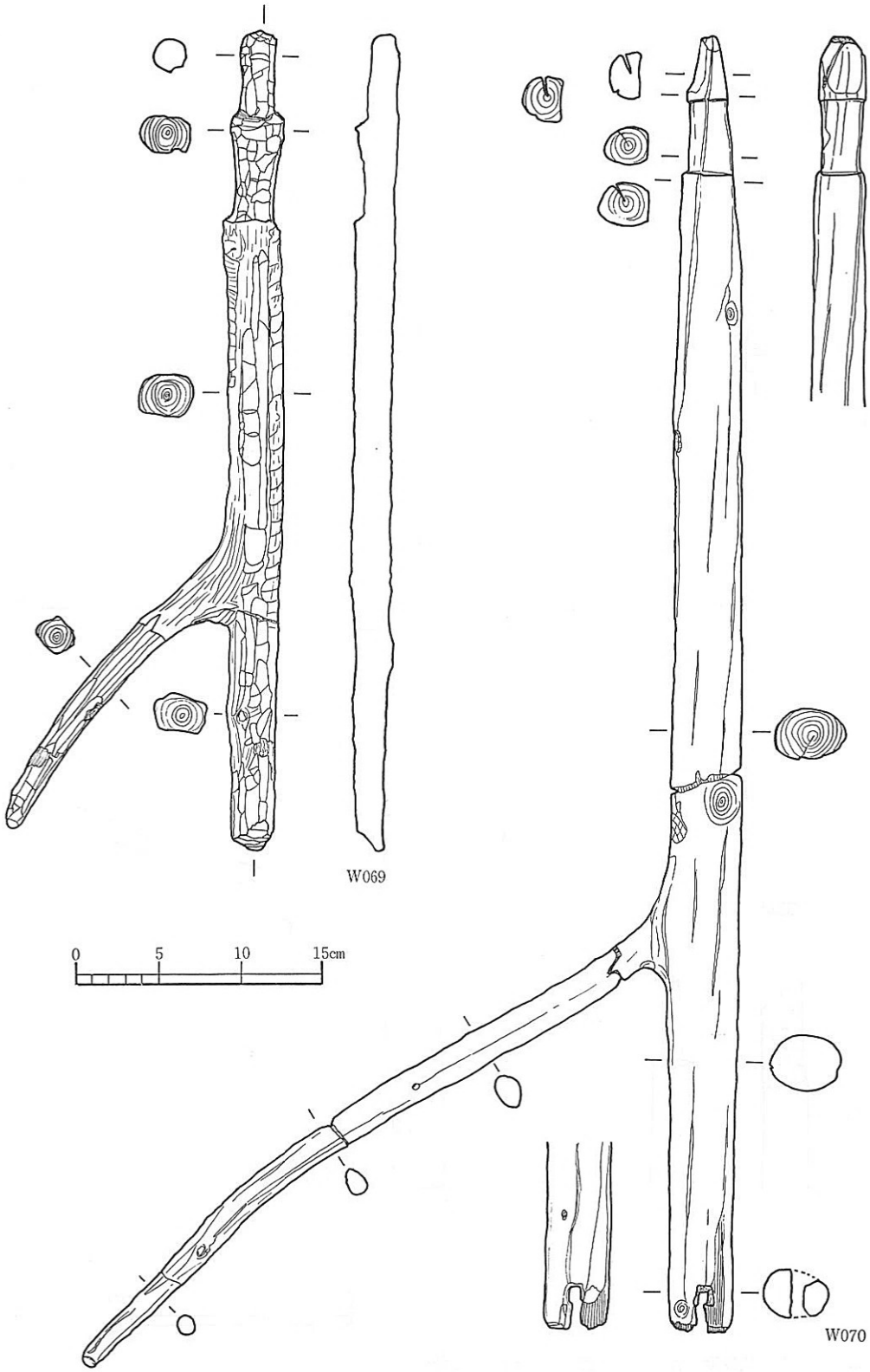
第34図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(11)
W45～W47布巻具（1/4）



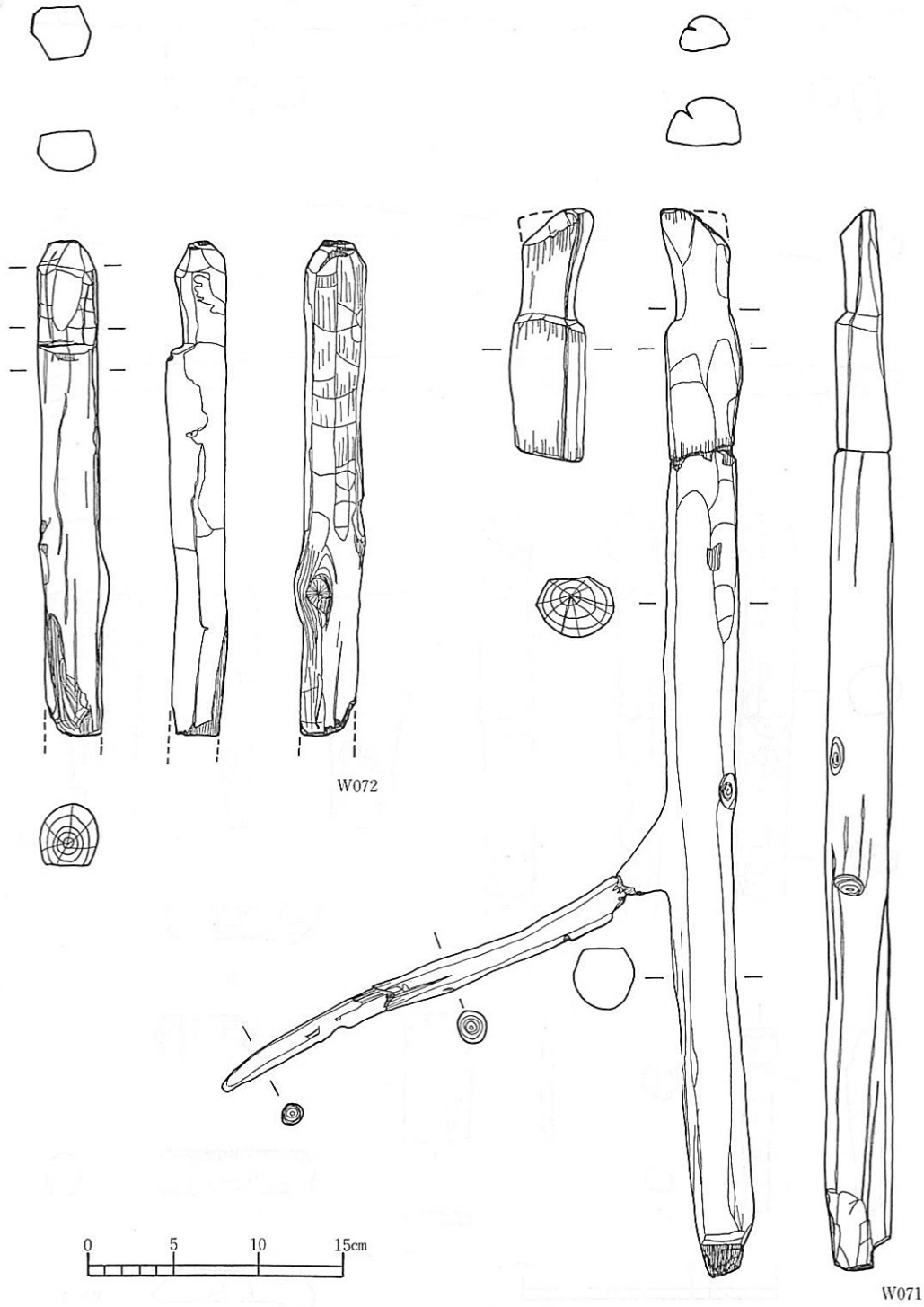
第35図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(12)
W67用途不明木製品（枝付棒状組合せ木製品）（1/6）



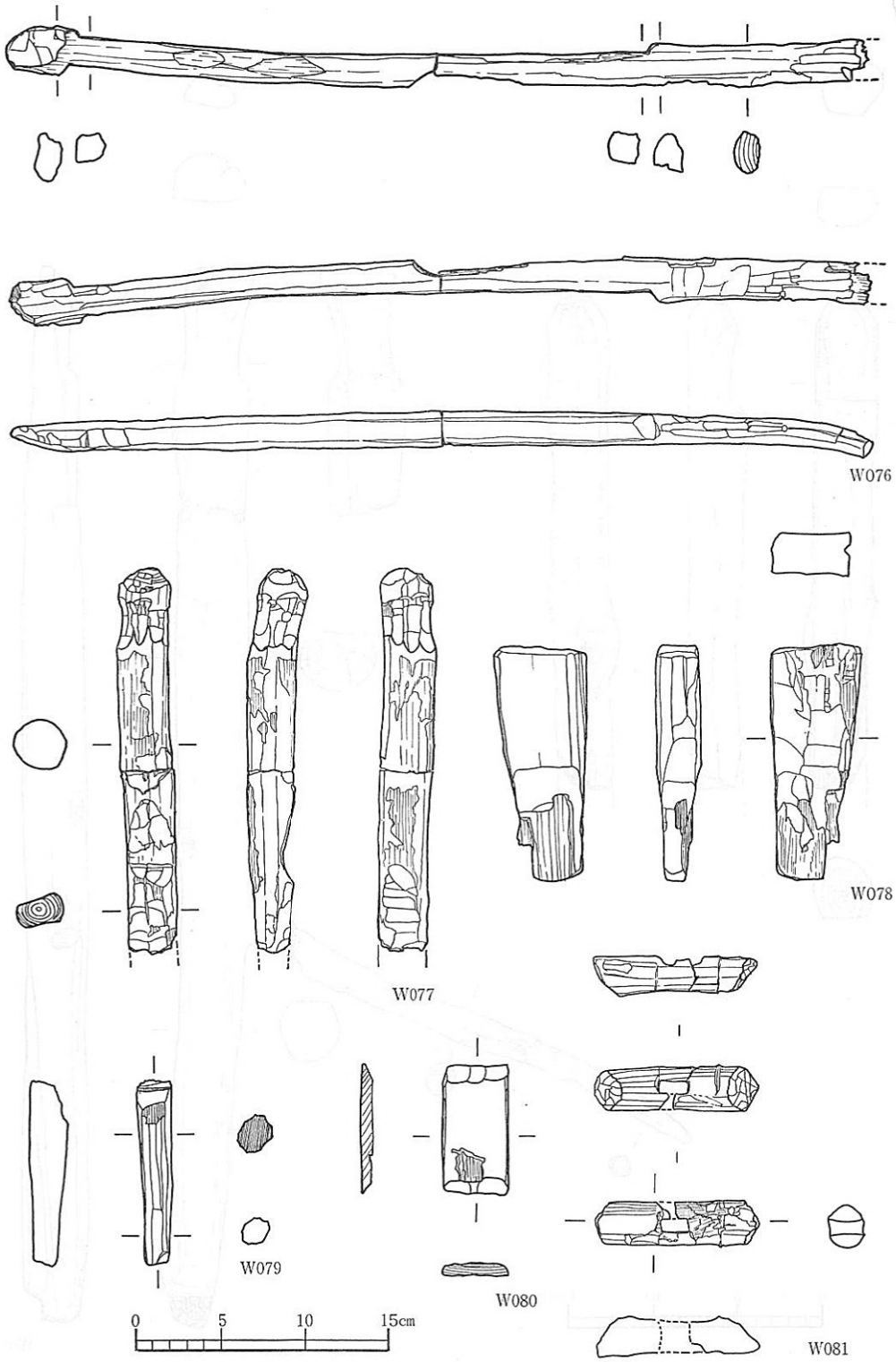
第36図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(13)
W68用途不明木製品（枝付棒状組合せ木製品）（1/6）



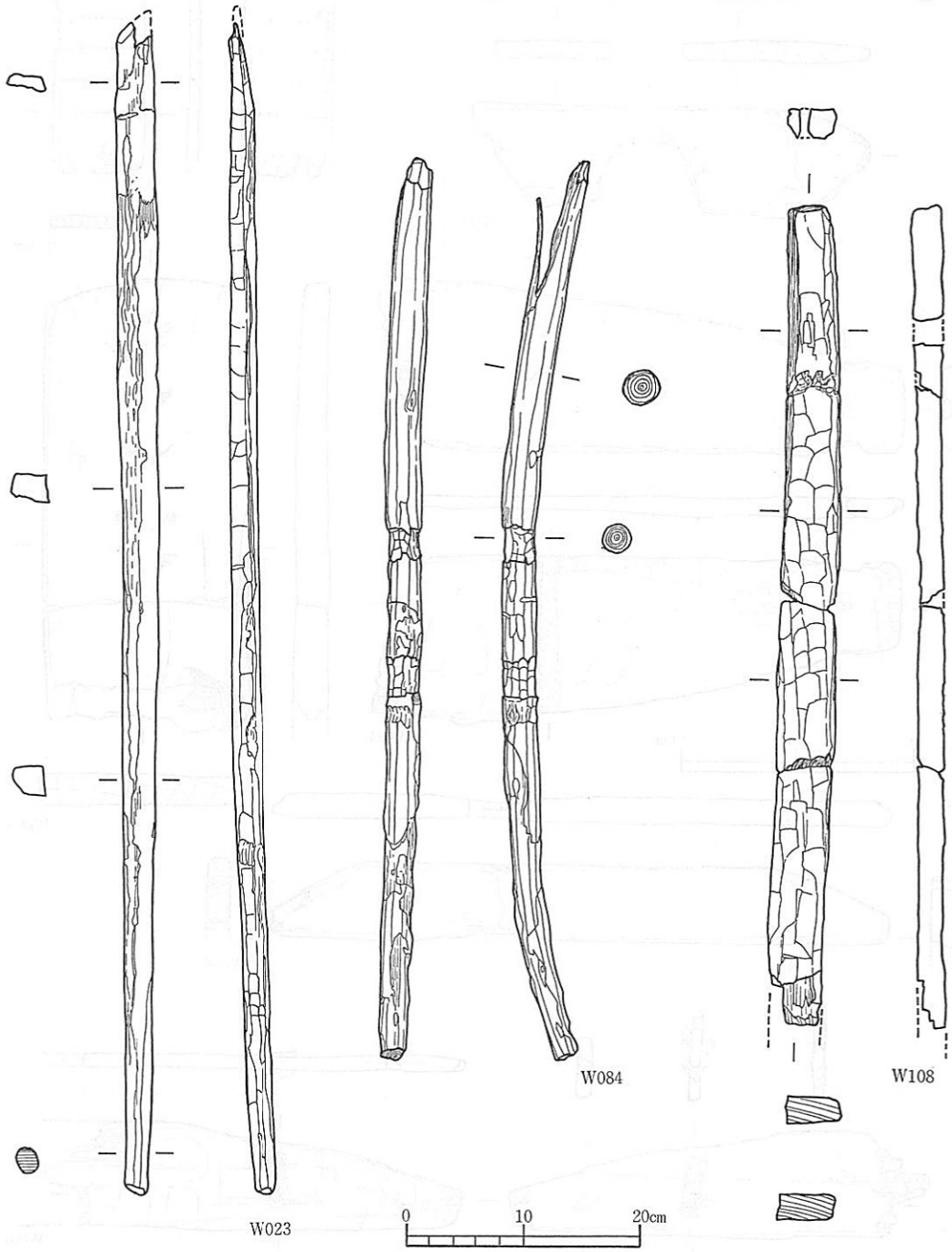
第37図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(14)
W69・W70用途不明木製品（枝付有頭棒状木製品）（1/4）



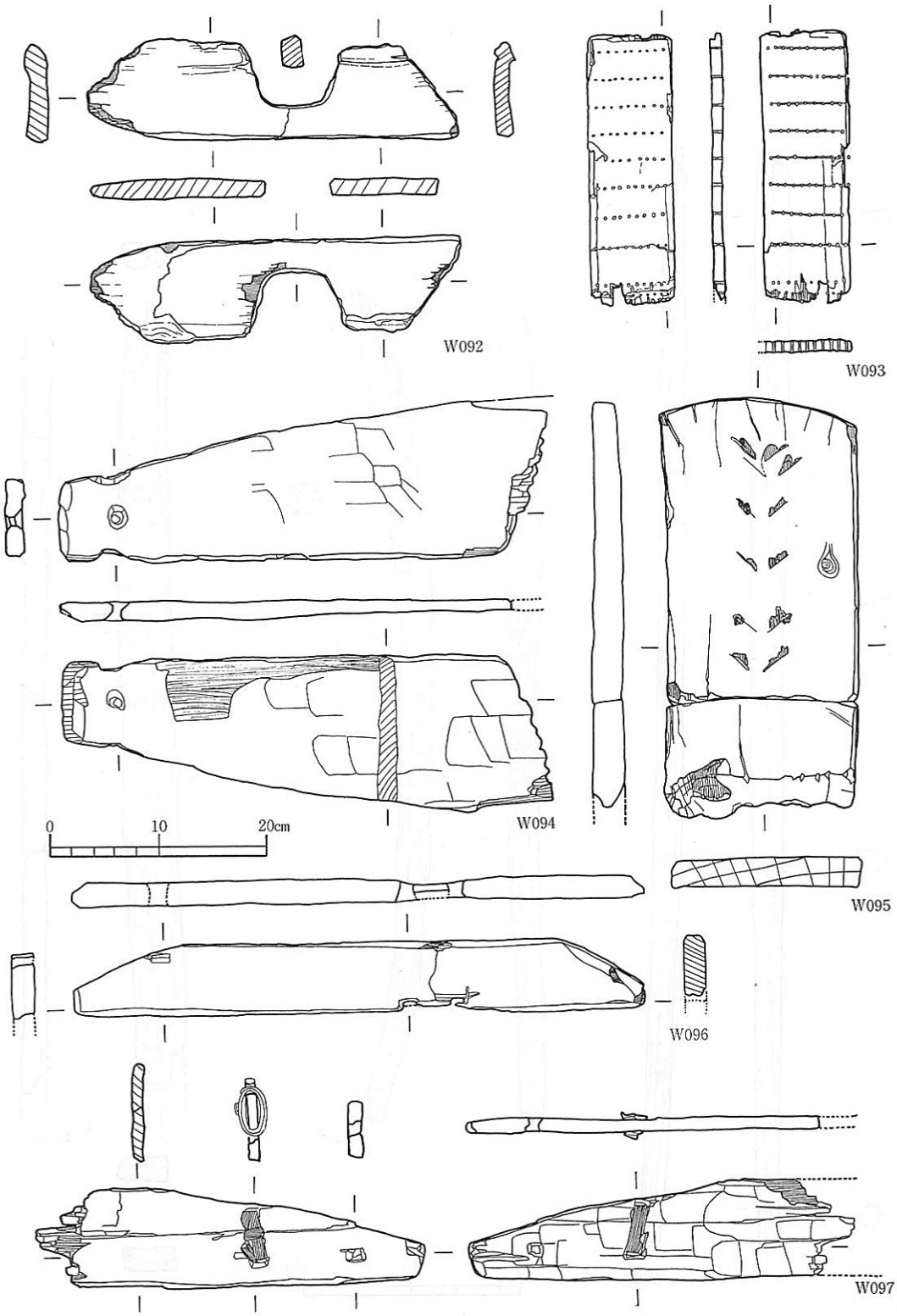
第38図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(15)
W71・72用途不明木製品（枝状有頭棒状木製品）（1/4）



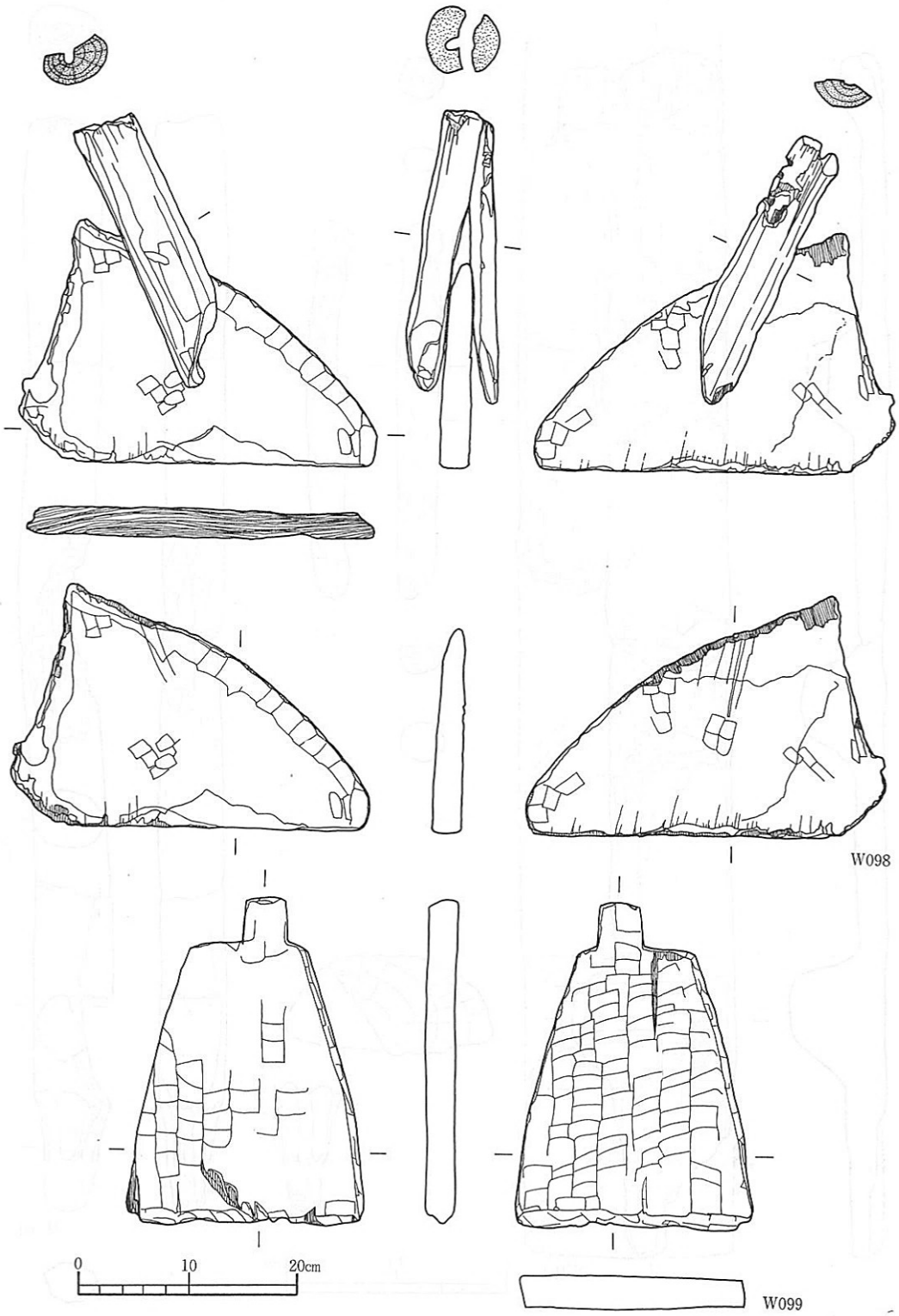
第39図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(16)
W76～W79用途不明木製品、W80小板状木製品、W81組み合わせ木製品（1/4）



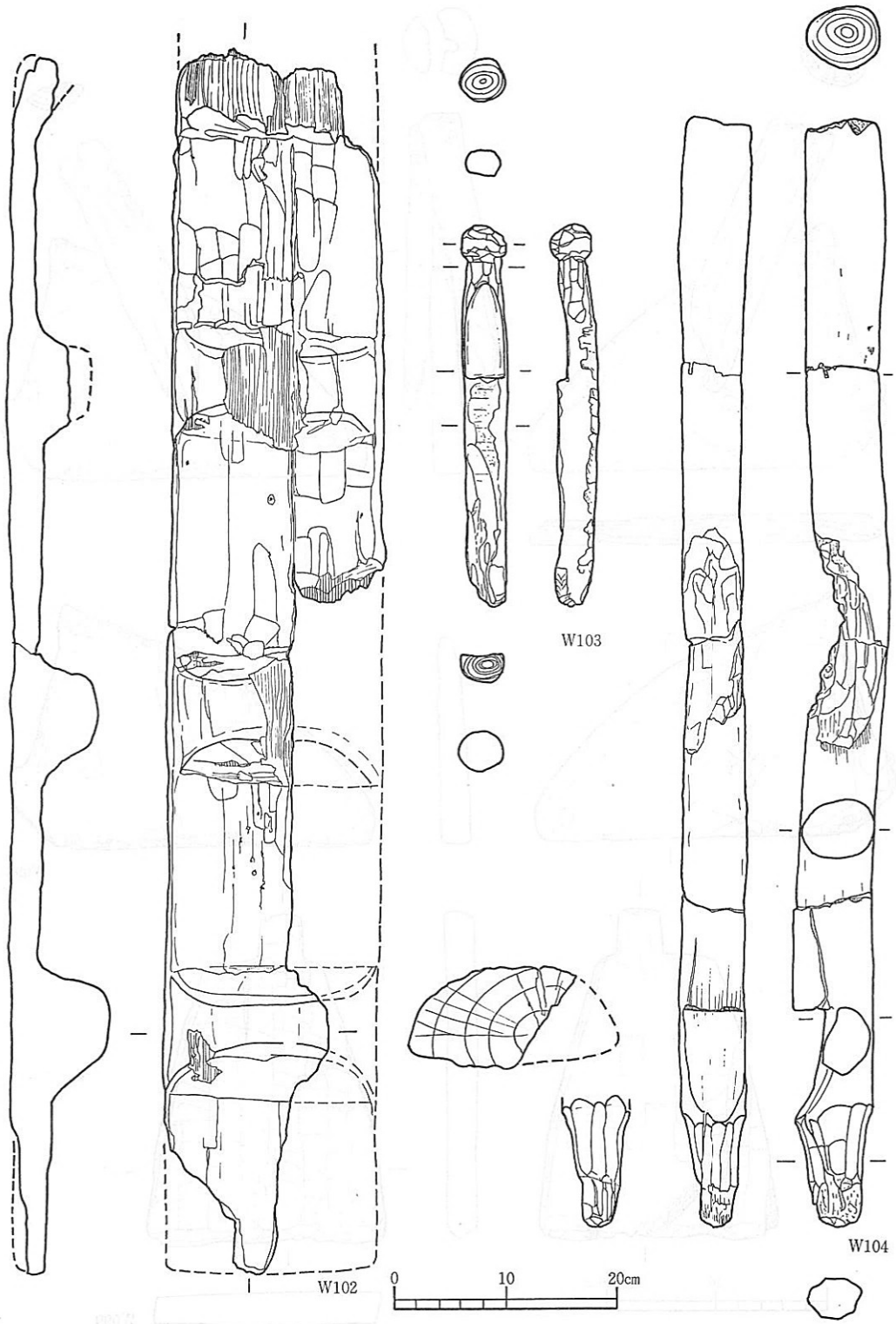
第40図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(17)
W23用途不明木製品、W81弓状木製品、W108枘穴のある角材（1/6）



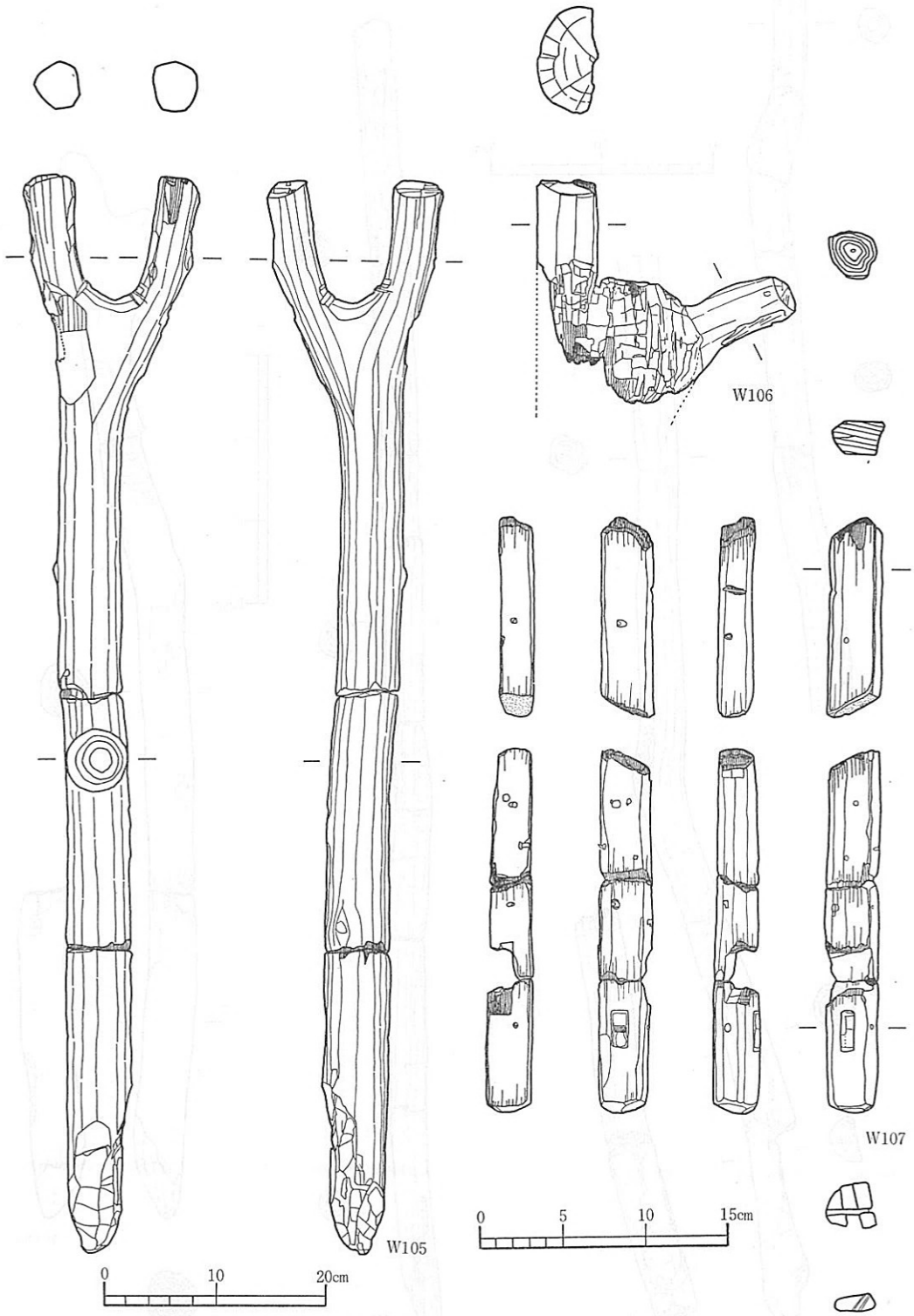
第41図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(18)
W92～W97板状木製品（1/6）



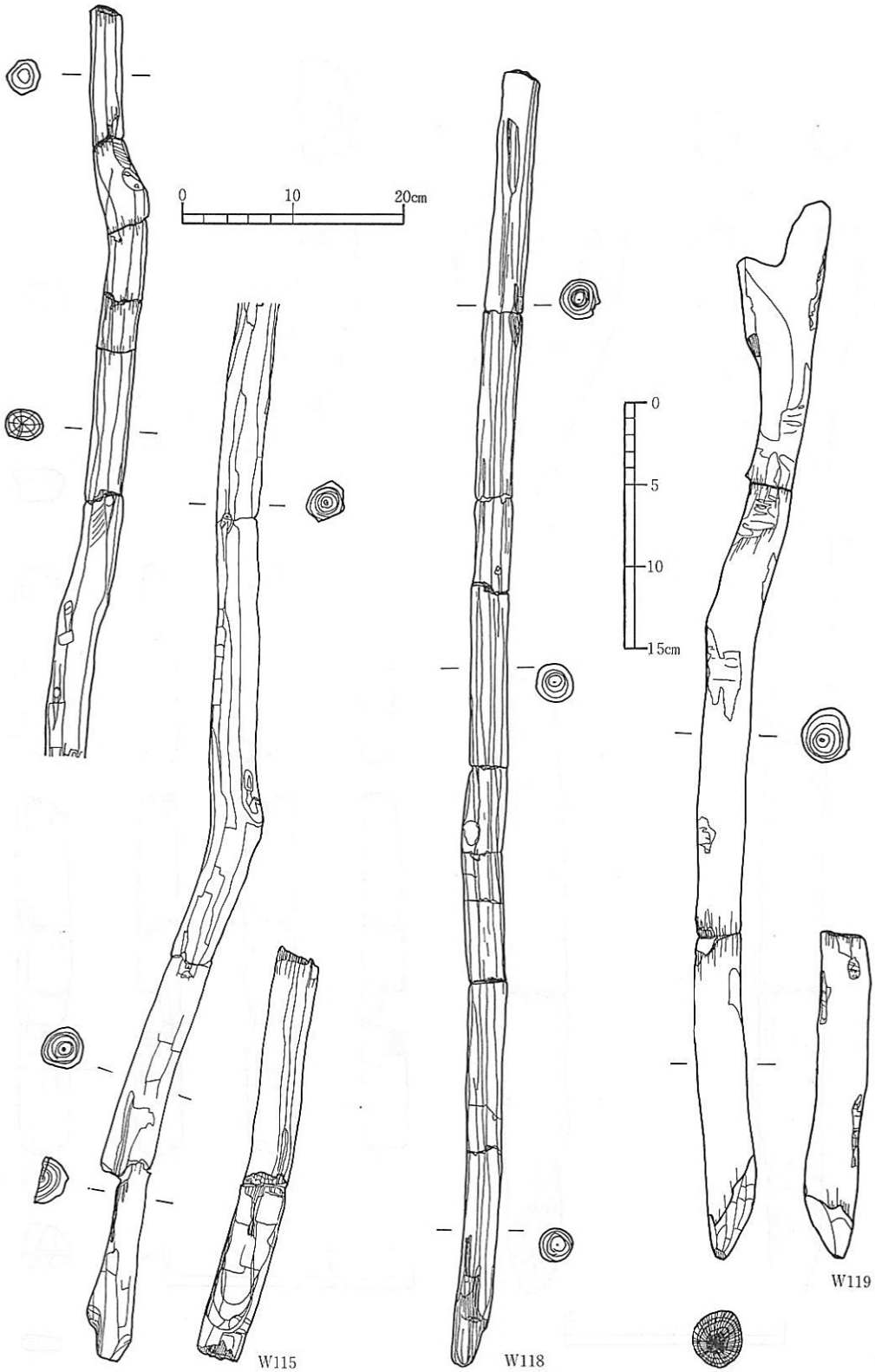
第42図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(19)
W98・99用途不明木製品（1/6）



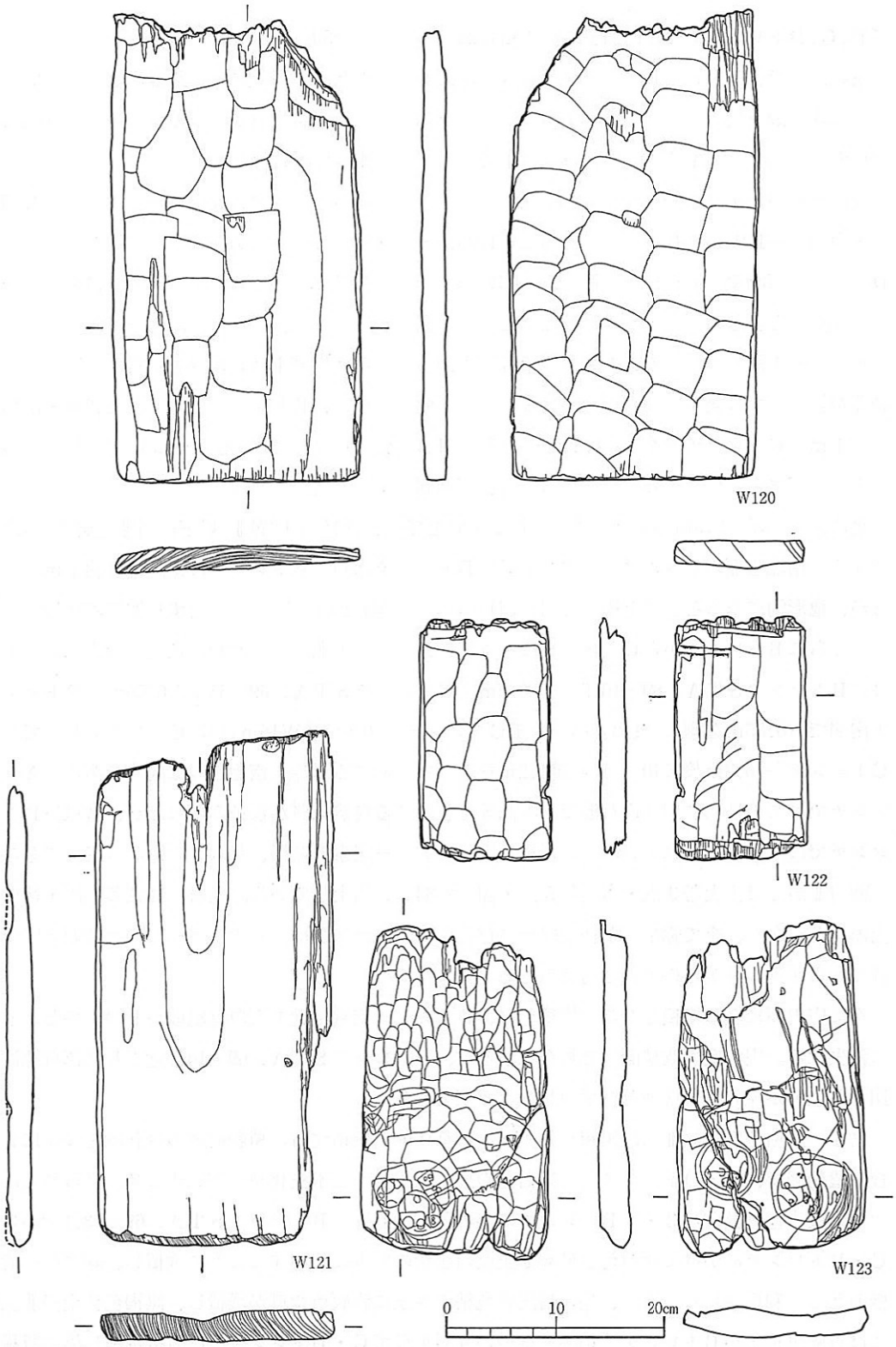
第43図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(20)
W102はしご（1/6）、W103・104抉り入り組柱（1/6）



第44図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(21)
W105・106受け柱（1/6）、W107木釘の打ち込まれた角材（1/4）



第45図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(22)
W115組み柱（1/6）、W118柱材（1/6）、W119又杭（1/4）



第46図　弥生時代後期　Aトレンチ流水堆積層出土遺物(23)
W120～W123板材・加工板（1/6）

＜B.C.Dトレンチでの庄内面までの堆積状況＞　（第47～50図）

庄内面まで、B・C・Dトレンチは基本的にAトレンチと同じ形成過程を踏む。堆積順序は、確認できる最下層の灰白色粗砂層Ⅰ→ピート層→ピート層への漸移層となる黒灰色粘土層→灰白色粗砂層Ⅱ（弥生第Ⅴ様式終末）→庄内Ⅰ遺構面→庄内Ⅱ遺構面となる。

灰白色粗砂層Ⅰは、無遺物層で時期不明である。南北のレベルは、Bトレンチ北端で－2.25m・南端で－1.96m、Cトレンチ北端で－1.95m・南端で－2.18mを測り多少の起状を呈すが、Dトレンチ南端で－0.8mと上昇する。4Bトレンチで確認した結果、層の厚さは約1.1mで下層に植物遺体を含む暗灰色粘土層が存在していた。東西のレベルは、南北とほぼ同一である。

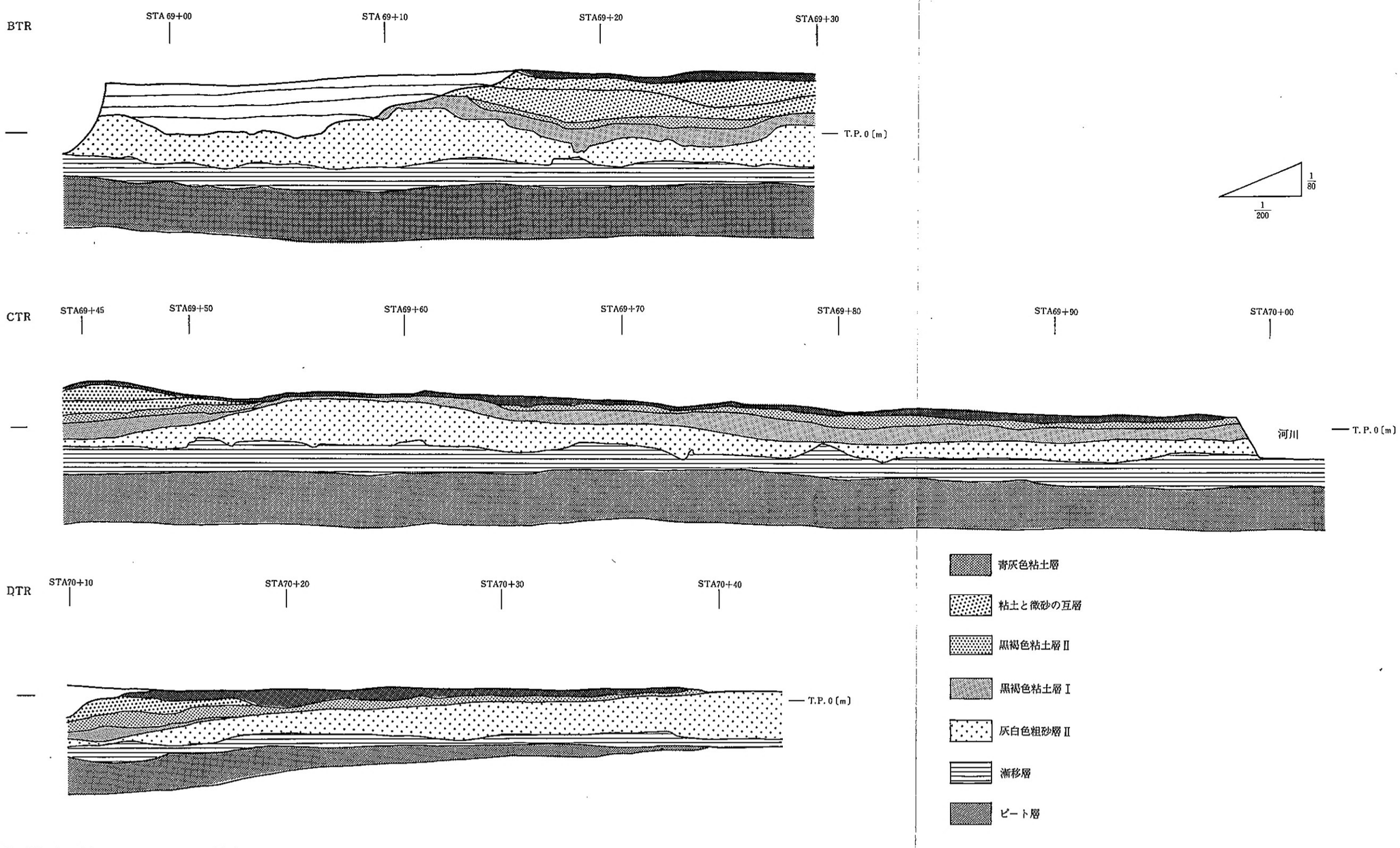
次にピート層が堆積するAトレンチでは、上面近くから弥生第Ⅰ様式の壺形土器が検出されているが、ここでは全く遺物の出土を見ない。南北のレベルは、Bトレンチ北端で－ 1.2m・南端で－1m、Cトレンチ北端で－0.9m・南端で－1.14m、Dトレンチ南端で－0.8mを測り、下層の上昇と相まって浅くなる。東西レベルは、下層同様南北と同一である。

次に、厚さ平均0.3mの漸移層灰褐色粘質土層を経て、灰白色粗砂層Ⅱ（以下砂層Ⅱと略す）が堆積する。南北上面のレベルは南へ向い下降しDトレンチ南端とBトレンチの比高差は約1mもあるが、地形的にみると孤状を描いて凹み、Dトレンチ南端で上がる形となり、すり鉢状の凹地となる。さらにBトレンチからCトレンチにかけて、Dトレンチ北部にて凹む。隆起点の南北レベルは、BトレンチＳＴＡ．69＋16.5で＋ 0.2m、CトレンチＳＴＡ．69＋55で＋0.55m、Dトレンチ南端で－0.85mを測る。東西レベルは1Cトレンチ（＋0.9m於W10m）からCトレンチを経て2Cトレンチ（－0.3m於E10）へ比高差1.2mをもって下降する以外、南北とほぼ同一である。Aトレンチではこの砂層に切り込む形で木製品等を包含する自然流路が数条みられたが、B・C・Dトレンチでは全く検出されていない。堆積方向はラミナー観察の結果、基本的に西から東へである。

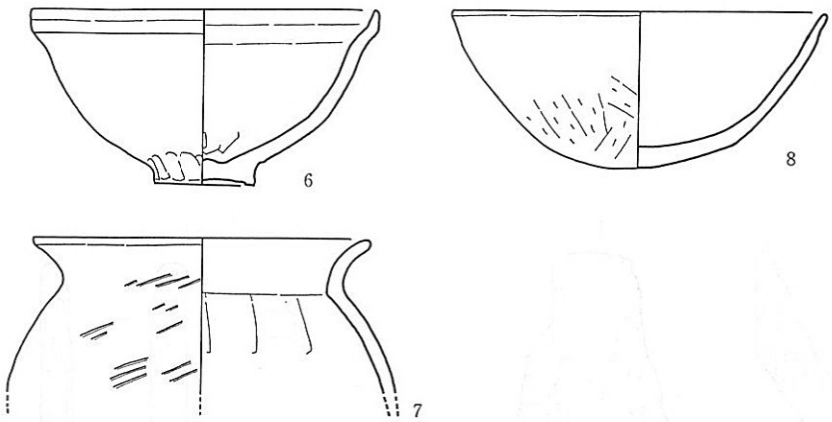
砂層Ⅱからは、土器3点・木製品5点・加工木34点が出土している。土器には甕形土器・鉢形土器などがあり、全て弥生第Ⅴ様式終末に位置する。残存状況は良好で、ローリングは顕著に受けておらず近接地からの流入と考えられる。

次に庄内面に至る堆積となる。堆積土は、Dトレンチ南端付近で灰白色粗砂層Ⅱの上昇とともに消失する。庄内期の遺構面は2枚存在するが、BトレンチＳＴＡ．69＋10付近より北部自然河川から土砂が流入し遺構面及び堆積状況は不明である。

まず、灰白色粗砂層Ⅱ上に黒褐色粘土層Ⅰが全体的に堆積する。植物遺体の炭化物を多量に含む無遺物層で、C・Dトレンチでは浮白色の果粒状を呈する水酸化鉄が斑点状に多く見られる。次に暗灰青色粘微砂が3・4Bトレンチに黒褐色粘土層ⅡがBトレンチＳＴＡ．69＋13付近からC・Dトレンチにかけて灰白色粗砂層Ⅱ上面の孤状の凹みに対応するように堆積し、両者第一遺構面として利用される。次に、先の暗灰青色粘微砂上に青灰色微砂が堆積し、黒褐色粘土層Ⅱ上には青灰色粘土がBトレンチで粘土と微砂の互層を経てC・Dトレンチでは直接堆積し第二遺構面となる。



第47図　弥生時代B・C・Dトレンチ古墳時代第Ⅰ面までの堆積状況図



第48図　弥生時代後期　Cトレンチ流水堆積層出土遺物(1)（S＝⅓）

＜Bトレンチ・流水堆積出土の木器＞

B地区出土の木製品として登録したもの5点、加工木34点、自然木6コンテナを数える。その中から、A地区における分類に拠り、次の様な木製品が分類された。

農具、田舟、漁具、弓状加工木。

＜田舟＞（第49図、図版84）（W 172）　1点出土。現長94.5㎝、現存幅16㎝、舟底の厚さ 0.6～0.9㎝、舟首部の長さ8.5㎝、舟首部高さ9㎝を測る。樹種はコウヤマキ材を利用している。部分的に火をうけている。

＜弓状加工木＞（第49図、図版105）（W 173・174）　2点出土。2点とも端部を作り出している棒状加工木である。（W 173）は、現長14.7㎝、直径2.0×1.5㎝を測る。棒状部分は平らな面をもち、断面カマボコ形につくっており、表面にヤリガンナの加工痕がみられる。端部を細く作り出している。樹種はシイノキの心持材を使用。（W 174）は現長34.7㎝、直径2.0×1.8㎝を測る。棒状部分は枝払い痕がみられ、断面楕円形を呈す。端部は両面から削られ、細く作り出している。樹種はカエデの心持材である。一般的に弓の材としては、イヌガヤやクワが用いられるが、この2点は樹種が異なるので、他の機能を考えた方が妥当かもしれないのだが、端部を作り出した細い棒状加工木という点から弓状加工木として分類しておく。

＜有段柱材＞　1点出土。（W 112）と同様に下端に段をつくり出した柱材になる。現長69㎝、幅8.8～5.5㎝、厚さ5～3㎝を測る。両平面は平らな面を作り、四隅を面取りしており、断面は扁平な八角形を呈す。樹種はヒノキ材である。

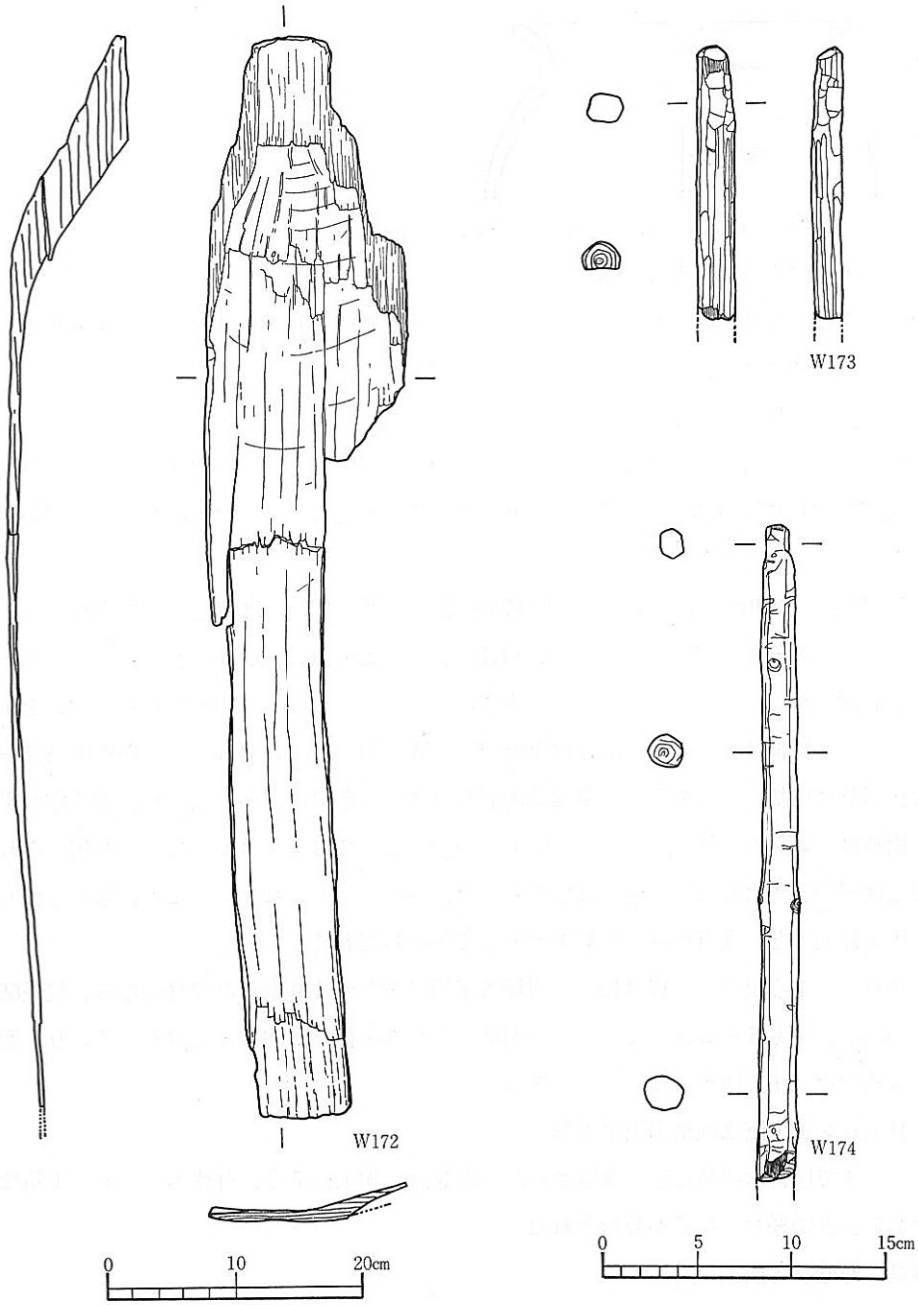
＜C・Dトレンチ・流水堆積出土の木器＞

Cトレンチでは、木製品として登録されたもの3点、加工材7点、自然木コンテナ1箱である。その中から、次の様な木製品が分類された。

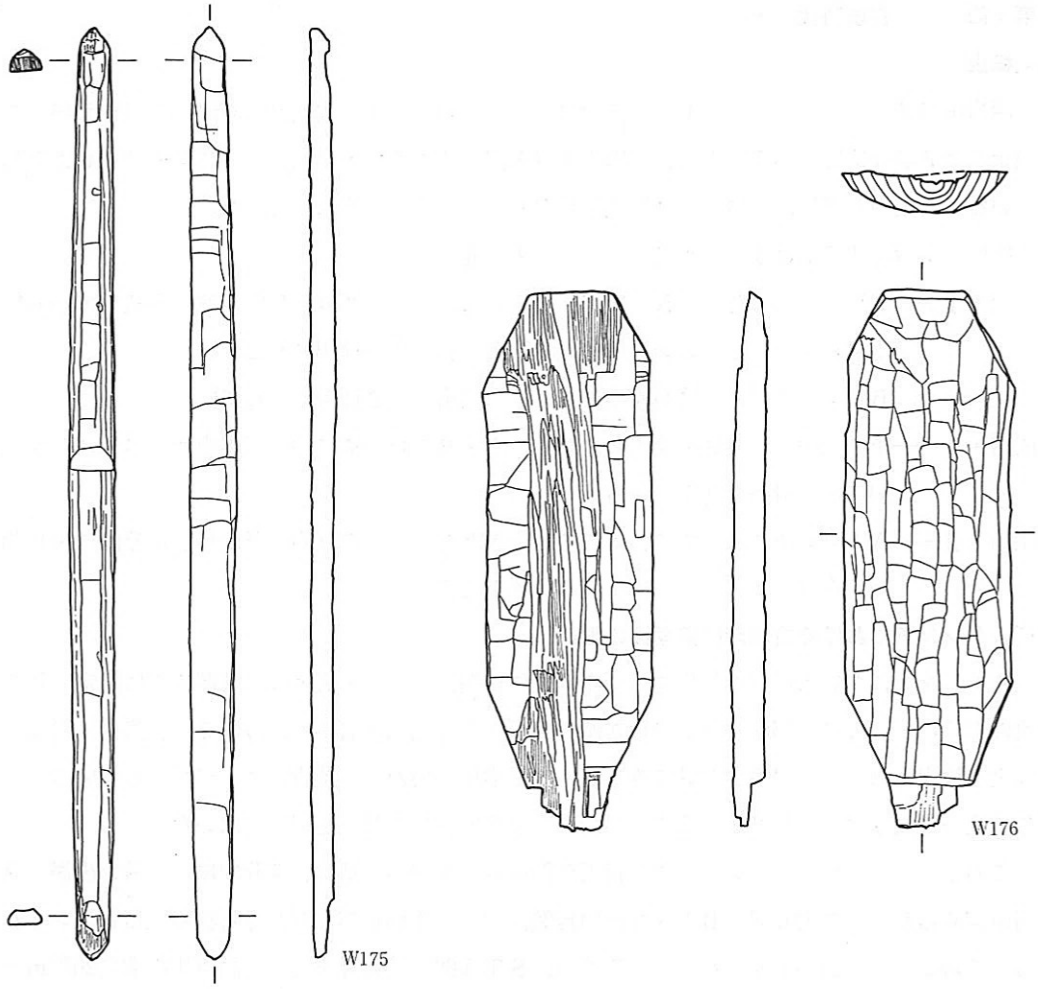
紡織具　布巻状木製品

用途不明木製品　枘をつくり出した板状木製品

建築材　杭材



第49図　弥生時代　Bトレンチ流水堆積層出土遺物
W172田舟（1/6）、W173・174弓状加工木（1/4）



第50図　弥生時代後期　Cトレンチ流水堆積層出土遺物(2)　W175布差具（1/6）、W176用途不明木製品（1/4）

＜布巻状木製品＞（第50図、図版93）（W 175）　1点出土。完形品。全長73cm、幅 3.5cm、厚1.8cmを測る。 裏面を平らな面につくり、断面は台形になる。両端部正面に浅い抉りが入っている。中央部が幅広く、両端に行くにつれて狭くなる。樹種はヒノキで柾目材の縦木取りである。

＜用途不明木製品＞（第50図、図版110）（W 176）　1点を数える。現長28.3cm、幅 8.7cm、厚さ 1.7cmを測る。手斧の加工痕がよく残っている。裏面には打ち割った部分が残るが平坦面をつくり、断面は扁平な弓張形になる。樹種はイヌマキの1/2分割材を利用。

＜杭材＞（図版122・124）（W146・166）　2点を数える。ともに丸杭で、（W 146）は組み柱ともみられる長大な杭材である。全長148cm、直径6.9cmを測る。杭先に鋭く作られ、上端は切断面よりなる。樹皮が部分的に残る。樹種はサカキの心持材。（W 166）は短い杭で、現長25cm、直径3.3cmを測る。樹種は不明。

第4節　　古墳時代・Ⅰ

＜概説＞

西岩田遺跡は、昭和○年○日下水道における調査において庄内式土器と酒津式土器が共伴して出土した著名な遺跡である。現在、庄内式土器を出土する遺構・層位について再検討をせまられているが、庄内式併行期については古墳時代の初頭に位置づけることとした。

庄内式に対応する面は3面が形成され、庄内Ⅰ～Ⅲと名づけた。

庄内・Ⅰ――遺跡全体には認められないが、流水堆積層の落ち込みや低い地域に堆積している粘土層がある。Cトレンチにおいて顕著で、遺物が検出された。
Bトレンチのみ土壙が検出され、庄内遺構面が2面形成されていた。

庄内・Ⅱ――上面において遺構を検出しており、A・Bトレンチにおいて庄内面のベースとなる。層内にも遺物を含んでいる。

庄内・Ⅲ――Aトレンチにおいては、灰青色粘土層とシルト層の互層を形成し、部分的に炭化物層が存在し、炭化物中に少量の遺物を含んでいる。

＜Aトレンチにおける古墳時代前期面の形成＞

Aトレンチにおいては古墳時代初頭（庄内式併行期）の遺構・遺物は南端部のみに限定される。他の部分においては局部的に古墳時代初頭に相当する青色粘土層が認められるが、遺構・遺物等は全く検出されない。層序から見てみると、流水堆積砂層の上に黄青色粘土が堆積している。青色粘土層の層厚はまちまちであることから、あまり安定した状況を現してはいない。

この粘土層の上位には、黄色微砂と青灰色粘微砂の互層が堆積し、部分的にごく薄い炭層が幾層か認められる。この互層はBトレンチの自然河川による小規模な自然堤防状の堆積と考えられる。このことは互層が形成されている範囲が、ＳＴＡ68＋20付近までの自然河川の北側20数mの部分に限定していることからもいえよう。

互層の上面においては、灰色粗砂が小さな凹み・小規模な落ち込み部分に堆積している。これも自然河川の影響が考えられるものである。

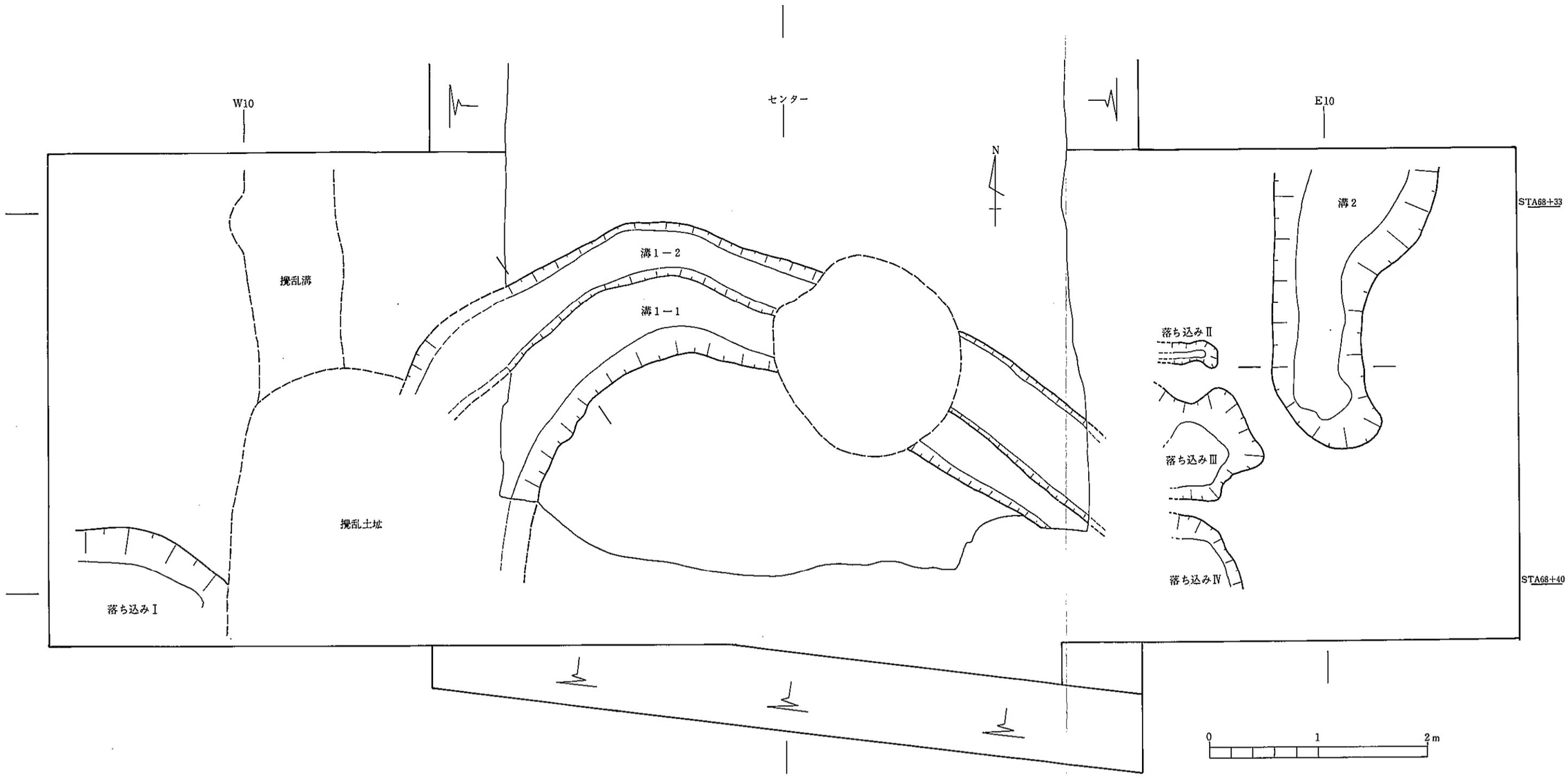
庄内・Ⅱ―青色粘土層にあたる、上面に若干の遺物が認められる。この面から溝1・溝2が切りこまれている。

庄内・Ⅲ―互層にあたり、この時に溝1・2が埋没する。この層の上面に褐色粗砂層が堆積し、粗砂中に遺物を包含している。

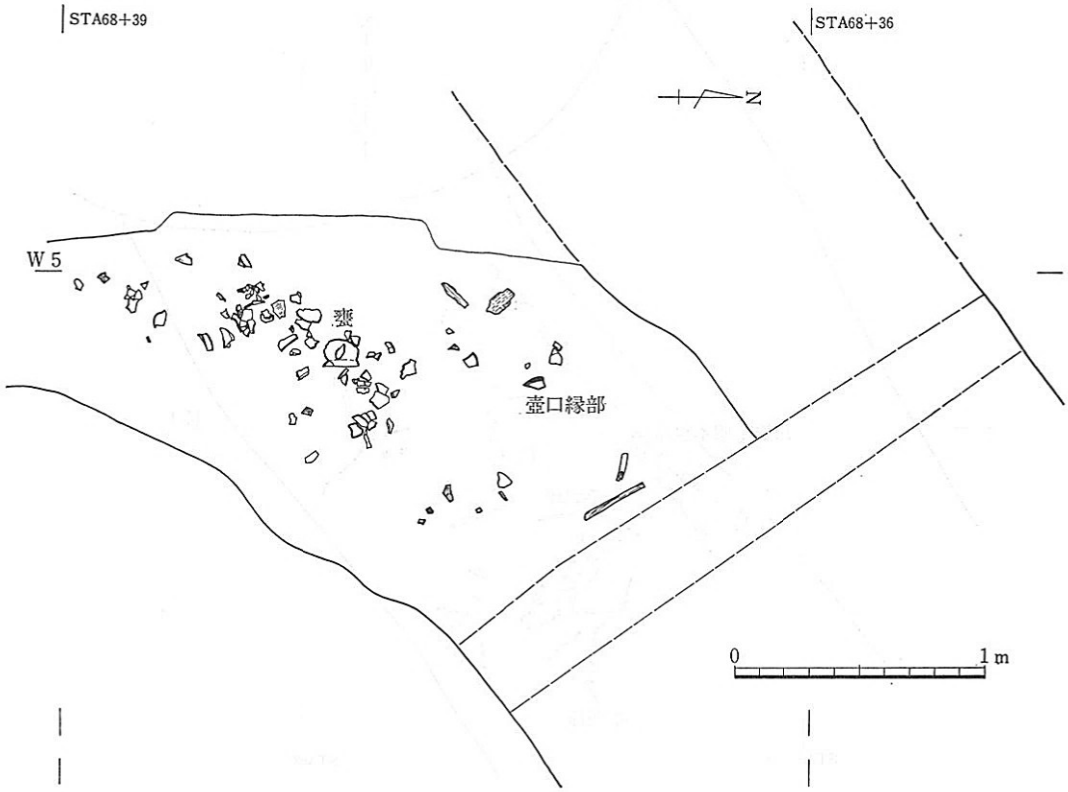
溝1

＜検出状況＞

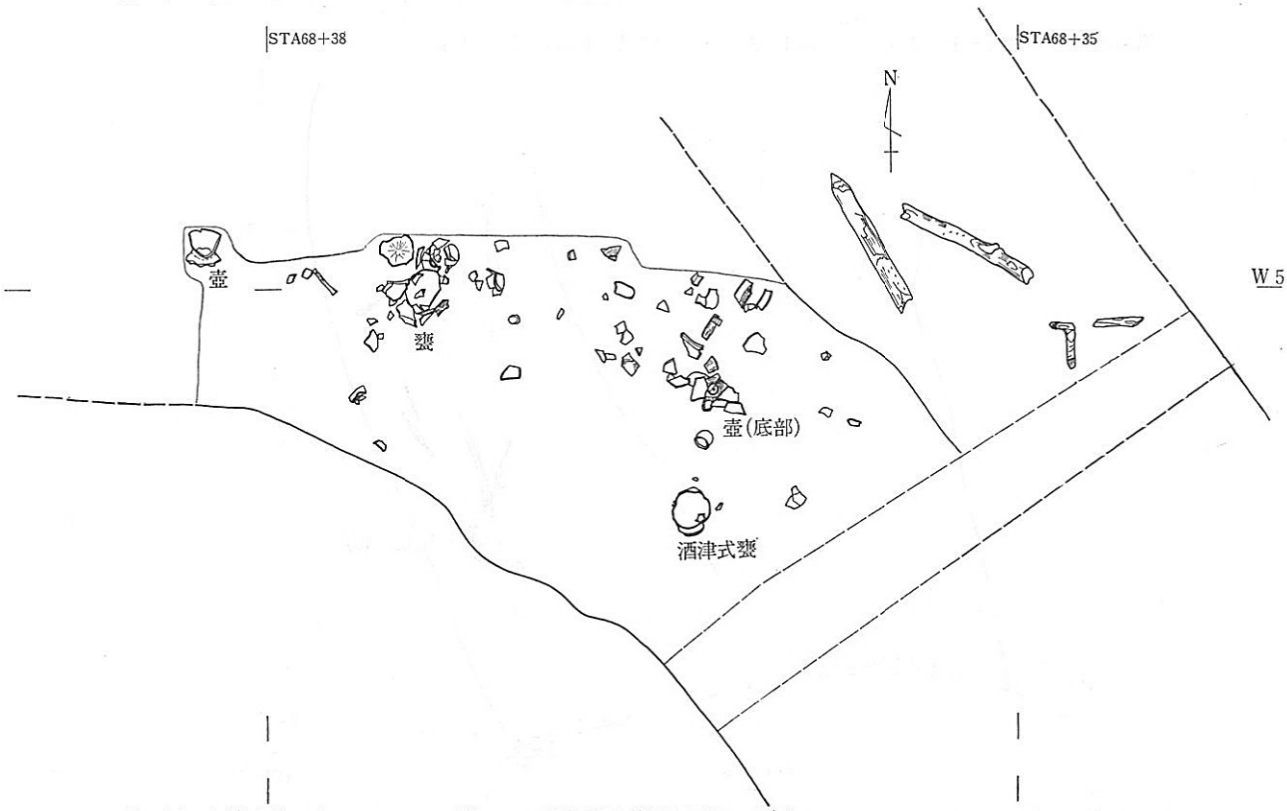
上に覆われていた黄色微砂と青灰色粘微砂の互層を排除した段階で、青灰色粘土面において検出を見た。溝の北側には、数ケ(箇)所に極く薄い炭層が認められ、土器の小破片が数片含まれていた。溝の南側は粘土が黄色味を帯びやや質を異にしたことから、盛土の可能性も考えたが決定的な根拠とならず方形周溝墓の可能性を捨てさり、庄内ベース面と同一とする。平面で溝の範囲



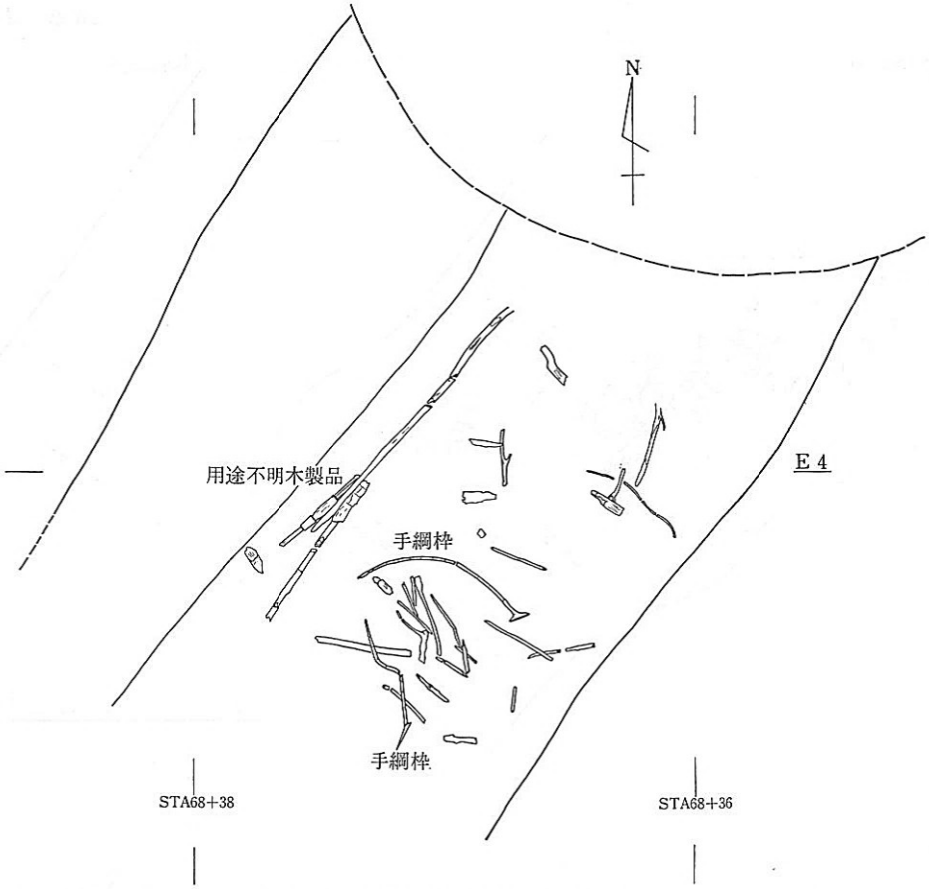
第51図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ遺構面（S＝1/80）



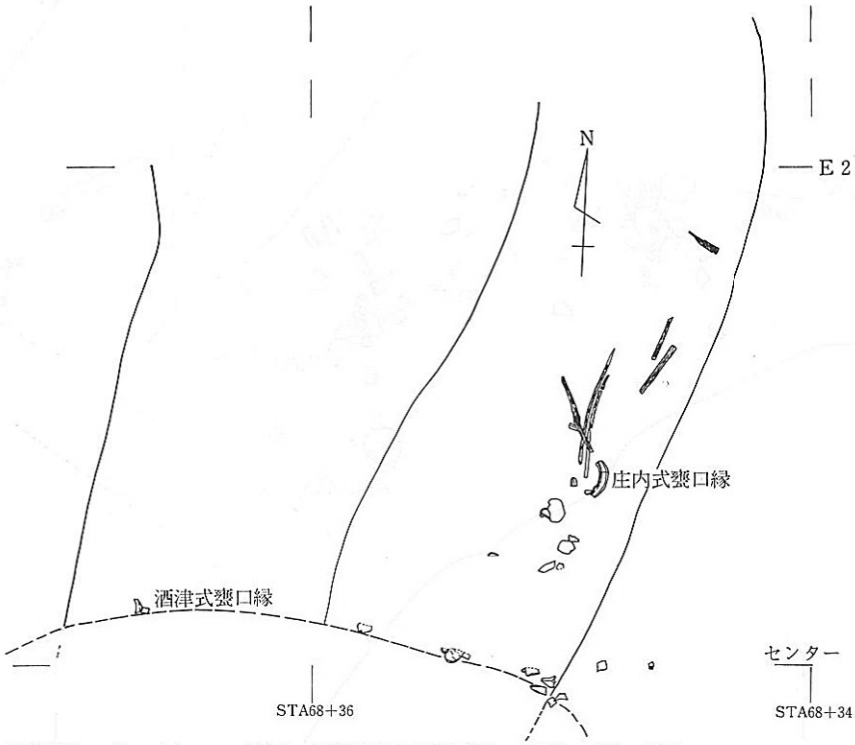
第52図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1－1遺物出土状況(1)



第53図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1－1遺物出土状況(2)（S＝1/30）



第54図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1-2遺物出土状況（E区）（S＝1/30）



第55図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1-2遺物出土状況（W－1区）（S＝1/30）

を確認した後、試掘を入れたところ、溝のセクションにおいて切り合いが認められた。全体としては、溝１と呼称するが、古い溝を溝１の１、切っている新しいものを溝１の２と名づけた。

＜平面形・規模＞

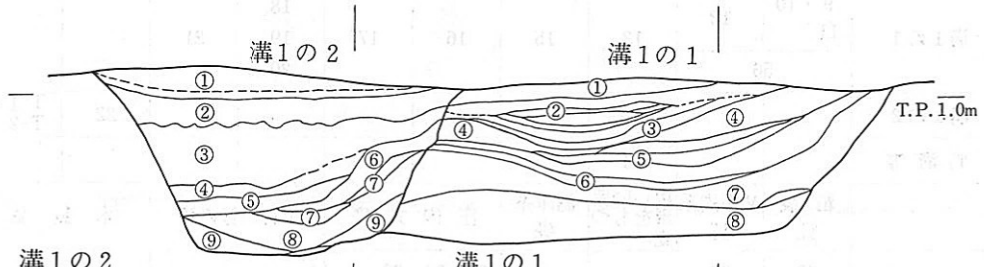
遺構は北側の一部を検出したのみで、全体の規模は不明。溝１の最大幅は2.5m、最小幅は2.2mである。深さは最深部のW－Ⅲ区においては 0.6mで、東に向かい徐々に浅くなる。E区においては深さ 0.4mであった。（新しい溝１の２の幅は1.2～1.4mで、溝１の１が埋没後、人為的に再掘削されたものであった。溝の中央より東側部分は上面遺構によって切られていた。15Aトレンチにおいては新しい溝に切られているため詳細は不明で、北側肩部のごく一部を検出したのみであった。16Aトレンチは西側の褐色粗砂層の下部に落ち込みが認められ、溝のコーナーの一部と考えられる。マンション建設予定地内において同時期と思われる円形周溝が調査されているが、この溝は隅丸方形周溝状をなすものと推定される。

＜堆積状況＞

溝１の１は基本的には、粘土と微砂がくり返し堆積しており、間に２層の炭化物層が認められる。遺物の多くは、これら２層の炭化物層（第３層・第６層）と第２層の炭化物混り青黒色粘微砂層から出土している。溝１の２は１の１が埋没した後に再掘削された状況を示していた。下層における４層（第６～９層）は互層化を呈し、半分位埋没した段階にやや強い流水があったため、下層を切るかのように第３・４層が堆積する。上位は砂のみで粘土化が認められない。 溝１－１が徐々に埋没することからやや長期間で、溝１－２は短期間で埋没した状況である。

＜性格＞

東大阪遺跡保護調査会が調査を実施したマンション建設予定地内(上野80)からも円形周溝が検出されていることからも、溝１の位置付けが問題となる。溝１の区画の内部からは土壙等は認められず、また砂層まで掘削が進んだ段階に断面の観察を行ったが盛土とする条件が全くなく、早急に方形周溝墓とするには根拠が弱い。しかし南半部を推定すれば、全体形が隅丸方形状をなす可能性が強く、この区画がいかなる性格を有するものか課題を残している。



溝１の２
①褐色混り青灰色微砂層
②炭混り青灰色微砂層
③炭混り青黒色微砂層
④青灰色微砂層
⑤青白色粗砂層
⑥炭化物層と青白色微砂の互層
⑦青黒色粘質微砂層
⑧炭化物層と青灰色微砂の互層
⑨青黒色微砂層

溝１の１
①褐色混り青灰色粘土層
②炭化物混り青黒色粘質微砂層（土器）
③第１炭化物層（土器）
④褐色微砂層
⑤褐色混り青白微砂層
⑥第２炭化物層（土器）
⑦炭化物混り青灰色粘土層
⑧炭化物混り青灰色微砂層

第56図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝１断面図（S＝1/50）

<遺物>

遺物は調査の都合により、大土壙の東側をE区とし、西側は3ヵ所に分け東からW—Ⅰ～Ⅲ区と命名し、区画別に取り上げた。

溝1—1は土器の出土が多く、特にW—Ⅲ区に多いことからW—Ⅲ区を中心に述べる。第1遺物出土層は、青黒色粘微砂層（第2層）で、甕等の小片が多い。肩部より下半が欠損していた壺形土器（10）、坏部を欠く小型高坏（17）、上部を欠く小型器台（16）、端部に波状文と円形浮文で飾られた壺形土器の口縁部（12）が出土している。第2遺物出土層は、第1炭化物層で第1遺物出土層より残りがよい。完形に近い生駒生麓産の胎土をもつ庄内式の甕（57）、肩部に縦2個の刺突をもつ酒津式の甕（34）、壺（9・11）、壺の胴部（56）、他には甕口頸部（28・39・40・47）が出土する。第3遺物出土層は、第2炭化物層にあたり、小型の鉢（18）、が出土した。W—Ⅱ区は若干の遺物が出土しており、W—Ⅰ区においてやや古い酒津式の甕の口縁部（33）が出土した。

溝1—2は木器の出土が多く、特にE区に認められた。E区の底部から出土した木器には、複合式の手綱枠（W 177）がやや離れて出土し、複雑な加工を加えた不明木製品（W 181）も出土している。東側側溝から小型の手斧柄（W 178）も出土している。W—Ⅱ区から剣状木製品（W 182）と船底形を呈する組合せ木製品（W 179）が、W—Ⅲ区からは片口（W 180）が出土している。以上の木器は下層・底部に上面から出土をみた。土器は少なく、W—Ⅰ区において、北側肩部付近から数点の甕（23・30・35・41）がほぼ集中して検出された。これは肩部に置かれていたものが壊れ溝に落ち込んだ状況が考えられる。またW—Ⅱ区の底部からは粗製の鉢（22）が出土した。その他に溝1—2からは土器が出土している。これらの出土状況から、溝1—1の遺物は廃棄された可能性が強く、溝1の2は河川による流水による流入であろう。

第12表　古墳時代Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物表

	広口壺	装飾壺	高杯	ミニチュア土器	小型器台	小型高杯	小型鉢	鉢	粗製鉢	土錐
溝1の1	9・10 11 56	12	13	15	16	17	18 19 20	21		
溝1の2									22	T-1・ T-2
側溝等			14							

	粗製甕	V様式系甕	新しい要素をもつ甕	酒津系甕	庄内式甕	単純口縁の甕	木製品
溝1の1	23 24 25	26 28 29	31	33 34	35・38・39 40・41・42 45・47・48・57	49・50 51・55	
溝1の2			30		43		W 179・W 180 W 181・W 182
側溝等		27	32		36・37・44・46	52・53・54	W 178

＜木製品＞　（第62・63図、図版141～144・147）（W177～182・205・207）

手網枠（W 177）は、サカキの二又に分れた枝の部分を利用して同様な形のものを２個つくり、それを組合せ、手網枠として使用した。枠の部分は枝払いし樹皮を剝いでおり、その基部直径1.5×1.2㎝を測り、先端にいくにつれて徐々に細くなる。先端部径1.0×0.9㎝。そして先端部は、両方とも片面を扁平に削り組合せる手段としている。一方は先端を有頭状につくり、他方はそのまま扁平につくっている。その部分をあわせて丸い枠にする。枠には約5.7～3.6㎝間隔に直径２～３㎜の孔があいており、孔の中には繊維状のものがつまっていた。これが網の原材料とみられる。右側の枠の部分には、15個の孔があり、左側の枠には10個の孔がある。枠の長さは左右で異なり、左側の部分で欠損部がみられるが、ほぼ、いきている。新潟県千種遺跡[注1]のさくらの皮をまいて緊縛した手網枠と同様な結び方をしたと考えられる。着装部は、樹幹をたてに割り下の方へ先細りになるように削る。上端部に小さな突起がつくられる。着装部の長さは二又部分から15.2㎝を測る。２個の枠で柄を挾みこみ、ツタや樹皮などを巻いて取りつけたと考えられる。

手斧柄（W 178）は小型品である。柄は直径1.5×1.2㎝で下端部が焼けて炭化している。台部の上面は平らで、先端部は柄状に（幅1.2、厚1.0㎝）つくられ、２個孔がある。（直径3.0～4.0㎜）その部分に斧身を装着させたものと考えられる。材質は不明で、全面丁寧な加工痕がある。

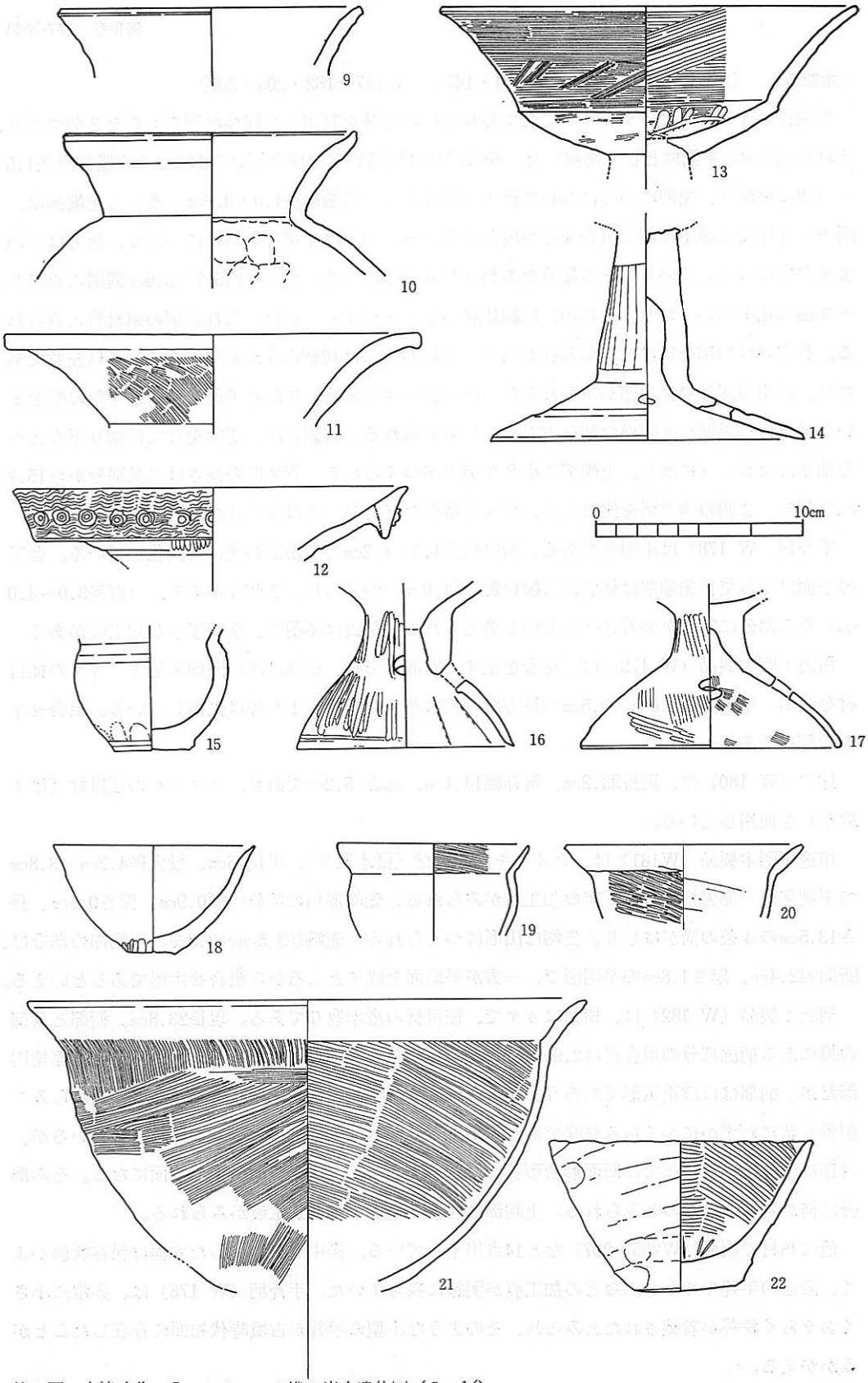
用途不明木製品（W 179）は、舟形を呈す。断面台形状、裏面は浅い凹面を呈す。カヤの柾目材を使用。中央部に1.6㎝×0.8㎝の長方形の柄穴が２個ある。下端部は欠損している。組合せ木器の部材である。

片口（W 180）は、現長33.2㎝、現存幅14.1㎝、高さ 5.2㎝であり、クスノキの柾目材（縦木取り）を使用している。

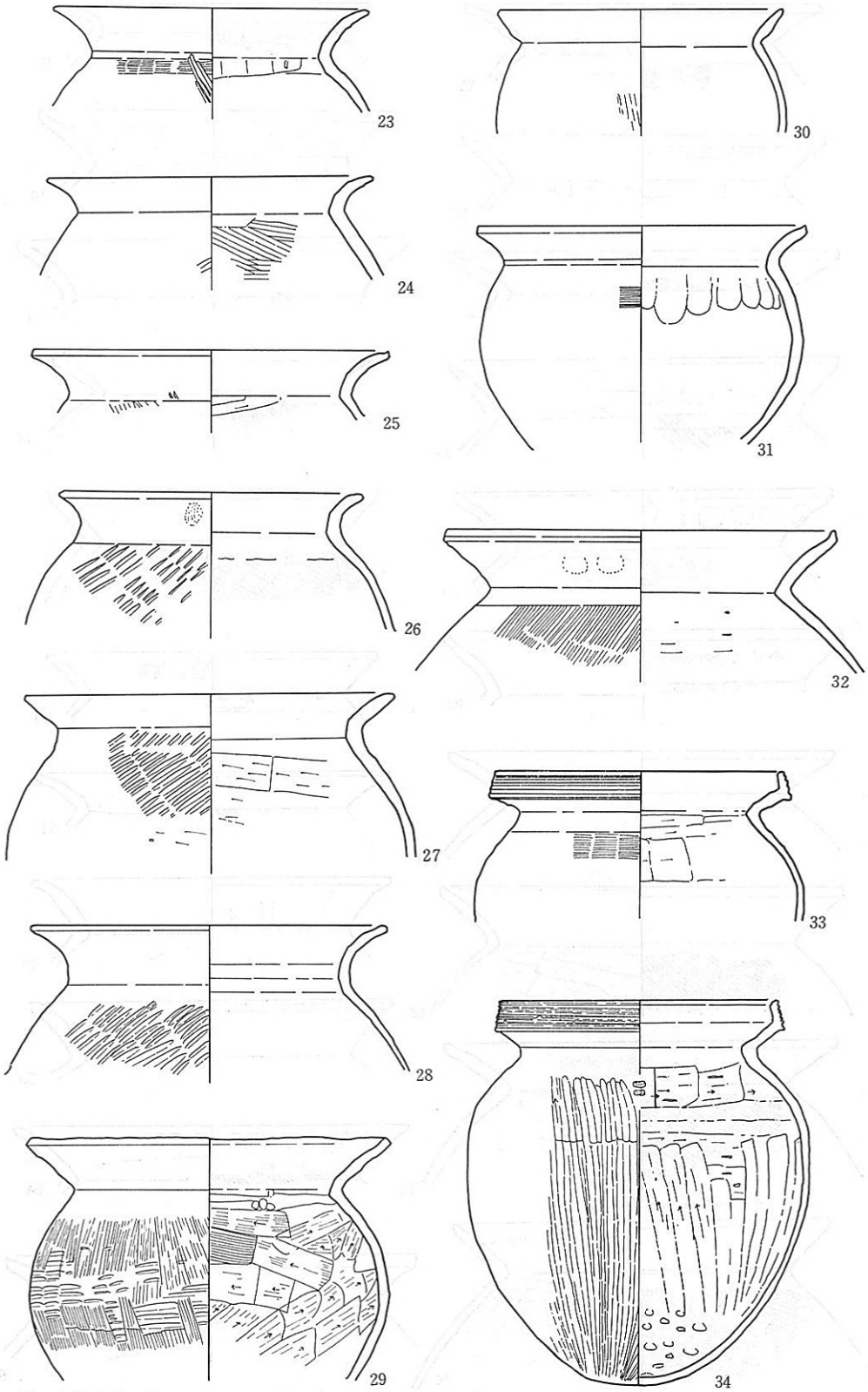
用途不明木製品（W181）は、シイノキの柾目材（縦木取り）、現長45㎝、最大径4.2㎝×3.8㎝で下端部が一部欠損。全面丁寧な加工痕がみられる。先端部⅓の部分に幅0.9㎝、深さ0.5㎝、長さ13.5㎝の４条の溝がはしり、先端は山形につくられる。先端径3.8㎝×3.3㎝。下端部の部分は、断面幅2.4㎝、厚さ1.8㎝の半円形で、一方が平坦面を成すところから組合せ木器であるといえる。

柄状木製品（W 182）は、樹種はカヤで、柾目材の縦木取りである。現長23.8㎝。柄部と身部の境にある柄尻部分の現存径は2.9㎝×2.6㎝（復元径４× 3.5㎝）である。柄尻部分は断面楕円形だが、柄部はほぼ正円形であろう。柄の部分は下に行くにつれてやや細くなり、側面からみて胴張り状にわずかにふくらみ気味である。柄尻部分は⅗位欠損し、身部も一部欠損しているが、身部は中心に、現存部では断面形台形状になり、正面は、台形、裏面は平らな面になる。その部分に何か着装したものとみられる。上端部は欠損。全面丁寧な加工痕がみられる。

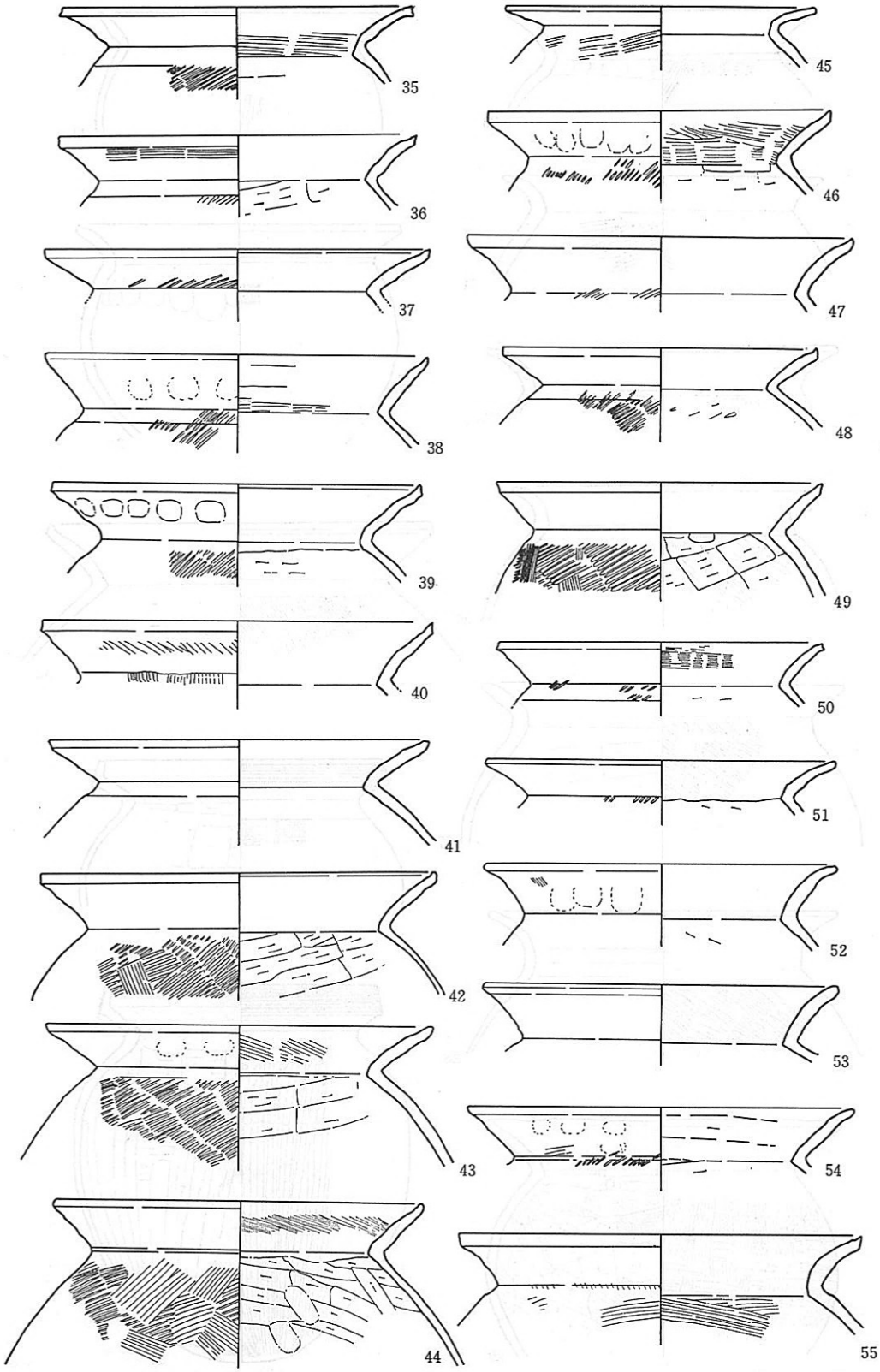
他に角材や板材（W205・207）など14点出土している。溝中から出土した木器は保存状態がよく、表面の手斧ややりがんなどの加工痕が明瞭に残っていた。手斧柄（W 178）は、非常に小さくおそらく鉄斧が着装されたとみられ、そのような小型の手斧が古墳時代初頭に存在したことがうかがえる。



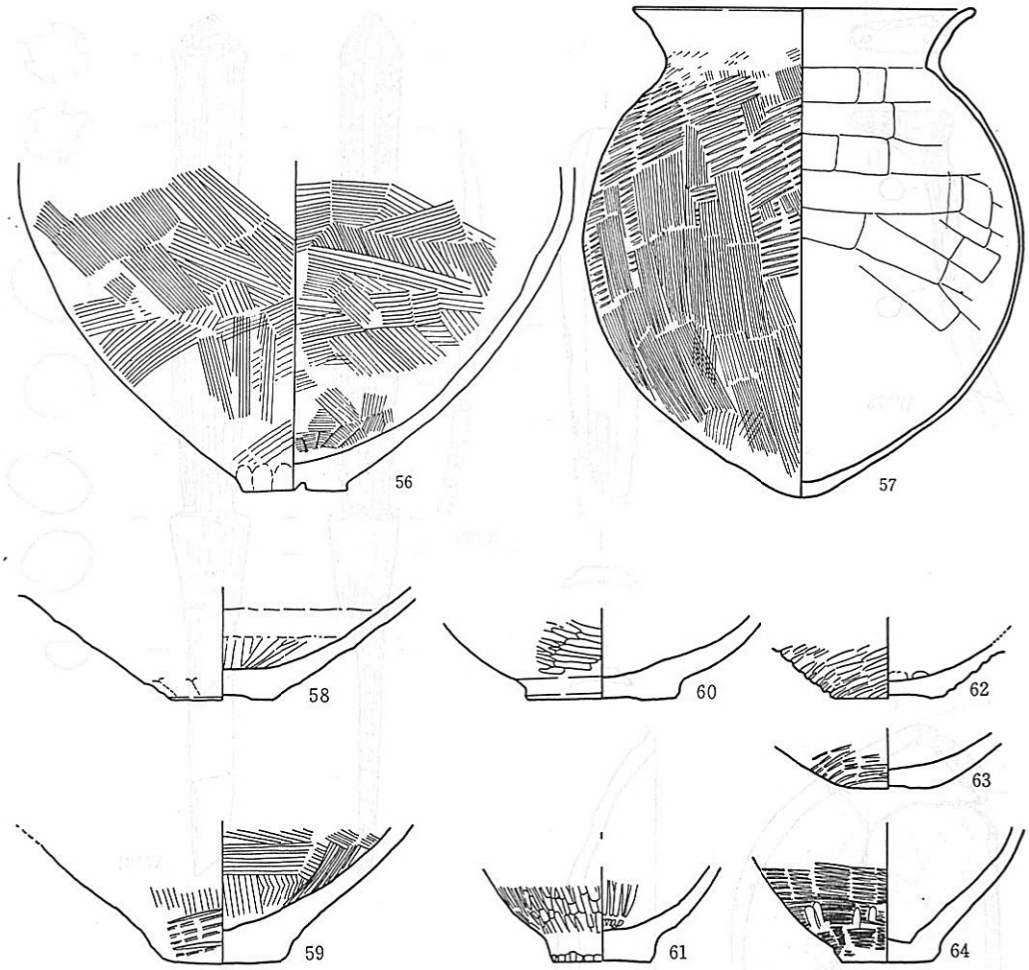
第57図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(1)（S＝1/3）



第58図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(2)（S＝1/3）



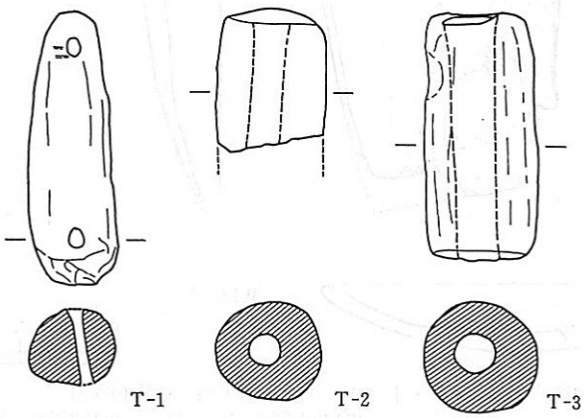
第59図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(3)（S＝⅓）



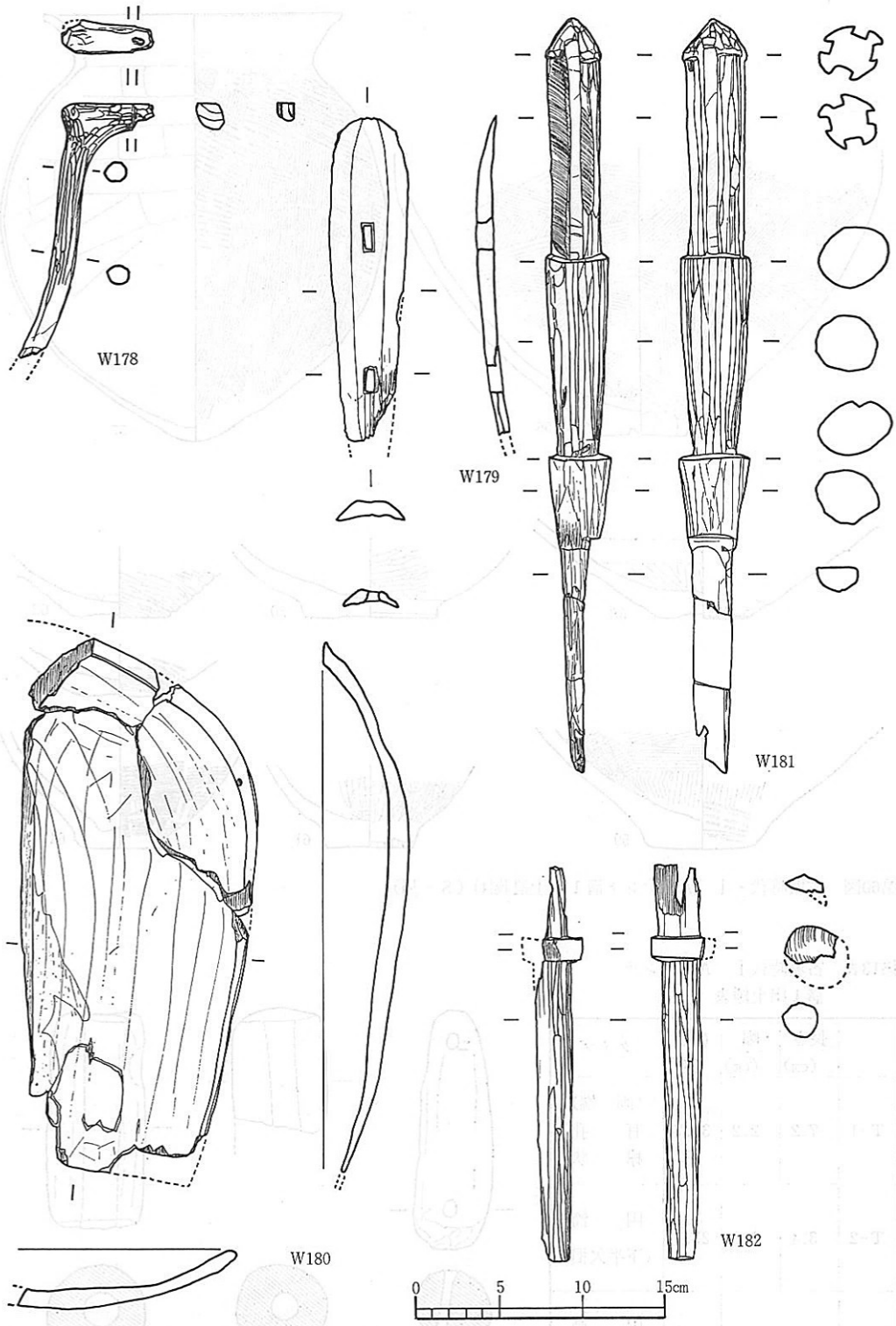
第60図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(4)（S＝1/3）

第13表　古墳時代Ⅰ　Aトレンチ
溝1出土錘表

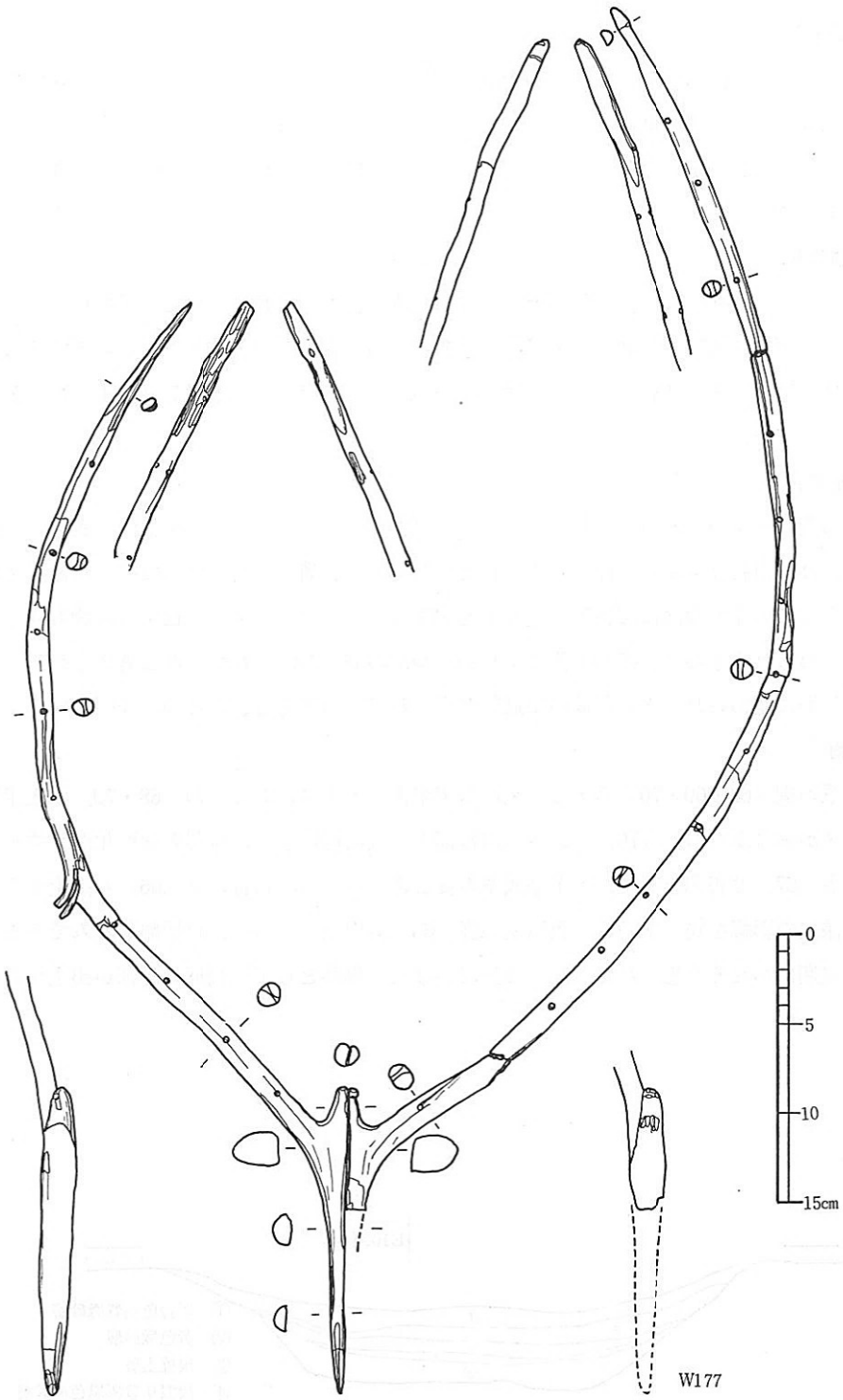
	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	タイプ
T-1	7.2	2.2	33.7	(両端) 有孔 棒状
T-2	3.4	2.8	27.1	円筒 (下半欠損)
T-3	6.4	3.0	65.2	円筒 (完形)



第61図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(5)土錘（S＝1/2）



第62図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(6)木器
W178小型手斧柄（¼）、W179用途不明木製品（¼）、W180片口（¼）、
W181用途不明木製品（¼）、W182柄状木製品（¼）



第63図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝1出土遺物(7)木器
W177たも枠（1/4）

溝２

＜位置・規模＞

16Aトレンチで検出した、長さ約 5.0mで南北方向に位置している。北端は幅約３mをなすが非常に浅く、深さは 0.2m程度、南に行くにつれてすぼまり遺物が集中して出土する付近の幅は1.7m、深さは約0.5mとなる。全体的な形状は不定形で溝というより落ち込みというべきかもしれないものである。

＜堆積状況＞

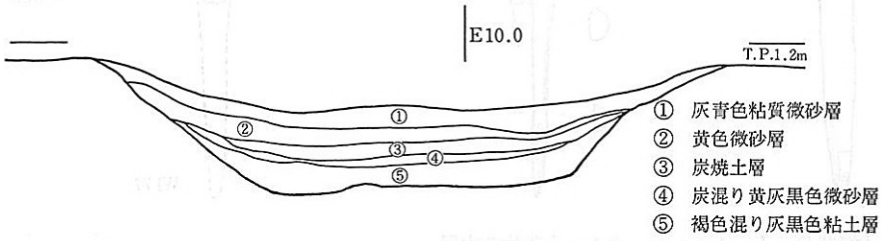
セクションを観察すれば、青色粘土面から切り込み、溝内は６層にわたり堆積している。特徴的なことは灰黄色微砂（第２層）・炭層（第３層）が、東側の肩部にまで上がっていくことである。遺物は第２層・第３層中から出土するものがほとんどである。土器７（追１）のみが第１層中に含まれていた。

＜出土状況＞

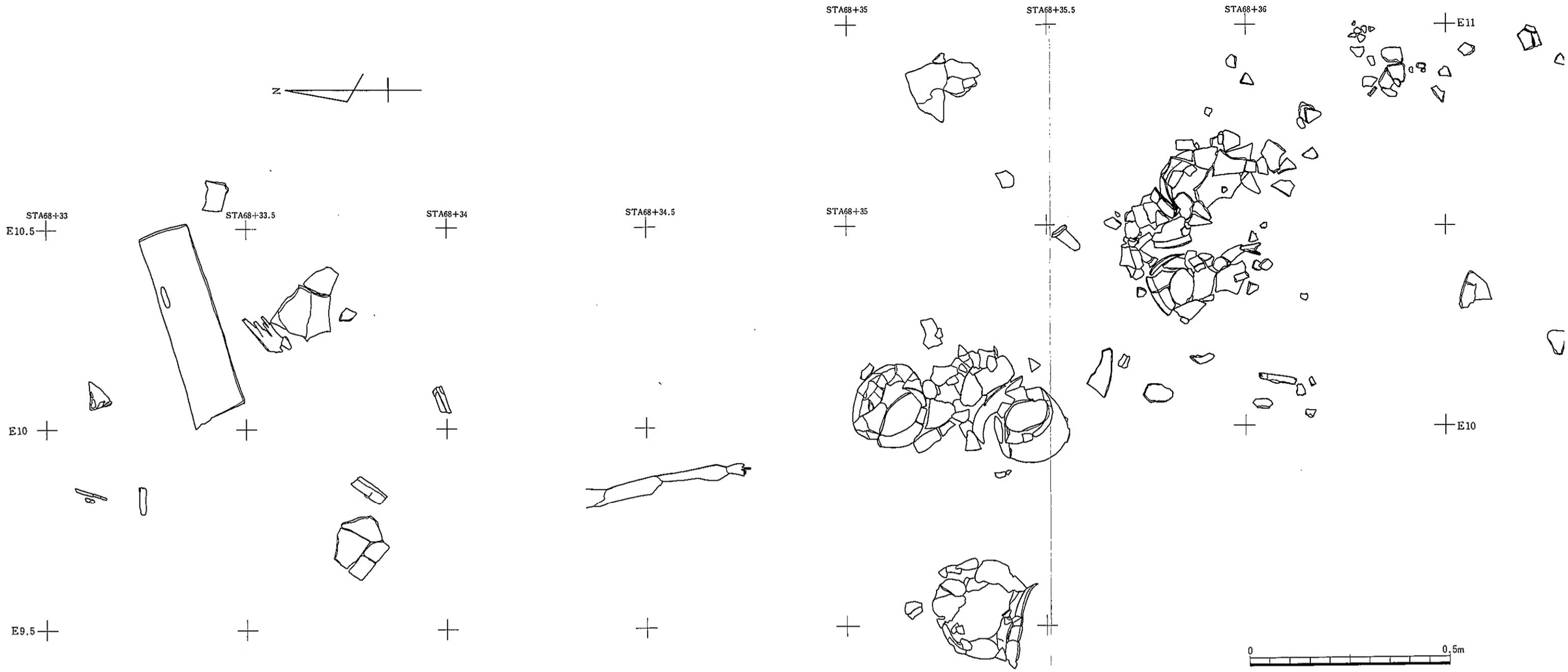
多くの遺物が集中する中央より南付近の遺物は、東側の肩部の上面、傾斜面、底部の東端に片寄っており、当初は東側の肩部に設置されていたものが、溝内に落ち込んでいったと考えられる。溝中に入っているものはほぼ完形に近く復元することができ、肩部に散在する遺物も同一個体のものと認められるもので、後の影響によりいくつかの破片が流されたものと考えられる。肩部の上・傾斜面に認められる灰黄色微砂に遺物が含まれていることも、ひとつの証明といえよう。

＜遺物＞

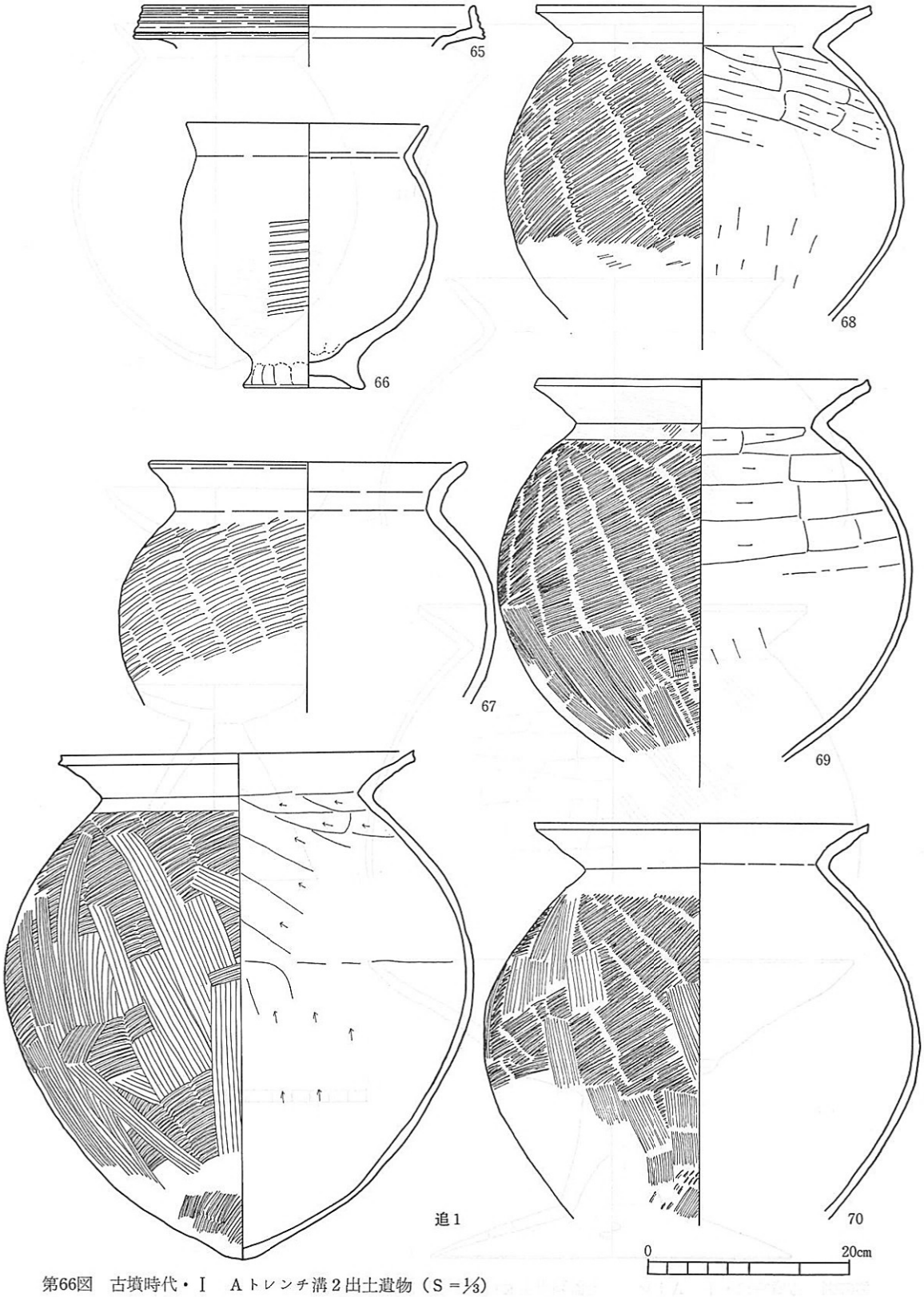
河内系の甕（68・69・70）がある。胴部の下半部にハケメがあるもの（68・79）、上半部にまでハケメがおよぶもの、（70）がある。口縁部も単純口縁に近く、胴部も球形化がすすんでいる。粗製の甕（67）は底部をもつ、第Ⅴ様式系の甕と考えられる。台付の甕（66）も出土するがこれも第Ⅴ様式の影響を残している。酒津系の甕（65）も出土しており、口縁端部のみであるが、才ノ町Ⅱ式期にあたると思われる。遺物は甕ばかりで、例外として、高杯の脚部が出土するのみである。



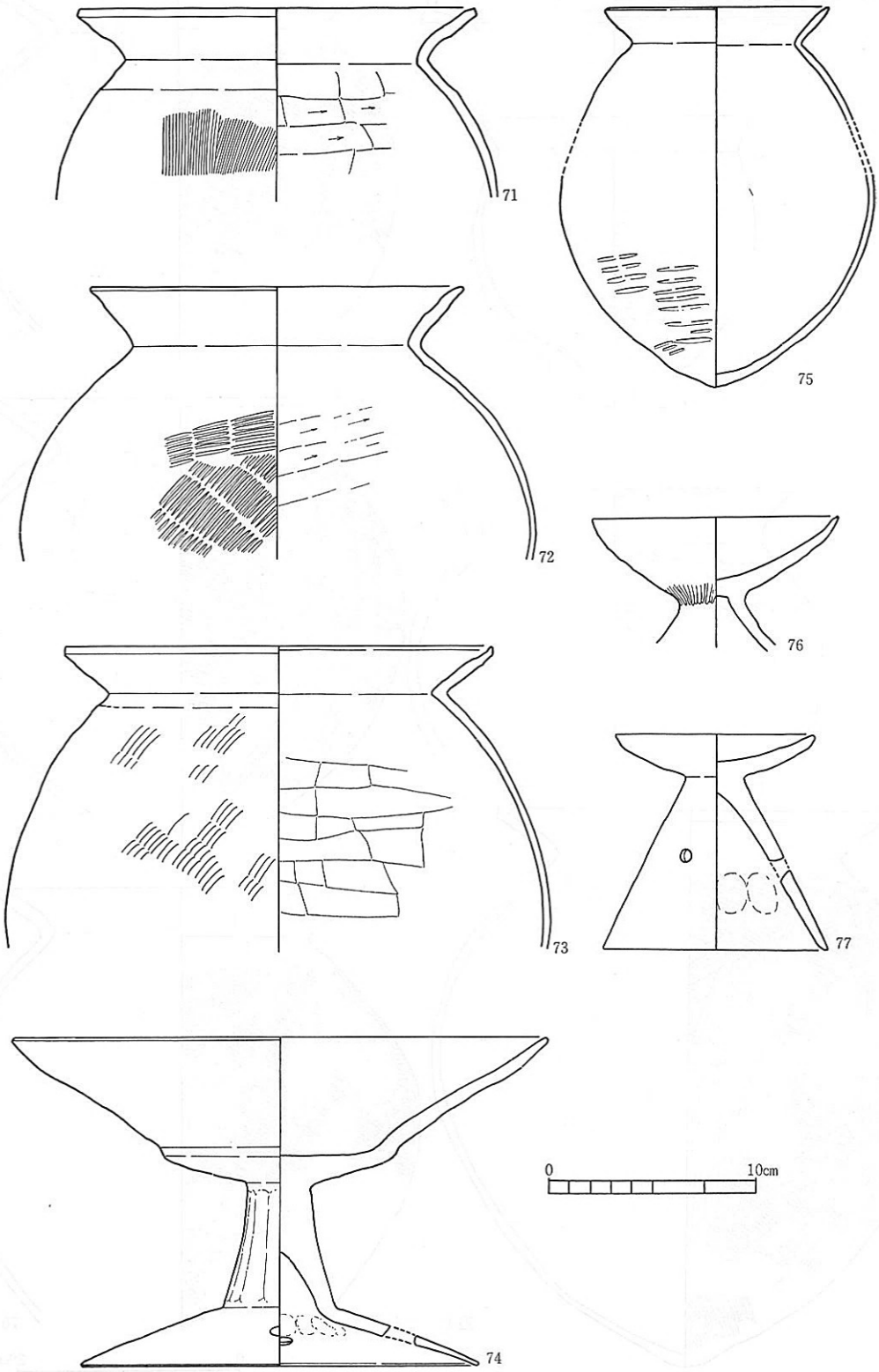
第64図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝２東西断面図（S＝1/20）



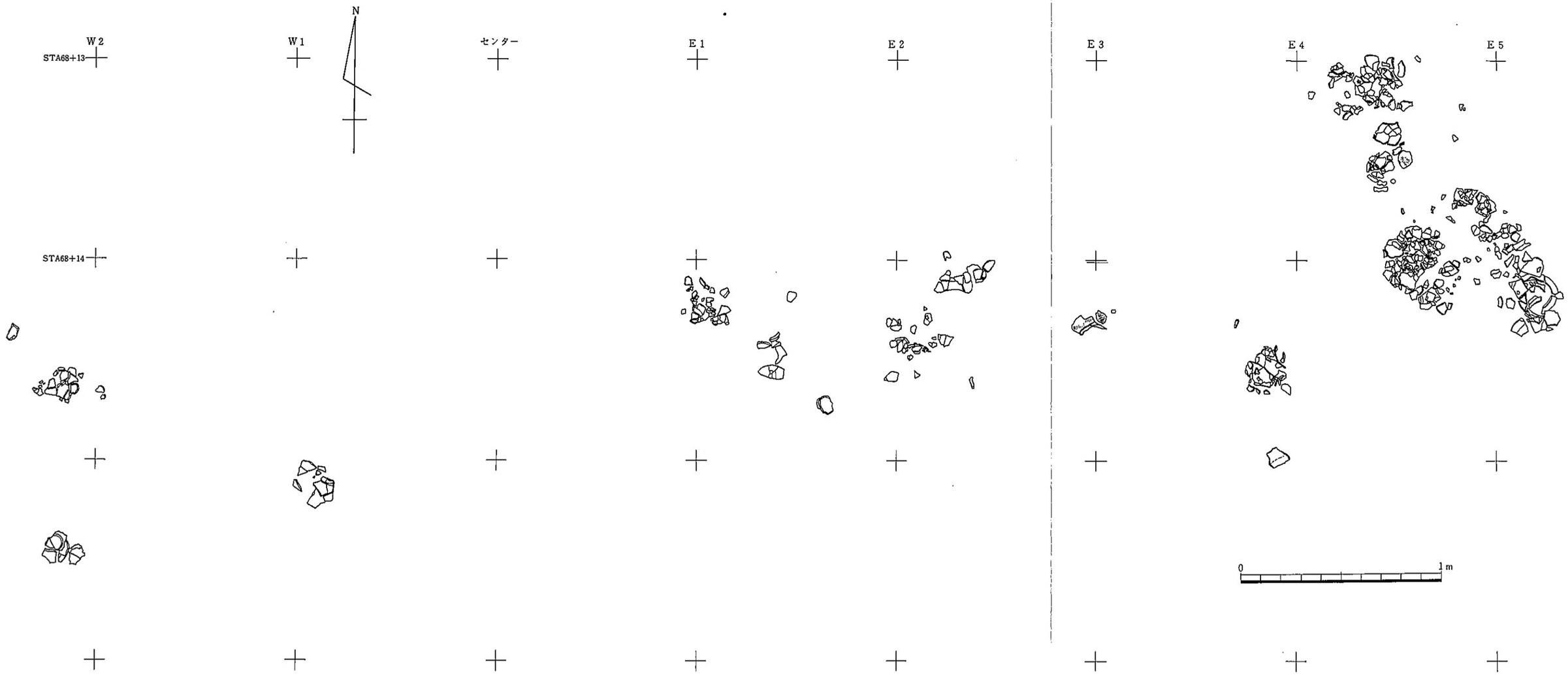
第65図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝2遺物出土状況図（S＝1/10）



第66図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ溝2出土遺物（S＝⅓）



第67図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ土器列出土遺物（S＝⅓）



第68図　古墳時代・Ⅰ　Aトレンチ土器列遺物出土状況図（S＝1/20）

土器列

＜位置＞

Ａトレンチ南端、ＳＴＡ68＋13～15付近に東西に並んで出土している。遺物間の間隔は不均等で明瞭に一列には並ぶものではないが、一応土器列と呼ぶこととする。遺物は、特に西側においては古墳時代後期面より顔を出しており、削平などの影響も考えられる。そのために残存状態が悪いと言えよう。西側側溝においてもＳＴＡ68＋10～12の地点で遺物を検出しており、14ＡトレンチにおいてもＳＴＡ68＋11.5・Ｅ９で庄内式の甕一点が単独で出土したことから同じ土器列のものと考えられる。

＜遺物＞

西側側溝から、甕・小型器台（77）が、西側からは肩部に突帯をもち、突帯の下部を波状文と爪形文で飾る壺が出土する。Ｅ１～３付近には壺の破片・高杯・小型高杯（76）が、東側には甕（71・72・73・75）が集中して出土している。これらの甕は口縁部を下にして設置されていた。ほぼ一個体になるものが多いが、小破片に粉砕されており復元が不可能であった。このようにＥ２から東においては甕が置かれており、西は、壺・高杯・小型高杯・小型器台などの器種が集まっていることから、何らかの意図があったのではないだろうか。

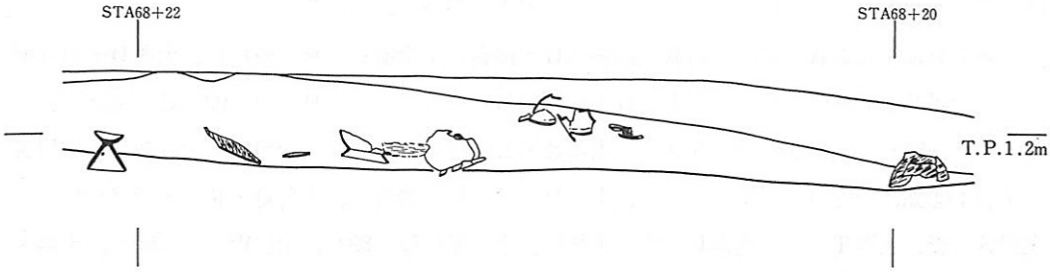
以下、出土遺物の器種について簡単に記述する。

西側側溝―小型器台・甕、土器Ⅰ―壺、土器Ⅱ―壺（底部）、土器Ⅲ―壺（土器Ⅰと同一個体）、土器Ⅳ―壺、土器Ⅴ―高杯、土器Ⅵ―小型高杯、土器Ⅶ・Ⅷ―甕、土器Ⅸ―甕、土器Ⅹ―甕、土器Ⅺ―甕、土器Ⅻ・XIII―甕、土器XIV―甕、土器XV―甕、土器XVI―甕、14Ａ―甕

Ａトレンチ褐色粗砂層

Ａトレンチ・ＳＴＡ68＋20～24まで、Ｅ１から西に向けて20数㎡にわたり粗砂が堆積していた。あたかも遺物を取囲むかのように、小さな凹みが形成され、ほとんどの遺物が庄内・Ⅲ面の互層上面に出来た凹みに納まっていた。第○○図は側溝から見た出土状況であるが、多くの遺物は互層上面において検出されており、ごく一部互層中に入るものも認められるが、粗砂出土の遺物として取扱った。特に、Ｗ３～Ｗ５にかけては粗砂が部厚く形成され、遺物を多く見ることから、本来的にこの区域が低かったことにより、ここに定着したものと考えられる。

このように、多くの遺物が流れ込んでくる要因としては、Ｂトレンチの自然河川の影響といえ



第69図　古墳時代・Ⅰ　３Ａトレンチ粗砂層遺物出土層位（W4.95ラインからの見通し）（Ｓ＝1/20）

よう。庄内期に属する、粘土と微砂の互層は自然河川によって形成された自然堤防というべきもので、粗砂は急激な流れによる「オーバーフロー」によるものであった。この粗砂層は16Aトレンチにおいても認められるが、ＳＴＡ68＋15より北方においては全く検出を見なかったこともから、河川から離れると影響を及ぼされなかった証しであろう。周辺の遺跡においても、庄内から布留期において洪水が存在した例が多く、洪水による自然河川の氾濫が予測される。このことは遺物がローリングを受け磨滅していることや、完形遺物が少ないことも、流入によったことを表現している。

＜土壙＞

粗砂が分布する区域の南側（ＳＴＡ68＋22～24・W2.5～Ｗ５）に、古墳時代後期に掘られた、土壙が存在する。この土壙は長径2.4m、短径1.2mの不整楕円形を呈していた。この土壙底部において、庄内式の遺物が出土している。この土壙内から出土した高杯・杯部と土壙北側肩部の粗砂層から出土した高杯が接合した。土壙上層においては須恵器の破片が出土しているが、これは埋没時に入ってきたものといえる。後世に土壙が掘削された時点において、粗砂層から出てくる遺物を、土壙内に戻したものと考えられる。このことから土壙下層の遺物は粗砂層の遺物と同一のものと考えている。

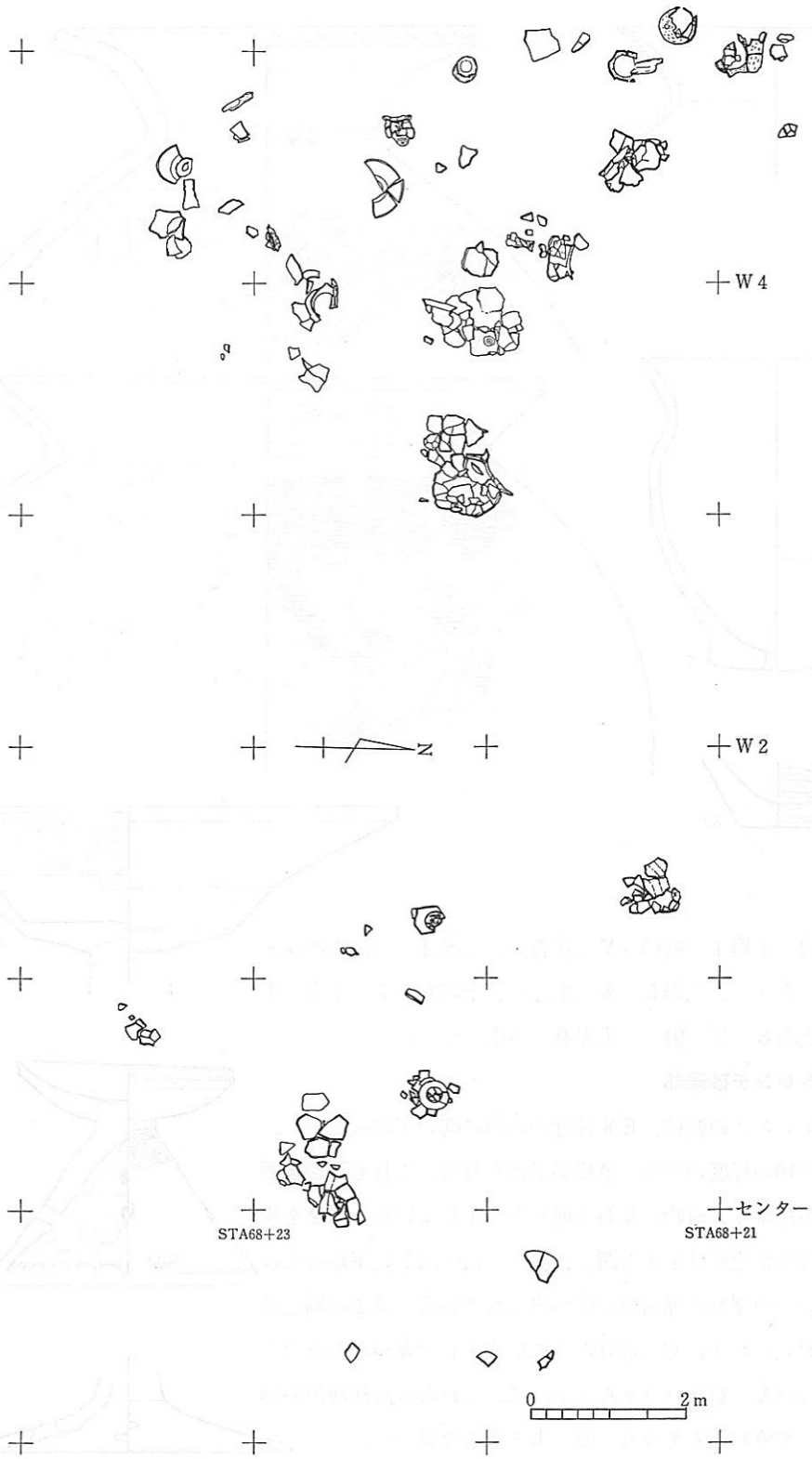
＜遺物＞

全体的に、遺物の表面に磨滅が認められるものが多く、ローリングを受けたものと思われる。まず、小型の甕（79）のように第Ⅴ様式系の甕が残っている。庄内期に属する甕（88）にしても、頸部に強いヨコナデが入り、口縁をやや外反ぎみに開く。甕（87）にしても、端部が丸い単純口縁であるが、頸部に強いヨコナデを持っている。甕（90）は典型的な庄内式の甕で、82の甕は大型のもの、甕（86）は粗製のものである。91・92の２点の甕は全体的にハケメを施し、胎土の色調も明褐色で他と異にしている。口縁部形状・体部形態は庄内式の影響を残しているが、全面にハケメを施し、頸部のみでなく肩部にも強いナデを施しており、布留式的な傾向をもっている。小型器台（83）も、土器列の小型器台に較べると、口縁部の立ち上がりが強く、やや新しい傾向を示している。壺（81）は口縁端部を列点文で飾り、壺（78）は装飾をもたない。80は製塩土器と思われ、84は高杯の裾部である。

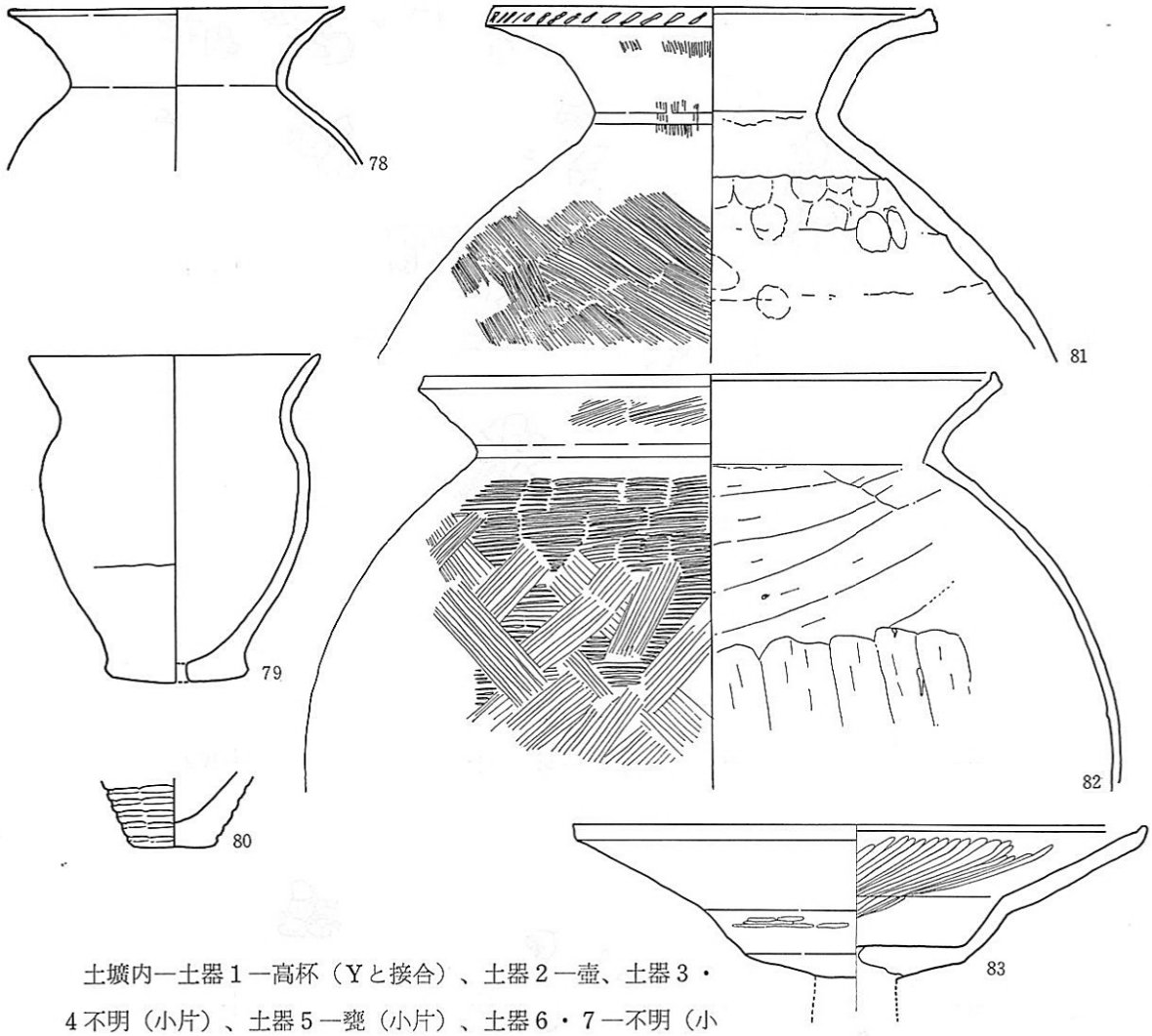
出土の遺物の器種を簡単に記述する。

側溝、土器１―甕（87、土器６と接合）、土器２―甕（小片）、土器３―甕（86）、土器４―甕（82）、土器５―甕（89）、土器６―甕（土器１と接合）、土器７―小型器台（83）

トレンチ部　土器Ａ―甕、土器Ｂ―高杯（Ｇと接合）、土器Ｃ―甕（破片）、土器Ｄ―甕（破片）、土器Ｅ・Ｆ―甕（小片）、土器Ｇ―高杯（Ｂと接合）、土器Ｈ―甕（92、Ｃと接合）、土器Ｉ―壺（81）、土器Ｊ―壺（底部）、土器Ｋ・Ｌ―不明（小片）、土器Ｍ―壺（78）、土器Ｎ―①壺；②甕、土器Ｏ―不明（小片）、土器Ｐ―甕（Ｎと接合）、土器Ｑ・Ｒ―不明（小片）、土器Ｓ―甕、土器Ｔ―甕、土器Ｕ―甕（小片）、土器Ｖ―甕（88）、土器Ｗ―甕（90）、土器Ｘ―不明（小片）、土器Ｙ―高杯（84・土壙土器１と接合）、土器Ｚ―小型甕（79）



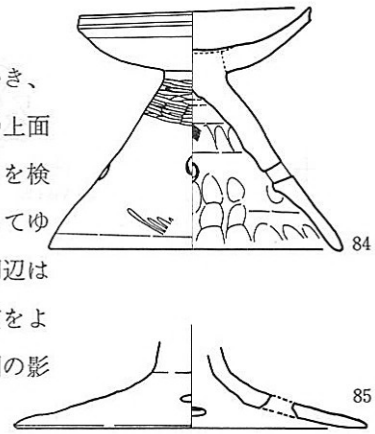
第70図　古墳時代・Ⅰ　3Aトレンチ粗砂層遺物出土状況図（S＝1/80）



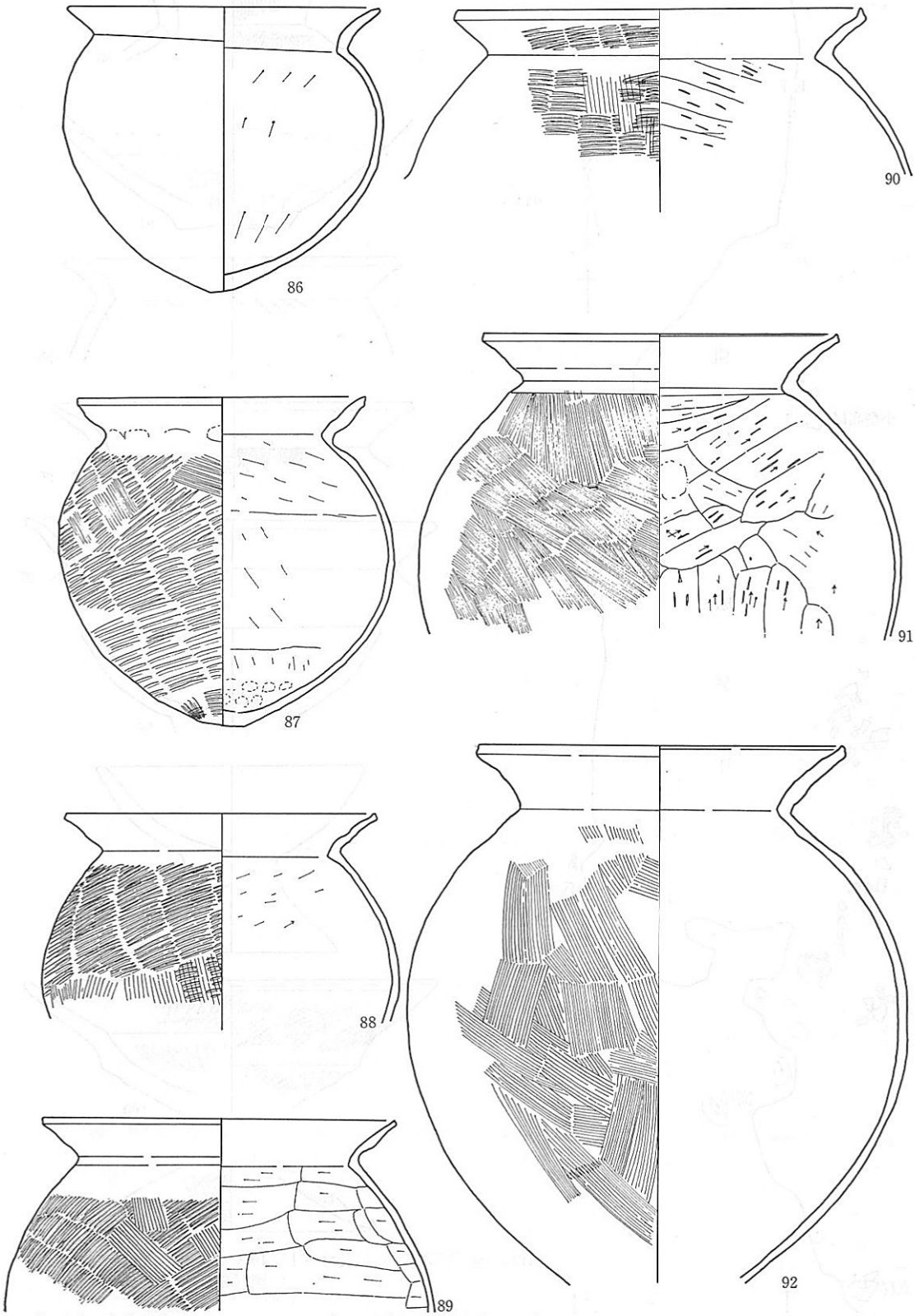
土壙内―土器１―高杯（Ｙと接合）、土器２―壺、土器３・４不明（小片）、土器５―甕（小片）、土器６・７―不明（小片）、土器８―甕（91）、土器９―不明（小片）

16Ａトレンチ砂礫部

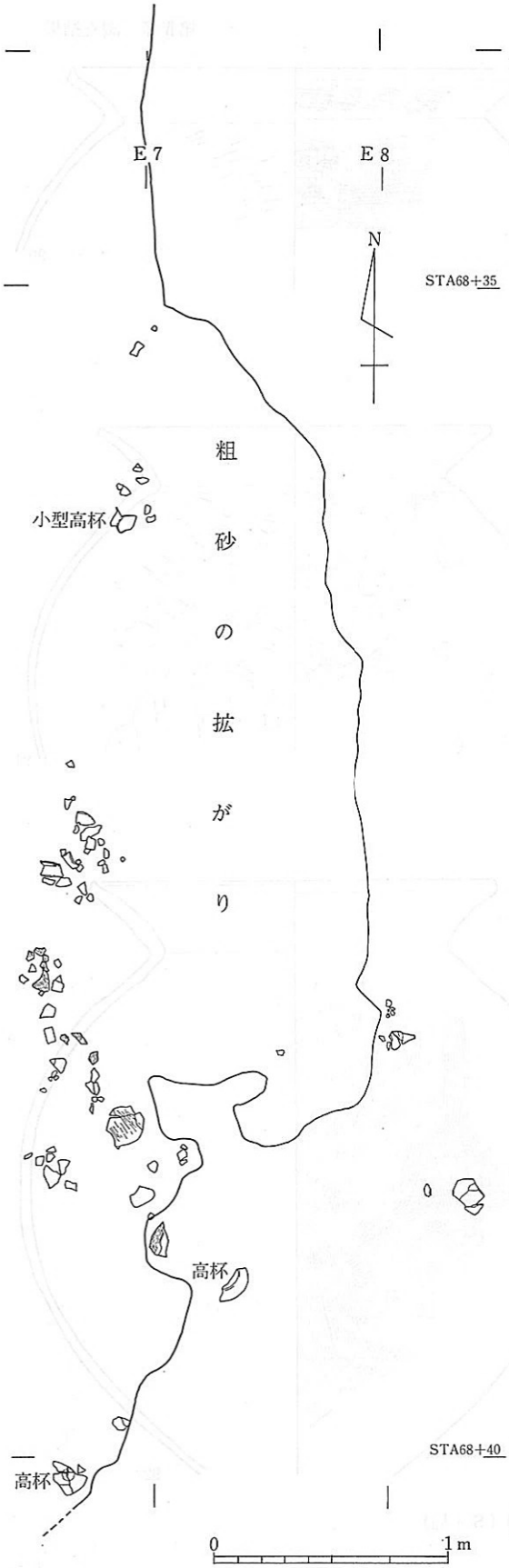
16Ａトレンチ西側は、Ｅ８付近から西に向い下がっていき、厚い所で10㎝程度の粗砂の堆積が認められた。これも互層上面の粗砂がたまり、遺物は互層上面から出土している。溝２を検出した青色粘土面は東から西へ、北から南へ向かい下がってゆき、低いこの部分に互層の形成が成されている。溝２の周辺は互層が形成されず、低い部分のみに形成された互層の性質をよく現している。遺物はほとんど小片で、これらも自然河川の影響によって流れ込んできたものと考えざるを得ない。

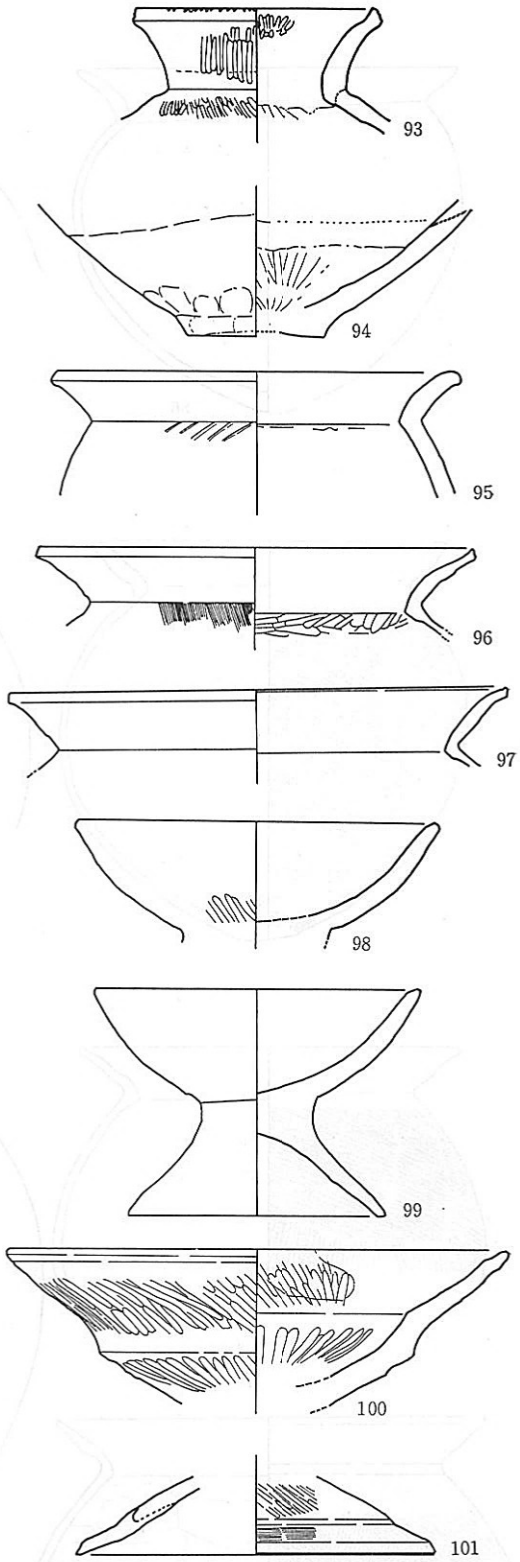


第71図　古墳時代・Ⅰ　３Ａトレンチ粗砂層出土遺物(1)（Ｓ＝⅓）



第72図　古墳時代・Ⅰ　3Aトレンチ粗砂層出土遺物(2)（S＝1/3）





STA68+40 第73図　古墳時代・Ⅰ　16Aトレンチ粗砂層遺物出土状況図（S＝1/30）

第74図　古墳時代・Ⅰ　16Aトレンチ粗砂層出土遺物（S＝1/3）

＜遺物＞

甕が４点、小型の広口壺が１点、高杯の杯部が１点、小型高杯が２点、高杯・杯部が１点出土。

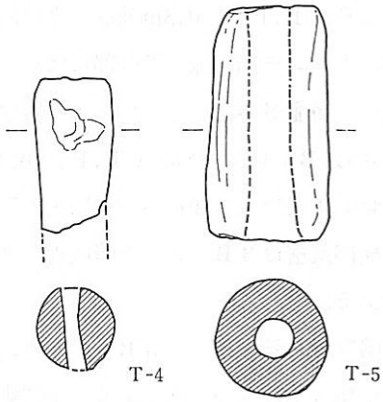
包含層他の出土遺物

庄内Ⅱの青灰色粘土の上面および庄内Ⅲの互層中から若干の遺物が出土している。103の甕はＳＴＡ68＋３、Ｅ 4.0地点で横たわって出土したほぼ完形のものである。102の酒津式の甕の口縁部はＳＴＡ68＋10、Ｅ４～５地点で出土している。107の左上11のタタキ目をもつ大和系の甕は残念ながら表採品であるが包含層出土のものとした。104の甕・口縁部も頸部に強いナデをもち、単純口縁化した新しい傾向の甕であろう。その他、土錘が２点Ｔ―４・Ｔ―５出土している。

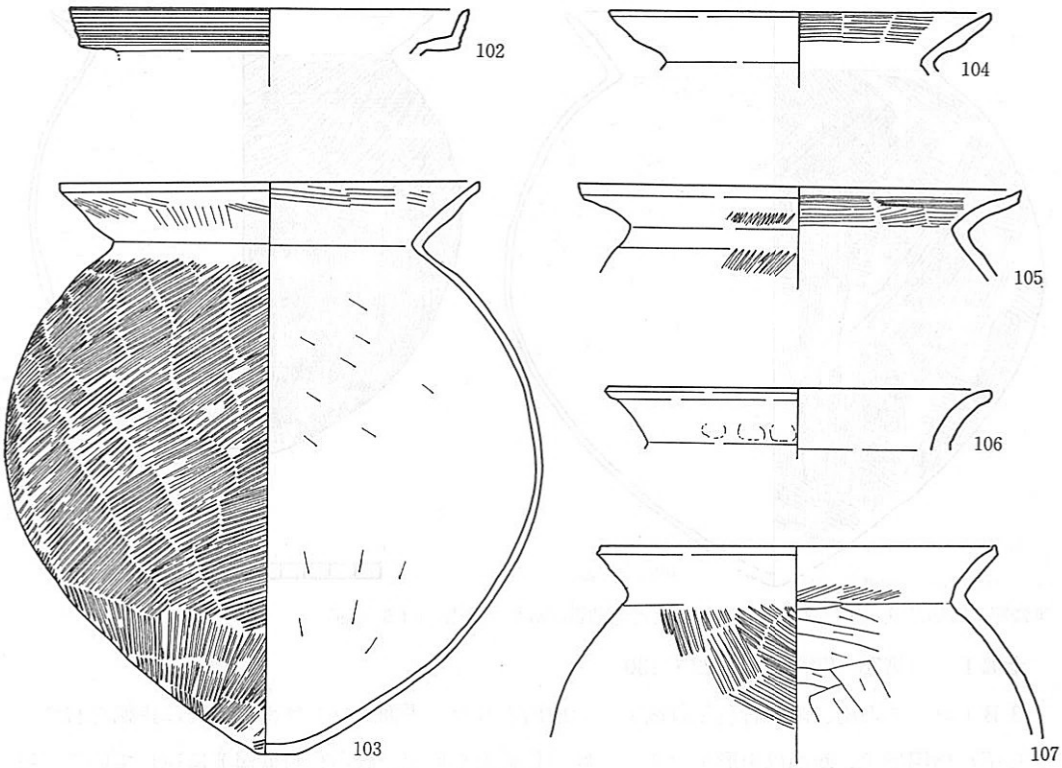
（村上）

第14表　古墳時代Ⅰ　Ａトレンチ包含出土土錘表

	長さ（cm）	幅（cm）	重さ（g）	タイプ
T-4	4.0	2.1	19.4	円　筒
T-5	6.2	3.2	68.4	円　筒



第76図　古墳時代・Ⅰ　Ａトレンチ庄内包含層出土遺物(2)土錘２点（Ｓ＝1/2）



第75図　古墳時代・Ⅰ　Ａトレンチ庄内包含層出土遺物(1)（Ｓ＝1/3）

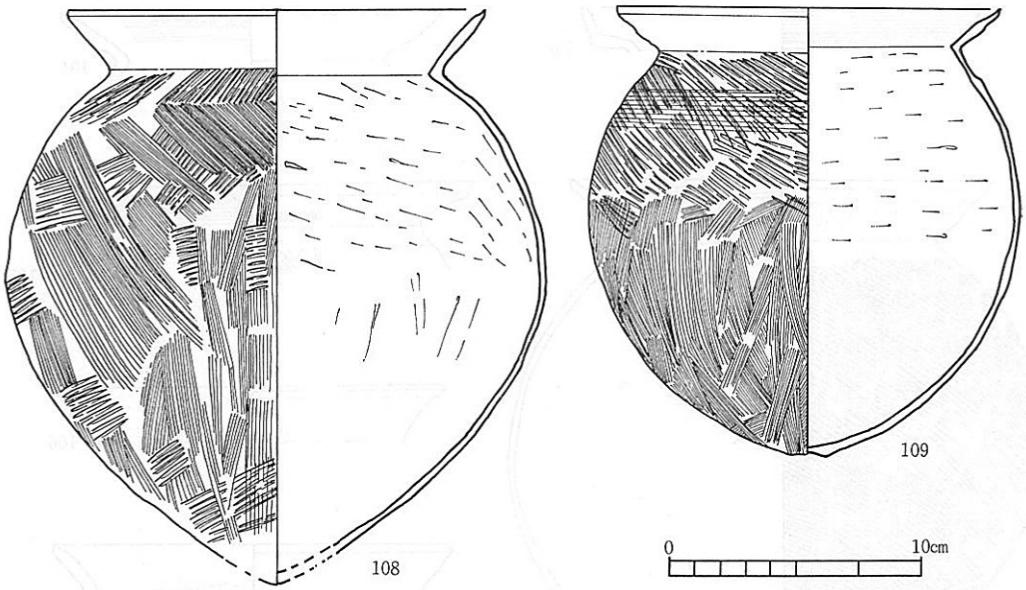
＜Bトレンチ庄内Ⅰ＞

概説　（第77図、図版130、付図3）

3Bトレンチにて始めて検出された遺構面で、トレンチ部、他の拡張部では不手際により面としては確認できなかった。3Bトレンチでは黒褐色粘土層Ⅱ上に暗灰青色粘微砂が堆積し遺構面となり、T.P.＋0.8m前後の平坦面を呈する。この粘微砂は4Bトレンチにも広がりを見せるが、トレンチ部、他の拡張部には存在せず、断面観察の結果これらの地区には相当層として黒褐色粘土層Ⅱが存在していた。この層はSTA69+13付近からT.P.＋0.7mの高さをもって広がり始め、Bトレンチ南端でT.P.+0.4mを測りCトレンチへと続いている。後述するよう、C・Dトレンチではこの層から土器類・木器類の出土をみるが、当トレンチでは全く検出されていない。

検出遺構は3Bトレンチ暗灰青色粘微砂上にての土壙1基のみで、黒褐色粘土層Ⅱ上には皆無である。

暗灰青色粘微砂は、3Bトレンチにて庄内式甕2点を包含していた。庄内式甕は、中型（108）と小型（109）の二者である。小型甕は、左下りの叩きが主体を占める河内技法において右下りである点注目される。両者の時期は中型甕口縁部に庄内式新段階のより新しい特徴が見られる点躊躇するが、小型甕の諸特徴と、庄内第2遺構より下位であり第1遺構面の包含層である点を考慮すれば庄内式新段階でも古相となる。



第77図　古墳時代・Ⅰ　3Bトレンチ暗灰青色粘質微砂層出土遺物（S＝⅓）

土壙1　（第78・79図、図版22・130）

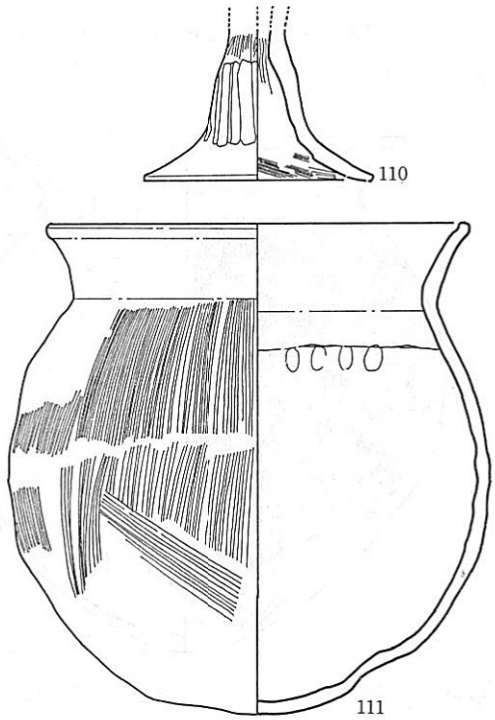
3Bトレンチの南、暗灰青色粘質微砂上で検出された。平面プランは南北方向に長軸を有する少し歪な楕円形で、断面は矩形を呈する。底は比較的平坦で、灰白色粗砂層Ⅱに達している。規模は、長軸推定1.1m、短軸0.96m、深さ平均0.55mを測る。埋土は、1層暗灰色粘質微砂・2

層暗灰色微砂・3層暗灰青色粘質土の三層に分離できる（第79図）。2層から3層にかけては、炭塊と焼土塊が集積し埋土が焼土化している。これは火が焚れた痕跡と見され、少なくとも3層は人為的埋積と認められる。

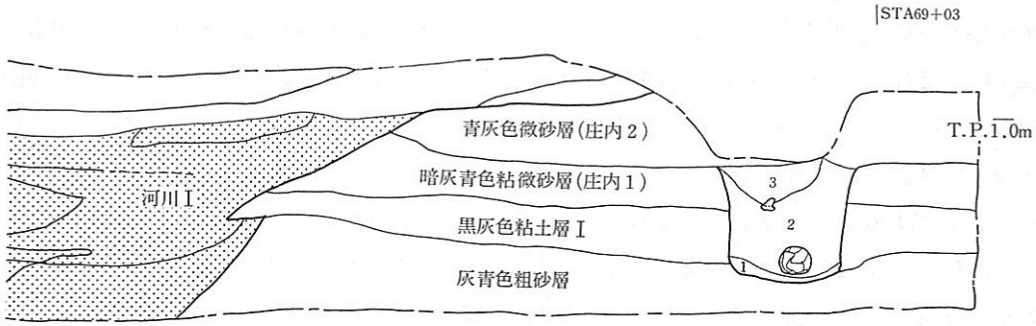
遺物として、3層からヒョウタン片が、2層から完形の甕（111）と庄内式甕破片が、2層上面から高杯の脚部（110）が検出されている。2層の甕は口縁部を横に向けて出土したが、体部内への埋土の流入はみられない。可能性として木製蓋の着装が予想される。

土壙の性格は、底が湧水層である灰白色粗砂Ⅱに達しているので井戸の可能性が高い。井戸としても、廃絶過程で火が焚かれている事実は注目される。

土壙の埋没時期は庄内式の範疇に収まるのは確かであるが、層位的にみて新段階新相までは降るまい。



第78図　古墳時代・Ⅰ　3Bトレンチ土壙1出土遺物（S＝1/3）



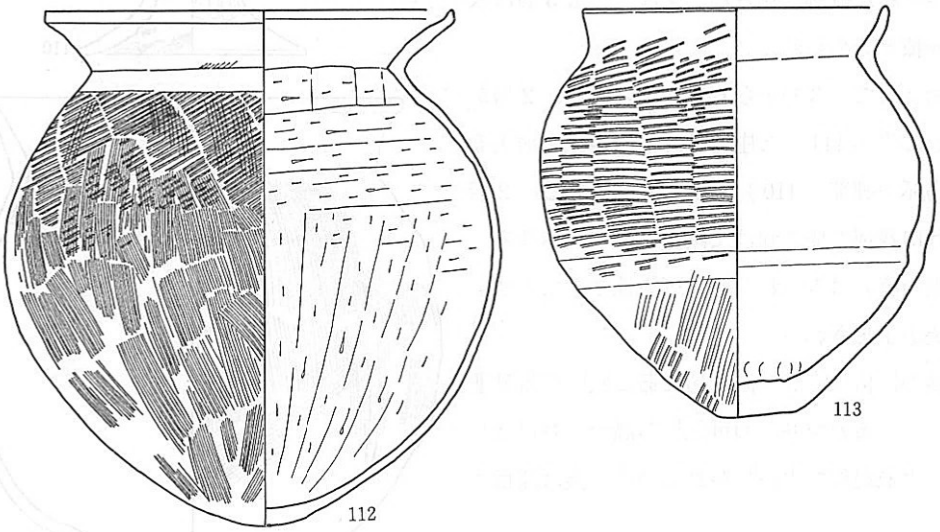
第79図　古墳時代・Ⅰ　3Bトレンチ土壙1南北断面図（S＝1/40）

＜C・Dトレンチ庄内Ⅰ＞

概説　（第80～82図、図版130）

Bトレンチ南半より伸びる黒褐色粘土層Ⅱに相当するが、上面にて遺構は全く検出されていない。この層は植物遺体を多く含み性質的にはピート層にちかく、土器・木器・自然木を包含する。層の性質上本来的に遺構が構築される基盤とは成り得ず、当時の状況としては湿地帯もしくは沼状が想定される。

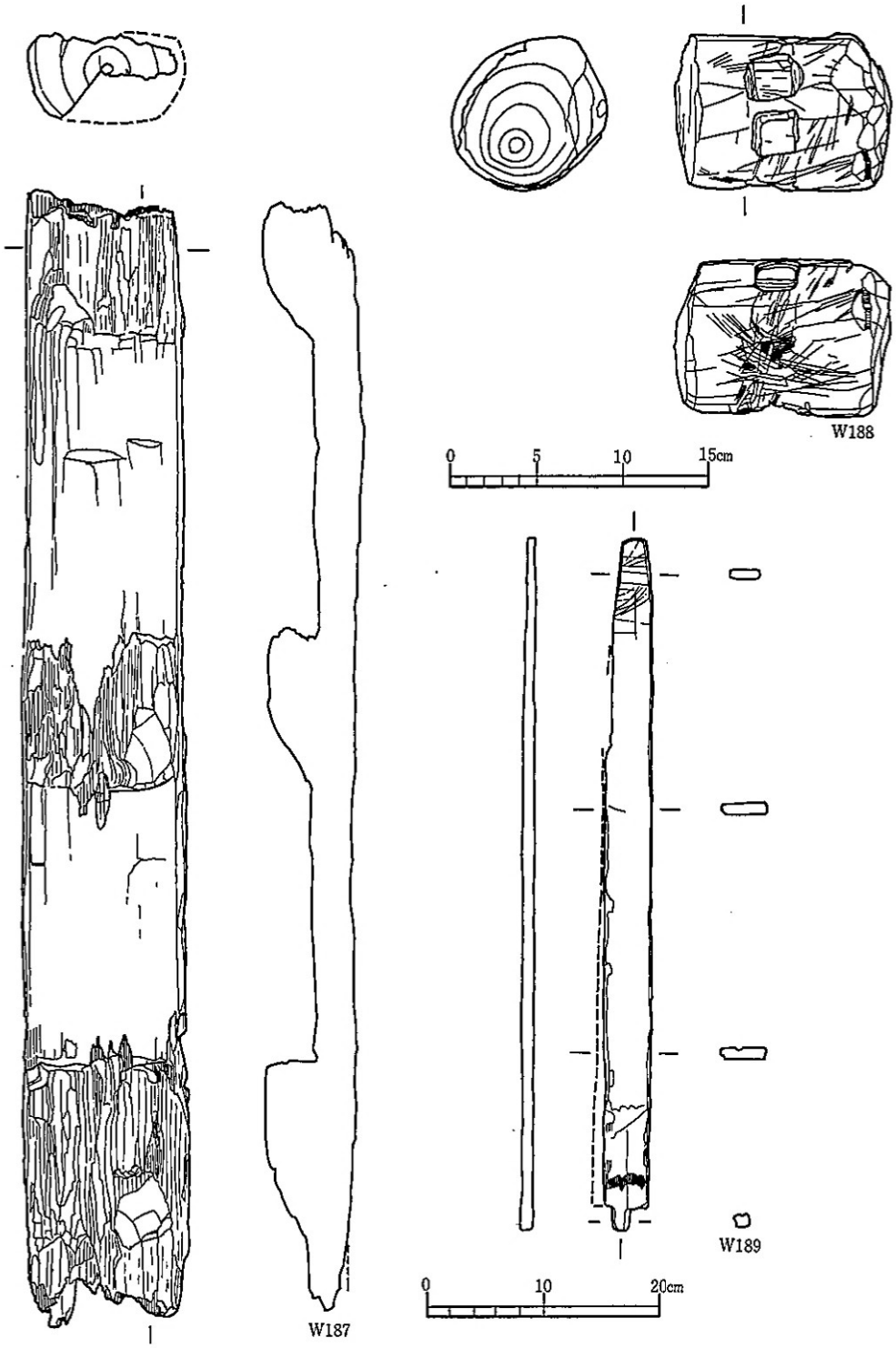
遺物の出土地点は、相対にCトレンチ南半に偏在する。土器には、庄内式甕（112）・第Ⅴ様式系甕（113）がある（第80図）。庄内式甕は完形で、外面に煤の付着をみる。時期は、庄内式新段階古相と考えられる。



第80図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ庄内Ⅰ遺構面下出土遺物(1)（S＝1/3）

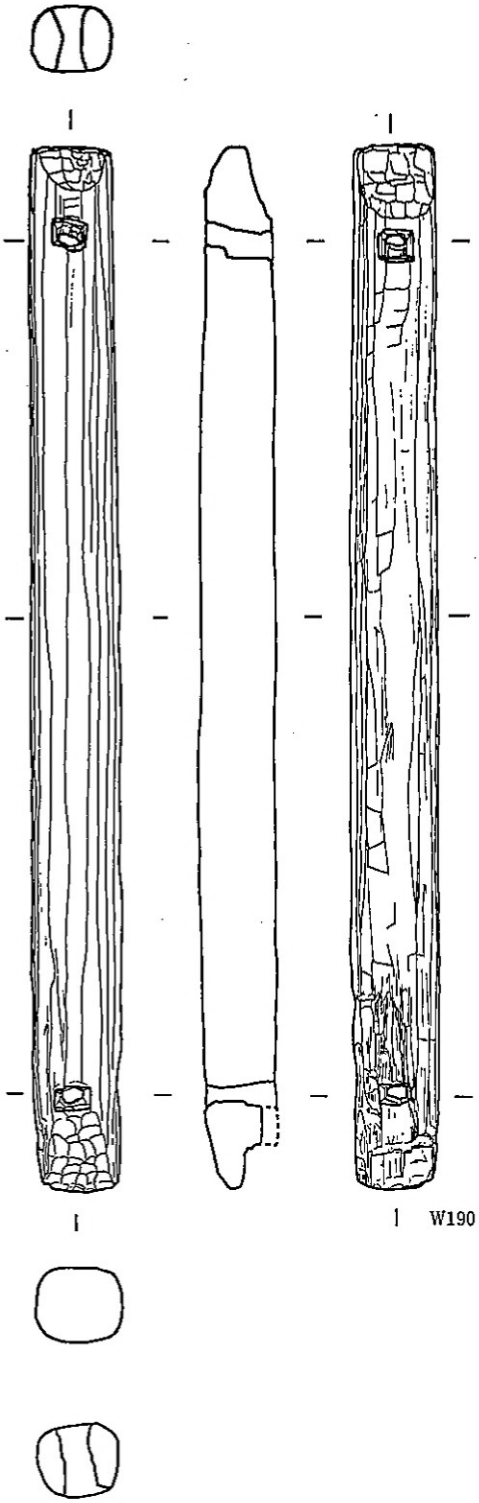
＜C・Oトレンチ　庄内Ⅰ遺構面下出土木器＞　（第81・82図、図版142・144～148）

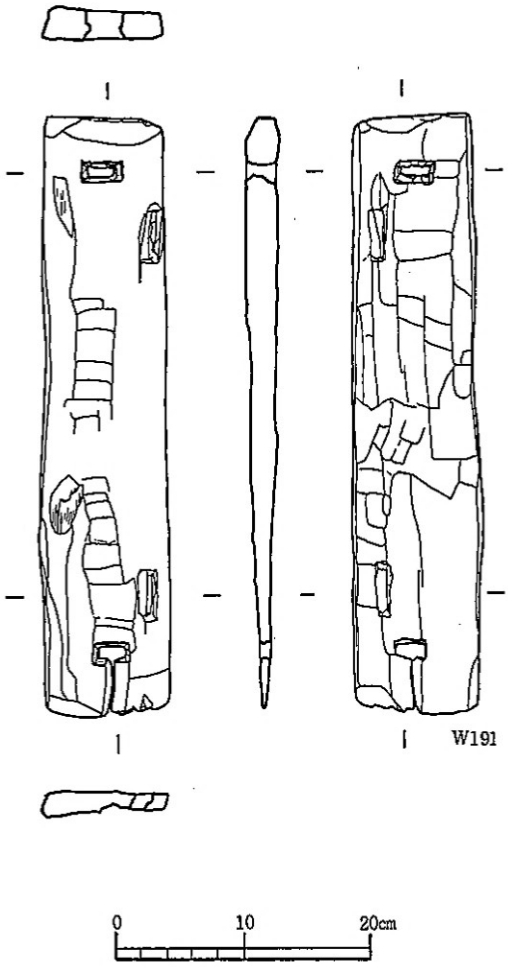
Cトレンチ黒色粘土層出土の木製品としては、はしご・編錘・剣状木製品・枘穴のある板状木製品・用途不明木製品などが出土している。はしご（W 192）は、現長98.3cm、幅14.3cm、踏み台部現存部分厚さ8cm、板部厚さ3.3～4.1cmである。樹種はヒノキの心持材を使用。上下両端は欠損しているが、踏み台部は三段で厚みをもつ。編錘（W 188）の樹種はカヤの心持材を使用、横木取りである。全長12.4cm、直径9.0×9.1cmを測り、比較的重量感のある編錘である。右端面は火をうけている。両端面は加工痕が明瞭に残るが、円筒部分の表面には打ち込んだ刃痕が著しく残っており、中央付近は凹む程である。何かを切断する時の台として転用したとみられる。剣状木製品（W 189）の樹種はヒノキの柾目材を使用。下端部は柄状に作られるが、先端部は先細りになり、端部は鋭く作られず丸く終っている。先端部片面にのみ線刻がある。用途不明木製品だが、形態上剣状木製品とする。用途不明木製品（W 190）は、断面隅丸方形の大型品である。樹種はスギで柾目材を使用。一端は面から削られU字形に作られ、もう一方の端部は片面が斜めに削られ、もう一面は段をなす。両端部ともその内側に段違いの枘穴がある。用途不明であるが組合せ式の建築材と考える。板状木製品（W 191）の樹種はモミを利用。上下両端は部分的に斜めに加工された面をもち、その内側に横長方形の枘穴が、一側辺沿いに縦長方形の枘穴が2孔斜め方向にあけられている。組合せ式の板材である。布巻状木製品（W 192）は棒状部分が断面方形になり、下端部に磨滅がみられるので他の機能も考えられる。断面方形の端部作り出しの加工材（W196）、有段の角材（W198）などの他に、庄内第一面からは、板状加工木や棒状加工木、



第81図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ庄内Ⅰ遺構面下出土遺物(2)
W187はしご（1/6）、W188編錘（1/4）、W189剣形木製品（1/6）

角材など34点の木器が出土している。Dトレンチ黒色粘土層出土の用途不明木製品（W 197）の樹種はサクラで柾目材の横木取りである。上面の右側は丸みをもち、左側は段を成し、その先は深く抉られている。下半は欠損しており全体形はわからない。この他に古墳時代初頭の包含層から棒状加工木や角材などが8点出土している。





第82図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ庄内Ⅰ遺構面下出土遺物(3)
W190用途不明木製品（1/6）、W191板状木製品（1/6）

＜Bトレンチ庄内Ⅱ遺構面＞

概説　（付図3）

黒褐色粘土層Ⅱ上に粘土と微砂の互層を経て、青灰色粘土が堆積し遺構面となる。3・4Bトレンチでは、互層は形成されず直接青灰色微砂が堆積する。形状は5BトレンチがT.P. 0.8mと少し低くなる他、ほぼ平坦でT.P. 1.1m前後を示し、東西南北の比高差も 0.1m内外に収まる。15・16Aトレンチとともに最も高位に当り、本遺構面の微高地となる。

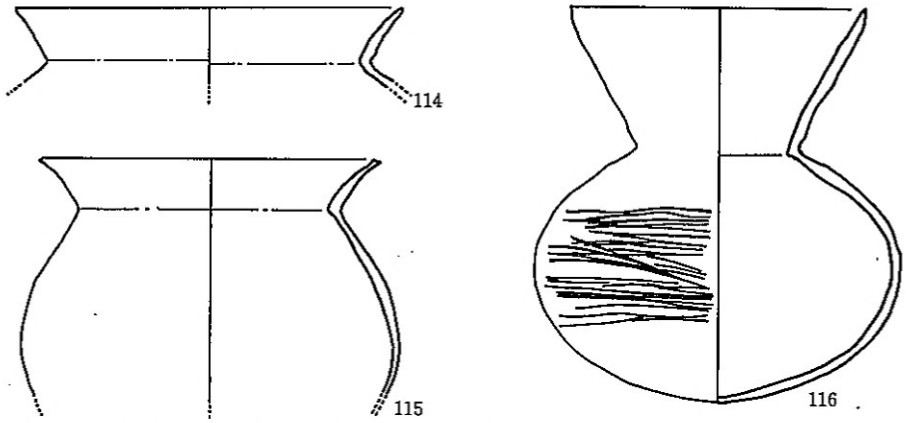
検出遺構は河川2本、土器群2ケ所、炭の集積3ケ所で、他に土器の単独出土3ケ所をみる。6Bトレンチでは、下位包含層から敲石と大型鉢の破片が出土している。全体図に示す井戸1は、本遺構面で検出されたが時期が古墳時代中期に下降するので後述する。

単独出土の土器　（第83図、図版131）

LocⅠ・Ⅱが4Bトレンチ河川Ⅰ肩部に、LocⅢ（116）が6Bトレンチ遺構面に位置する。LocⅠ・Ⅱ（114・115）の甕は、型式学的に布留式古段階に含まれ本遺構面使用の下限を知る資料である。

炭の集積

炭の集積は、A地点0.6×0.4m、B地点0.4×0.3m、C地点 0.6×0.45m規模の不整円形を呈する。それぞれ堆積は1～2㎝で、特に中央部が深く庄内式甕の細片がわずかに含まれている。炭は薬灰状のものだが、火を焚いたとする積極的証拠はない。

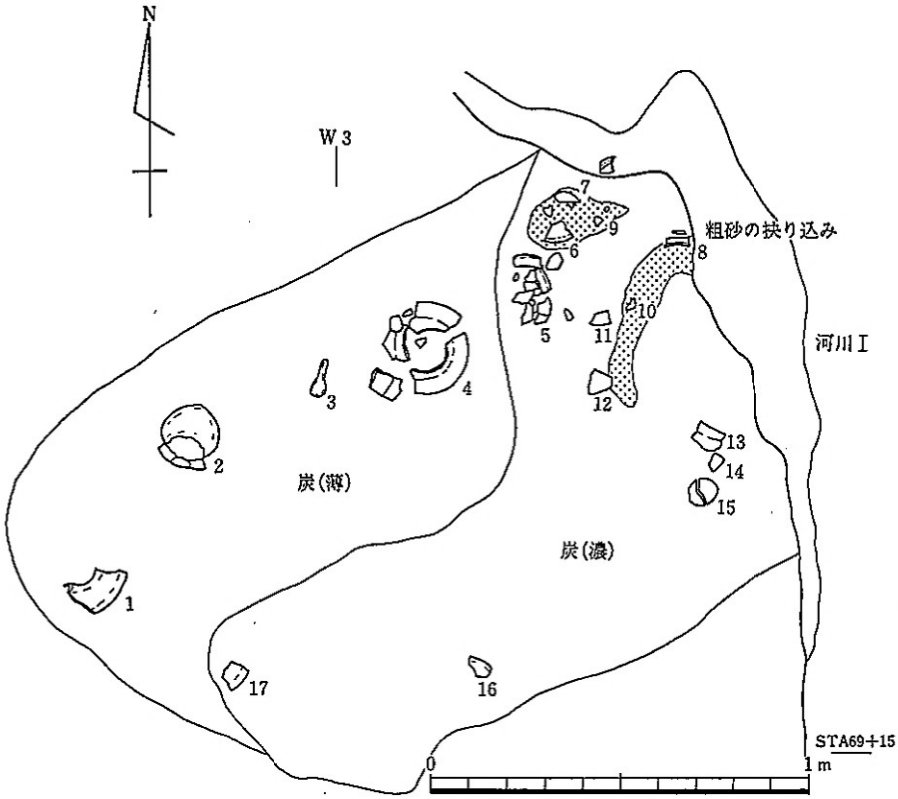


第83図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ庄内Ⅱ遺構面下出土遺物（S＝⅓）

土器群1　（第84・85、図版23）

＜位置＞　STA69+15付近、河川Ⅱ西岸。高さはTP1.3m。

＜構造＞　上下に分かれる。下部構造は東端が隅丸方形にふくらむ溝状の落ち込みで、暗灰色粘微砂（炭混り）を埋土とする。現存長1.7m、最大幅1.25m、深さ西端0.1m・東端0.15mを測り河川に流入する形をとる。この上面を中心に、上部構造としての炭層が2× 1.5mの楕円形の厚さ1～2㎝をもって拡がり、上面に土器がのる。遺構の東端は、河川流水作用により流入してい



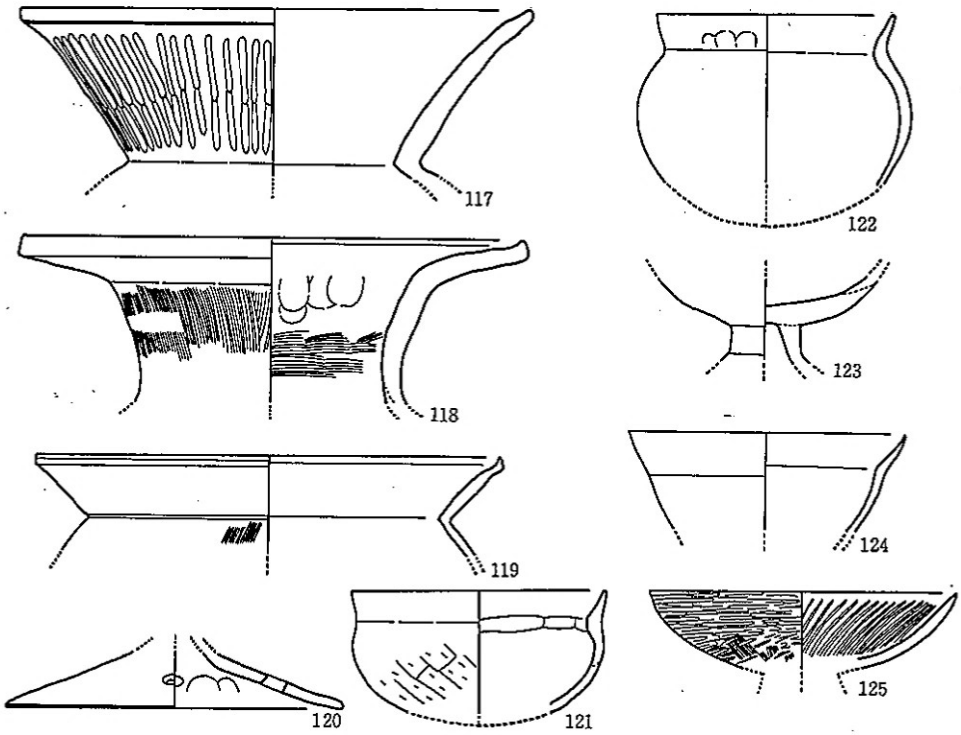
第84図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ土器群1出土状況図（S＝1/20）

る。炭層は藁灰質で、0.15× 0.3cmの木炭を含む。炭層下の暗灰色粘微砂と青灰色粘土に焼土化はみられず、炭層は他の場所から運ばれてきたものである。

<組成の復元>　土器群の東部には、河川最終堆積層の粗砂が抉り込み、オーバーフローの痕跡が見られる。この状況から、検出土器全てが本来的に土器群に属し原位置を保持しているとは限らず、河川で運ばれた土器の混入や土器片の遺構内・外への移動が十分に予想される。従って、土器群の検討は、①出土状況や磨滅度を基準とする混入物の除去、②出土状況や接合資料の分布状況からの原位置、の確認から始めねばならない。出土遺物は後述するとおりである。その内、No.1・2・3・4・5・11・12・13・14・15は、磨滅度が低く炭層に密着した接合資料が集合するなど原位置を示す。No.16・17は、炭層に包含されていたので問題はない。ところが、No.6・7・8・9・10はオーバーフローの粗砂に混りかなりローリングを受け、付近に接合資料が存在せず混入土器とみなせる。従って、先者の土器群が当初の土器組成を示し検討の対象になる。

<出土状況・遺物>　原位置の遺物について述べる。

No.1（117）　壺口縁部。口縁端部が上方にやや直立気味で検出された。端部は既に古墳後期第1遺構面にて顔をのぞかせ、土器自体は庄内第2遺構面包含層に含まれていた。頸部が炭層上に位置するとはいえ、先の包含層中の遺物である可能性もある。遺構内に接合資料はない。



第85図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ土器群1出土遺物（S＝1/6）

No.2　甕。完形にて、口縁部を斜上方に向けて出土した。内部の流入土は、庄内Ⅱ遺構面包含層の灰褐色粘質微砂。

No.3　匙形土製品。暗褐色を呈する生駒西麓産の胎土を使用し比較的丁寧に調整された土製品で、身を裏向けにし出土した。全長10.5cm、身の長軸5cm、短軸4.5cmの楕円形、凹部の深さ2cm、柄の長さ5.5cm。性格は、縄文・弥生時代では非実用的で呪術的・祭祀的な何らかの儀式に用いられた可能性の強い器具であるといわれ(小林81)、古墳時代中期の祭祀遺跡から出土する例が多いことを考慮すると、庄内期も前代と基本的な性格に変化をみないと思われる。

No.5（119）　庄内式甕。ピット状の凹みに、口縁部と体部の破片が集合していた。出土状況―①口縁部破片は体部破片よりレベル的に上位、②付近にNo.11・12を始めとし多数の同一個体に属す破片の存在、③底部のみ皆無―から、底部を人為的に打ち欠いた甕が正置され、後、土圧やオーバーフローにより破損し折重なり一部破片が周辺に散乱した、という過程が復元できる。外面に煤付着。

No.13（121）　小型鉢。本体の1/3残存で、他に接合資料はない。当初から破片であったのか、破損し他の破片が流出したのかは不明。二次焼成を受けている。

No.15（123）　小型器台。脚柱部下が炭層に埋没していた。脚裾部は当初から欠損状態であったと考えられる。小型鉢と近接し出土したことから、小型鉢が当初から破片であったとしても観念

的にセット関係を有すると考えられる。

No.16 (125)　小型器台杯部。二次焼成を受けている。

No.17 (124)　小型鉢。小型器台とともに炭層中、本来的に破片で炭層中に接合資料は皆無である。二次焼成は受けていない。

<一括性>　土器群は型式的に庄内期新段階新相に位置し、その状況は共存関係を示す一括遺物である。

<性格>　属性の検討の結果、1)非日常的な遺物の有り方と炭の集積、2)祭祀的性格の強い匙形土製品の存在、から本遺構は何らかの祭祀的行為を表出している蓋然性が高い。

祭祀行為とすると、何に係るのであろうか。共同体の農耕祭祀に関係する飲食物供献行為を伴う祭祀とするには、その主要構成器種である高杯の欠落、及び壺、器台の特異な有り方からして十分にその条件を備えているとはいい切れない。最も合理的な解釈として、河川の岸に立地しそれと時間的共有関係を結ぶ状況下で、河川との有機的関連性と絶えず水害に悩まされていた当時の河川への危機感を想定すると、河川に係る祭祀行為の一形態とするのが妥当であろう。

土器群2　(第86～88図、図版24)

<位置>　ＳＴＡ69＋18.5、河川Ⅱ西岸。

<構造>　約95×65cm、深さ２～４cmを測る楕円形の浅い凹みに炭が集積し、上面に吉備系の甕がのる。炭層は薬灰質で厚さ３～４cmを測り、甕を中心に約60cmの不整円形に分布する。炭層下に焼土化はみられない。遺物出土状況図の外輪線は炭層の流出範囲を示す。

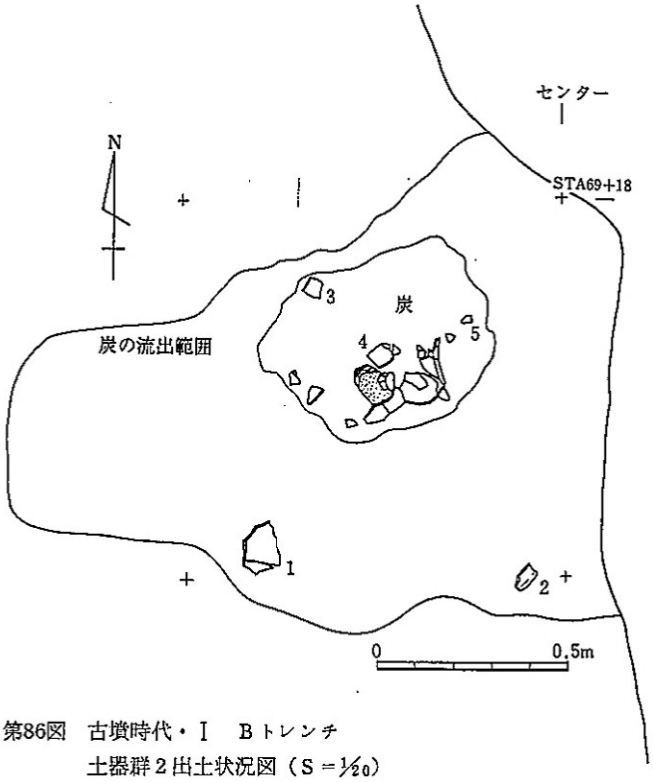
<組成の復元>　No.１～５を除く破片は、全て同一個体の吉備系甕に属す。No.１・２は、炭の流出部に位置しかなり磨耗を受けている。砂層の被覆、抉り込み等の明確な痕跡は残していないが、位置関係からして河川Ⅱのオーバーフローを受けている可能性は高くそれによる混入物かもしれない。No.３～５は顕著な磨耗がみられず炭層に包含されているので、土器群No.16・17のように本来的に炭層に属する遺物である。従って、No.１・２は検討対象から除外される資料になる。

<遺物の出土状況>　原位置を占める遺物につき述べる。

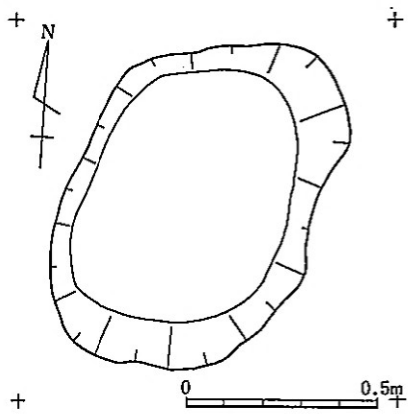
吉備系甕 (127)　器体上半が、拳大の河原石を包み込む形で横位で出土した。破片は総数17片を数え、口縁部から体部肩にかけて比較的原形を示す。底部の破片は全く見当らず、当初からの存在に疑問が持たれる。残念ながら、体部片の割れ口にその確証を得られず人為的に打ち欠かれていたか否かは不明だが、後述する本遺構の特殊性を考慮すると人為的な可能性が高い。図示出来なかったが、接合不可体部破片に米粒大の刺突痕と人の爪痕がみられる。煤は体部肩を除き付着するが、それは第Ⅴ様式系甕や庄内式甕と同様な状況を示すもので、当遺構での二次的加熱の結果ではない。土器は搬入品。

No.3　壺口頸部破片。二次的加熱は受けていない。

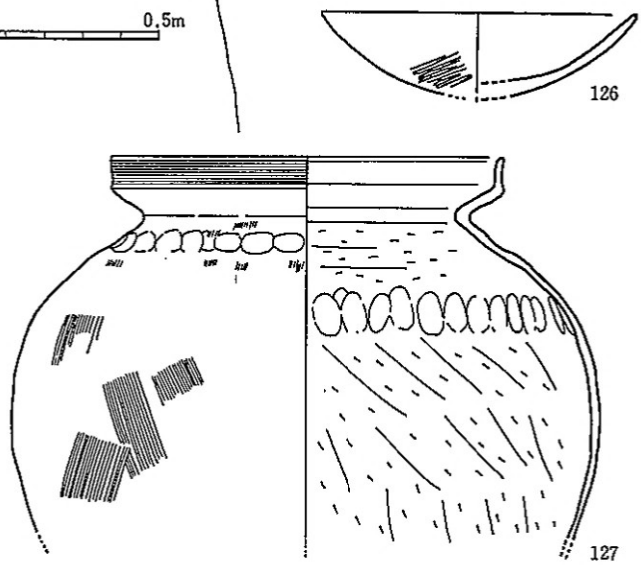
No.4 (126)　小型器台杯部破片。二次的加熱は受けていない。



第86図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ
土器群２出土状況図（S＝1/20）



第87図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ
土器群２土器・炭除去状況図（S＝1/20）



第88図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ土器群２出土遺物（S＝1/3）

No.5　壺口頸部破片。二次的加熱は受けていない。

<時期>　小型器台は、庄内式新段階。吉備系甕は岡山平野での編年によると、百間川古墳時代Ⅰ(江見80)～Ⅱ、下田所式～亀川上層式(柳瀬77)に該当する。これ以上の細い時期決定は困難だが、同一様相を示す土器群１と近接し位置することから土器群１と同時期の可能性が高い。

<性格>　出土状況・位置関係からして、土器群１同様河川に何らかの働きかけをした祭祀行為を示す蓋然性が大きい。とすると、同一性格でありながら土器群１が在地系土器を主体に据え土器群２が搬入品を主体とする差異は、祭祀行為の背景を考える上で示唆的である。そして当時期にて搬入品の大半を占めるのは吉備系甕であるが、それがどの程度実際の生活に密着していたかを知る手掛りとしても評価できる。

河川Ⅰ　（図版25～30、付図３）

<位置・形状>　ＳＴＡ69＋00以北のＢトレンチ全域にわたり自然河川を検出した。河川幅は約50m、深さ約２～ 2.5mを測る。北岸は一部トレンチ部北西隅にかかり、南岸はＳＴＡ68＋95～69＋00にかけてほぼ東西方向に走行するプランを描く。川底は、ピート層への漸移層である暗褐色粘土層に達する。河川の中央ＳＴＡ68＋75付近でＴＰ－１m、南岸付近でＴＰ－ 0.6mを測り、多少の凹凸をなすが比較的緩やかな弧状を呈する。後述するが、川底南半には足跡・鋤跡が見られる。南岸は布留期の急激な流れが走行するため、肩部が流れの粗砂層に抉り込まれ断面凹凸を呈する。特にトレンチ部・４Ｂトレンチでは著しい。その状況は、肩部に露呈している第Ⅴ様式流水堆積の灰白色粗砂層Ⅱ・庄内期第１遺構面の暗灰青色粘微砂が砂質であるが故流水の影響を強く受け、粘土面が凸で粘微砂面が凹となる。布留期の急激な流れは、ＳＴＡ68＋89～90＋96にかけて走行する北流と南流からなる。規模は、概ね北流幅４m・深さ 0.9m、南流幅３m・深さ0.9mを測る。断面は各々半円形を呈する。

流水方向は、本遺跡周辺の自然河川の諸例、ラミナ観察の結果より東から西へと考えられる。

<層位>（付図26）　基本的に３層に分離できる。Ⅰ層は、暗褐色系砂礫層。Ⅱ層は、淡黄褐色系砂層。Ⅲ層は、青色系粗砂層。更に大きくみると、Ⅰ・Ⅱ層を上層、Ⅲ層を下層と纒められる。層の広がりは、Ⅰ・Ⅲ層が遍在し、Ⅱ層がＳＴＡ68＋82.5付近で消失し、それより以南はⅠ・Ⅲ層のみになる状況を示す。布留期の流れは、南流・北流とも層位的にⅢ層が共通し、南流堆積層上位には肩部からの流入土である灰黒色粘微砂土層が見られる。Ⅰ層上面はＳＴＡ68＋70以北において後に古墳時代後期遺構面として利用されているせいか、一部土化し砂礫土に変化している。堆積層内には間層として植物遺体の集積層は断続的に見られるものの、湿地的状況や流水の緩慢状況を示すいわゆる黒褐色シルト質層は一枚も見られない。このことは、先述したように河川の主体を占める土器群が時間的に限定できることを考え合わすと、河川における連続性のある流水は比較的短期間の堆積層形成を想定させる。

遺物と層位の関係は、上層に布留式・庄内式、下層に庄内式・弥生土器が包含される傾向にある。出土地点は、河川北半の上層と布留の流れに偏在する。布留の流れでの遺物は、そのほとんど全てが弧状に凹む底面直上に集合している。流れの一過性の故であろうか。

<足跡・鋤跡>（表15、表16、付図４）　トレンチ部川底ＳＴＡ68＋74～90にかけて検出され、規模・分布状況から二群に分離できる。ＳＴＡ68＋80付近より北をⅠ群、南をⅡ群と呼称する。Ⅰ群は、全長20～25cmを測る足跡群で比較的密集状態にある。Ⅱ群は、全長10cm～15cmを測る足跡群と鋤跡群で構成され、Ⅰ群に比べて足跡規模は相対に小さく、立地する川底も 1.0～15cm高くなる。鋤跡群は統計処理の結果刃部横幅は概ね10～15cm内に収まり、掘削角度は20～30°前後に集中する傾向を示す。両群の足跡・鋤跡には、規則的な歩行性・連続性は認められない。

足跡や鋤跡が残されたのは河川が機能し始めた段階で、それらは川底および川岸への人間の何らかの働きかけを示すものである。では、どのような行為の結果であろうか。佐原真氏が、「熱

帯・亜熱帯アフリカでは、河川が網の目のように拡がっており、それに沿って至るところに粘土が堆積している。粘土を採掘する場所は、川岸か川の近くのことが多い。しかし、川床自体からとることもある(佐原70)」と紹介した土器製作用の粘土採集の民族例は、その行為を類推する上に非常に参考になる。

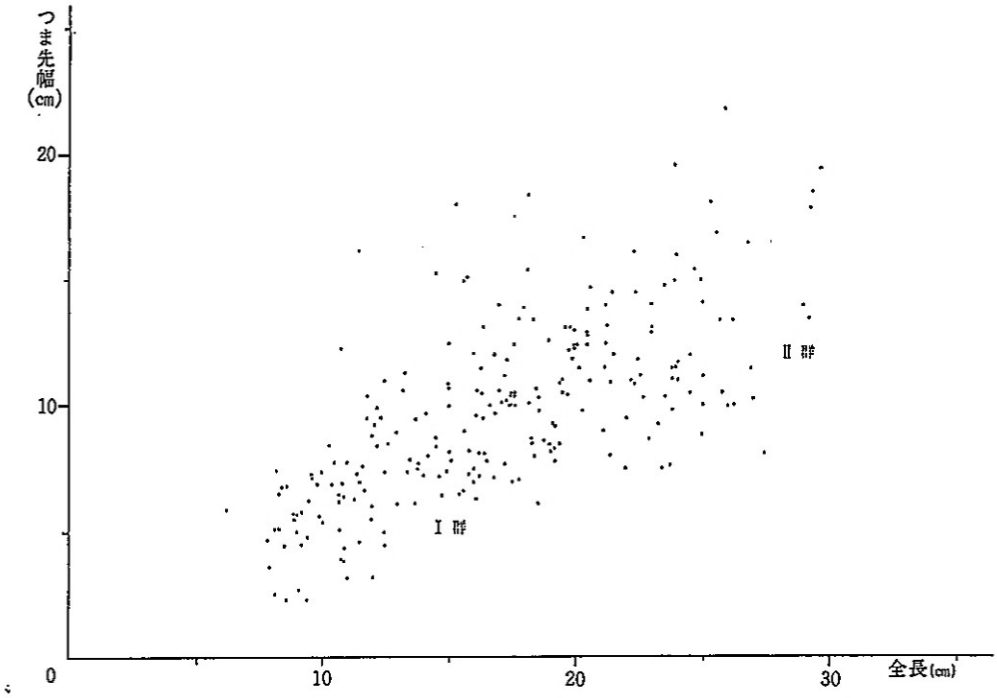
現在、整然と北流している河内平野の河川も過去において幾度も走行方向に変化をみせ、複雑に連結していたであろう。この姿は、最近の調査で増々鮮明に描き出されている。河川により運搬された粘土は、河川付近に堆積し「二次粘土」となり土器製作用の原料に供される。河川岸・底には、「二次粘土」が露出し、土器製作に適合する粘土が容易に選出される条件が備わる。本河川Ⅰも例外ではない。

本河川で露呈している粘土は、川底の暗褐色粘土、岸の黒褐色粘土層Ⅰ・青灰色粘土である。この内、鋤跡は残るものの川底の粘土は各種の夾雑物を多量に含むため、土器製作用原料としては不適当であり候補は粒子が細く可塑性に富む岸の粘土になる。

このような状況設定が許されるなら、「鋤を所持し河川に働きかける行為」が表出されている足跡・鋤跡に、「土器製作用の粘土採集時の痕跡」という性格を付与してはどうだろうか。残念ながら、河岸が先述の様に布留期の急激な流れにより凹凸に抉られ露呈する粘土面もかなり磨耗を受けているため、採掘痕は確認できなかった。試みに青灰色粘土を使用し製作したところ、淡黄橙色を呈し雲母を多量に含む土器ができた。

以上、先の想定は確実な証拠を得られず推論の域を出ない。類例を待ちたい。

第15表　古墳時代Ⅰ・Ｂトレンチ河川Ⅰ足跡集計グラフ



第16表　古墳時代Ⅰ・Ⅱトレンチ河川Ⅰ検出鍬跡計測表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
全長（cm）	13.5	16.1	17.0	15.0	10.5	11.3	11.5	15.5	16.6	26.0	—	6.0	9.0	14.2	11.4
幅（cm）	4.2	4.5	5.9	7.5	6.9	5.0	3.5	4.0	7.0	8.7	—	4.5	3.0	4.0	5.0
角度（°）	12.1	32.8	30	21.9	45	25.7	35.3	26.2	17.5	27.5	—	30.0	20.0	37.0	14.6

<遺物>　土器・土錘・木製品・植物製品を検出した。（第89～112図、図版131～138、142、143）

土器　在地系と外来系とがあり、総量の約90％が庄内式から布留式で占められる。

弥生土器（128～149）　畿内第Ⅰ～Ⅴ様式の範疇で、他に比べて顕著な磨耗が観察される点を特徴とする。全体の約9％を占め、計22点。広口壺（136）は第Ⅱ様式前半。鉢（128）は第Ⅲ様式。甕（129・130）・広口壺（137）は第Ⅲ・Ⅳ様式後半。広口壺（132・138）・甕（133・134・141）は第Ⅴ様式前半。他は第Ⅴ様式後半となる。

Ⅴ様式系土器群　（150～170）　畿内第Ⅴ様式後半の形態・技法を基本的に継承し緩慢な型式変化のもとに庄内式から一部布留式まで残存する土器群。図化資料には鉢（150）もみられるが甕が最も多く、大型より中型・小型が目に付く。総じて外面の叩き痕は2～3凹／cmを測り、その傾きは左下り。内面は刷毛目調整を基調とするが、（166）のように内面ヘラ削り技法を採用している例もある。底部は突出度の低い平底で、その成形技法には円板充填法（寺沢80）（167・168）と円板すえおき法（寺沢80）（157）などがあり、傾向として先者の技法に拠る品が多い。（167）は当該期甕の特徴をよく表している完形品で、器高14.8cm・口径14.5cmを測り、その規格は正方形プランにほぼ収まる。体部での逆円錐形台部の占める割合が高く、底部から⅓程に分割成形痕が観察される。（164）は器高18.0cm・口径12.4cmを測る。長胴気味の体部に丸底、そして「口縁叩き出し技法」（都出74）に拠る口縁部が短く直立気味に伸び端部が丸く終るなどを特徴とし、一般に摂津系と呼称されている様式である。叩きの単位は4凹／cmと他と比較して細くなっている。類例を探すと、中田遺跡（奥田、米田83）では布留式古段階古相の土器を、若江北遺跡（尼上ほか83）では様式として布留式に属する庄内式甕を伴出している。（158）は頸部が伸る形式で、復元口径18cmを測る大形品。外面の平行叩き痕は2凹1cmと粗く、纒向遺跡辻土壙（石野、関川76）面出土品（図97―5）に類似する。

庄内式甕　（171～202）　ここでいう庄内式甕とは①細筋の叩き、②内面ヘラケズリ、③口縁部の立ち上がりを特徴とする甕で、土器様式としての庄内式に存在する甕を指すものではない。計32点で、甕総量の約38％を占める。概ね新段階の様相を呈するが、下記のとおり時期的に上がる資料も含まれている。叩きの単位は、第Ⅴ様式・第Ⅴ様式系甕よりcm単位あたり4～5本増加し平均7凹／cmである。色調は褐色系と黄橙色に大別できるが、いずれも角閃石の頻度が高い。しいて差を求めるなら、褐色系の生駒西麓産の方が粒度が高い。時期的に上がる資料として（178・179・191）がある。特徴として口縁部の屈曲が鋭く、叩きが4凹／cmと先の平均値に比べると粗い。内面はヘラケズリを受けるが、器壁が4mm前後と厚い。（191）は口縁部が短く体部肩に

張りがみられる。これに対して（182）は、①体部が球形・丸底、②頭部径が最大腹径に比して小さい、③器高と最大腹径が等しい、④叩きが7～8凹／cmと非常に細い、などの特徴より庄内式甕が最大限に発達した姿の一形態と考えられ、新段階でも新相以降に位置づけられる。完形品で、器高21.9cm、口径15.9cm、最大腹径21.8cmを測る。

布留式甕　（203～231）　計29点。土器様式として布留式に属する甕を指すものであるが、型式組列からみると庄内式甕（219）も含まれている。大多数の甕は縦向遺跡の形式分類によると甕Cと呼称されている形式に該当し、布留式古段階の様相を呈する。概ね色調は黄橙色系を示し、胎土には粒度の低い角閃石が存在する。以前、甕Cを整理してa・b類（小山田82）に分けたが、以下それに従う。

a類（219・229）　庄内式甕の型式組列上に位置するもので、量的に少ない。口縁部が直線的に伸び端部が庄内式同様上方に立ち上がるが、その稜には丸味がみられる。体部の張りが強くナデ肩で、外面は縦刷毛目調整を基調とするが、（229）ではその下に平行叩き（4凹／cm）が観察される。内面はヘラケズリを受け器壁が薄く仕上げられ、屈曲部内面には鋭い稜が走る。

b類　新たな技法との複合化により庄内式甕より系統樹的に分かれ、新たな型式組列の起点となるもので、出土資料の大半を占める。a類と比較して①口縁部の内彎化②屈曲部内面のヨコナデ③体部肩の横方向の刷毛目調整④体部肩の装飾、などの新たな要素の出現を特徴とする。更に細分できる。

b_1（221・224・225）　口縁部が内彎気味に伸び端部が上方に立ち上がり丸く終わるもので、体部は屈曲部付近が少し伸びる形になる。外面は縦一横刷毛目調整によるが、屈曲部下はヨコナデにより消されている。刷毛目は断続的で、（225）を例にとると実測図の中心線から2本目の縦線が開始点で1本目の縦線が原体を器壁から離さず一時的に休止した痕跡を示す。この場合、刷毛目原体の見せかけの動きは時計方向になる。（224）の体部肩には刷毛目調整の後に3櫛描波状文が施されているが、少なくとも径の¼（残存部）の範囲では施文原体は器壁から離されていない。

b_2（223）　口縁部が内彎気味に伸び端部には外傾する端面が形成されているもので、ヨコナデによりその両端が延長線上に肥厚し中心が少し凹む。体部は球形で右下りの刷毛目調整が施されており、屈曲部は強いヨコナデで丸く凹む。

b_3（208・209・210・213・217・218・227・228）　口縁部が内彎気味に伸び端部が上方に丸く肥厚するもので、b類でも最も量が多い。b_4にも共通する点だが、全体に焼成がやや軟質で法量的には小形品が目に付く。成形、調整技法は不明確な叩きの有無を除けば大差はない。形態的には屈曲部外面の凹みが一層著しくなっている（213・228）。（206）の体部肩には、縦刷毛目調整の後に4条の櫛描波状文が施されている。

b_4（203・204・207・214・215・216）　口縁部が内彎気味に伸び、端部が平坦面で内外に肥厚するものである。肥厚形態には、肥厚があまり目立たないもの（207）、外方向への肥厚

が著しいもの（203）、平坦面がやや外傾気味を呈するもの（215）などがある。規則的な刷毛目調整の中でその不規則性が目立つ（215）では、4条／cm・7条／cm・10条／cmと単位の異なる原体が順次使用されている。（216）の体部肩における横刷毛目調整は連続して施されている。

（230・231）は口縁部の形態が不明で、先の分類に当てはめることはできない。（230）は最大腹径が上位にくる倒卵形で、体部肩には多少波を打ちながら連続する横刷毛目調整が施されている。内面はヘラケズリを受けているが、底部近くになると指頭圧痕が観察されるようになる。（231）は籠に入り出土した甕で、体部高18cm、最大腹径18cmを測る。外面は板ナデ状の刷毛目調整が上半では横方向に下半では放射状に施されている。煤の付着や二次的加熱による色調の変化は全く見られず未使用と考えられる。

壺　計40点。広口壺、二重口縁壺、短頸壺、短頸直口壺、ミニチュア壺があり、所属様式は庄内式から布留式と考えられる。

二重口縁壺　口頸部の形態、技法からａ、ｂ類に大別できる。

ａ類　頸部が直立気味から途中で角度を換え横方向に伸びるもので、技法的には一但横方向に粘土紐を継ぎ成形した頸部先端を擬口縁とし口縁部を伸ばしている。さらに細分できる。

a_1（238）　頸部の上方が長く横方向に短く伸びるもので、その屈曲部内面には鋭い稜が走る。頸部と口縁部の接合部は垂下状態にある。

a_2（241・243）　（243）の頸部が上方、横方向とも同一伸長を測るもので、接合部の垂下はみられない。口縁部内外面は変形ヘラ描波状文で飾られ、体部下半には径1.6cmの孔が焼成前に穿たれている。（241）は口縁部外面に放射状、×印にヘラミガキが施され、口縁端部が上方に肥厚している。

a_3（242）　頸部の横方向の伸びが著しく口縁端部が横方向に拡張するものである。頸部外面に刷毛目が残る他、装飾性は皆無である。

a_4（245）　口頸部が逆くの字形を呈するもので、復元器高45cmを測る大形品。器壁が非常に厚く移動困難な土器である。一般に瀬戸内海をとりまく地域に分布する壺で西部瀬戸内系とされるが、普遍化できる一形式として各地の土器組成に入り込んでいる可能性があるので斬定的に在地系に含めた。ちなみに胎土には角閃石が含まれ色調は暗褐色を呈している。

ｂ類　外反する頸部の先端を擬口縁とし口縁部を伸ばすもので、さらに細分できる。

b_1（239・240）　頸部と口縁部が同様な外反度を示すもので、接合部には垂下はみられない。（239）の口頸部外面には比較的太いヘラミガキが縦方向に施されている。（240）の口縁部外面には5条の櫛描波状文の加飾がみられる。

b_2（233）　頸部が長く口縁部が短く外反しているものである。焼成は軟質でヨコナデ調整のみで終っている。

b_3（232）　頸部から口縁部へと内彎気味に伸びるもので、その接合部は強いヨコナデにより凹線状に凹む。一応在地系に含めたが、形態的に吉備系の可能性もある。

二重口縁壺の所属様式決定は困難だが、b_2（233）・a_2（243）・a_3（242）は布留の型式と考えられる。（242）はその口縁端部の拡張現象の類例が七ノ坪遺跡(中井74)などに求められ段のつくりに丸味を伴っている。（243）は底部が突出する平底をとどめるものの、最大腹径が中位に存在する球形の体部を呈し装飾が簡略化されている。

長頸壺（234～237・246～248）　口頸部の形態差からａ、ｂ、ｃ類に分けられる。胎土は精製され粒度は極めて低い。精良品。

ａ類（234・235）　口頸部が内彎気味に伸びるもので、端部は薄く尖り気味に終わっている。内面は放射状のヘラミガキが施されている。（235）の外面は縦刷毛目調整でヘラミガキが省略されている。

ｂ類（236）　口頸部が直立気味に伸び端部付近で少し外反するものである。外面は横方向にヘラミガキが密に施されているが、体部下半には成形時のヘラケズリが残っている。体部内面はヘラケズリを受け器壁が薄く仕上げられている。口頸部内外から体部外面にかけて酸化鉄が塗布されており、体部内面には口頸部からの玉だれが残る。

ｃ類　（237・248）　口頸部が外開きに直線的に伸びるもので、（237）は器高20.3㎝、最大腹径16.7㎝を測る完形器である。体部は球形で底部は平底に近い丸底である。口頸部は内外とも丁寧なヘラミガキが施されているが、体部下半には（236）同様成形時のヘラケズリが残る。（248）は器壁が厚く胎土・調整に簡略化がみられるのでミニチュア品かもしれない。

（246・247）は体部のみで、（246）は外面にヘラミガキが施されているがその下には４凹／㎝の平行叩き痕が観察される。

（237）は体部の発達状態から、和田廃寺遺跡(木下79)下層に類例が求められ、布留式に属する。なお、体部下半にヘラケズリが残る点は同じ精製土器である小型丸底壺に共通するもので、同様に他の器種とセット関係を持つものかもしれず。器台はもはや消失しているので高杯の可能性がある。

広口壺（249～259）　口頸部の形態からａ、ｂ、ｃ類に大別できる。

ａ類　口頸部が直線的に伸びるもので、さらに細分できる。

a_1（249・255）　口頸部は直線的に伸びるが、(22) の場合は立ち上がり気味である。

a_2（253）　口縁端部付近で短く外反するもので、内外面ともヘラミガキが施されている。頸部のつけねには、刺突文の加飾がみられる。

ｂ類　口頸部が緩やかに外反するもので、さらに細分できる。

b_1（251）　頸部が少し伸びてから外反するもので、頸部外面には指頭圧痕が残る。体部内面のヘラケズリは弱く、粘土紐接合痕、指頭圧痕が残っている。

b_2（252）　頸部がしまり、大きく外反するもので、外面中位に一条のヘラ描沈線が走る。口頸部内面と体部外面は同一原体による刷毛目調整である。体部内面は指ナデ仕上げ。

b_3（256）　口縁端部付近で外反するもので、外傾する端面で終わる。

b_4（254）　口頸部が短頸部に近い状態で開き、（256）とともに屈曲部下までヘラケズリが

施され、$b_{1,2}$類と器壁厚が異なる。

c類（257・258・259）　長く伸びる頸部から口縁部が横方向に長く伸びるもので、端部が上下に肥厚している。（259）は頸部から口縁部への変化が明瞭で内面に稜が走る。（257）はその変化が緩やかで、口頸部外面には各部に対応するように三段階に分かれてヘラミガキが施されている。

短頸壺（267～271）　口頸部の形態によりa、b類にわけられる。

a類（267）　口頸部が大きく外反するもので端部は側端面で終わる。器壁が厚いのが特徴。

b類（268・269・270・271）　口頸部が直線的に伸びるもので、端部が丸く終る。（271）はb類の体部で、長胴気味の球形である。体部下半の丸味に対して上半がなで肩を呈し、形態的には新しい庄内式甕・布留式古段階の甕に基本的に共通する。分割成形の結果体部では、外面の刷毛目調整の原体は上半と下半で異なり、内面でも調整技法がヘラケズリから刷毛目調整へとその変化に呼応している。

その他の壺（260～265）　（260・261）は体部上半で、（261）は肩の張りが上位にあり、長胴と推定される。（262・263）は厚手、指ナデ仕上げのミニチュア品であり、（264・265）もこの部類に入ると考えられるが胎土が精製され細部にいたるまで丁寧に作られている。

高杯（272～290）　杯部と体部とがあり、各々形態・技法により細分できる。

杯部　形態と脚部との接合方法によりa、b類に大別できる。

a類（272・273）　椀状を呈し脚部とは接合法（寺沢80）による。胎土はやや粗くヘラミガキが簡略化されており、特に杯部内面は刷毛目調整のみでヘラミガキが省略されている。

b類　杯部が低い体部より角度を換えて斜上方に開くもので、脚部との接合法は円板充填法に拠る。胎土は精製され調整も丁寧である。さらに細分できる。

b_1（274・284・285・287～290）　杯体部が水平方向に伸びるもので、大形、小形とある。杯口縁部内面はヘラミガキが放射状に施されるのが一般であるが、中には基礎調整である刷毛目段階で終っている例（274）もある。体部と口縁部の境には、凹による段（290）やヘラ状器具の圧痕（288）がみられる。

b_2（284・286）　杯体部が丸味を有するもので、口縁部との境には凹による明瞭な段が形成されており調整は剝離により不明。（286）の脚柱状部は外開きに短く伸びる。

脚部　形態と杯部との接合方法によりa、b、c類に分けられる。

a類（279～281）　脚柱部が円筒状を呈し裾部との境が明瞭で、杯部との接合が円板充填法によるもの。（279）は小形品の脚部で柱状部がエンタシス状を呈し、杯部b_1（285）に対応する。（281）は長く伸びる脚柱部で、杯部b_1類でも（288）の形に対応する。

b類（276～278）　脚柱部から裾部へ緩やかに続くもので、相対に器壁が厚い。杯部との接合は、（276）が挿入付加法（寺沢80）（278）が接合法である。（277）は脚柱部が貫通しており器台の可能性もある。

c類（282・283）　脚裾部が低く大きく開くもので、4方から透し孔が穿たれている。杯部b_1類にみられる重複する細かなヘラミガキと暗文状ヘラミガキの組み合せによる精製小形高杯は布留式古段階の特徴と考えられる。b_2類は調整は不明だが形態的に同様であろう。なお、技法的にみて杯部との相互成形が接合法による（278）は時期的に上る資料といえる。

鉢（291～320）　形態・技法によりa・b・c・d・e・f・g・h・iと分離できる。

a類（291～296・305）　扁平な椀状の体部に口縁部が二段に屈曲し、胎土が精良で横方向のヘラミガキがとても丁寧に施される。口縁部の屈曲形態は様々で、緩やかにS字状に屈曲するもの（294）、受口状を呈するもの（296）、屈曲部が断面三角形に突出するもの（292）などがある。

b類（297・301）　扁平な体部から口縁部が斜上方に伸びるものである。

c類（298・299・302・308）　椀状の体部から口縁部から短く伸びるものである。

d類（303・85・307）　扁平球形の体部から口縁部が短く内彎気味に伸びるものである。（303・85）は口縁部の発達が著しく小型丸底壺に近い様相を呈し、口縁部内面の放射状のヘラミガキの有無を除けばもはや調整、成形技法に差は見られない。

e類（309～318）　椀状の体部を呈するものである。底部には丸底（311・315）・平底（312）・尖り底（316）などの形態がある。技法的には叩き成形によるもの（*ex* 310）・ヘラケズリによるもの（316）・指ナデ仕上げによるもの（*ex* 312）などがある。叩き痕は平行ないし左下りで、その単位は先にみた布留式甕や長頸壺に共通するもので3～4凹1㎝を測る。

f類（319・320）　扁平な椀状を呈するもので、形態的には皿に近い。全面ナデ調整。

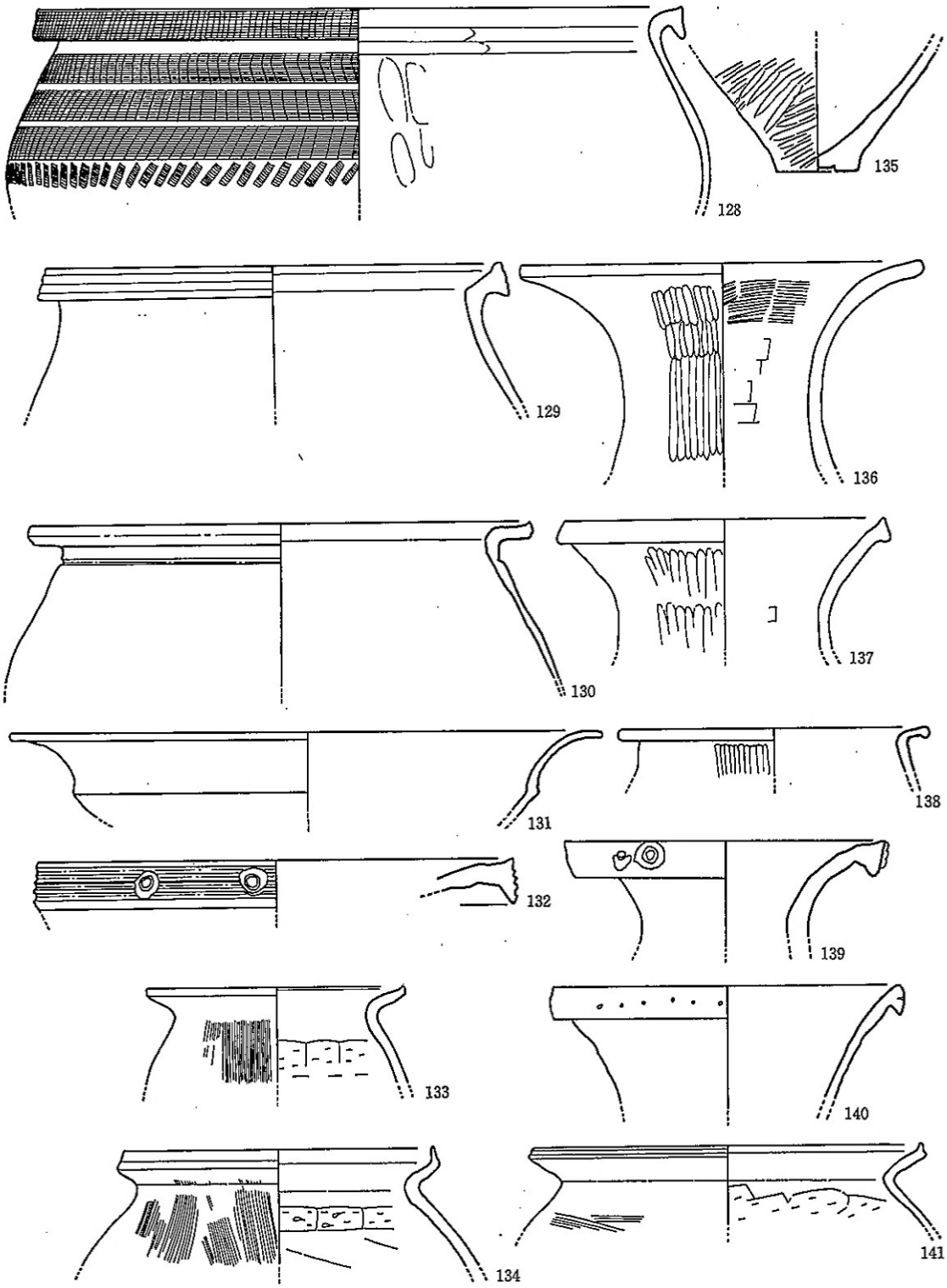
g類（304）　底脚で口縁部は二段に屈曲すると推定される。小形品。

h類（300）　砲弾形の体部で口縁部が比較的長く伸びるもので、器壁が厚く胎土の粒度が高い。外面には煤が付着しており、煮沸用具として使用されていたことが知られる。

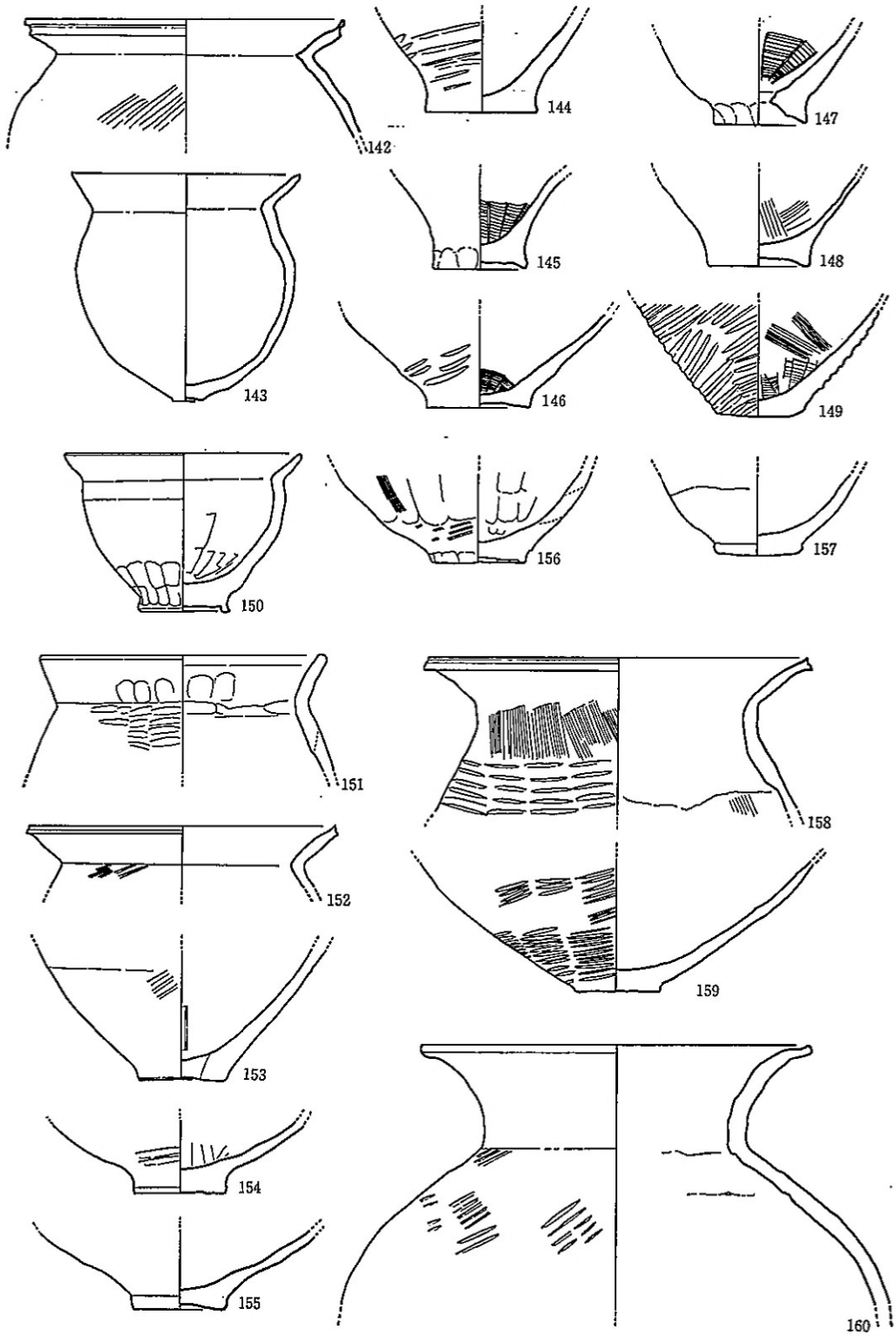
a類では瓜生堂遺跡（中西80）や八尾南遺跡（六尾南81）に類例が求められ庄内式に上る（294）を除くと、すべて布留式古段階新相に属する。d類（303・85）は形式学的に小型丸底壺の前段階と考えられ布留式古段階古相に属する。

小型丸底壺（321～323）　（321・322）は扁平球形の体部から口頸部が大きく開くもので、内外面ともヘラミガキが丁寧に施されている精製品である。体部下半のヘラケズリはあまり目立たず布留式古段階新相。（323）は屈曲部に鋭さが見られず形態的に後出する。

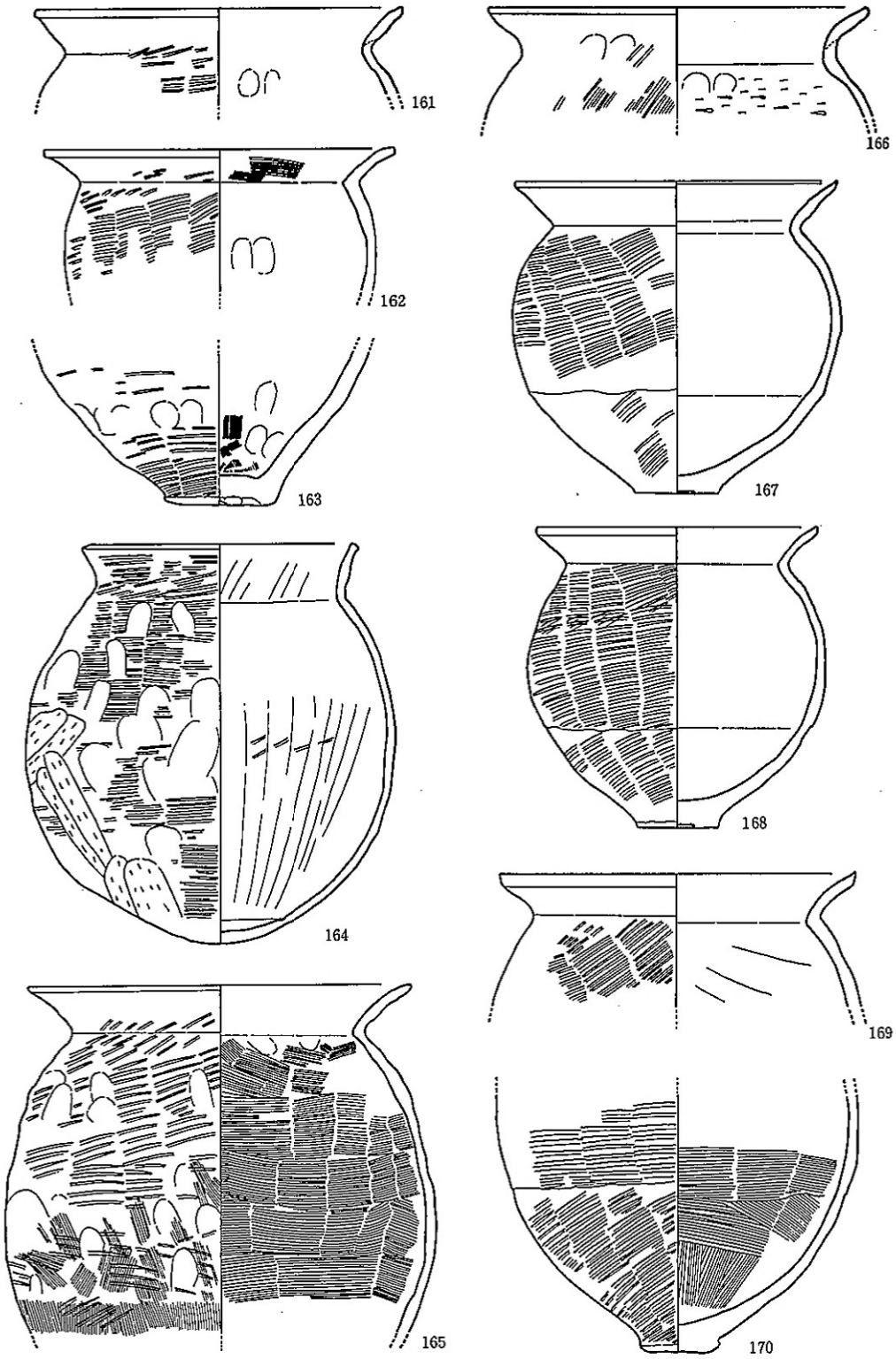
器台（324～332）　脚部と杯部がある。精製品杯部には口縁部付近で短く外反する（325）や口縁端部が丸く肥厚する（330・331）がある。丁寧なヘラミガキの多用が目立つ。脚部は直線的に開くもので、杯部と相互成形は挿入付加法に拠る。形態的に（325）は布留式を特徴づける形式である。



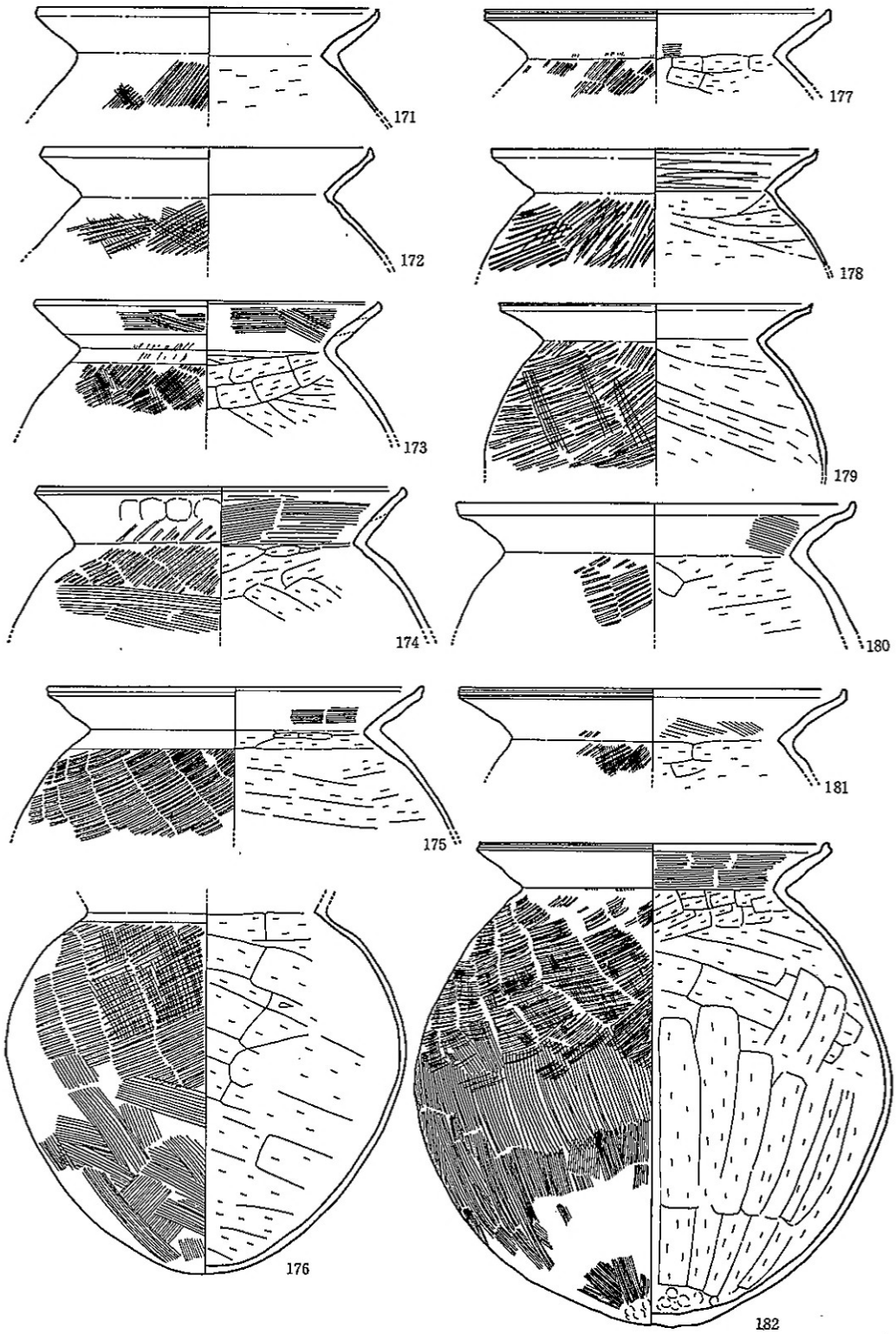
第89図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(1)〔弥生土器〕（S＝⅓）



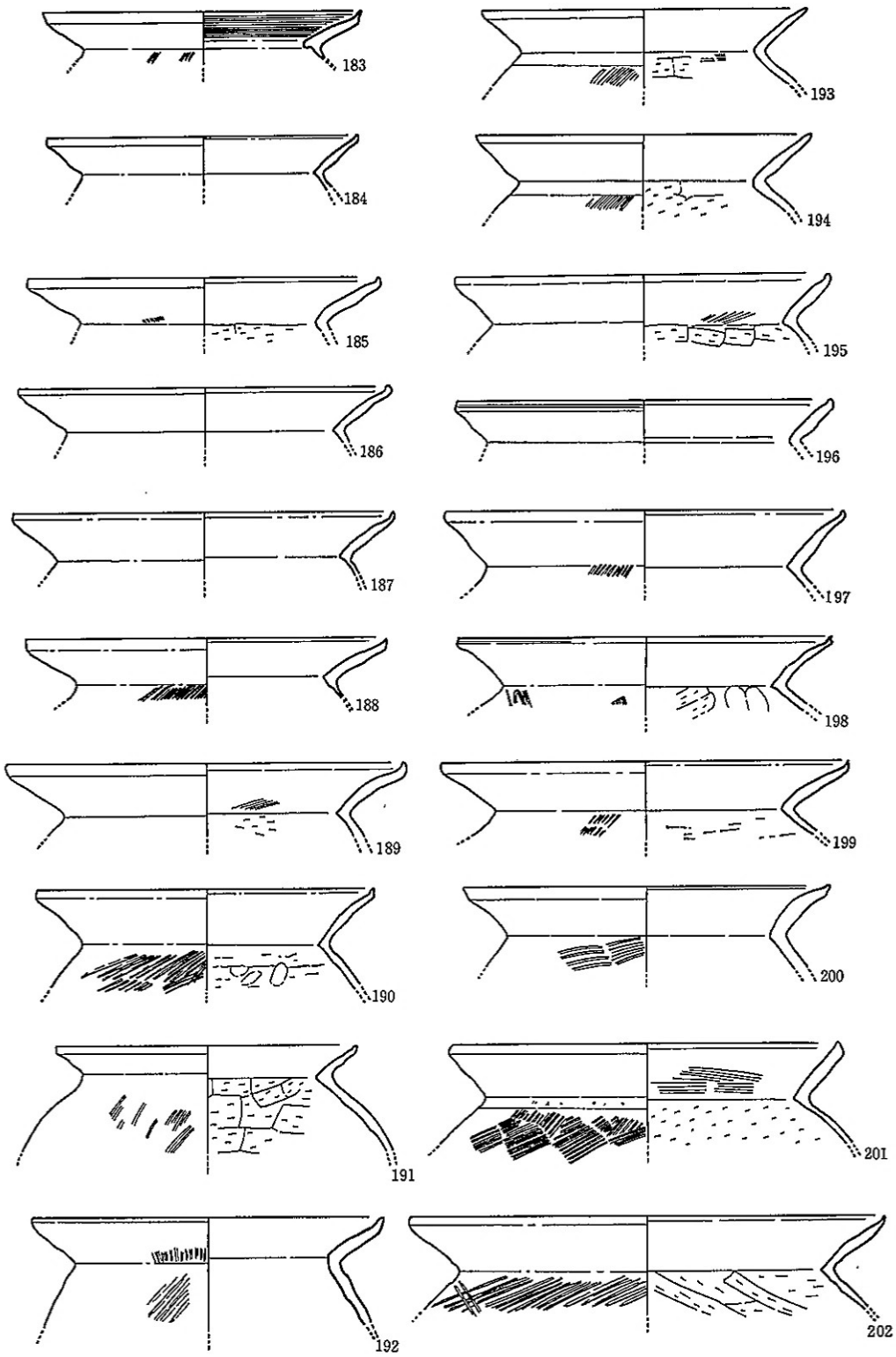
第90図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(2)〔弥生土器第Ⅴ様式系〕（S＝⅓）



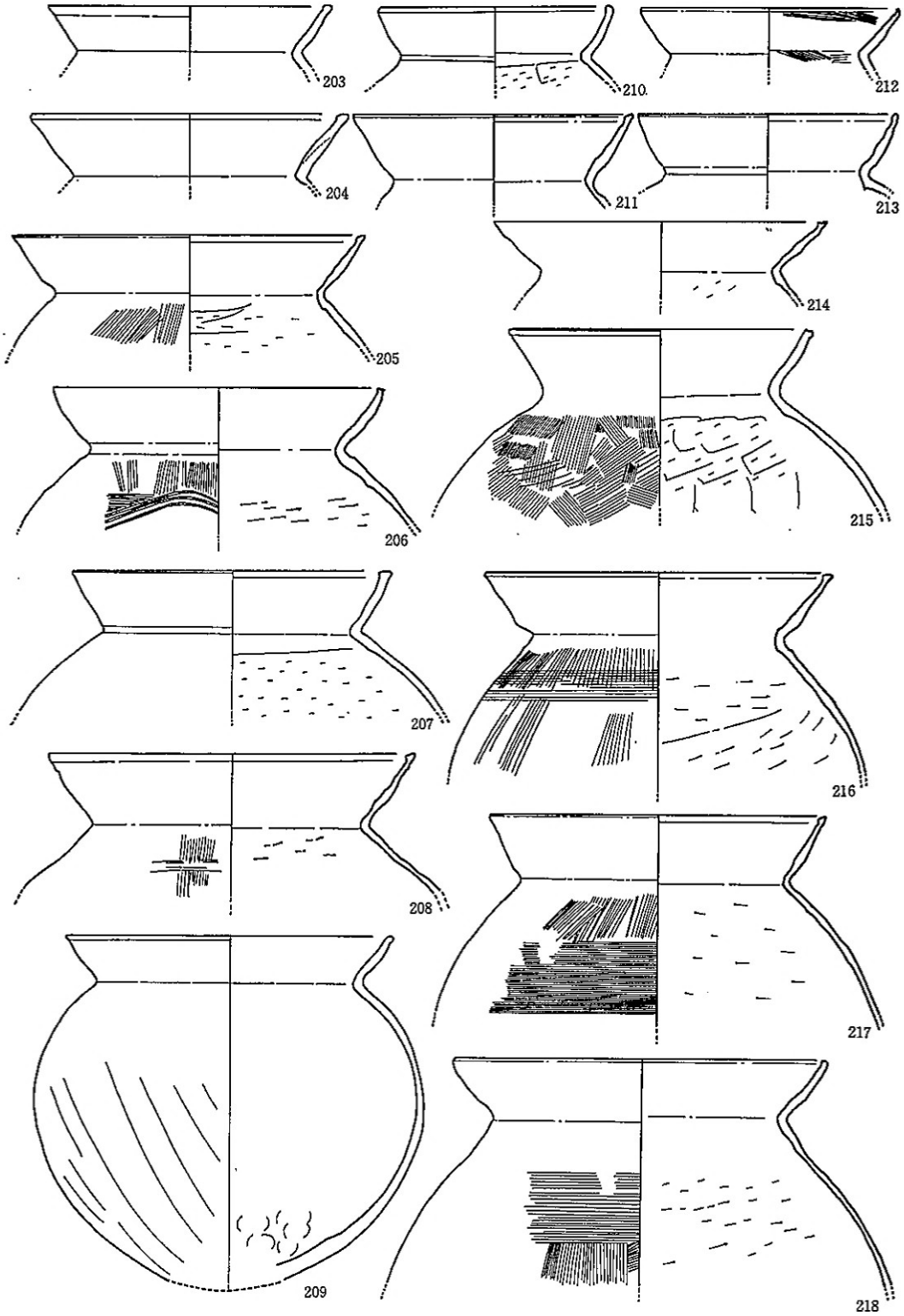
第91図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(3)〔第Ⅴ様式系土器〕（S＝⅓）



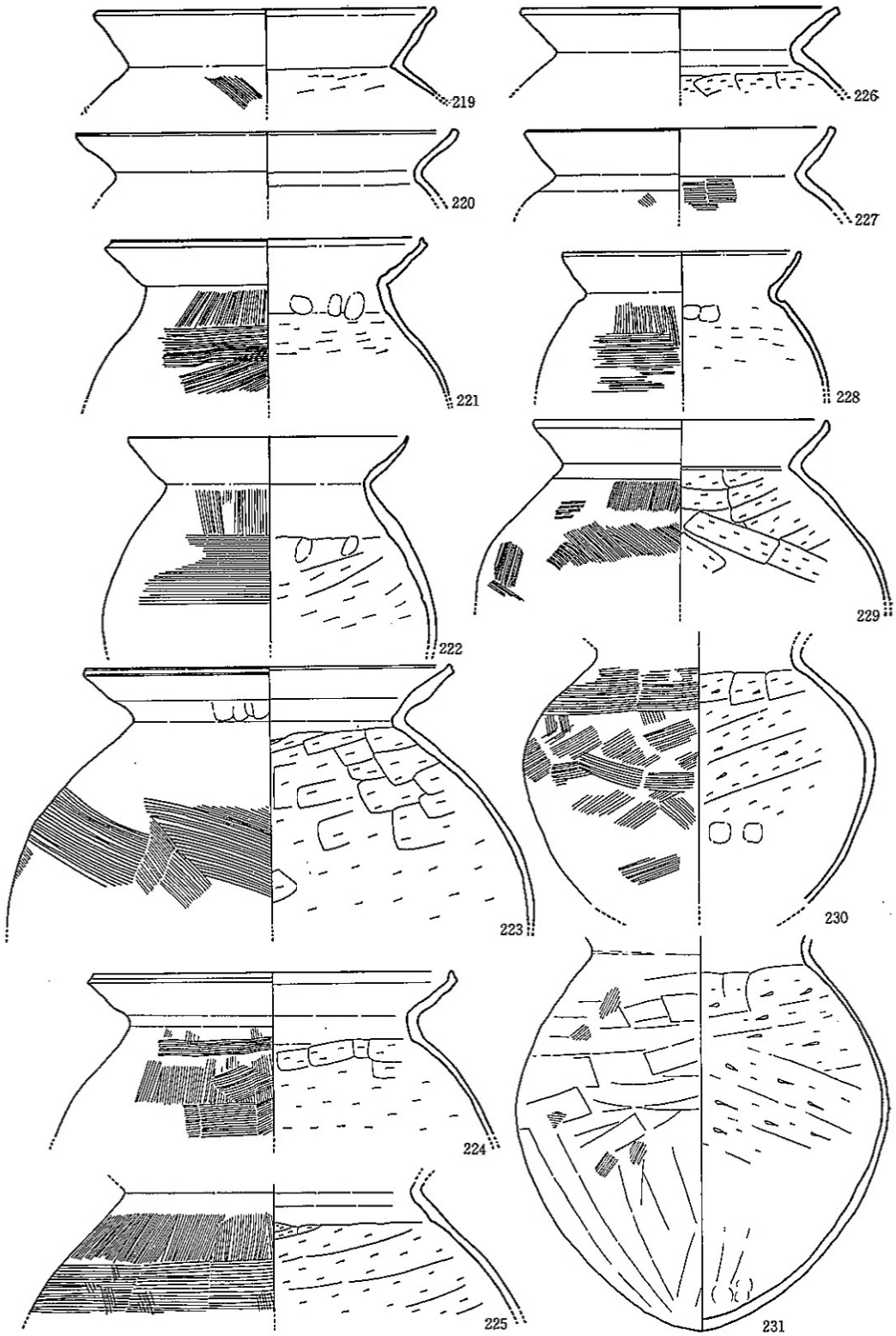
第92図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(4)〔庄内式甕①〕（S＝⅓）



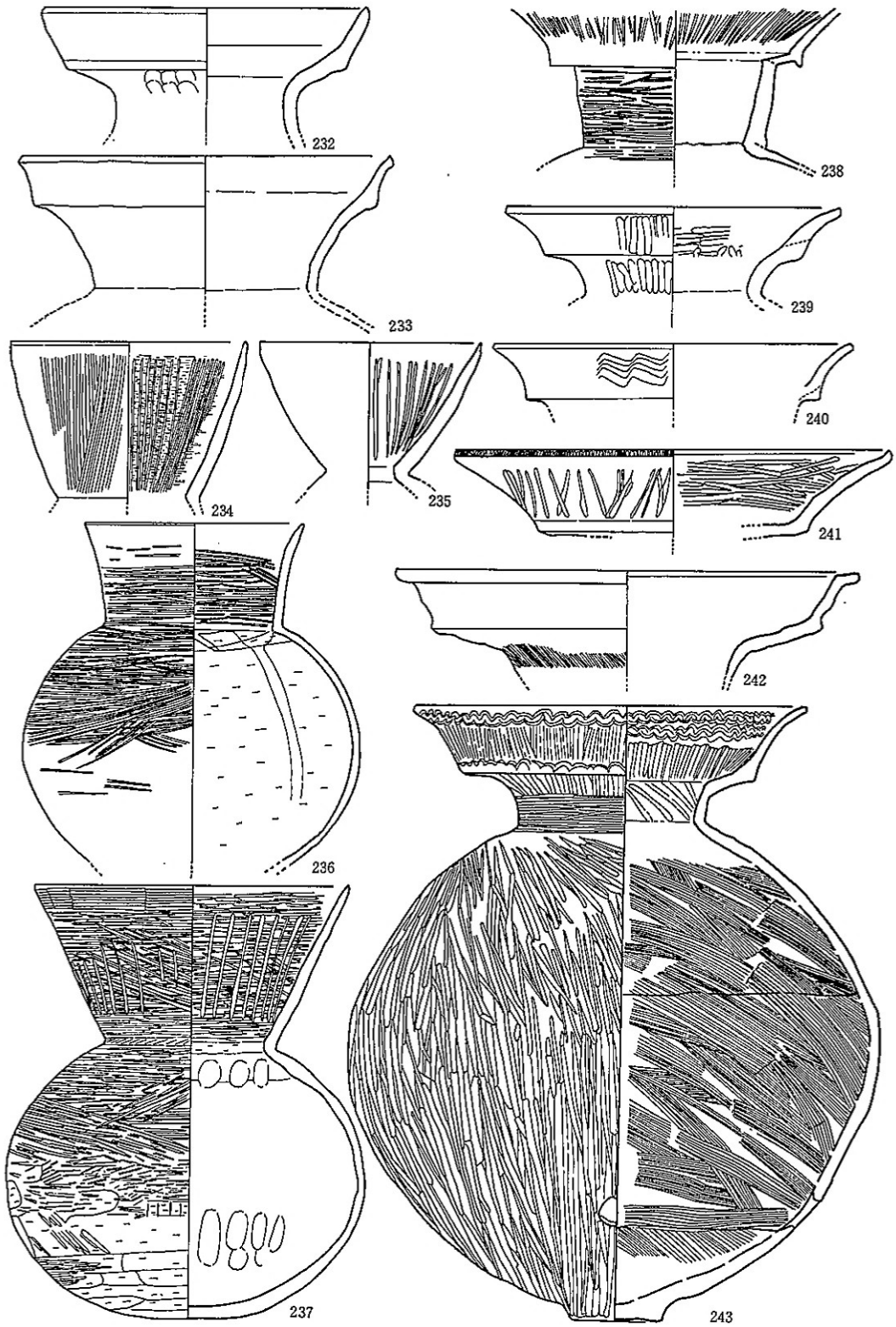
第93図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(5)〔庄内式甕②〕（S＝⅓）



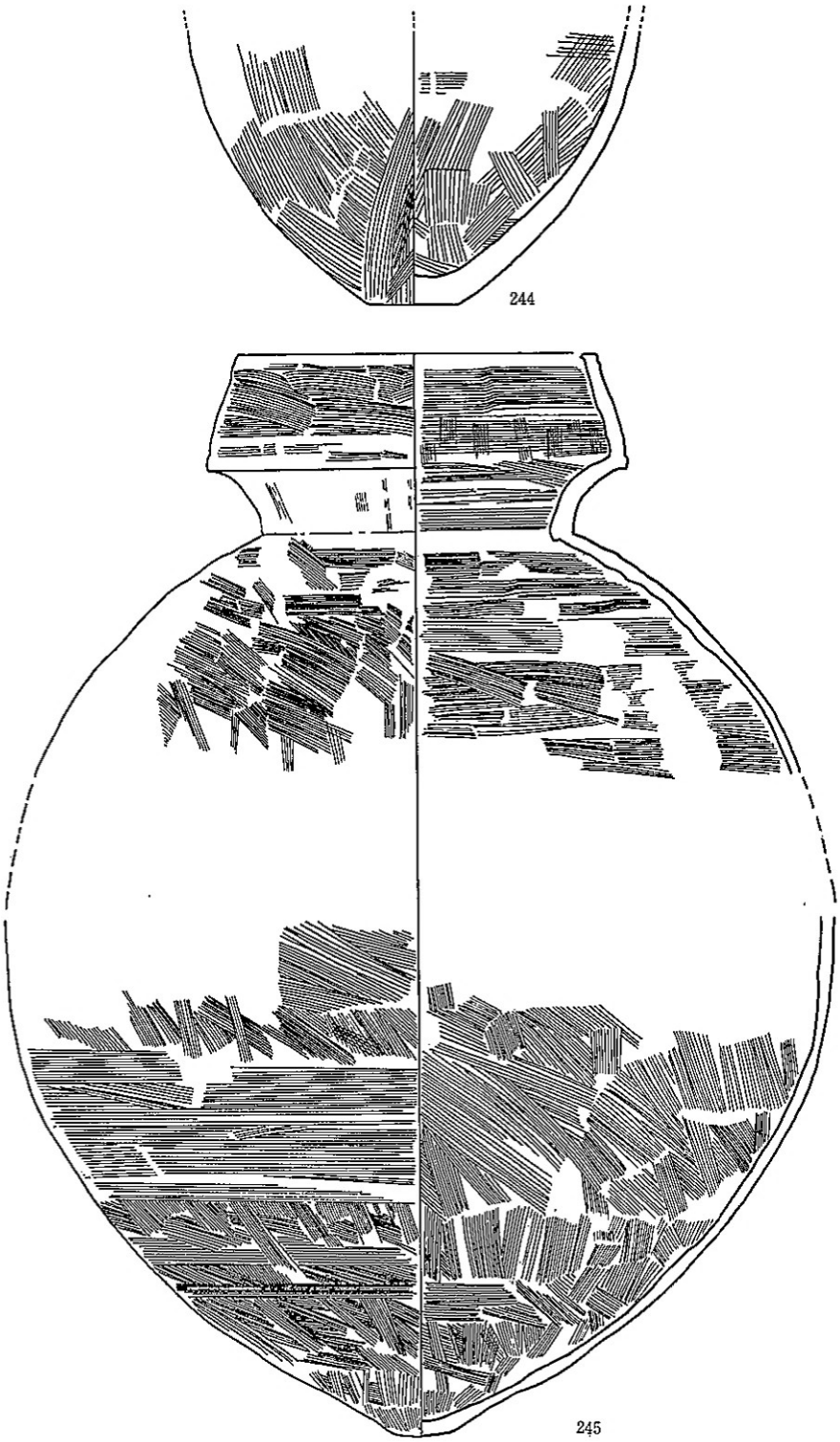
第94図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(6)〔布留式甕①〕（S＝1/3）



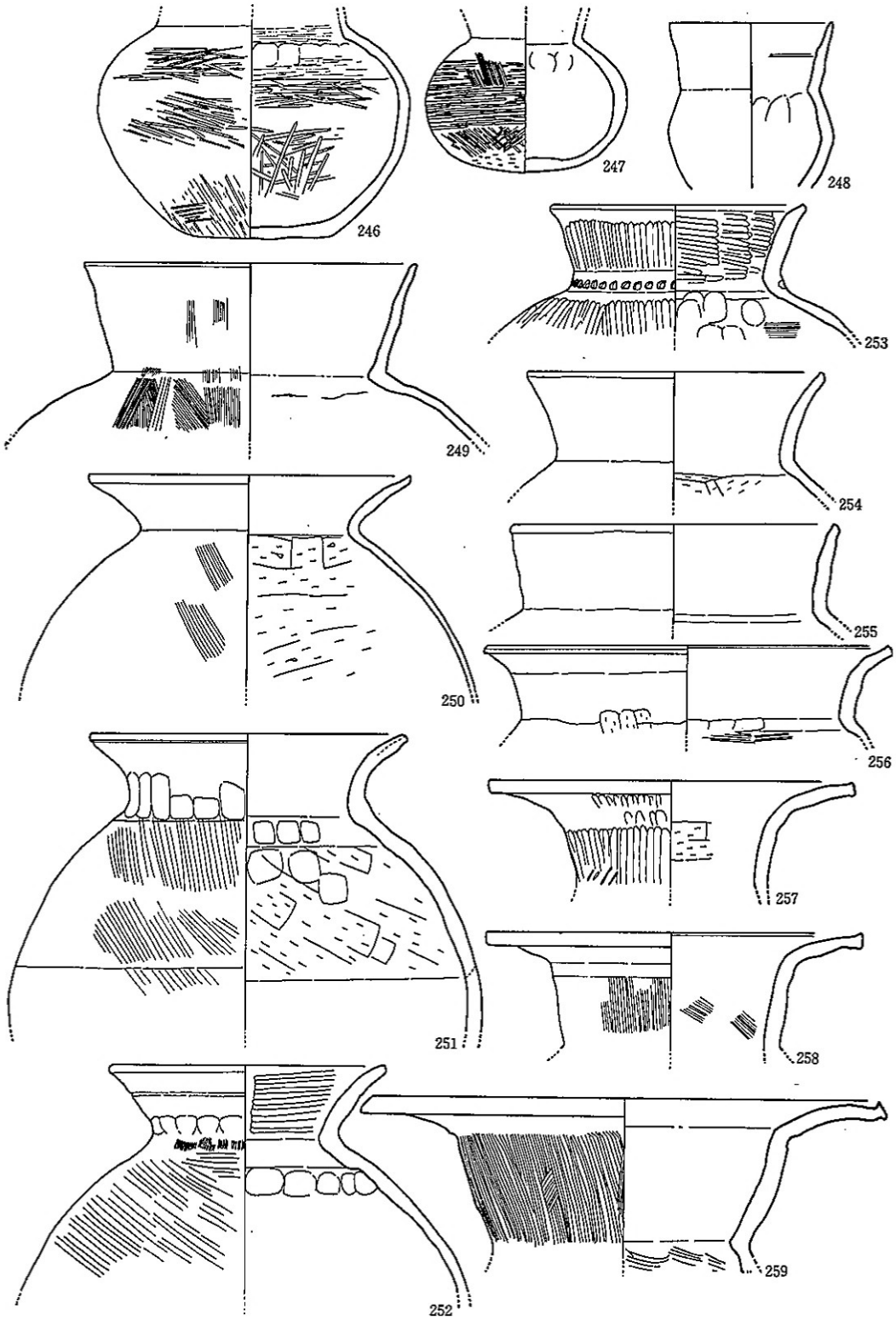
第95図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(7)〔布留式甕②〕（S＝1/3）



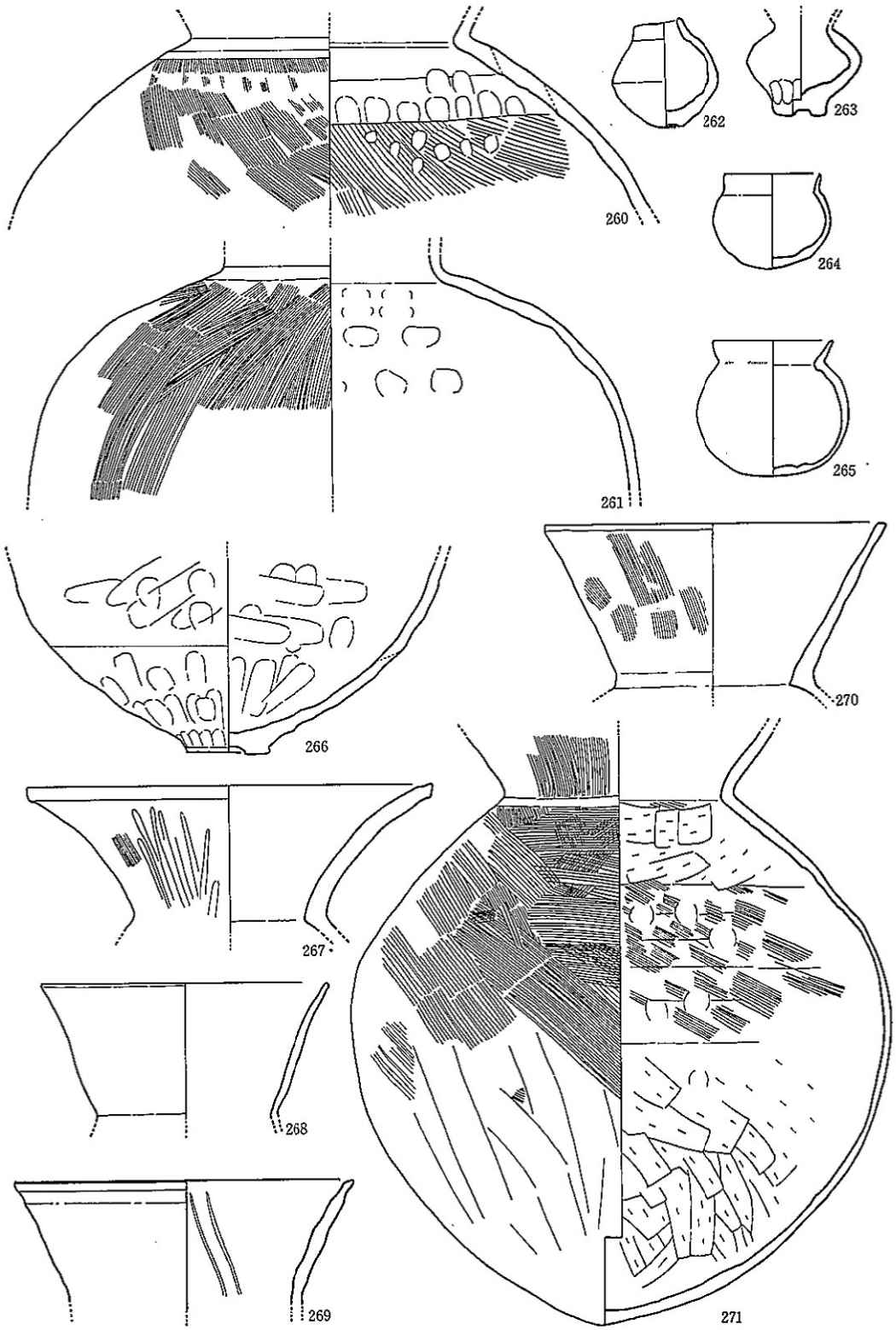
第96図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(8)〔二重口縁壺・長頸壺〕（S＝1/3）



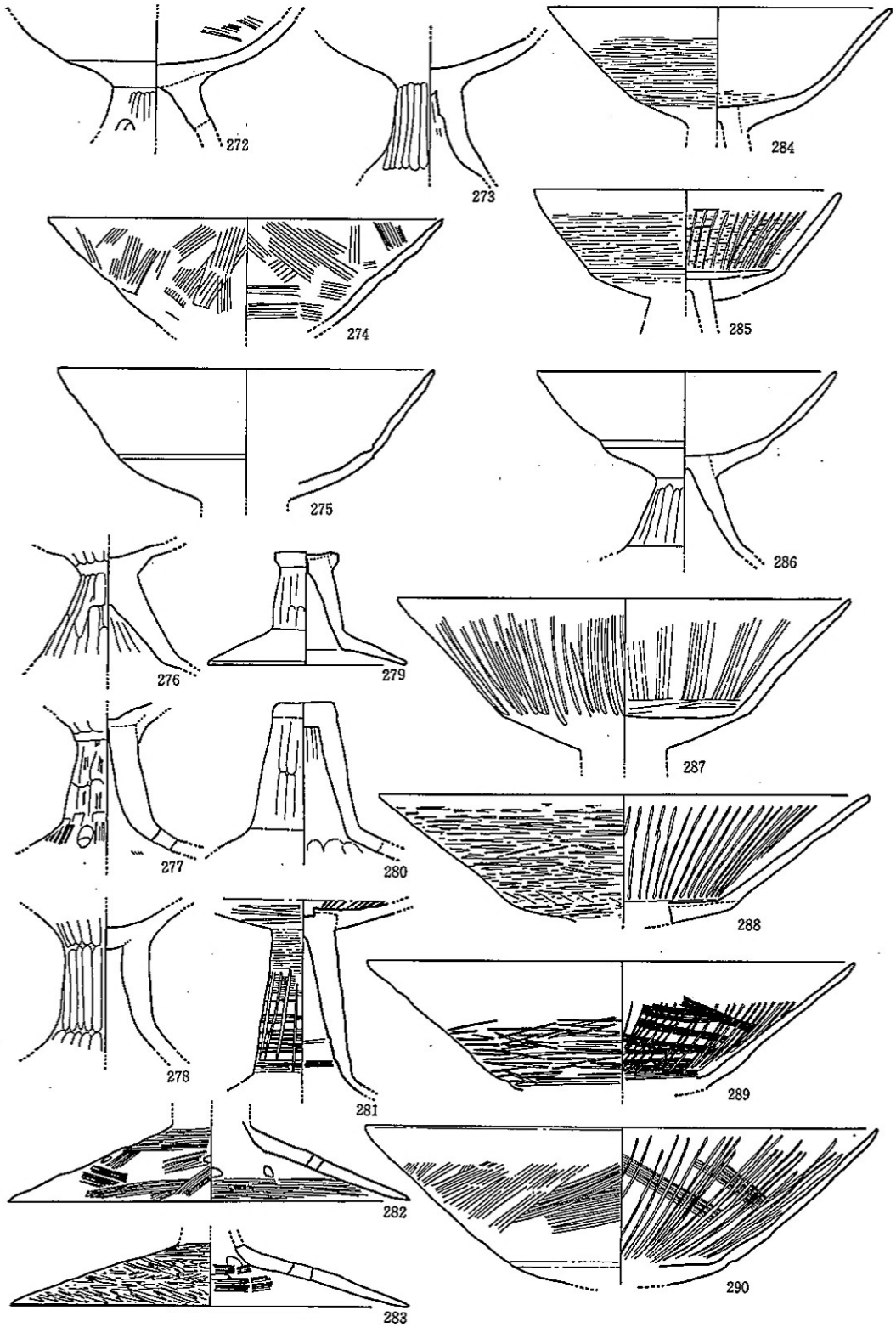
第97図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(9)〔二重口縁壺〕（244・S＝1/3、254・S＝1/6）



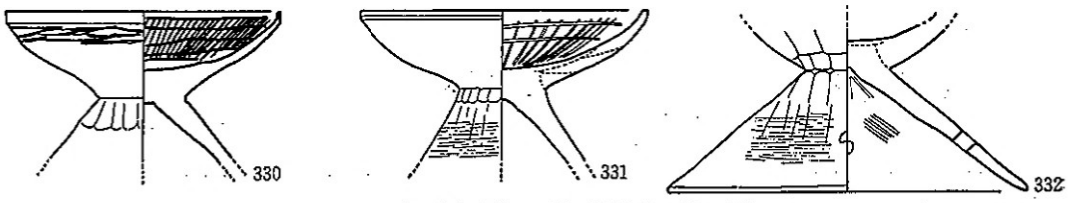
第98図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(10)〔短頸壺広口壺〕（S＝1/3）



第99図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(1)〔短頸壺・ミニチュア壺〕（S＝1/3）



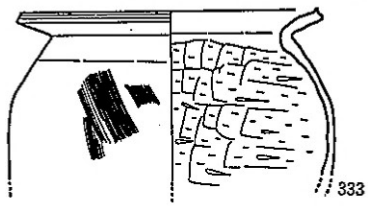
第100図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(2)〔高杯〕（S＝1/3）

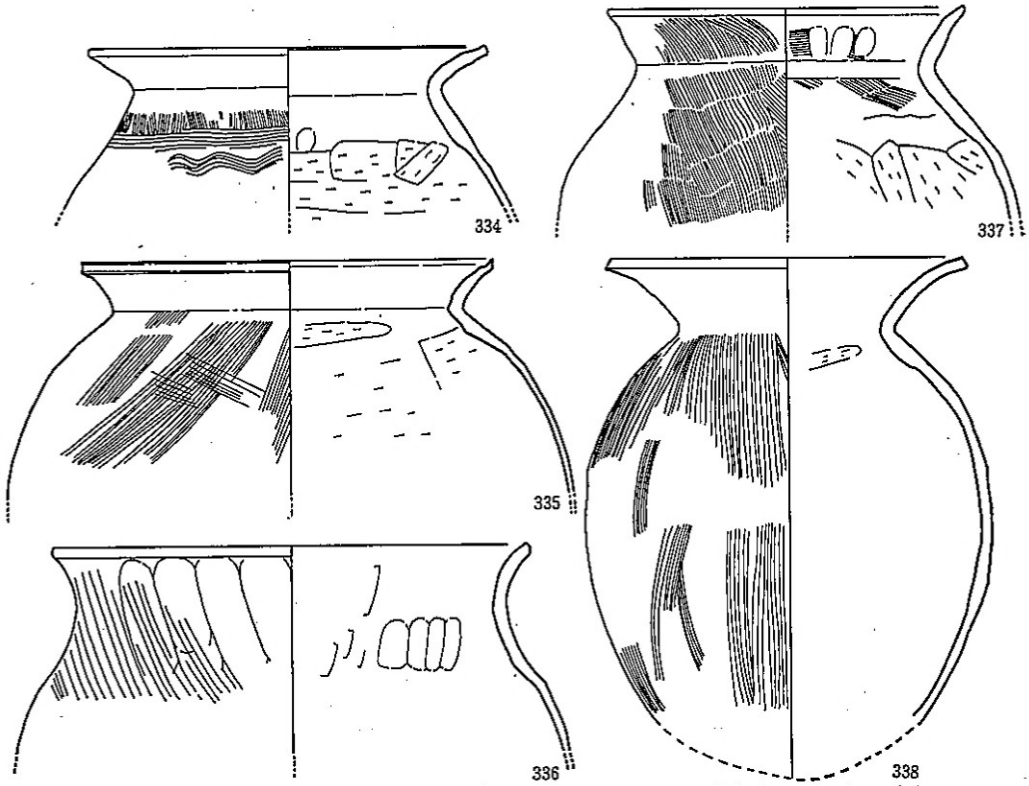


第103図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(15)〔小型器台〕（S＝⅓）

＜庄内式～布留式に存在する甕＞　（第104図）

残存状態が非常に良好で、顕著な磨耗を特徴とする弥生土器とは明らかに区別できる一群を掲げた。（334）は復元口径15.9cmを測り、色調は淡黄橙色を呈す。体部肩に櫛描による直線文と波状文が連続的に施され、内面へラケズリが屈曲部下にまで及んでいない点など、布留式古段階の甕に共通する。（335）は復元口径15.9cmを測る。口縁端部は短く上方に立ち上がり、体部は球形。体部外面には縦刷毛、内面にはへラケズリが施されている。上田町遺跡第1層出土例品（第4図―2）と同型式(原口63)である。（333）は復元口径12cmを測る小形品で、焼成は堅緻。直線的に短く伸びる口縁部と円筒形の体部、そして強い内面へラケズリが特徴で、河川Ⅱでも出土している。（338）は復元口径15cmを測り、長胴の体部をもつ。体部外面は縦方向の刷毛調整で、その単位は長い。内面はへラケズリ。体部内面下半には炭化物の付着がみられる。





第104図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(16)〔庄内式・布留式に存在する甕〕（S＝⅓）

＜外来系＞

形式から外来系と認識できる土器には、西から北部九州・山陰・吉備・摂津・東海系と細片の大和系が少量ある（個体数算出と図化は不可能）。型式学的にみると、後述するようにそれらの併行関係には多少のずれがあるものの概ねその時期は畿内の庄内式～布留式古段階に併行し、当該期の河川資料に占める比率は約10％に達する。地域別には吉備系が最も多く16点、次に山陰系が５点、北部九州・東海系が各々１点となる。器種別には甕が大半を占め、他に吉備系に鉢、山陰系に壺がみられる。外来系土器群の中で吉備系の占有比率が高く東海系のそれが極端に低い先の事実は、当該期の河内全体に普遍化できる現象で近年資料増加の著しい八尾市周辺の諸遺跡でも指摘されている。纒向遺跡では外来系土器の比率を時期別（１～３式）に処理しているが、当該期に最も近い纒向３式をみると東海系（45％弱）が吉備系（３％前後）を大きく上まわり河内とは全く逆の結果を示(石野・関川76)している。

（参考）　河内平野における外来系土器出土遺跡（庄内～布留式）(註)

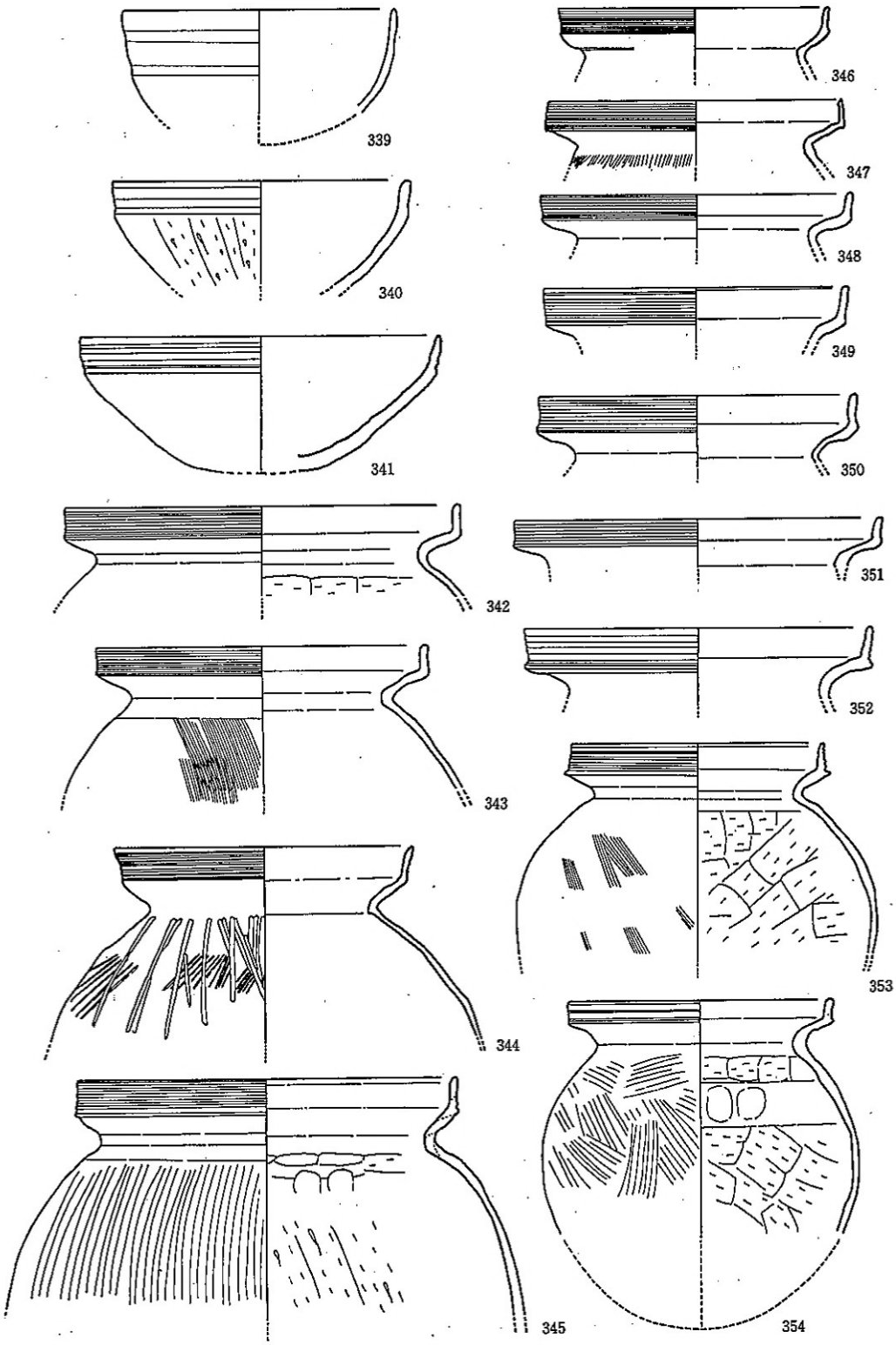
- 吉備―新家・瓜生堂・若江北・加美・中田・萱振・八尾南・小阪合・東郷・本郷
- 山陰 北陸―加美・中田・八尾南・東弓削・東郷・萱振・森の宮
- 東海―瓜生堂・若江・鬼塚

＜吉備系＞　（第105図）

甕と鉢で計16点。甕は全て口縁部が「く」の字形に屈曲し更に上方に拡張する形式で、計13点。完形品はないが、球形の体部に僅かに平底を残す底部がつくと推定される。技法的にみると、口縁部拡張側面はヨコナデのみのもの（354）以外は全て櫛描平行線が施されており、それらには深いもの（347・352・353）と沈線の浅いもの（その他）の二種類がみられる。体部外面には、刷毛目のみ（343・347・353）、密なヘラミガキ（345）、刷毛目＋ヘラみがき（344）と三種類の調整技法がみられ、口縁部へと続く屈曲部には強い指ナデ痕が緩やかな凹みとして残る。屈曲部内面はヨコナデにより丸味を有する。体部内面は一般にヘラケズリが施されるが、後ナデにより平滑に仕上げられている例（343）もある。胎土・色調は総じて、微量ではあるが角閃石を含み黄橙色系を呈する。鉢は底部から内彎気味に伸びる口縁部を有する形式で、口縁部がほぼ連続的に伸びる（339）と端部付近で角度を変え外反気味に伸びる（340・341）に分類できる。ともに底部は平底と推定される。後者の口縁部側面はヨコナデにより擬凹線状を呈し、体部との境には稜線が走る。

甕・鉢ともに、形式・技法から搬入品の可能性が高いと思われる。型式学的には甕（244・246・249）を除いて岡山平野の百間川古墳時代Ⅰ(江見80)・下田所式(柳瀬77)に該当する。甕（244・246・249）は、①口径が小さい、②櫛描平行線文のあたりが弱い、③口縁拡張部下の稜線があまり明確でない、などの諸点より時期が下がり百間川古墳時代Ⅱ(江見80)に該当するであろう。

なお、甕（343・345）には濃厚な煤の付着が認められ当地にて使用されていたことが窺える。



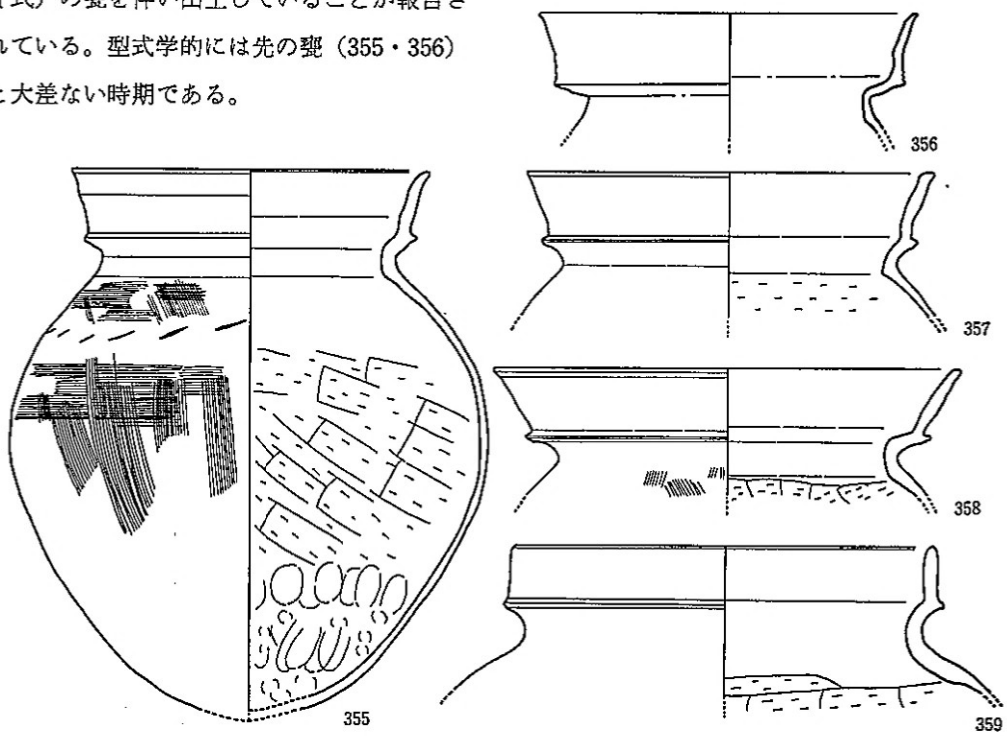
第105図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(17)〔吉備系土器〕（S＝1/3）

＜山陰系＞

甕４点と壺１点、計５点。調査区内で山陰系土器が出土するのは、本河川だけである。いずれも「鍵尾式」と呼称されている複合口縁の形態を示すが、口縁部が途中で角度を変え外反気味に伸びる甕（355～358）と内傾気味に上方に伸びる壺（359）に分けられる。形態・成形技法・調整技法・胎土からして全て搬入品と思われるが、特に（355・356）は可能性が高いとの教示を得ている。(注) 甕（355）を例にとると、体部上半の縦刷毛と横刷毛の組み合わせ、肩部の櫛状施文具による圧痕文の装飾などに山陰地方における普遍的な甕の技法原理がみられ、法量の多少の差こそあれ秋里遺跡８・９・10区出土例品(加藤76)に酷似する。この甕は底部の一部が欠損するもののほぼ全容が知られる。器高22cm(推定)、口径14.3cm、最大腹径19.2cmを測る。体部内面のヘラケズリは右下りに施され、底部付近には指頭圧痕が残る。煤は底部頂点付近を除き厚く付着している。他の（357・358）にも煤の付着がみられ、吉備系土器同様当地にて煮沸道具として使用されていたことが知られる。胎土はいずれも長石・石英そして輝石の極微粒を含む。色調は、にぶい黄橙色（355・359）、灰黄褐色（358）、淡黄橙色（357）、灰白色（356）を呈する。

これらは型式学的にみると、（355・356）が秋里Ⅰ式（８・９・10出土）、青木Ⅴ・Ⅵ(清水78)に、（357・358・359）が青木Ⅶに該当し、吉備系土器と同様に二時期に分離でき、河川の主体を占める庄内式新段階～布留式古段階に併行する。

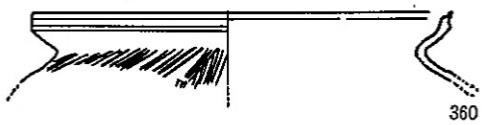
東大阪市遺跡保護調査会による当遺跡(上野80)の調査でも、同形式の甕２個体が庄内式新段階（上田町Ⅱ式）の甕を伴い出土していることが報告されている。型式学的には先の甕（355・356）と大差ない時期である。



第106図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ出土遺物(18)〔山陰系土器〕（Ｓ＝1/3）

＜東海系＞　（第107図）

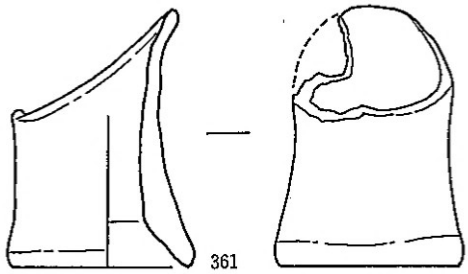
河内の土で製作されたＳ字状口縁甕で、暗褐色を呈する。Ｓ字状の屈曲は弱く、口縁端部はやや薄く丸く終る。外面は刷毛目調整。復元径15.5cmを測る。模倣対象は型式学的にみて、大参編年(大参68)のｂ類天屋敷式、あるいは安達・木下編年(安達・木下74)にて古式の布留式土器を伴うⅢＡであると思われる。



第107図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ出土遺物(19)〔東海系土器〕

＜北部九州系＞　（第108図、図版138）

中空で鼓形を呈し、高さ10cm、底部径７cmを測る土製支脚である。色調は淡黄橙。畿内には存在しない形式で、北部九州を中心に分布し大橋氏の分類によると(大橋78)、B_1タイプで古墳時代前期に該当する。

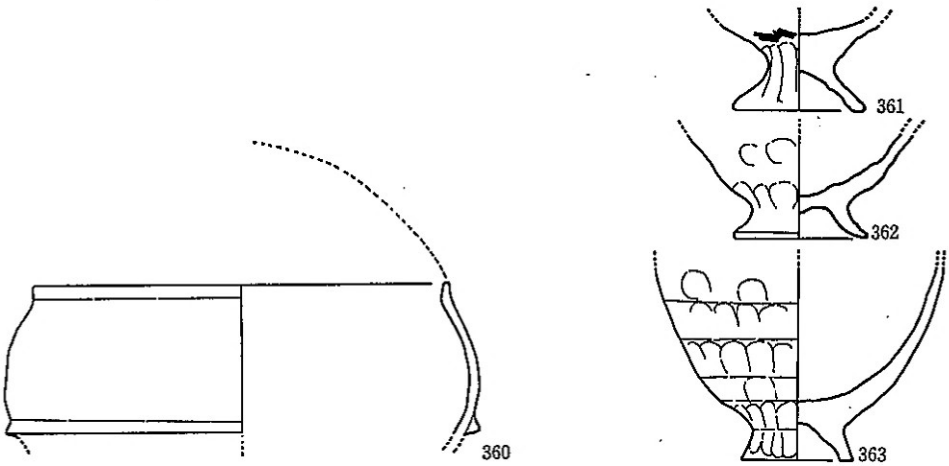


第108図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ出土遺物(20)〔北部九州系土器〕

＜その他、製塩土器（361～363）・手焙形土器（360）＞　（第109図）

製塩土器　反鈎鐘状の体部をもつ脚台式で、計３点。すべて調整は指ナデ、色調は灰白色混りの浅黄橙色を呈する。脚部の形式は異なり、（361）はハの字形に開き裾端部が丸く終わる、（362）は裾端部が外へ反る形で薄く尖り気味に終る。（363）はハの字形に踏んばり裾端部は平坦に終わる。型式学的には、同志社編年(森・白石76)（紀淡海峡）のｃ類、しょうぶ谷Ⅰ式に、酒井氏試表(酒井76)のⅥ・Ⅶ類に該当し、所属時期は庄内式新段階～布留式古段階に収まる。他に図化は出来なかったが、体部に叩き痕を残す破片も出土している。

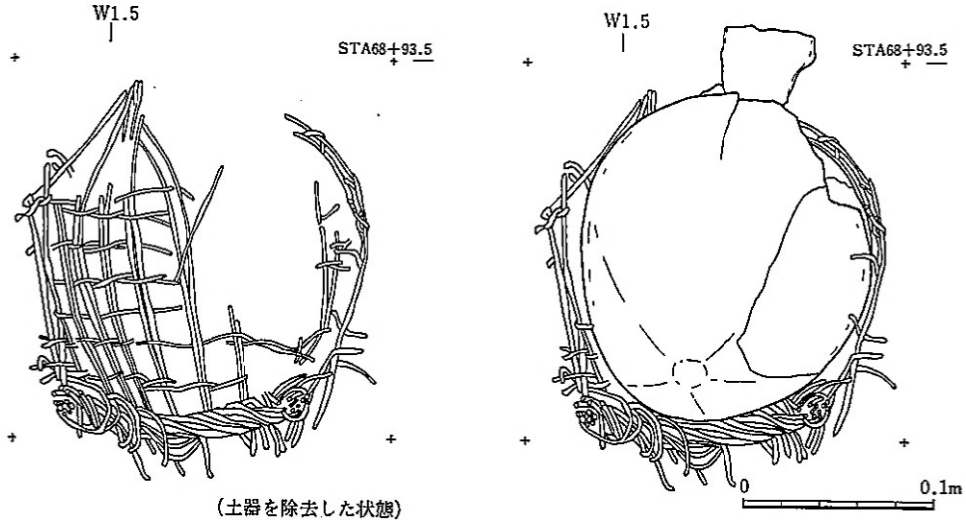
手焙形土器　復元最大腹径17cmを測り、色調は淡黄橙色を呈する。かろうじて図化できる程度の破片でへい部・底部の形態は不明だが、体部下方にめぐる突帯の稜に鋭さがみられない特徴より、庄内式―布留式にかけての型式と思われる。



第109図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ出土遺物(21)〔製塩土器・手焙形土器〕（Ｓ＝1/3）

＜植物製品―籠＞　（第110図、図版28・29）

ＳＴＡ68＋93.5、Ｗ 1.5付近、布留の急激な流れの南流底だまりで検出した。籠は底の輪が切れ、土器（第95図・231）を中心に左右に開いていた。蔓は中空で径５㎜を測るもので、種類は不明である、構造は蔓14本をよじり束にした輪を底にすえ、それより上方で２点に収束するよう、縦条・横条各々２本１組でモジリ編みされている。収束部は欠損して不明だが、手でもてるように工夫されていると推定される。大きさを復元すると、輪の径が約10㎝、高さ15㎝以上になり、土器がすっぽりと入る程度になる。



（土器を除去した状態）

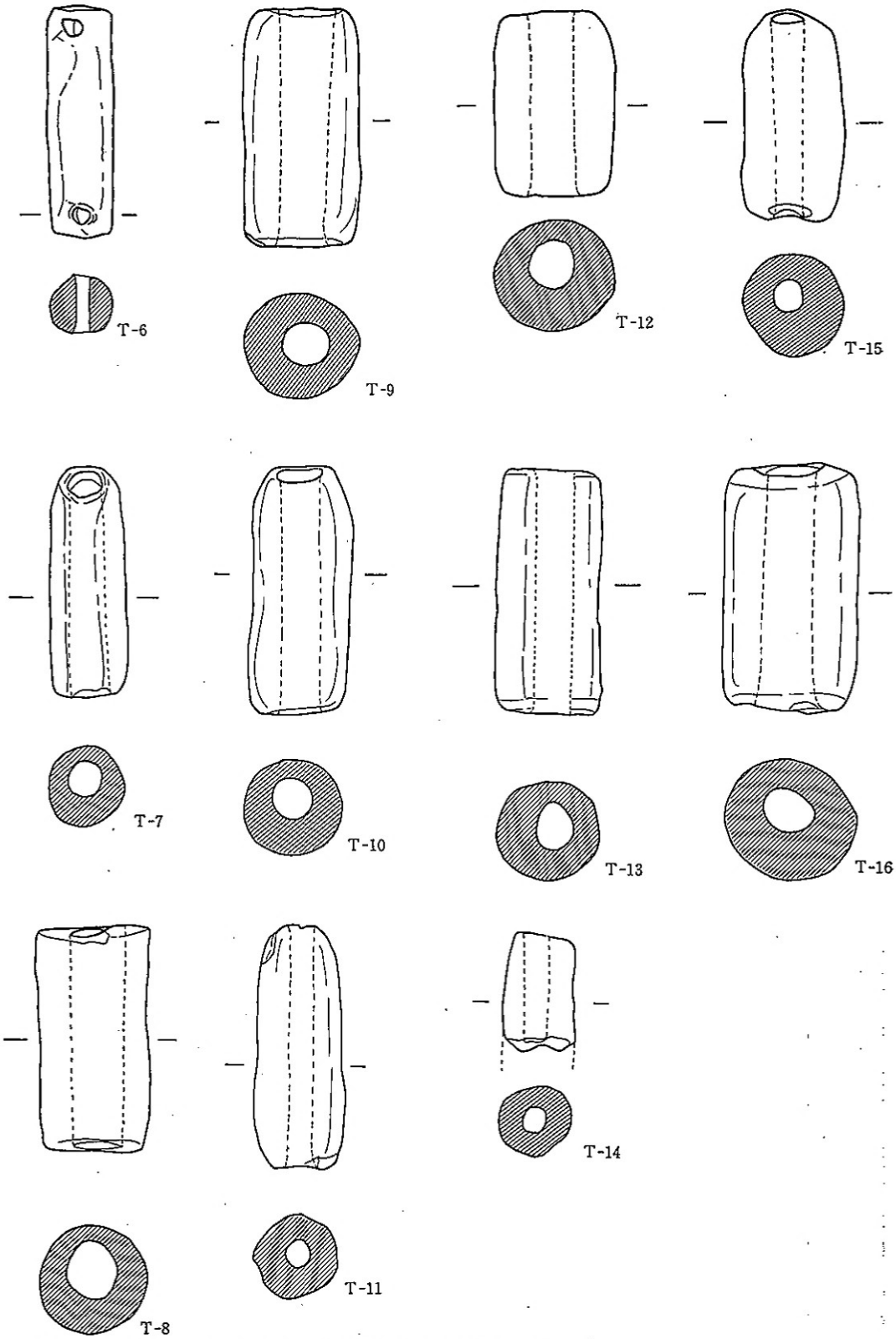
第110図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ籠出土状況図（Ｓ＝¼）

＜土錘＞　（第111図、図版138）

計11点で、形式は有孔（Ｔ６）と管状（Ｔ９～Ｔ14）に分かれる。以下観察表に拠る。

第17表　古墳時代Ⅰ　Ｂトレンチ河川Ⅰ出土土錘観察表

番号	出土地点	形態	長さ	最大径	重量	備考
T-6	河川1	有孔式	7.32cm	2.17cm	41.1g	淡灰褐色を呈する　両端に小孔を有する
T-7	〃	管状式	7.47cm	3.64cm	112.9g	褐色～淡褐色を呈する
T-8	〃	〃	5.79cm	3.72cm	89.9g	淡褐色を呈する
T-9	〃	〃	6.44cm	3.46cm	81.3g	灰黒色を呈する　一端は凹む
T-10	〃	〃	6.95cm	2.53cm	44.0g	淡灰褐黒色を呈する
T-11	〃	〃	7.76cm	3.12cm	82.9g	褐白色を呈する
T-12	〃	〃	7.74cm	3.34cm	102.1g	淡灰褐色を呈する 孔の一方の断面は隅円方形に近い
T-13	〃	〃	7.71cm	4.95cm	121.0g	淡灰褐色を呈する
T-14	〃	〃	7.03cm	3.47cm	95.6g	淡灰褐色を呈する　全体の⅓に黒斑
T-15	〃	〃	7.55cm	2.89cm	60.2g	褐白色を呈する　一部欠損
T-16	〃	〃	3.77cm	(2.3 cm)	19.7g	淡褐色を呈する　一端欠損



第111図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(22)〔土錘〕（S＝½）

<木製品>　（第112図）

なすび形着柄鋤（第112図・図版142）（W183・184）が2点出土している。ともに樹種はカシで柾目材の縦木取りである。（W 183）は、耕起部分としての刃部が一枚板のもので、現長49.9㎝、現存幅7.30㎝、最大厚1.3㎝。抉り込みから下の刃部は長さ48.2㎝、厚さ上方中央部が1.3㎝、下方中央部は8㎜、刃部先端部では5㎜を測り、長さの割には非常に薄身である。側縁は平らな面をもち、鉄製鋤先をはめこむ装置は作られていないので、そのまま木製鋤として使用したものである。（W 184）は、上端部、下端部とも欠損し、側縁も一部欠損、半身しか残っていないが着柄部分としての基部に小さな突起と抉り込みがあり、刃部が二又にわかれたなすび形着柄鋤である。現存長26.7㎝、現存幅5.3㎝、厚さ1.8～1.4㎝。

角形容器側板（第112図、図版143）（W 185）は、平面形が台形をしており、短辺10.8㎝、長辺残存部で11.2㎝、高さ8.5㎝、厚さ0.8㎝で、底部に0.4×0.6㎝の横長長方形の小孔が2個あり中央部両側辺近くに0.8×0.3㎜の縦長の小孔が位置する。上下両側辺、右側辺は平面と直角に交わる面をなすが、左側辺は直交する 0.3㎝幅の平面と斜めに交わる面をなす。一平面は加工痕が明瞭に残るが、他方の面は荒れている。樹種はコウヤマキで、柾目材の横木取りである。これは三重県北堀池遺跡出土の箱形容器に同様の例があり、その側板と考えられる。当遺跡の容器は、台形状板を4枚と底板を組みあわせ、底部の広い台形状の箱形に組み、小孔をサクラの皮などでとじあわせるものであろう。

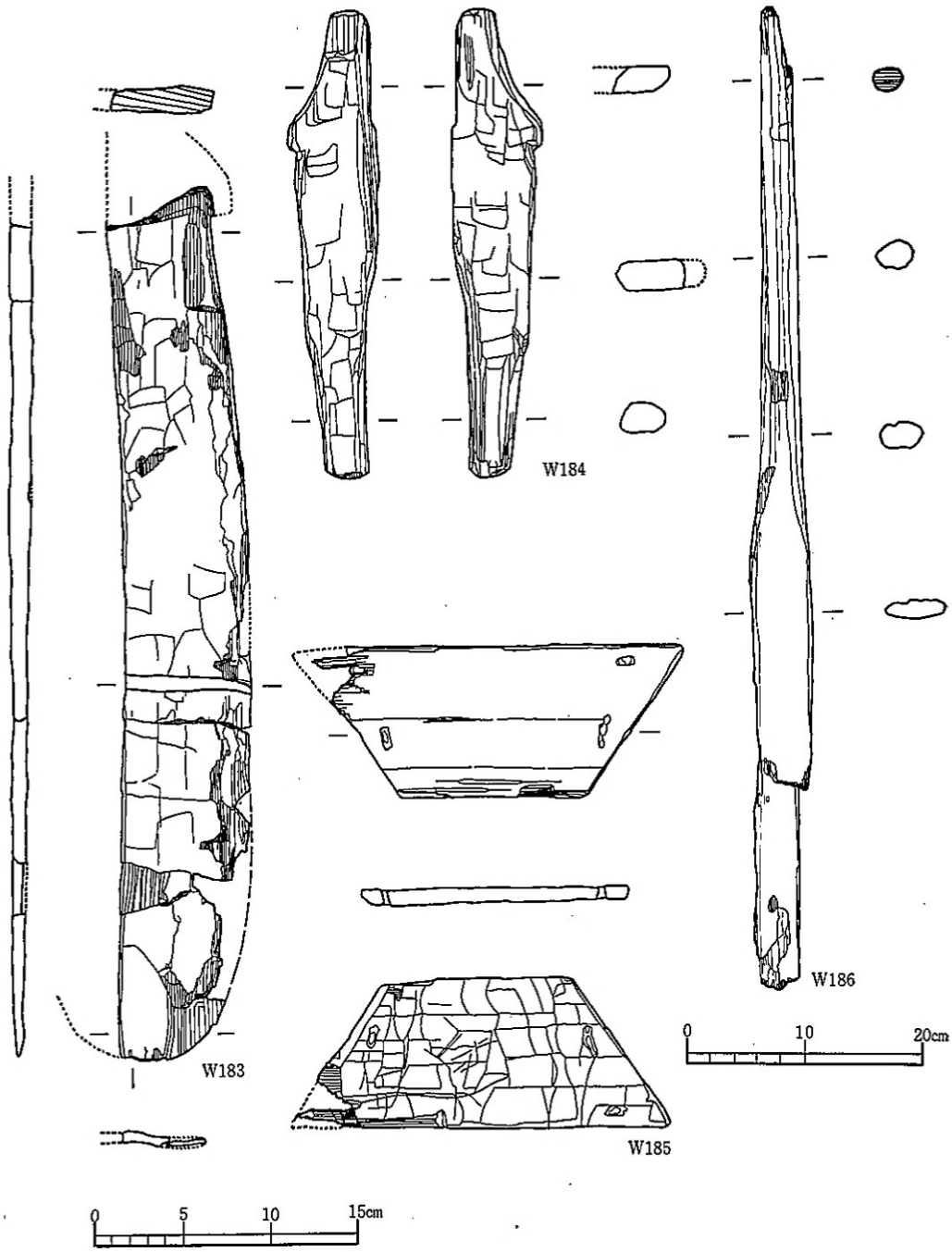
櫂（第112図、図版142）（W 186）は、現長83.0㎝、身部最大幅5.2㎝、厚さ1.7㎝、柄部径1.6×1.4㎝を測り、一木作りである。身幅の狭い櫂身になる。樹種はヒノキで柾目材の縦木取りである。

（W 192）（図版145）は裏面がほぼ平坦になるが、直径5.4×4.0㎝を測り端部が有頭状に作られており、組み柱の上端部になるとみられる。

用途不明木製品（図版145）（W 194）は、上半部は断面方形を呈し下半部は尖り気味につくられる。上半部に穿孔のある小型の木製品である。丁度栓のような形である。

用途不明木製品（図版145）（W 195）は、断面方形を呈し、端部に浅い抉り込みがあり、細長い角棒状木製品になるものと考えられる。下半部は角を面取りしている。組合せ式木製品の部品である。両端に小孔のある板状木製品（図版146）（W 202）には、4.5～4.6㎝間隔に緊縛した紐の痕跡（幅0.6㎝）が3本白く浮き出て残っている。小孔のある板状木製品（図版147）（W 206）は、 正面上半は徐々に薄くなる斜めの面を呈し、その部分の左側辺沿いに小円孔が2ヶ穿孔されている。右側は割れ下端部は焼けて炭化しているが、スギ製の板状木製品である。裏面は他の板材と2枚合わせたものとみられる。この他に断面扇形の棒状木製品（図版146）（W 200）、断面半円形の細い棒状木製品（図版146）（W 201）などがある。

Bトレンチ河川Ⅰからは、この他に88点以上の木製品、加工木がある。切断痕のある棒状木製品や加工材、板材、割切材、杭などで、他に削った際に出来た薄い削りくずや樹皮も出土している。

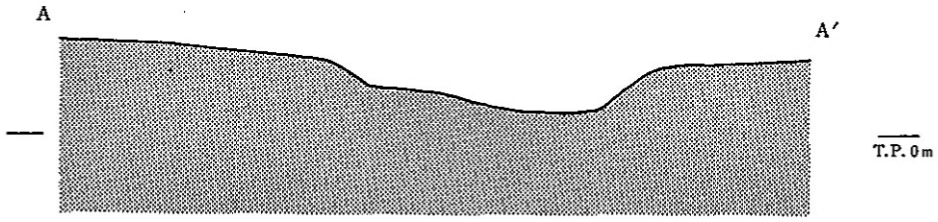


第112図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅰ出土遺物(23)〔木器〕
W183・W184なすび形着柄鋤（1/4）、W185角形容器側板（1/4）．W186櫂（1/6）

河川Ⅱ

<位置・形状>　（第113図、図版25・27、付図3）

トレンチ部ＳＴＡ68＋97以南および６Ｂトレンチ西端にて検出した。河川Ⅰにほぼ直交し南北方向に走行するプランを示す。形状は場所により異なる。河川Ⅰとの連結部は、両岸が迫り出し水門状を呈する。河幅は約４ｍ。ベルト１から２にかけて、岸は緩やかな傾斜面がテラス状に張り出し中央の不整円形のたまりへと続く。ベルト２で、河幅約９ｍ、深さ約１ｍを測る。ベルト２以南は、漸移的に岸の傾斜が急になり河幅を狭くなる。その変化はベルト４以南で顕著で、ベルト４で深さ約1.4m、トレンチ部南端で河幅約6.5m、深さ約1.7mを測り、 河川の断面が開ききみのＵ字形を呈するにいたる。川底は第Ⅴ様式の流水堆積層で、連結部でＴ．Ｐ．0.3m、トレンチ部南端でＴ．Ｐ．－0.5mと北から南へ0.8mの高低差を示す。河川Ⅰと連結部の高低差は、約1.1m。 川底付近では、最下層にブロック状に混在している黒褐色粘土塊がみられた。粘土塊は10～30cm程の大きさで、質的に流水堆積上の黒褐色粘土Ⅰに共通する。混在の度合はベルト４付近、すなわち東岸付近が最も高く最下層の大半を占めている。また、先の不整円形のたまりには、ベルト２セクションに示されているように、黒褐色粘土Ⅰが島状に残在している。



第113図　古墳時代・Ⅰ　Ｂトレンチ河川ⅡＡ—Ａ′断面図（Ｓ＝1/100）

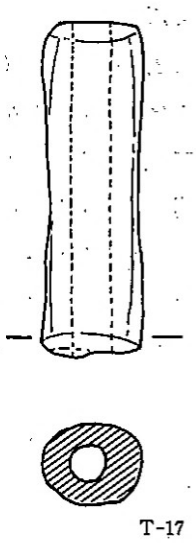
<層位>　（第115・116、図版27）

堆積層は、基本的に下からⅠ層黒灰色系粗砂層、Ⅱ層灰褐色系砂層、Ⅲ層淡黄褐色系砂層に分離できる。間層として、植物遺体集積層や黒色有機質層は存在せず、河川Ⅰ同様一過性の状況を示す。各層ともラミナは西下りに走り、Ⅱ・Ⅲ層は西岸付近に粗砂が集積し、東岸付近で青色微砂と互層を形成している。この堆積状況は、西岸に顕著に残る流水の影響と因果関係を結び、西岸近くを急激な流水が通過したことを物語る。堆積層のオーバーフローは、Ⅲ層が主体を占めベルト４付近より岸に沿って扇形状に広がっており、先述の如く土器群に影響を及ぼしている。

<遺物>　（第117～119図、図版139）

土器と土錘と木製品を検出した。木製品は、杭状木製品が２点と少ない。土錘は、管状を呈し長さ8.8cm、径2.6cmを測る（第114図）。土器はコンテナで６箱。実測図は43個体（第117～119図）。完形品は少ない。型式学的にみると、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式—広口壺（364・365）・鉢（366）・甕（371）、畿内第Ⅴ様式末—甕（372）、庄内式—甕（367・374・375）・広口壺（386・

387）・高杯（394）など、布留式古段階古相―甕（368・370・377）・高杯（384・391）・鉢（398・402）など、と分離できる。しかし、各型式がⅠ～Ⅲ層に混在し、層位・出土地点を異にする接合資料もみられるので、これらは層位的には処理できない。量的には弥生土器は少なく庄内式新段階から布留式古段階に属す土器が多く、河川Ⅰ同様の傾向を示す。以下、特徴ある土器について記述する。



第114図　古墳時代・Ⅰ
Bトレンチ河川Ⅱ出土
遺物(1)土錘（S＝½）

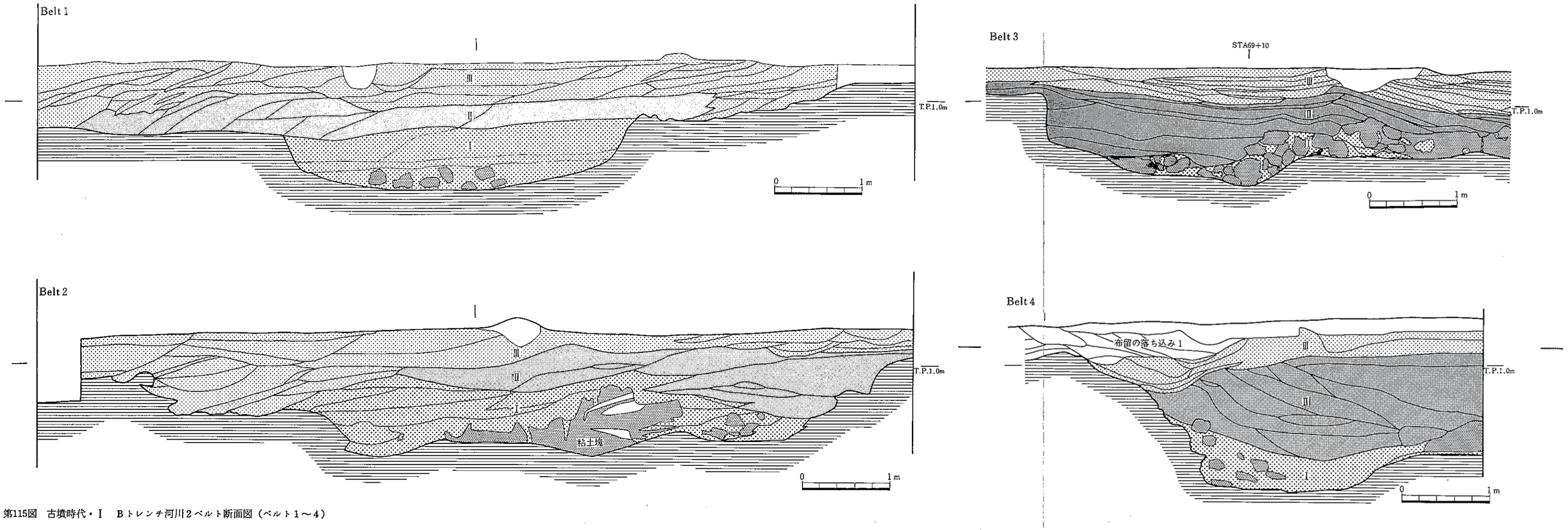
属性から外来系と認識できるのは吉備系甕（406）のみで、その占有率は河川Ⅰにくらべて総量を相対化しても非常に低い。口縁部はヨコナデにより、櫛描平行線文はみられない。体部外面には、縦、方向の刷毛の後ヘラミガキが放射状に施されている。型式学的には百間川古墳時代Ⅰ(江見80)に該当する。

広口壺（387）は、煮沸に供され外面に煤が付着している。器体は堅く焼きしまり、胎土の鉱物組成と色調は庄内式甕に酷似する。器壁厚は4～6㎜を測り、ヘラミガキ等の装飾性はみられない。体部は欠損するが、河川Ⅰ第99図271と同形と推定される。ところで、同じ広口壺でも、（386）は内外に縦方向のヘラミガキが施され器壁は10㎜前後を測り、（379）は内外に縦方向のヘラミガキがみられ器壁は同じく10㎜前後を測り、（388）は赤橙色を呈し軟質で器壁は7～10㎜を測るなど、（387）と比較して、器壁厚・装飾性の有無、胎土に差がみられる。従って、この二者の差を積極的に評価し、先の特徴をみれば壺（387）は煮沸機能の付加を目的とし製作されたと考えられる。弥生土器壺類に、煤の付着と装飾性の乏しさを特徴とし一般に壺甕と呼称されている形式（池上では壺D(佐原・小島70)）があるが、この壺の性格はそれに共通するものと推定される。なお、この壺は庄内式新段階の土器としたが、口縁端部の形状から布留式古段階に下る可能性もある。

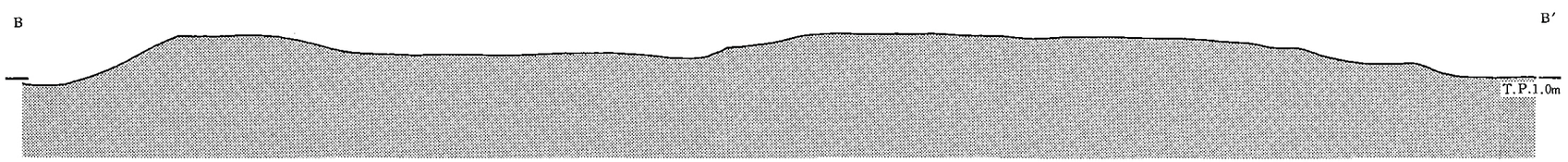
庄内式新段階広口壺（382）は、内外ヘラミガキの後、体部肩に同一原体の櫛状工具による平行線文と波状文で飾られている。両方とも、実測図に向って左側が開始点、右側が終止点になる。

布留式古段階甕（370）には、体部肩にて板ナデ下に叩き痕が観察される。庄内式甕（河内型新段階）の叩きが平均7凹／㎝、左下りであるのに対し、この甕が5凹／㎝とやや粗く右下りである点、注目される。口縁部は、内彎に伸び屈曲部内面が立ち上るなどの特徴を示すことから、「口縁叩き出し技法」には拠っていないと推定される。甕（377）はなで肩を呈し、肩部に横方向の刷毛目が断続的に施されている。鉢（405）は、口縁部の屈曲に鋭さがみられず布留式古段階新相で定型化する口縁二段屈曲鉢の型式組列として前段階をなす型式である。

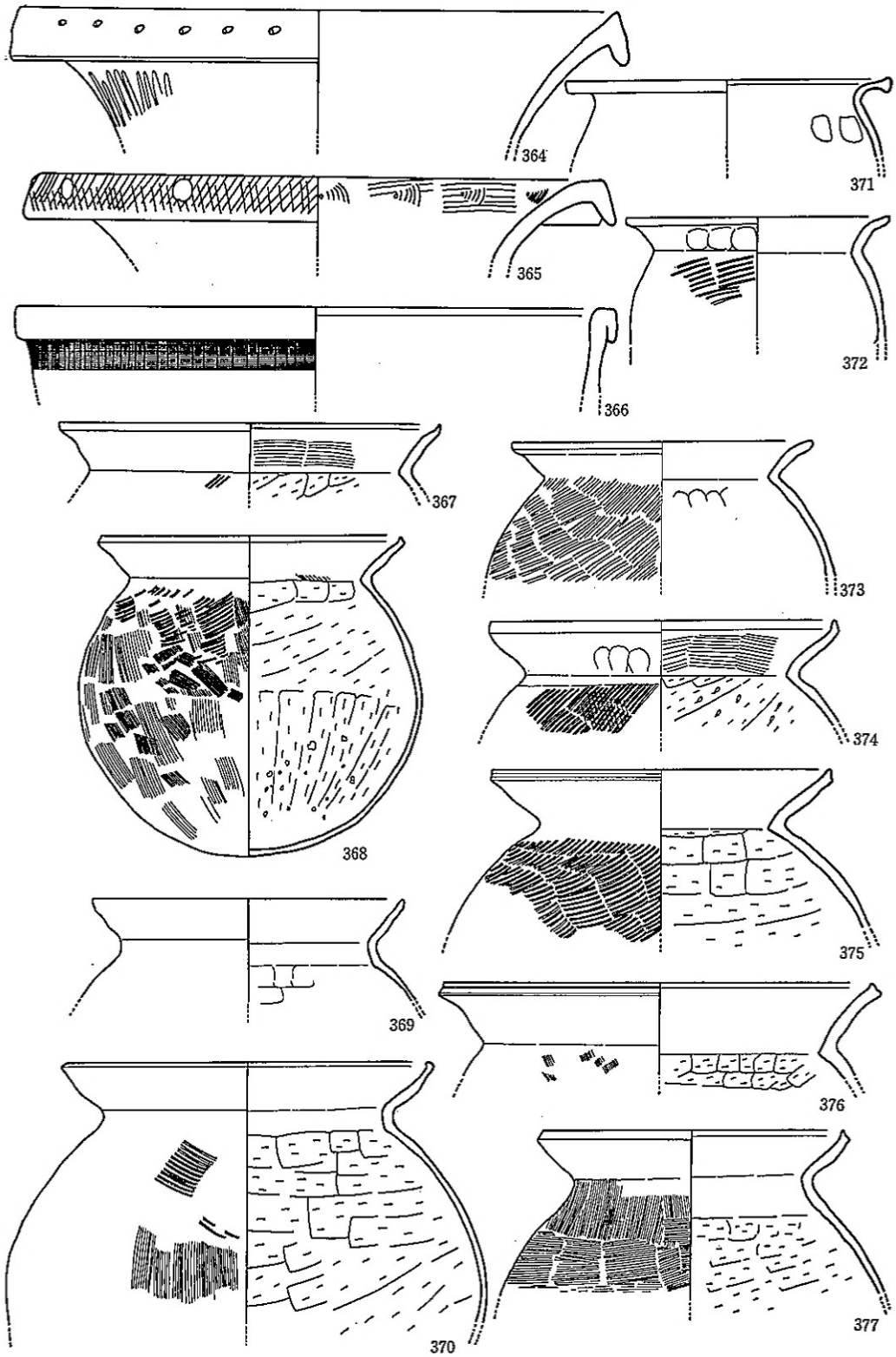
布留式古段階新相の甕（387・385）は、屈曲部内面にヨコナデにより生じる面の幅が狭くなり、口縁部の内彎度が大きくなる。端部は肥厚化現象が著しく、平坦で外方向にふくらむ。



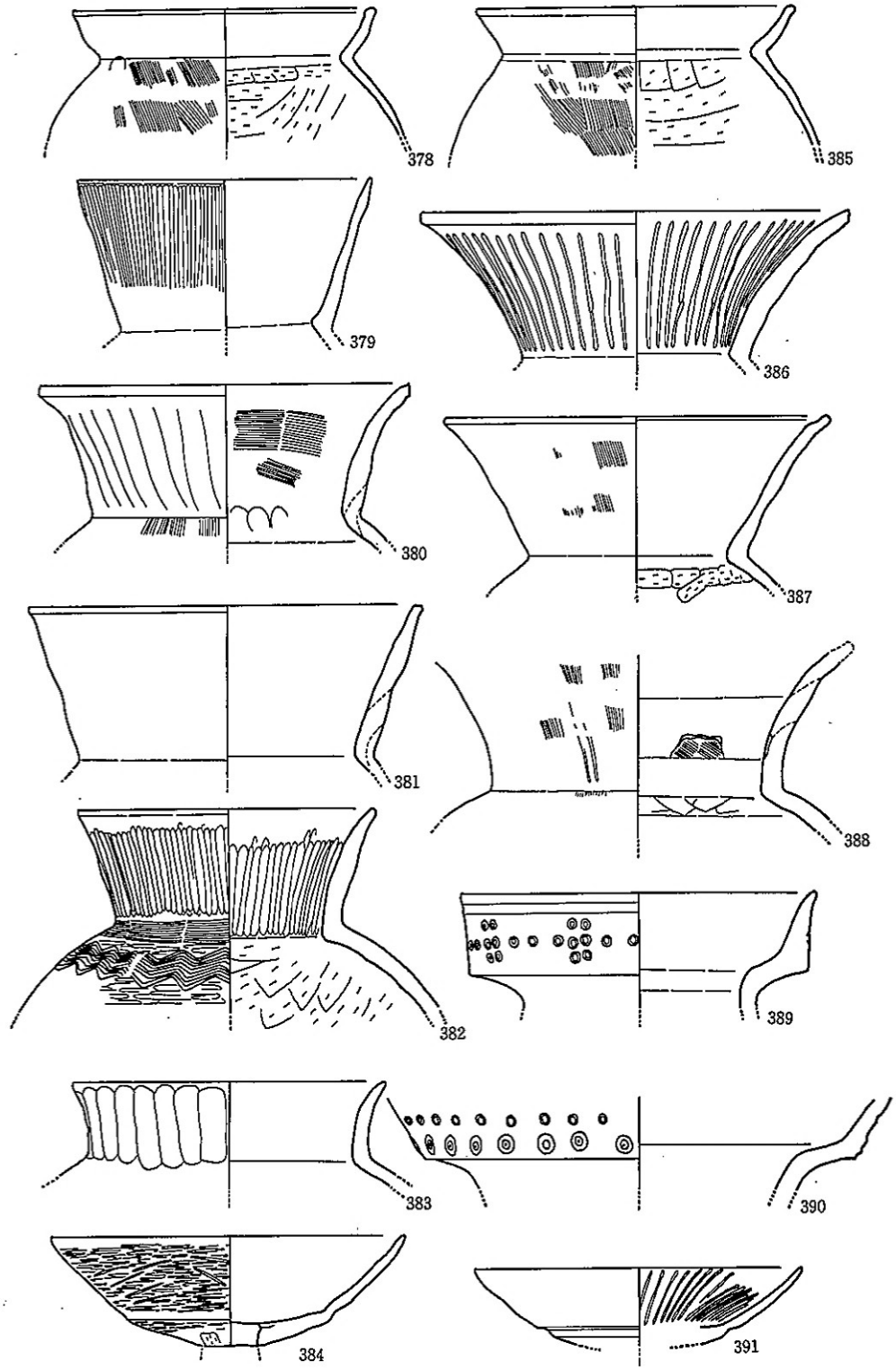
第115図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川2ベルト断面図（ベルト1～4）



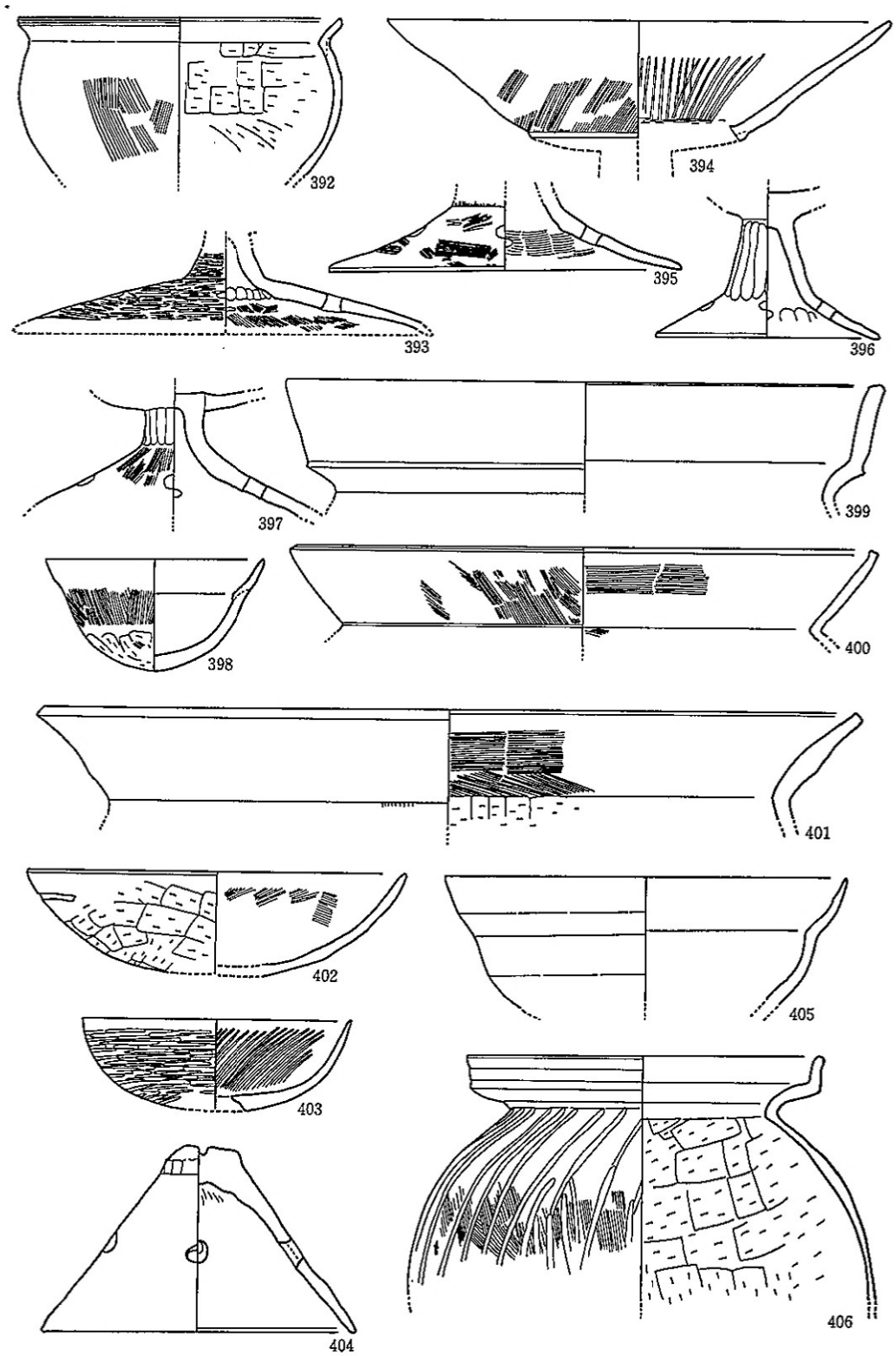
第116図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川2 B—B′ 断面図



第117図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅱ出土遺物(2)（S＝1/2）



第118図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅱ出土遺物(3)（S＝1/3）



第119図　古墳時代・Ⅰ　Bトレンチ河川Ⅱ出土遺物(4)（S＝⅓）

＜C・Dトレンチ庄内期Ⅱ遺構面＞

概説　（図版31、付図５）

第２遺構面は、黒褐色粘土層Ⅱ上に堆積した青灰色粘土層上面で、Ｃトレンチの南半では淡黄褐色微砂が薄く覆う。粘土は一様に堆積せず、灰白色粗砂層Ⅱの隆起している１Ｃトレンチからその東にかけてはみられず、その範囲は砂層上面が遺構面に相当する。

遺構面は、Ｃトレンチ北端からＳＴＡ69＋50～60Ｅに連続する低い高まりが存在する他、概して多少の起伏を呈しつつも北から南へ、西から東へ緩やかに傾斜する。Ｃトレンチ北端からＤトレンチ南端までの比高差は、0.55mを測り傾きは約６°となる。東西方向の比高差は、３Ｃ－Ｃ－４Ｃトレンチ間、１Ｄ－Ｄ－２Ｄトレンチ間では 0.1m内外に収まるが、１Ｃ－Ｃ－２Ｃトレンチ間では灰白色粗砂層Ⅱの隆起により0.689mと他より大きい。

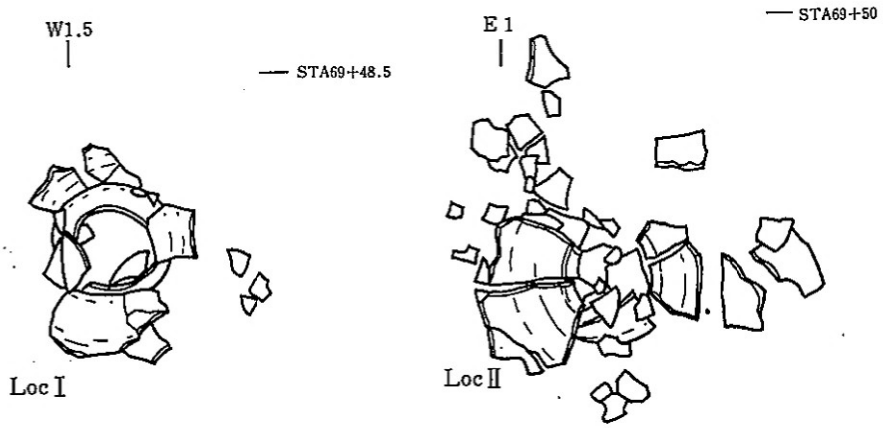
検出遺構は自然河川一条と足跡群で、他に土器の単独出土をみるにすぎない。

単独出土の土器　（第120・121図、図版140）

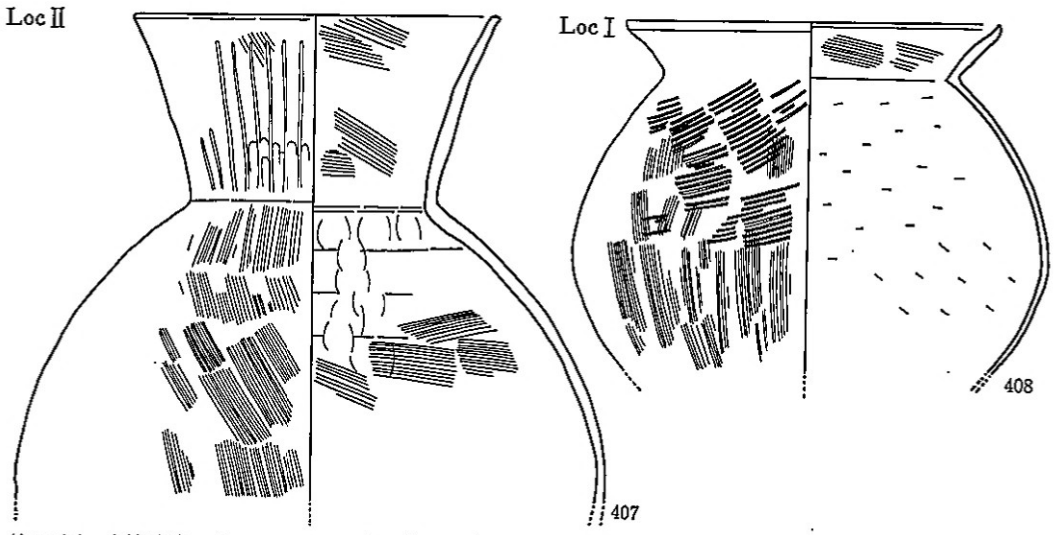
Ｃトレンチ北端からの傾斜が一応落ちつく付近、ＳＴＡ69＋50センターにて庄内式甕（LocⅠ）と壺（LocⅡ）が、遺構に伴わず検出された。両者は約３m離れた位置関係にあり、出土レベルもほぼ等しい。両者ともに口縁部を下にする形で倒置された後土圧で押しつぶされた出土状況下にある。復元してみると、両者とも体部下半の破片は全く無く本来的に打ち欠かれていたと推定される。

壺（407）と庄内式甕（408）は一般的に庄内式新段階新相に属する。しかし、庄内式甕は型式学的に布留式まで残存しても不都合ではない型式なので、時期は庄内式新段階新相～布留式古段階古相とする。

出土状況から土器が意識的に置かれたのは確実で、それは一般的生活関係行為の結果ではなく、ある特殊な目的下に行なわれたと推定することができよう。



第120図　古墳時代・Ⅰ　Ｃトレンチ LocⅠ・Ⅱ土器出土状況図（S＝1/10）

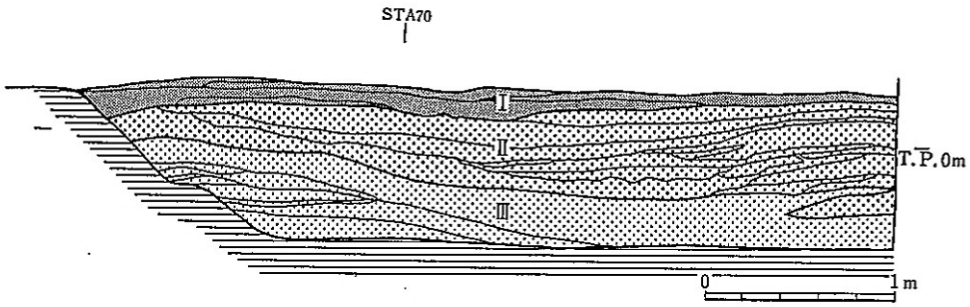


第121図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ LocⅠ・Ⅱ出土遺物（S＝⅓）

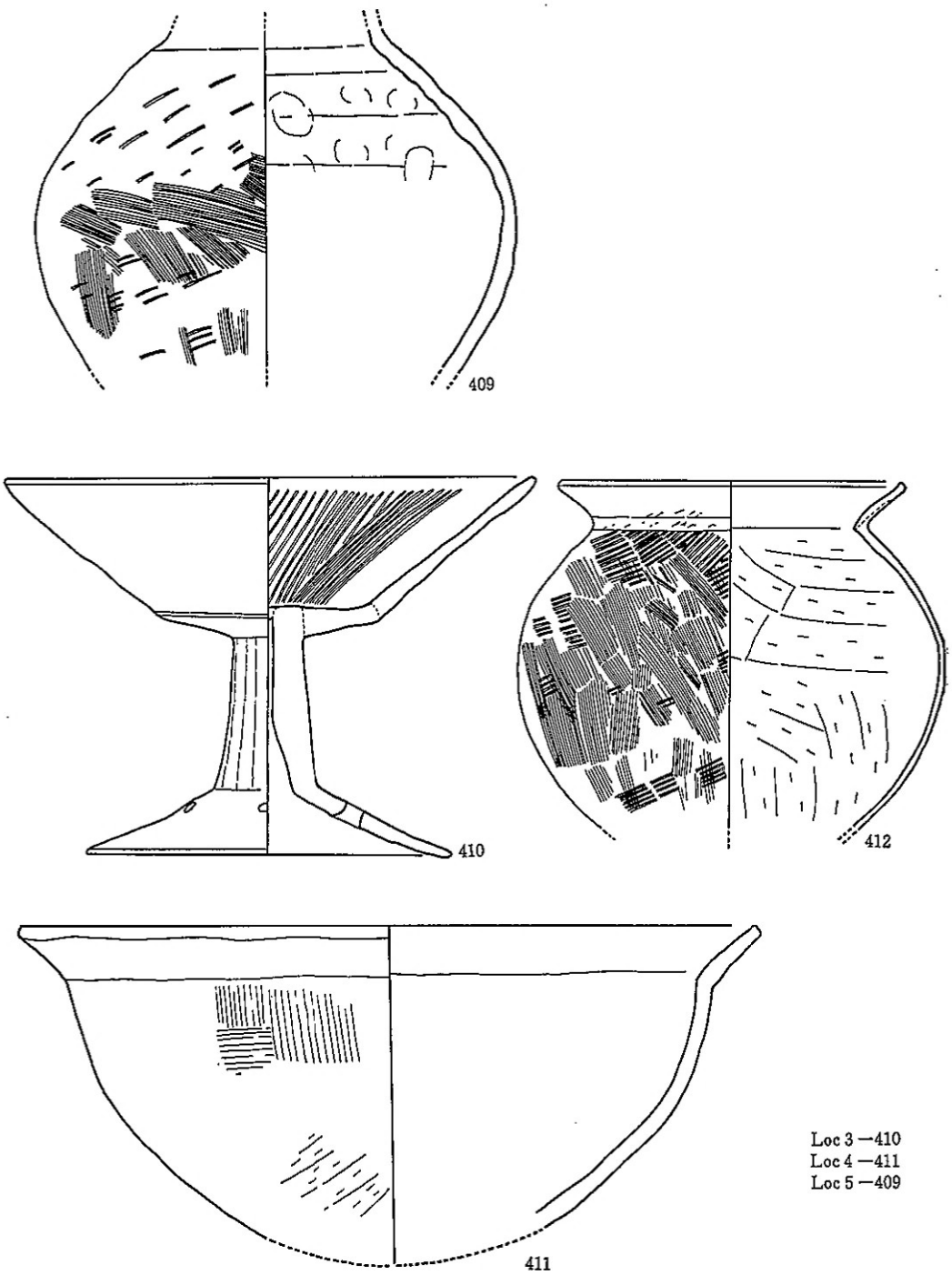
河川Ⅰ　（第122・123図、図版31・33）

3C－C－Dトレンチにかけて、少し蛇行気味に北西方向に走行するプランで検出された。川幅は、上場で6～7mを測る。深度はCトレンチが最も深く0.85mを、浅い3C・Dトレンチでは0.3～0.4mを測り、川底はCトレンチを中心に北西・南西方向に上る傾向にある。肩部の形状は3C～Cトレンチにかけて明瞭かつ安定しているが、Dトレンチでは川底から肩へと緩やかに続く。堆積層は、Ⅰ層黒灰色粘質微砂と暗灰色微砂の互層、Ⅱ層灰白色粗砂層、Ⅲ層黒灰色粘質微砂に分離できる。Ⅰ・Ⅲ層は河川全体に分布し、Ⅰ層は各地区でオーバーフローしている。Ⅱ層はDトレンチには見られず、3C～Cトレンチにかけて序々に厚く堆積し特にCトレンチ南西隅ではすり鉢状に厚く堆積層の大半を占めるに至っている。

遺物として、Ⅰ層から板状加工木・棒状加工木・用途不明木製品・壺（409）が、Ⅱ層からほぼ完形に近い庄内式甕（412）が、また3Cトレンチ北部肩から高杯（410）・鉢（411）が検出されている。庄内式甕は、磨耗度が低く近接地からの流入と考えられる。型式学的には、遺構面出土例品（第121図－408）と同じで、帰属様式は布留式に下る可能性が強い。逆に、高杯や鉢には比較的古い要素がみられ、時期的には下層の庄内式甕（第80図－112）に共通する。



第122図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ河川Ⅰセンター断面図（S＝1/40）

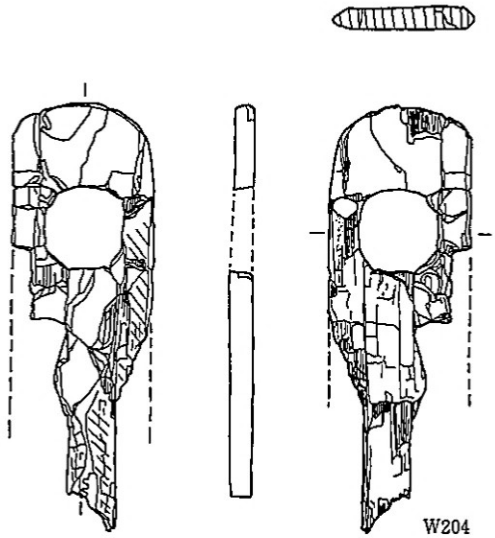


第123図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ河川Ⅰ出土遺物(1)（S＝⅓）

＜木製品＞　（第124図、図版146）

板状木製品（W 204）は現長33.5cm、幅11.1cm、厚さ1.4～1.8cmである。樹種はコナラで柾目材を利用している。上端部は円く彎曲した面で、長径 6.5×短径 6.3cmの円孔がある。下端部は焼けて失われているが、細長い板状木製品になる。建築用板材とも考えられる組合せ用の板材である。

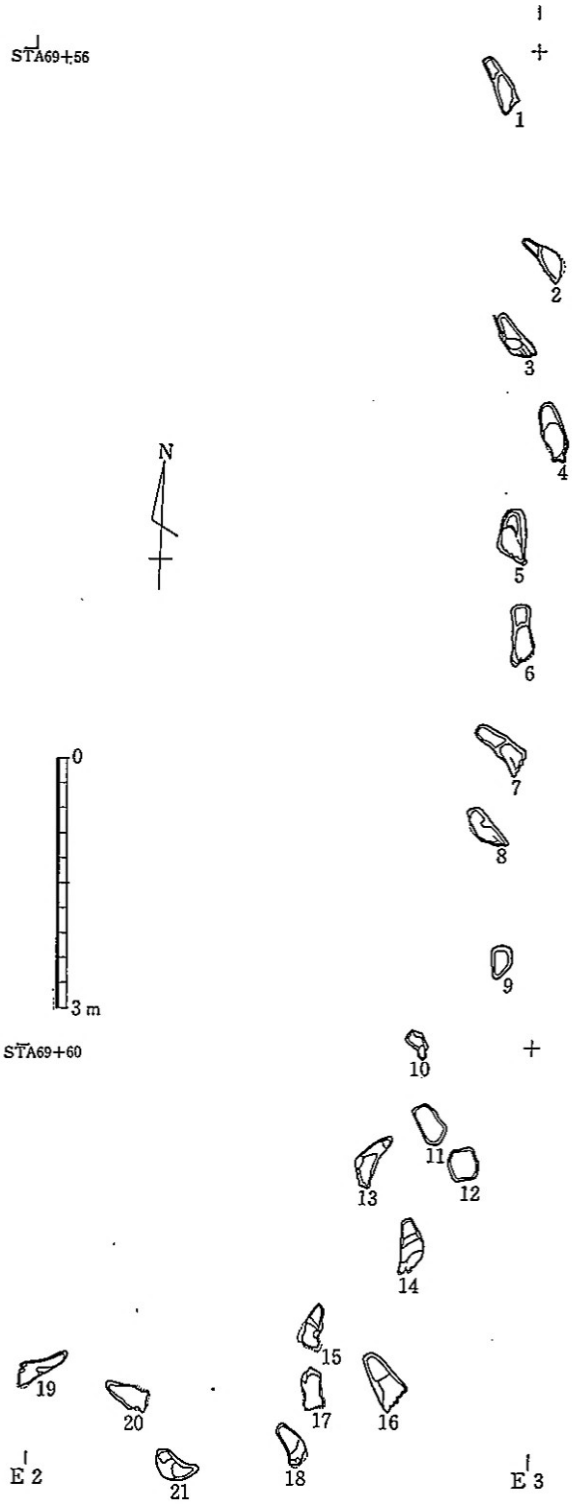
古墳時代初頭の河川より、木製品・加工木・自然木なども出土しており、この他に角材・板材・棒状木製品などが6点出土している。



第124図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ河川Ⅰ出土遺物
(2)　W204板状木製品（S＝1/6）

足跡群　（第125図、表18、図版32）

CトレンチＳＴＡ69＋90付近の東側、自然河川の北岸に近接する場所で足跡の一群が検出された。青灰色粘土面に残り、埋土は付近一帯を覆う淡黄灰色微砂である。残存状況は良好で、五指が完全に確認できるのも数例ある。足跡には南へ歩行する規則性が認められるが、群の南端で北西向きと南東向きに交錯する。南向きの足跡は、規則的な歩行に同一人でも 0.2～0.35



第125図　古墳時代・Ⅰ　Cトレンチ足跡平面図
（S＝1/30）

mの誤差が生じる点を考慮すれば、同一人の痕跡と認定できる。規模はほぼ一定で平均長0.2mを測り、全て大人と推定される。平面プランは現代人に共通する。

Cトレンチでは他にも足跡らしき凹みが全域にわたり散発的に見られたが、足跡と認識できる程プランも明確でなく深くもないので図示は省略した。

第18表　古墳時代Ⅰ　Cトレンチ足跡計測表

No.	長〔cm〕	幅〔cm〕			深〔cm〕		左右	備考
		先	中央	かかと	先	かかと		
1	23.1	8.1	8.7	5.6	4.2	0.9	左	親指がはっきり残っているがあと4本はよくわからない。土ふまずははっきりしている。
2	23.4	11.4	6.1	6.2	3.4	0.9	左	全体に横へ流れた感じで、ぼんやりとした輪郭しかわからない。
3	20.1	8.4	7.5	5.5	2.5	0.9	右	足先が跡み込んだ状態で、かかとが欠けている。指は親指と人さし指がはっきりしていて、他は不明瞭。土ふまずはわかる。
4	23.9	9.1	8.2	6.0	3.7	1.3	左	指が5本ともはっきりしている。親指のつけ根の骨が外に出ているらしい。土ふまずあり。
5	21.8	10.5	7.3	4.8	3.0	1.7	右	指が5本ともはっきりしている。土ふまずも明瞭であるがかかと部分はなく、足先を踏み込んだ感じである。
6	24.7	10.6	8.7	6.1	4.5	1.8	左	指は3本まではわかるが2本不明瞭である。土ふまず、かかとははっきり残っている。
7	22.5	10.4	8.6	5.6	4.9	2.0	左	親指ははっきり残っているが他は横へ流れているため不明瞭。
8	19.4	9.2	7.5	4.6	4.2	1.9	右	親指ははっきり残っているが、他はめり込むような形になっていて不明瞭。かかと部分なし。
9	12.0		8.0		最深2.7		不明	指、かかとの識別不能。
10	12.5		6.5		最深2.3		不明	
11	17.7	8.4	7.4	7.3	1.5	1.6	不明	指、かかとの識別不能。
12	12.3		9.5		最深2.9		不明	指状のものが6本あるゆえ指とは考えにくい、あと識別不能。
13	22.3	12.4	8.3	5.9	2.5	1.2	右	足の形としてはよく残っているが、親指以外は不明瞭。土ふまずはよくわかる。
14	21.7	10.4	9.4	5.6	4.0	1.4	左	幅広の足がよくわかる。指5本ははっきり残っているが、土ふまずは不明瞭。
15	18.6	9.5	7.3	4.3	3.6	0.9	右	かかと部分ははっきり残るが、土ふまずは不明瞭。親指から3本まではわかるが、残り2本は流れているため不明瞭。
16	23.9	11.2	10.4	4.2	2.7	1.3	左	5本の指がはっきりわかり残りもよいが土踏まずが不明瞭。
17	16.4	9.6	7.5	4.5	2.6	2.6	左	左足のようである。指ははっきりしない。
18	19.7	9.2	7.0	5.2	2.3	17	左	親指のつけ根がぐっと外に出ている。それ以外の指は、かたまりになっておりわからない。土踏まずははっきり残っている。
19	23.1	10.2	6.1	4.3	2.0	1.0	右	親指、小指、薬指ははっきり残る。残り2本は横に流れているので不明瞭。かかと、土踏まずははっきり残っている。
20	18.5	8.1	7.5	4.6	2.1	1.9	左	土踏まずははっきりしているが、指は5本とも不明瞭。
21	17.6	8.4	8.1	4.5	0.9	1.8	左	土踏まず、かかとははっきり残っているが、指は5本とも不明。